

Y W V

50年の歩み

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部
創部 50 周年記念誌



2007年

YWV50 年の歩み

道



1976年 八ヶ岳にて春合宿

YWV 創部 50 周年記念誌

2007年11月10日発行

横浜国立大学 学生歌

作詞: 鶴若 英子 (学・英語 昭 34 年卒)

作曲: 大根田 とおる (工・機械 昭 37 年卒)

♩=100



1. 見 遥 か す 青 海 原 に 伸 び ゆ き て 尽 き せ ぬ も の は わ れ ら が 思 い
緑 濃 き 丘 に 登 り て 共 に 語 ら ん 共 に 学 ば ん わ が 友 よ

2. 新 し い 世 を 創 る 者 光 あ り 望 み を 胸 に わ れ ら の 道 を
悔 い の な き そ の 日 そ の 日 を 共 に 進 ま ん 共 に 学 ば ん わ が 友 よ

1、見遥かす 青海原に 伸びゆきて 尽きせぬものは われらが思い

緑濃き 丘に登りて 共に語らん 共に学ばん わが友よ

2、新しい 世を創る者 光あり 望みを胸に われらの道を

悔いのなき その日その日を 共に進まん 共に学ばん わが友よ

CONTENTS

学生歌「みはるかす」	3
挨拶 OB 会会長 嘉納秀明	6
YWV 部長 高木展郎先生	7
50 周年記念事業実行委員長 鈴木弥栄男	8
ご挨拶 創部 50 周年に寄せて	
元部長 田中 裕先生	10
元部長 長原幸雄先生	11
元部長 井口栄資先生	12
前部長 米屋勝利先生	13
YWV50 年の歴史	
ワンダーフォーゲル部の創設(嘉納秀明 1 期)	15
記録から見た YWV の 50 年(塩野貴之 46 期)	19
創部のころの思い出(佐藤文雄 1 期)	25
ワンゲルの思い出(吉田光志 1 期)	27
各期の活動の記録	
1 期	30
2 期	31
3 期	32
4 期	33
5 期	34
6 期	35
7 期	36
8 期	37
9 期	38
10 期	39
11 期	40
12 期	41
13 期	42
14 期	43
15 期	44
16 期	45
17 期	46
18 期	47
19 期	48
20 期	50
21 期	51
22 期	52
23 期	53
24 期	54
25 期	55
26 期	56
27 期	57
28 期	58
29 期	60
30 期	61
31 期	62
32 期	63
33 期	64
34 期	65
35 期	66
36 期	67
37 期	68
38 期	69
39 期	70
40 期	71
41 期	72
42 期	73
43 期	74
44 期	75
46 期	76
47 期	77
48 期	78
49 期	79
50 期	80
51 期	81



野反湖

- . 広がる活動の場
 - 他大学との交流 (斎藤伸一 4期) 83
 - 合同ワンダリングに参加して (諸角絢子 5期) 84
 - 初の海外 返還前の沖縄PW (斎藤伸一 4期) 85
 - 回想の沖縄 (高須 梓 5期) 85
 - 第2次沖縄 PW (永井紀子 6期) 88
 - 第1次台湾 PW 紀行 (小木曾克彦 7期) 89
 - 台湾 PW (馬場誠一 9期) 94
- . 悲しい出来事
 - YWW50年に起こった重大事故・遭難事故 (西浦章予 15期) . 96
 - 春合宿九州隊事故 97
 - 丹沢三峰歩荷訓練遭難事故 99
 - 北アルプス・穂高岳 PW 遭難事故 101
 - 黒部峡谷水平歩道遭難事故 104
 - 大島君を偲んで (牛窪 肖 15期) 107
- . 苗名小屋と共に
 - 山小屋建設の趣旨と経緯 (郡司直樹 4期) 110
 - やっぱり山小屋はいい (小口雄平 14期) 111
 - 小屋日誌より 112
- . 部室のつばやき
 - 部室ノート「友垣」より 123
- . YWW 創部 50 周年記念山行記録
 - YWW50 周年記念海外山行台湾玉山 (安藤貞利 11期) . . . 132
 - YWW50 周年記念山行畦ヶ丸 (白神逸夫 7期) 136
- . 創部 50 周年に思うこと
 - 体験を共有するということ (伊藤明広 31期) 139
 - 私と登山活動 (石川 真 41期) 140
 - 山小屋の思い出 (細谷慎一 38期) 143
 - シニア OB月例山行雑感 (腰塚典明 3期) 145
 - これからのワンゲルを担って (主将 小林貴志 49期) . . . 147
 - 編集後記 148

表紙写真：2003年5月榛名山
 (OB会・シニアOB合同)
 撮影：谷上 俊三(4期)



横浜国立大学ワンダーフォーゲル部の創立50周年を迎えて

YWVOB 会会長 嘉納 秀明 (1 期)

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部は 1957 年 5 月 1 日に当時の 1 年生だけで発足いたしました。以来部員数が増加し、数年を経ずして本大学有数の大きな部に発展し、活発な部活動を展開してまいりました。

1968 年には創立 10 周年記念行事として妙高高原に苗名小屋が完成して、現役、OB がともに活動し、かつ憩い、思いを共にする場として今日まで利用されています。部員数は最近少なくともはなりましたが、現役部員は精力的に部活動を行っており、ワンダーフォーゲル活動は今も健在であります。また、現在の OB の数は 500 名を超え、かなりの数の OB が今なお各地においてワンゲル、山行活動を行っております。

OB 会が主催する月例山行には、とくにシニアを中心として、毎回 30 名以上が参加し、すこぶる活発な活動を続けております。



本年 2007 年に当部は満 50 年を迎え、現在の現役 1 年生が 51 期となりました。OB と現役、YWV の全員でこの輝かしい歴史を祝いたいと思います。

50 周年を契機とする事業として、YWVOB 会公式ホームページを公開することと、部史編纂事業を開始することを決定し、それぞれを運営する委員会を新設し既に作業を開始しております。公式ホームページにつきましては、本会の活動の歴史と現状をひろく一般の方々にも知っていただくことと、会員間の親睦をはかり、情報の伝達を容易にすることを目的にしております。すでに昨年度開設しました試行ホームページにおきまして多くの会員の協力により、非常に充実したページが出来上がっております。これをもとにさらに親しみやすいホームページにできますよう皆様のご協力をお願いいたします。部史編纂事業も会員の皆様のご協力のもと、これまでの 50 年間に行われた公式ワンダリングの全てに通し番号をつけデータベース化することができたのをはじめとして、部誌「スカイライン」の復刻、OB 会報の PDF 化、月例山行のデータベース化などが完成しております。今後、部室に所蔵されている莫大な山行記録のデジタル化などを継続してゆく予定です。

50 年の歴史を振り返りますと、揺籃時代からの急成長、部則、禁止条項、リーダー制の確立、各期ごとに意欲的なテーマを掲げての夏合宿、路線対立による分裂騒ぎ、悲しい遭難事故、他大学ワンゲルとの交流、山小屋建設と維持管理、部員数の減少による廃部の危機、OB 会の初期事務局による経営と第一次月例山行、関西支部の発足、OB 会の低迷化、遭難対策費の行方不明とその再確保、シニア OB の月例山行開始、新体制 OB 会運営の開始など、その一端は本 50 周年記念誌に掲載されておりますが、紆余曲折、波乱に満ちたものであります。しかし、その中に一筋、YWV に対する熱い思いと山を通じて結ばれた深い友情とが綿々と貫かれているのを見ることができます。これからも、現役部員、OB 会員が集い、山小屋で語り、山行を共にし、楽しいことに挑戦しつつ、我々の YWV を育ててゆくことを願ってやみません。

YWV 50周年に寄せて

YWV 部長 高木 展郎 (14 期)
(部長在任 2004 年 ~)

YWV が 50 周年ということに、考え深いものがあります。私が大学に入学した頃は、大学紛争の余波で、授業の始まりが 4 月ではなく、6 月過ぎから始まりました。その間、清水ヶ丘にあるワングルの部室が、大学生活の大半を送る場となりました。大学生活では、授業に出るよりも部室にいる時間の方が多かったと思います。

就職するときも、教員になれば夏休みがあり、山に登れる、というような単純な理由で教員になったと言っても過言ではありません。しかし現実には、就職してからはほとんど山には登れない状況となり、今日までそれが続いております。

現在の横浜国立大学は、4 年前に国立大学法人横浜国立大学となり、大学の独自色がかなり出せるようになりました。

そのことは、両刃の剣で、よい面と悪い面とがあるように思います。学生諸君は、私たちの頃よりは、明らかに授業によく出席をし勉強もしております。大学での学習評価に、GPA (Grade Point Average) 制度が導入されたこともあり、熱心な取組が行われております。私たちが学生の頃は、5 月を過ぎると食堂がすくということがありましたが、現在は全くそのようなことはありません。GPA の制度のためか、現在の学生は出席率が非常によく、まじめに授業に取り組んでいます。そこにも時代の移り変わりを感じます。

また、時代の変化、流行と言うこともありますが、大学に様々な部やサークルができています。私が学内でよく見かけるラクロス部は、私たちの時代にはありませんでした。男女それぞれに 50 名近い部員を抱えているようです。かつての YWV のような盛況を呈しています。私の大学時代に友人が作ったアメフト部は、関東学生の一部リーグで頑張っています。

時代を経たということでは、現役の部員に、小生の娘が高校時代一緒だったという YWV の部員の方もいらっしゃるようになりました。時の流れを実感しております。

大学が、現在の常盤台に移ったのが昭和 49 年です。私たち 14 期が卒業したその年に、清水ヶ丘と大岡地区から統合されました。大学キャンパス内の樹も大きく茂り、年輪を重ねています。

YWV も 50 周年という節目を迎えました。この時に YWV の部長をさせていただいていることを光栄に思うと共に、後輩に十分なことができなく、申し訳ないという気持ちでいっぱいです。大学は、時代の中で改革をすることを急務としております。変わる、変える、ということそのものに意味があるような取組もあります。

大学そのものが大きく変わらざるを得ない状況の中で、大学生活そのものをより豊にするサークル活動としての YWV を、微力ではございますが、これからも大学職員として支えに行ければと存じております。

十分なことができなく誠に申し訳なく存じております。YWV の OB 会のお力をお借りしながら、後輩を見守りたいと思っております。



横浜国立大学ワンダーフォーゲル部創立50周年を迎えて

50周年記念事業実行委員長 鈴木弥栄男(9期)

50周年とは何だろうか?と、ふと考えてみた。夫婦だと金婚式にあたるもので、よくも離婚せずに一緒に社会の最小単位としてもってきたな、まさか今更離婚なんてないだろうとお互いに思う。

会社だと、多くは先ず10年もったら、先ず一人前。でも50周年、100周年もったからといってその後も継続、存続は保証されない。区切りの良い、10、50、100は何かと世の中でこの数字が登場する。

100名山もその一つであり、100歳万歳も然り。

でも、原始時代から何と2000年強経過した現在、一世代が20年として100代継続してきたのであり、明治時代でも平均寿命が何と40歳前後とすると、一世代が40年と荒く見積もると、たったの三世代しか未だ経過していないことになる。

それらのことから類推すると「50周年」とは、何と貴重な、意味ある時間ではないだろうか?

まして、4年単位で世代交代する大学のクラブで50周年とは、やはり凄いといわざるをえない。人生50年と、信長が言ったようだが、まさしく50年とは一つの区切りであり、世代が交代するのである。

私もワンゲルクラブに4年間身を置き、自然の美しさ、偉大さ、仕組みの素晴らしさを、同世代の仲間から刺激を受け、享受し、社会に飛び込んだ。

しかし、やはりいつの間にもやら、生まれ故郷、自分の住処、ワンゲルに舞い戻って来てしまう。何かがあるのだろう。

偶然と同年に入学した同期もさることながら、また偶然に出会った先輩や後輩と接することにより、多くを学んできたと思う。

この度は、父親とか母親の世代と子供の世代と一緒に集い、多くの記念事業を自分達で作成し、過去を振り返り、尚かつ未来に向けて、世代を超えて一緒に行動することは、意義のあることだと思います。そんな訳で、実行委員長を引き受けた次第です。

まずは、いかにして50期に渡る各期に連絡をとるのか腐心し、結果的に2007年1月27日に実行委員会には、多くの期の方々が参集されスタート致しました。

記念山行が、台湾の玉山、丹沢の畦ヶ丸とワンゲルらしくスタートし、その後公式ホームページ公開に漕ぎ着けて、世間に横浜国大ワンゲルありきと宣言し、苗名小屋での記念登山と記念式典、そして、記念誌発行を迎え、更に元工学部建物にてのOB会総会、記念式典、場所を変えての懇親会をもって、計画した行事が終わる予定です。

この記念誌に多くの方々に寄稿して頂き有難うございます。また、実行委員や連絡係をはじめ、記念行事に参加された方々に御礼申し上げます。

これから、一足飛びに100周年に向けて、大いに人生を楽しみましょう。



ご挨拶 創部 50 周年に寄せて



尾瀬ヶ原からの至仏山

ぬち ど(du) たから

田中 裕 (部長在任 1966年～1979年)

ワンダーフォーゲル部 50周年おめでとうございます。

継続は力なりと申しますが、ここに至るまでの関係諸兄のご努力ご精励に深く敬意を表します。

組織の維持発展には、不易と流行を見極めつつ、新たな挑戦の構えが必要となりましょうが、その不易なもの大きな一つは、氷雪かトレッキングかなどの議論以前に、生物無生物も一緒にしての大自然のいのちとの交流ではないでしょうか。そしてそれを媒介としながら育まれる友情こそが部活動の原点だと思います。

私の部長時代、ゆえあって殆ど山行を共にせずいまだに申し訳なく思っていますが、その間に個人ワンダリングを含んで死亡事故 4 件あり、ご両親の嘆きはもちろんのことですが、関係方面に多大のご迷惑をかけてしまいました。

しかし穂高遭難の遺体収容に際しての OB 諸兄の活動振りには頭が下がりました。忙しい会社勤めを終えて現地に急行され、翌日の収容後はそのまま帰京された方が殆どでした。若さの力と連帯の強さを感じました。

「ぬち ど(du) たから」という古い言葉が沖縄にあります。

あの悲惨な戦禍に見舞われた沖縄では、一層この言葉の重みを感じられたことでしょう。いのちこそたからなのです。若い方々は屢々、いのちの大切さに気付いていません。自分たちがいのちの力に溢れているからでしょうか。岩壁を攀じながら岩の割れ目から顔を出している一輪の花に、「おお、お前もがんばって生きているな」と、声をかけたくなるようなやさしさやゆとり、そしてその自然への畏敬と共感がいのちの大切さにつながるのではないかと思います。

ともかくいのちを大切にしてください。しかしいのちとは生物的生命には限りません。社会的実存的など様々な関係性の中で生きていて、その大切ないのちも人間の尊厳や愛する者のために敢えて擲つこともありうるのが、万物の霊長としての人間のいのちとよばれるものでしょうか。

もうすでに私は老醜老残の身、若い方々に、もっともらしいことをこれ以上いう資格もありません。やむなく、幹事さんへの義理の思いで、近況の些事を加えます。

20 代の終わりころ、パリからシャルトルへの巡礼に加わったのがきっかけでその後様々の巡礼を経験しました。もっとも、牛にひかれて善光寺ならぬ、美女に惹かれてカテドラルが発端ではあまりホメられる話ではありません。

中年期にはサンティアゴコンポステーラ (スペイン領内のみ) やフランスのロマネスク教会巡礼などでヨーロッパの古い歴史遺産や美しい田園に感動しました。

日本では、秩父、坂東、西国百観音をはじめ、各地の巡礼地を訪ね、古層にある日本的なものをあらためて認識しました。

晩年は四国八十八ヶ所で、喜寿の年に発心したのですが、家庭の都合で継続できず昨年再開、小刻みを重ねてようやく最後に昨秋もみじの高野山に登拝しました。

さすがに馬齢 (81) を感じました。モンブラン登頂から 52 年経っていました。

今は、数十年来の野鳥の会、野草の会などで自然のいのちとのふれあいを楽しんでいます。

追記

いのちを大切にしてください。しかしいじけることなくのびのびと青春を謳歌してください。“その子はたち櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな”(晶子)です。それが若さの特権でしょう。年配の OB の方々にはまた別のいのちの形が醸しだされてくることでしょう。

“年どしにわがかなしみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり”(かの子)

ワングル創設50周年にあたって

長原 幸雄（部長在任 1979年～1991年）

私は記録癖が全くなく、たまたま記録したとしても整理能力がなく、全く困ったものです。私は確か1991年定年退職と同時に部長を辞めたと思うのですが、また私が国大に就職したのが1956年ですから、ワングルとは同年ということになります。

私がなぜ部長を引き受けたか、それは前部長田中裕君の言葉巧みな勧誘です。彼とは旧制一高での同期生なのですが、学生時代は全く面識なく、国大で一緒になってはじめて言葉を交わすようになりました。彼は、大学はお寺に住み込むため京都大学、そしてフランス留学帰り、私はいつも煙に巻かれる、そのうちどっちが悟っているかと禅問答。

こんな田中君からワングルを引き受けてくれといわれたのです。私がひとりで山をうろついていることを知っていたからでしょう。私も卒業研究の面倒を見た学生にワングルもあり、彼は私の部長就任に、「先生は軽はずみだ」と反対しましたが、ついほいほいと引き受けました。ワングルの部長になるのには身内の猛反対という洗礼を受けなければならぬようです。

その事務引継ぎも済まないうちに、前穂での転落事故、ワングルとしての山行ではなかったとはいえ、田中部長も現場に駆けつける。これは大変なものを引き受けたと実感。

そこへすぐさま黒部の水平歩道での転落事故。部員諸君と宇奈月へ。初体験の私、気も動転の部員諸君、ご遺族との対応、どこか小さな小屋を借りての仮通夜、学生部との協議、すべて夢のようですが、宇奈月警察署だけはよく覚えています。

一方、楽しい思い出もいっぱいです。はじめての新歓丹沢山行、大倉のキャンプ地に行ったら、「あら、先生、山靴！」ちょっといい気持ち。このときはたしか寄（やどろぎ）に下り、バス待ちのあいだ村の酒屋の戸口をどンドンたたいたら、キャプテンにまだ行動中ですと叱られました。

2回目はユーシンで別れて私は玄倉林道を下りましたが懐中電灯の電池が切れ、例の曲がったトンネルで壁伝いの始末。私は「うろつき野良犬」です。

ワンダーフォーゲルは、私の持っている辞書では、□渡り鳥、□ワンダーフォーゲル（ワングル）という面白い出方をしています。今度は和独辞典で渡り鳥を引くとツークフォーゲルとあってワンダーフォーゲルは出てきません。渡り鳥は決まった季節に決まったコースをたどるもの（まさにツーク）明治の初めにどなたかがワンダーフォーゲルを渡り鳥にしてしまったのでしょうか。

ドイツのある男声合唱曲の歌詞に「ギリシャやローマの文化がなんだ、ここドイツの森にこそわれらゲルマンの心があるのだ」とありますが、ワンダーフォーゲルの意味が、心が、分かるような気がします。

50年というのは夫婦の仲なら金婚式です。先輩、後輩が心をつなげてつないできた、これはかけがえのない財産です。

これからの発展を願って。

写真は1955年7月、常念岳頂上です。

ワングル誕生一年前、地下足袋でした。



横浜国立大学ワンダーフォーゲル部設立50周年について思うこと

井口 栄資(部長在任1991年~1997年)

昨年定年退官した後も継続して研究の仕事で多忙だと、1年しか経っていないのに横浜国立大学での37年の勤務がずいぶん昔のことに感じます。その間、確かに5年間ばかりはYWV(横浜国立大学ワンダーフォーゲル部)の部長を務めたことが思い出されます。そのYWVが設立50周年を迎えるとなると、やはりある種の感慨があります。

実はYWV部長を引き受けるように要請された時、私は頑なまでに次の二つの理由で固辞しました。一つは私が大学に着任早々起こった黒部「水平歩道」での滑落事故。第二は大学紛争中、数あるサークルの中で何故かYWVは最も過激なサークルとみなされていたからです。いずれにしても私はこの重責を果たすことはできないと思い、強く辞退したのですが、周囲の状況はそれを許さず部長を結局引き受けることになりました。幸い、部員諸君が努力してくれたおかげで大きな問題もなく部長の任を全うすることが出来、彼等に心から深く感謝する次第です。

最近「トレッキング」という言葉があり、「クライミング」とは区別されていますが、WVの守備範囲はトレッキングだと思います。私も縁あって「氷壁」の魚津恭太氏と一緒にいわゆるトレッキングを今も続けております(井上靖は魚津恭太を滝谷のD沢で死亡させましたが、御本人は健在で環境省-当時は厚生省-の山岳レインジャー第1号となられ、山岳行政に大きく貢献されました)。

共同研究で20年来の友人である独国ハンプルグ大学の教授は本場アルプスで鍛えた正統派アルピニストですが、昨年話が山にまで及ぶと「おまえの登山はただ単に登るだけか?」とさも不思議そうに真顔で私に訊ねるので、少々プライドを傷つけられました。しかし、WVの延長線上での山登りはトレッキングだと思います。実はこの適正な線を守ろうとする姿勢こそが非常に大切です。確かに不幸な遭難もありましたが、YWVは基本的にはこの方針を50年間堅持してきたと思いますし、この点が最も高く評価されるべきです。魚津恭太氏を介して著名なアルピニストと話をすることが多いのですが、彼等の話から「山には魔性があり、それに引き込まれて、飽くことなく挑戦を繰り返して結局自分を制止出来ず、死に至るまで突っ走ってしまうアルピニストも多い」と聞きます。山を知れば知るほど非常に魅力的に見えるその魔性には十分な自覚が必要でしょう。そのような山を対象にして、自らの限界を設定している人間の集団がWVだと私は考えます。

私もこの限界を十分理解してこれからも登山を楽しみたいと思います。



2007年5月武尊登山の途中で至仏をバック

ワングル部創立50周年に寄せて

米屋 勝利(2期)(部長在任1997年~2004年)

本州西の果てから都会に出てきたときは、江戸言葉、浜言葉そして大都会の姿など見るもの・聞くものすべてにびっくりの田舎者でした。

横浜国大に入学からの4年間の大学生生活は私にとっては新世界であり、その中のワングル生活は私の青春そのものでした。高校までは川や海に潜っていましたので山は初体験でした。

私自身は卒業後すぐに東芝に入社、平成元年に母校に戻って平成16年3月に定年退官、その後も大学に残って現在「研究と産学連携」の仕事をしてもらっています。

こうして卒業後45年が経過し、ワングルも50周年を迎えたわけですが、当然のことながらその間ワングル時代を忘れたことはありません。今日のOB会活動、特にシニアOB会の活動は素晴らしく、月例登山は100回を数え、常に盛況である様子が直接或いはYWVOB会報から伝わってきます。こんなにも、心に郷愁と憧れを感じていながら、私自身は月例には年1回程度の体たらくです。このような「願望と実行の不一致」はなんとも言いようがありません。何をしているんだとお思いでしょうね。

ところで、大学に移ったときに、郡司直樹(4期)さんから呼びかけがあり、井口栄資(4期)先生のあとに部長を引き受けることを約束しました。私の部長在任期間は平成9年から現在の高木展郎(教育人間学部教授)先生に引き継ぐまでの7年間でした。

とは申しまして、「ワングル部長です」というだけで学生諸君の無事故を祈るばかりでした。ご存知の通り、この50年間に世の中は大きく様変わりしました。クラブ活動の中でワングル部員は大幅に減少し、昔の面影今何処と偲ぶばかりです。

はるか昔の現役時代を思い起こすと、柴田晴彦(工学部教授)先生がワングルの部長でした。柴田先生は、随時ワングルの合宿にも参加され、「僕は歩くのが遅いから少し早く出発するよ」といって山行も楽しんでおられました。柴田先生のことを思うと私はただ名ばかりの部長を恥じるばかりですが、これも時代でしょうと勝手に説明をつけております。

ともかく在任中無事故で終わったことは幸いでした。

柴田先生の話少し続けますと、先生の定年を記念して、有志(1~3期)で先生と一緒に記念登山を計画しました。柴田先生は、「駒」のつく山を踏破するのが夢だということでした。そのときの先生の希望は「会津駒」か「栗駒山」でしたが、結局後者を選択されました。小安峡(泊)→須川温泉(泊)→栗駒山往復→中尊寺のルートで一喜一憂しながらカメラを持って楽しんでおられた姿が今でも懐かしく思い出されます。

さて、私の実績ですが、日本100名山は50%弱程度です。最近の旅は、箱根、軽井沢、上高地、奥日光、陸中海岸、利尻島・礼文島、釧路、黒部・立山、角館・田沢湖高原等々、と観光地への気楽な旅が多いので、これに毎年4月の同期会と月例(もう少し高い頻度)が加わればバランスが取れると考えています。再起を期しておりますので、どうぞ私をお忘れなきようよろしくお願い致します。



. YWV50 年の歴史

ワンダーフォーゲル部の創設
記録からみた YWV の 50 年
創部のころの思い出
ワンゲルの思い出



1971年7月 三ツ岩岳から会津駒ヶ岳への道

ワンダーフォーゲル部の創設

嘉納 秀明(1期)

1. 萌芽

私が高校生であったとき、一度も「ワンダーフォーゲル」という言葉を耳にしたことがなかった。そんな私が、大学に入って早々にワンダーフォーゲル部をどうして作るようになったのか？

浪人していたころ、よく中学時代のある友人の家に遊びに行った。彼は中学から慶応高校に進学して、そのまま大学に進んだから、慶応大学経済学部の1年生であった。秋のころに、彼の家にゆき、山登りの計画の話聞いた。彼は慶応大ワンダーフォーゲル部に入部して、秋の行事である大菩薩嶺集中登山の1パーティに参加して登るといい、登山計画書の地図を見せてくれた。大菩薩嶺には沢山の尾根が集まっている、その尾根ごとにパーティを決め、登るのだという。彼ら1年生は裂石から登るコースだが、初狩駅から延々小金沢連嶺の尾根をたどり、やってくるコースは「猛者(モサ)連」が歩くという。

私がワンダーフォーゲルという言葉と活動を知ったのはこのときであった。それまで、昆虫採集を趣味にしていた私は大山や神奈川県内の低山にはよく登っていた。しかし、純粹な登山に出かけたことはなかった。中里介山の小説から、大菩薩という響きには惹きつけられる魅惑があったし、モサ連があるくコースというものには、とにかくすごい冒険が待っているようで心に残っていた。大学に入ったらぜひやってみようと思った。

2. 部の創設

大学にはいると、知らない言葉がたくさん出てきて戸惑った。オリエンテーションとはなんのことかわからないが、講堂に行ってみるとサークルの紹介で上級生がやってくるという勧誘するのだが、ワンダーフォーゲル部はなかった。ないなら自らつくるしかない。

それにはまず人集めであるが、知り合いといえば、出身校の湘南ボーイしかいない。吉田君は、中学以来の同級生、堀内君は同じ辻堂から通学した仲だ。河野君は現役入学だが、知り合いだ。この3人に趣旨を説明して新部設立の発起人になってもらい、私が模造紙に「ワンダーフォーゲル部創設！部員募集」と大書した。しかし、堀内君の言うにはワンダーフォーゲルなんて誰も知らないから、これでは内容がわからない。ハイキング部でもいいではないかとのことで、ワンダーフォーゲル部の下にやや小ぶりの字でハイキング部と書き添えた。このピラを廊下の要所要所に張り、説明会を開いた。ハイキング部と書いてあるからわかりやすい。かなりの人が集まり、望月、田上、佐藤、小野、桑原の諸君は経済学部、山上、磯崎、加藤の3嬢は学芸学部、その他にも何名かの人々が入部した。これだけの名簿をもって学生部にゆき、体育系サークルとして認めてもらい、部室も決まった。

3. 初期の活動

最初の歓迎ハイキングは6月に大磯散策、第一回登山は7月に箱根金時山ハイキングに出かけた。8月には第一回の夏合宿をすることになったが、装備もないので、北軽井沢のバンガロー村に泊まり、浅間山に登山したほか、白糸の滝、照月湖、鬼押し出しなど浅間高原を跋涉した。右の写真はバンガロー村での炊事風景である。受験生活が終わったばかりで、誰も食事の支度などしたことがない。特に男子は全く駄目で、調理は女性まかせ、このようなお恥ずかしい風景になった。その代り貸自転車で照月湖に行ったときは、女性を後ろに乗せて男性部員が頑張った。

合宿が残した課題は飯盒炊飯をきっちりできるようにすることであった。

10月に丹沢で一般公開登山を計画した。9月に下見登山を行い、一般参加者の満足のゆく登山はできたが、無謀な企てとしか言いようのないものであった。素人が素人を案内しているのである。もし、怪我人が出たらどうするか、転落した人を助けに行けるのかなどを考えると慄然とさせられる。

新設した部の存在感を示すため、また当時フィーバーしていた登山熱に迎合するためであったが、課題はしっかりした登山技術の習得であった。こうして次第にハイキン

グクラブからの脱却が必要になってきた。このため、11月にはより厳しい登山が行われた。

乾徳・黒金山は新宿発 23:55、塩山駅を3時に出発して、12時間歩いた。大菩薩嶺登山も夜中のバスで、早朝柳沢峠から黒川山・鶏冠山をピストンし、大菩薩嶺から大菩薩峠を経て裂石に戻る強行軍であった。1958年4月になると、3つの学部に進級してバラバラになるため、1期として最後の西伊豆旅行を行った。

次の懸案は新入生の確保であった。これなくして部の存続が確保できない。4月のサークルオリエンテーションに満を持して臨んだ。幸い多数の参加希望者を迎え、新人歓迎はうらかな鎌倉天園のハイキングを行った。また、各学部において、それぞれ部室を確保した。当時の登山熱に支えられて、以後順調に部員数を増やし100名に近い巨大な部に成長して行った。



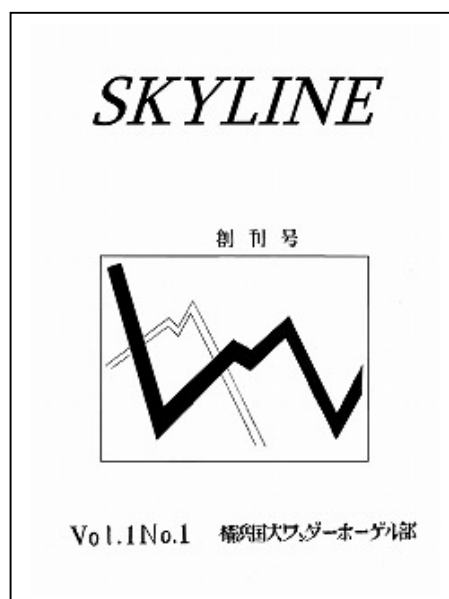
夏合宿 1957.8.5 北軽井沢にて

4. 部誌「スカイライン」の発行

私は部活動を記録に残すことが大切と考えていたので、部誌の発行を早くから考えていた。1958年の春休みにその編集をはじめた。名前は「スカイライン」と決めた。私はこれ

を山の彼方の象徴と考えていた。表紙裏に「私達の前途に SKYLINE は存在する。高く又遠い究極を秘めて、それは大地のシルエット、青空を切る刃物のイメージ。私達がそれを見つめて、それを目指して進むもの・・・しかも、しっかりと踏まれた土につづくもの」と書いている。しかし、部の財布は貧弱でとても部誌発行費は出してもらえないので、広告代で賄うこととし、伊勢佐木町のデパートやお店を回った。当時は学生に世間が寛大で、寄付金かご祝儀代として出してくれた。

このようにして、私が卒業するまでスカイラインは部費に頼らず独立採算で年2回発行していた。その後、年1回の発行になったが、1966年の10巻までは連続して発行され、以後、11巻(1970)、1972年号、1975年号、1976年号、1979年号まで部誌として発行された。1968年に10周年号が出来てからは、20周年、25周年、30周年、40周年と記念号が出るのみとなっている。



5. 部の理念 - 行動的文明批判 -

当時大学には、山岳部と山の会とがあった。山岳部は少数精鋭の伝統ある部であり、山の会は、平床山荘という志賀高原の山小屋を中心に活動する同好会であった。ワグネルはこ

の両者の中間的存在であり、登山を先鋭化すれば山岳部と競合し、ハイキングだけでは山の会と競合することになった。事実大学祭のとき山の会がワグネルのすぐ横で写真展を開き、つばぜり合いのようになったこともあった。また当時は安保闘争に象徴されるように学生は改革の理念に燃え、行動には理屈がないとならないという人が多かった。誕生したばかりで急成長したワグネルには、それ自体の存立の根拠になる理念が必要となった。

いろいろと思考の末、私は「行動的文明批評(批判)」という言葉を作った。これは文明認識の拡張、本来的自由の追求、行動と理念の関連の追求などを行動規範として山野を跋渉しつつ、自然の中に自己を問うのがワグネルの理念であると考えたのである。実はこうした考えは戦前、昭和初期の山を愛した文人たちの本に啓発された考え方で、父の書棚にあった田部重治著「人生の山旅」や、吉田弦二郎の山の随筆を読んで、山でものを考えることや昭和初期の登山にあこがれていた。このため、登山と文芸が結びつく活動であるワグネルは体育系ではなく、文化系サークルであるという考えが強くなり、1959年の春に私が体育系サークル会議に出席し、脱退を宣言して文化系サークルとなった。

これは今に続いているようである。

行動的文明批評のほうは学生運動が下火になると同様に消えて行ったようである。

6. 冬山登山の開拓

1959年正月に菅平でワグネル初のスキー合宿を行った。出かけたのは1期のみであったが、皆はじめての雪世界で雪山のすばらしさを体験した。何とか雪山に登りたい。いろいろ山の本を読み、装備をそろえてその年の3月に田上、松本と3人で奥秩父縦走に挑戦することになった。皆40キロのザックにピッケルを持ち、新宿駅ホーム階段に座席確保のために座り込んで列車を待つ。見送りに来てくれた藤岡さんの「部の新しい歴史を作ってください」との激励を後に出発した。縦走は小屋から小屋まで吹雪の中を12時間歩き通す過酷なものであったが、増富、金峰、国師、甲武信、雁坂峠と回って下山できた。こうしてYVWでは場所を限定してではあったが、冬山登山が行われるようになった。

7. エピローグ

この奥秩父縦走の帰り、東京から東海道線に乗ると、中年のサラリーマンが近づいてきて、「どこへ行ってきましたか？」「奥秩父を縦走してきました」「それはすごい、塾ですか？」「いえ、国大です」「そうですか、ぼくは慶応のワングル部員だったんですよ。でも僕のころには冬期登山は夢でした。今夜は感動しました。ぜひ握手させてください」

握手しながら、私のほうが感動していた。彼はすこしアルコールが入っていたかもしれない。

しかしそれだけにかえて心の真実が伝わってきた。私は今もあの夜の感動を鮮明に思い出す。我等のワングルは慶応大学ワンダーフォーゲル部に触発されて誕生した。その慶応のOBから握手を求められたのだ。ようやく我々も一人前になれたのだとの思いが込められた。

8. おわりに

2007年5月12日、創立50周年記念OB山行で西丹沢畦ヶ丸山に登った。参加者には1期の私と51期の現役部員一年生があり、50周年記念にはふさわしい組み合わせであった。

畦ヶ丸山頂での食事休みの時、私はこの写真を51期生に見せて、「50年前この西丹沢に君と同年の1期生が来たのだ」といった。

「先輩、いい男だったんですね」

「君だっていい男だよ。今日、ここでの写真を持って、50年後の創立100周年山行で、ここ西丹沢にきて、101期の現役一年生に君の写真を見せるのだ。彼はきっと言うよ。『先輩、いい男だったんですね』と」



1957年夏 西丹沢水の木大欄にて

記録からみたYWVの50年

塩野 貴之(46期)

一口にYWV 創立50周年と言っても、その歴史は紆余曲折を経ている。では、どのような歴史を経て、YWVは50周年を迎えたのだろうか。幸いにも部室には、大量に残された記録書や部誌、総括、友垣などの貴重な資料が保管されている。それらの資料を参考にして作成した図と表を見ながら話を進めよう。

まず部員数(OB会名簿より最終学年次まで在席の部員数より算出)については、創部8年目の1964年と20年目である1976年の2度のピークの後、現在まで減少一方である。(図1、図2)部員数に連動してワンダリング回数も変化しているが、必ずしも部員数が多いほど回数も多いというわけではない。これは執行部の方針に左右されるのだろう。

では表1の年表を参考に、歴史を振り返ってみよう。

YWVの創設期は手探り状態の中で、組織と登山技術の確立がなされた。だが、キャンパスが3箇所に分かれていたこともあり、辞めていく部員も多かった。それでも順調に部員数は増えてゆき、創部4年で組織が確立され、活動の幅も広がると同時に、山偏重の活動の懸念からワンゲル理念追求の気風が生まれた。理念追究の具体的行動として、統一的テーマのもと、里歩き主体の夏合宿が1960年以降に行なわれるようになった。サマーキャンプや海外ワンダリングなど新たな試みがなされる中で、部員数はなおも急増を続け、1964年に総部員数87名とYWV史上最高のピークを迎えた。

1966年頃までは活動の場として山と里が共存していたが(図3参照)いわゆる山派と里派の対立が徐々に表面化し、1967年7月のリーダー会議によって里派が退部し、当時の制度であったリーダー会制が廃止となった。当時の記録を見るに、最大の原因は感情的な対立であったことは否めない。

以後、山登り中心の活動となり、ワンゲル理念追求の傾向はなくなっていく。この変動の翌年、苗名小屋が建設され、YWVも新たな段階に突入するが、1969年は大学紛争に伴う大学閉鎖で活動はほとんど行なわれなかった。大学閉鎖の後に行なわれた1970年の春合宿では、祖母山で滑落事故が発生した。そして、その事故報告書が発行されたわずか10日後に、丹沢三峰でYWV史上初の死亡事故が起きた。この影響で夏合宿は中止、活動は縮小された。この4年間でテント焼失事故を含めて3件の重大事故が発生、さらに部員の退部、大学紛争とYWVは混乱の中にあつたといえる。この混乱の中で部員も減少していき、1971年には31名まで減ってしまった。

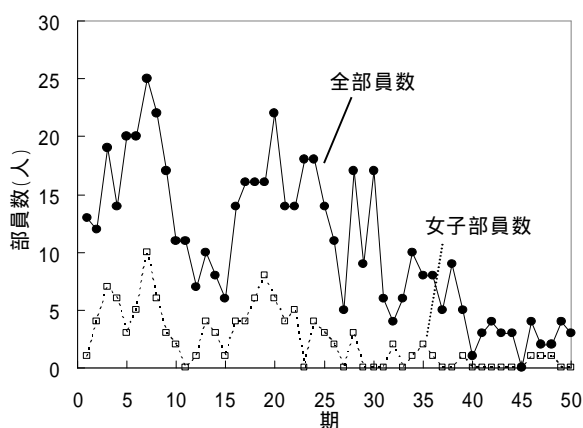


図1. 部員数の変化

(部員数はOB会名簿より算出した)

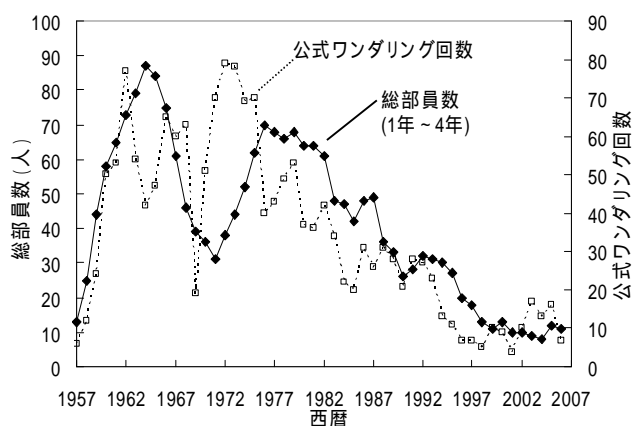


図2. 総部員数と公式ワンダリング回数の変化

表1. YWV の歴史年表

年度	区分	主な出来事	執行部の期	総部員数
1957	創設期	YWV 創立・夏合宿を行なう	1	13
1958		『スカイライン』創刊	1	25
1959		部則発行・サマーキャンプを始める	1	44
1960	ワング ル理念 追究期	山、島、スキーと活動の幅が広がる・L 養合宿を初めて行なう	2	58
1961		ワングル理念追求のムードが高まる	3	65
1962		神奈川県下三大学 W.V. 連合発足・「祖国を知る」をテーマとする	4	73
1963		「地域踏査と相互理解」を基本方針とする・組織、運営の合理化	5	79
1964		小屋建設準備委員会発足・春合宿を行なう	6	87
1965			7	84
1966		山派 vs 里派 (理念追求派) の対立が深刻化	8	75
1967	混乱期	里派退部・班制度の導入	9	61
1968		苗名小屋建築	10	46
1969		大学紛争に伴う大学閉鎖により活動休止	11	39
1970		丹沢三峰死亡事故・夏合宿等公式行事中止・無届山行増加・冬山訓練開始	12	36
1971	登山 技術 追究期	「友垣」誕生	13	31
1972		活動の場の主体を山とする・合宿派 vs PW 派が対立・夏合宿は行なわず	14	38
1973		火打山で冬山訓練・男女別での L 養合宿を行なう・沢登りを始める	15	44
1974		夏合宿なし・常盤台へキャンパスが移転	16	52
1975		夏合宿なし	17	62
1976		奥穂高岳死亡事故・夏合宿再開・活動の場を「中級山岳」とする	18	70
1977	安定期	合宿中心で活動することを部則に明記・年間テーマは「自然破壊について」	19	68
1978		年間テーマは「現代ワンダラー批判」・山行に文化的要素を取り入れる	20	66
1979		アイゼンピッケル全面使用禁止・「人間と自然破壊」というテーマで研究学習	21	68
1980		遭難対策規約の確立	22	64
1981		「現代における自然と社会の関係を考えよう」というテーマ打ち出す	23	64
1982		よりフィールドに結びついた活動を目指す・小屋再建委員会の発足	24	61
1983		自然に親しみ、それを通して部員間の相互理解を深めることをテーマとする	25	48
1984			26	47
1985		YWV 初合同執行部 (27・28 期) 体制をとる	27・28	42
1986		黒部峡谷水平歩道死亡事故	28	48
1987		安全第一の活動方針を掲げる	29	49
1988			30	36
1989		「責任と義務」、「共通体験」を重視する	31	33
1990			32・33	26
1991		ワングルという集団の中での個人の確立を目標とする	33	28
1992			34	32
1993		35・36	31	
1994		36	30	
1995	軽アイゼンの補助的使用を認める	37	27	
1996	個人山行の整備をすすめる	38	20	
1997	個人 主義的 活動期	部員の半数が退部・合宿を自由参加とする	39	18
1998			41	13
1999			41	11
2000			42	13
2001		YWV 史上初めて新入部員なし	43	10
2002			44	10
2003		黒姫山滑落事故・苗名小屋の屋根葺き替え	46	9
2004		部則・審査会事項の全面的改訂 (手続きの簡略化)	46	8
2005		YWV 史上初の女性主将誕生	47	12
2006		ラジウス・ラジ盆を使わなくなる	48	11
2007		アイゼンピッケルを使用した山行を行なう	49	15

死亡事故後は、活動の縮小に満足できない部員の無届山行が増加し、1971年からは練成的合宿が多くなっていった。14期は「創造的再建」を掲げ、部の新たなあり方を模索するが、合宿派とPW派の対立によって夏合宿は行なわれなかった。また冬山訓練、雪山登山、沢登りと山岳部的活動が活発化して行き、1973年には厳冬の火打山に登頂するまでになった。1974年も夏合宿は行なわれず、翌75年には執行部の夏合宿案が部員によって否認されて夏合宿中止という事態に陥った。部員個々人が自由な活動を求めた結果、サークルとしての一体感が欠けてしまっていた時期と言える。それでも部員数は増加して行き、1976年には総部員数70名と第二のピークが訪れた。また公式ワンダリング回数も多く、活動は活発だった。

このような状況の中で1976年の5月に奥穂高岳で死亡事故が発生。この事故を機に、YWVの体制が大きく変換した。まず事故の翌年、合宿中心で活動することを部則に明記し、部員の一体感を高めるよう方針転換を図った。そして1979年に21期執行部は、安全面の配慮からアイゼンピッケルを全面使用禁止した。また、ワンダリングに少なからず文化的要素を取り入れるようになり、里ワンダリングも復活した。

これは登山技術追究の時期に対する反省と反動、あるいは尾瀬を代表とする自然保護の気運の高まりが影響しているのだろう。実際にこの時期は、19期が掲げた「自然破壊について」というテーマに代表されるように、自然や自然保護、もしくは自然と社会の関係について考える勉強会が活発に行なわれた。1982年以降、部員数は徐々に減少して行き、1986年には水平歩道の死亡事故が起きて、合同執行部の弊害など様々な問題点が浮かび上がったものの、この時期は総じて安定していた時期と言える。また1977年以後の夏合宿は、南ア南部、南ア北部、大雪山との順で、3年周期で行なわれるようになった。この周期は1990年以降、南ア、北ア、大雪という順になったものの、現在まで受け継がれている。

時代は下り、33期が個人の自由をより尊重しようという姿勢を基本方針に取り入れたことに象徴されるように、この時期から個人山行の整備や、ワンダリングの手続きを簡略化しようという動きが見られるようになった。このように自由な活動を求める部員と、手続きが煩雑といえども安全面や部の一体感を優先する部員の対立が1997年2月に表面化し、40期が1人を除き全員退部するなど部員の半数が退部した。

これ以上の部員の減少を防ぐ意味もあって、39期執行部は「みんなが楽しく」という方針を立て、合宿を自由参加にした。

山岳部、ハイキング部、さんぽ会と山を志すクラブが消滅・休止すると同時に、YWVも部員数は減少、活動内容も縮小してゆき、2001年には45年目にして初めて新入部員が0となった。

2003年春には経験の浅い2年生部員がリーダー、サブリーダーを務めた黒姫山で、滑落事故が発生し部員1名が重傷を負った。

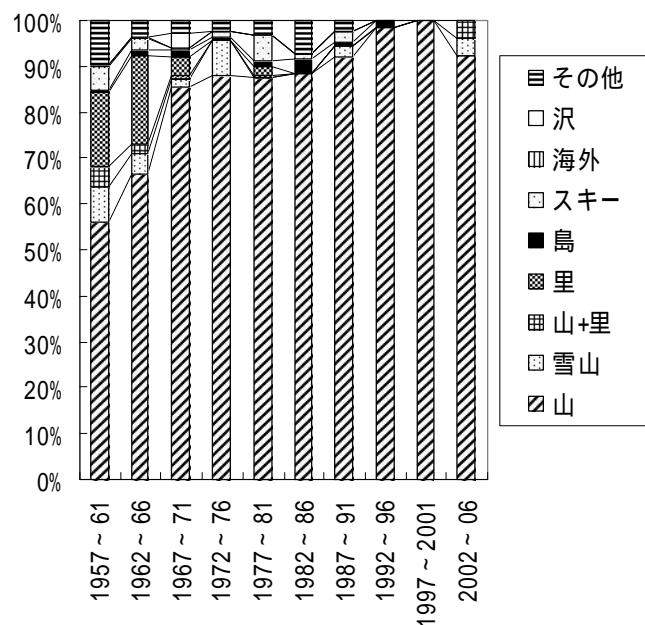


図3. 活動フィールドの変遷
(その他には追いコンや講習会等が含まれる。近年は追いコンやスキーは公式ワンダリングに含んでいない)

2004年には執行部学年で活動しているものが1人となり、後輩の協力も得られなかったことから、YWVの解散を宣言した。

しかしOBの説得もあって活動を再開。部則・審査会事項を全面的に改訂して、3、4人でも活動できるような体制を敷いた。

翌2005年には女性主将が誕生した。近年は合宿の日数を大幅に縮小するなど、YWVが生き残る道を模索している。

次に目を転じて女子部員数の推移を見てみよう。

50期あわせて部員数は515名、そのうち女性は115名と全体に占める割合は22.3%である。

しかし1~25期までは女性部員割合が26.5%であるが、26~50期では10.9%と明らかに女性の割合が減ってきている。特に40~45期には女性がいない。

YWVに女性を呼び込むためには、どうすればよいのだろうか。

YWVは山を活動の場の主体としてきたサークルである。では、どんな山に多く登ってきたのだろうか。日本には無数の山があり、その全てを分析に含めるのは困難だったため、日本300名山を対象に分析を行なった(表2)。

公式ワンダリングで最も多く登ったのは、丹沢山の49回である。ここでは丹沢山を丹沢山地最高峰の蛭ヶ岳としている。蛭ヶ岳の南にある本当の丹沢山には、65回登頂している。また300名山ではないが、搭ノ岳には実に131回もその頂を踏んでおり、YWVが最も多く登った山であろう。神奈川県の水源地である丹沢山地は、今も昔もYWVのホームグラウンドだったのである。

第2位は多くの若者にとって一番のあこがれであったろう、槍ヶ岳となっている。穂高岳は大キレットに阻まれていたこともあり、13回しか登られていない。3位は奥秩父の雄、金峰山である。金峰山に近い国師ヶ岳も12位と金峰山と同様によく登られている。100名山がブームとなってからは金峰、瑞牆とセットで登られるようになったため、瑞牆山も29位にランクインしている。4位は小屋から近い火打山で、一年を通じてよく登られてきた。5位以下、大菩薩嶺、雲取山、甲武信ヶ岳、谷川岳と関東近郊で登りやすい山となっている。7位の八ヶ岳北部の天狗岳は、赤岳より多く登られている。また三俣蓮華岳は北アルプスの中で2番目に多いが、これは黒部五郎岳と双六岳、鷲羽岳のジャンクションになっているため、結果として多く登られたのだろう。11位の鳳凰山は南アルプスの中では1番登頂回数が多い。南アルプスは白根三山、甲斐駒仙丈と北部の名山が上位にランクされている。その他、尾瀬・会津地域の山を多く登っているのも、YWVの特徴である。

以上の結果は、縦走登山をメインとしてきたYWVの性格をよく表している。すなわち険しく困難な山よりも、たおやかで生命溢れる自然が広がる山々を、縦走という形態で歩いてきたのである。百名山の中で登っていないのは、斜里岳、幌尻岳、後方羊蹄山、岩木山、蔵王山、西吾妻山、磐梯山、筑波山、草津白根山、赤城山、霧ヶ峰、恵那山、伊吹山、大台ヶ原の14山である。幌尻岳をのぞき、縦走に向かないか、山頂近くまで自動車で登れる山となっている。YWVで登るまでもないと、

表2. 日本300名山の中でYWVが登頂した回数の多い山
太字: 100名山
標準: 200名山
斜字: 300名山

順位	山名	回数
1	丹沢山(蛭ヶ岳)	49
2	槍ヶ岳	40
3	金峰山	39
4	火打山	34
5	大菩薩嶺	31
	雲取山	31
7	甲武信ヶ岳	30
	谷川岳	30
	天狗岳	30
	三俣蓮華岳	30
11	鳳凰山	29
12	北岳	28
	国師ヶ岳	28
14	八ヶ岳	26
15	間ノ岳	25
	巻機山	25
17	飯綱山	22
18	仙丈ヶ岳	20
19	薬師岳	19
	妙高山	19
21	甲斐駒ヶ岳	18
22	燧ヶ岳	17
	会津駒ヶ岳	17
	大天井岳	17
	三ツ峠山	17
26	鷲羽岳	16
	至仏山	16
	御正体山	16
29	悪沢岳	15
	水晶岳	15
	野口五郎岳	15
	白馬岳	15
	瑞牆山	15
	平ヶ岳	15
	朝日岳	15
	黒姫山	15
	御坂黒岳	15

50年に渡り敬遠され続けてきたのだろう。

また百名山で登られた山は86山、延べ1086回、200名山では50山、延べ289回、300名山はわずか28山、延べ161回となっている。このことから、YWVが目指した山は百名山に偏っていたということがわかる。名の知られていない藪山に登るより、日本アルプスの名山に登りたいと思うのは当然のことだろう。

YWVは毎年、春休みや夏休みを利用して長期間のワンダリングを行なってきた。その中で、長期間の上位10ワンダリングを並べたのが表3である。1位、2位は手前味噌で恐縮だが、筆者が2年連続で実行した日本横断ワンダリングである。3位以降は沖縄、九州、韓国、北海道の周遊が10位までを占めている。時間を無駄に使える学生の特権を行使し、まさに渡り鳥のように各地を周っていたのだろう。上位10のうち7つは1960年代に行われており、当時のYWVの活気がうかがわれる。

次に下界へ降りずに、長期間縦走した記録を集めてみたのが表4である。全て南ア、北アであるが、中でも茶臼岳～北岳間の縦走と、劔槍または劔笠縦走が長期縦走には多い。ほとんどが1980年以前の記録だが、近年でも劔槍縦走や光岳～北岳縦走は散発的に行われている。しかし、装備や登山道が良くなったことにより、往年より日数を必要としなくなったため、上位には進出していない。

近年、ワンダリング日数が短くなっている。図4はワンダリング1回当たりの平均日数の推移を示したもののだが、1960年代に5.5日を超えていたものが、最近では2.5日まで減少した。この要因は交通機関の発達により、短期間で山に登れるようになったことや、大学生が様々な活動を行なうようになりまとまった時間を取れなくなったこと、山は週末に短時間で登りたいと意識が変わってきたことが考えられる。

ここまで様々な記録をもとに、YWVの歴史と変遷、特徴を振り返ってみたが、時代とともにYWVは変化してきたことが見て取れる。しかし協調と対立、親愛と憎悪はどの時代にもYWVの部員の中にあり、複雑な人間関係の中で前進が続けられてきた。重い荷物よりも人間関係で苦しんだ部員は多いと思うが、だからこそYWVの同期の結びつきは一生のものとなるのだろう。

今後も苦しみながらもYWVが存続、発展していくことを願って、本稿を終わりにしたい。

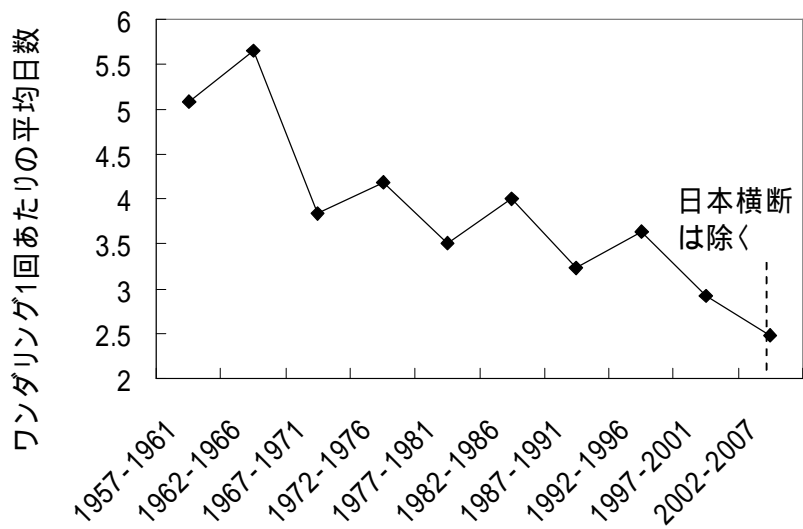


表3. 長期ワンダリングベスト10

順位	日数	回	年月日	行き先	メンバー
1位	40	1666	2004.8.10~9.20	日本横断(沼津-富士山-南ア-中ア-北ア-滑川)	塩野、井上、島田
2位	27	1655	2003.8.29~9.24	日本横断(横浜-奥多摩-奥秩父-西上州-浅間-苗名小屋-糸魚川)	塩野、井上
3位	24	278	1964.3.4~27	琉球列島(那覇-西表島-石垣島-那覇)	須賀、菅谷、清水、蓮尾、秋山、山本、古荘、原隆、下村、林、奥野、小木曾
		497	1968.3.13~4.5	韓国	加藤、塚本、鈴木紀、関口
5位	22	97	1961.3.12~4.3	九州	斉藤伸、郡司、谷上
		351	1965.8.8~29	沖縄	菅谷、駒形、八島、束田、鈴木博
7位	21	71	1960.8.5~25	北海道	岩上、大串他
8位	20	74	1960.8.9~28	北海道	石田、平野
		748	1972.7.17~8.5	夏期W北海道(大雪山系・利尻・利尻)	目野、川端、他11名
10位	19	123	1961.8.5~23	北海道	諸節、甘粕

表4. 長期縦走ベスト10

順位	日数	回	年月日	行き先	メンバー
1位	17	409	1966.8.22~9.7	南アルプス(赤石山系)	畑中、早坂、下村、三浦煌、三浦正、日渡、小出、白神、近藤、木下、山懸
2位	14	672	1971.8.25~9.8	北ア(蓮華温泉-朝日岳-雪倉岳-白馬岳-槍ヶ岳-唐松岳-鹿島槍ヶ岳-針ノ木岳-大町)	高橋、他7名
		898	1974.8.7~20	南アルプス(北岳-塩見岳-茶臼岳)	松田、池谷、他11名
		750	1972.7.22~8.4	夏期W南アルプス(北岳-茶臼岳)	吉田、鶴岡、他4名
		751	1972.7.22~8.4	夏期W南アルプス(光岳-塩見岳)	鈴木、下田、他6名
6位	13	1102	1978.7.19~31	夏合宿(畑薙第一ダム-茶臼岳-赤石岳-荒川岳-三伏峠-樺沢)	西田ほか
		195	1962.8~8.20	剣槍縦走(富山-雷鳥沢-劔-五色ヶ原-薬師-雲ノ平-双六-槍-横尾-奥穂-上高地)	斉藤大、白井、中村、羽鳥、矢島、諸角
8位	12	1441	1988.8.15~26	北ア劔・笠PW(室堂-劔岳-立山-薬師岳-雲ノ平-黒部源流-双六岳-鏡平-笠ヶ岳-新穂高温泉)	麻生ほか
		958	1975.7.20~31	夏期W北アルプス(立山-薬師岳-槍ヶ岳)	木村、松本、他8名
		754	1972.8.14~25	北アルプス(笠ヶ岳-雲ノ平-薬師岳)	日野、川端、他9名
		203	1962.8.27~9.7	南アルプス(池山小屋-北岳-間岳-農鳥-塩見-三伏-荒川-大聖寺平-赤石-聖-沼平-金谷)	永田明、諸角

創部のころの思い出

佐藤 文雄（1期）

1957年（昭和32年）4月、当時、横浜国大の教養課程が履修されていた立野分校の壁に、「ワンダーフォーゲル部創設！（ハイキング部） 部員募集」という張り紙が張り出された。元来運動音痴で、投げる、飛ぶ、走るなどが苦手な私であったが、唯一「歩く」ことならできると、指定された日時に、とある教室に飛び込んだ。そこにはこれから新しい部をつくるのだという熱気と暗い受験期を通り越した開放感、春の陽気、などが相俟って、非常に華やいだ雰囲気があった。

ワンダーフォーゲル部は湘南高校卒業生であった嘉納、吉田、河野、堀内の諸氏を発起人として作られ、初代の部長は堀内肇氏であった。

当時の横浜市内は敗戦の跡が色濃く残っており、MPのジープが走り回ったり、野沢屋（松屋だったかな？）は進駐軍専用のPXであったりした。横浜国大は経済学部が清水ヶ丘に、工学部が弘明寺に、学芸学部が鎌倉にと3つのキャンパスに分散されていたが、これら3学部の一年生は集められて、山手の立野にある小さな校舎で授業を受けることになっていた。その立野分校の登校途中には進駐軍家族の兵舎があり、4、5才のヤンキー娘にわれわれ大学生をからかう仕草をされるといったそのような時代だった。

部室は校舎の中庭に仮設された半円形のカマボコ部屋と称したトタン屋根でできた部屋で、ここに同じ趣味を持った者同士が集まり、駄洒落や青臭い文学論、エセ哲学論等、おおいに青二才ぶりを発揮し青春を楽しんだものである。

最初の山歩きがいつだったのかどこだったのかははっきりとは覚えていないが、印象に残っているのは、創部より3ヶ月たった夏休みに、最初の夏合宿として信州浅間山登山が挙行された。当時の浅間山も噴煙は出ていたのであろうが、登山は許されていた。記憶に鮮やかなのは鬼押し出しの奇岩と、田舎者だった私には軽井沢という地名に胸を躍らせたことであった。

長い夏休みが終わり、久しぶりに部室に入ると"山派"と"野原派"の山野論争が持ち上がっていた。人間は良くも悪くも向上心がある。ハイキングとして山歩きをしているうちにより高い峰、より難しいところに挑戦したくなる。

当時、井上靖の山岳小説「氷壁」が大増刷され紙価を高めていたときであり、登山熱が盛んになっていた。

そのような状況から起こった論争だったが、既設の山岳部と一線を画すために、私は次のように言ったことを記憶している。「ピッケル・アイゼン・ザイルなどを最初から装備していかなければならない山歩きや沢登りは部としては行わない」

しかし部長の堀口君はじめ数名の者が退部し、ハイキング部という副題もとれて、ワンダーフォーゲル部一本になった。

あるとき望月君が当時としては斬新なスポーツシャツを着てきた。白地にぼかした青線で十字にデザインされていたので、見方によっては荷物である。「これカッコがいいや」とばかり5、6人がそれを求めて一斉に着たので、「ワングルのユニホームみたいだね」と言われた。これがきっかけとなって、ワングルのユニホームが作られることになった。

創設したばかりの部には装備は何もなかった。テントもないから夏の合宿もバンガローを借りて行った。数ヶ月分の部費だけでは装備を作るにはお金がまったく足りない。当時会計を担当していた私は財源の確保のため、秋の大学祭に部で喫茶店を開業した。

皆で手分けしてポスターを張り、しゃれた店作りをした。当時高級ウイスキーであったサントリー角瓶に安物の「レッド」を入れておいたのだが、好評を博し一夜にしてたちまち資金調達に成功して、装備なども購入できるようになったことを、誇らしくもまた後ろめたく、ほろ苦く思い出す。

部活動として申請しなかったのが個人的なことになるが、1959年の夏、東海道53次を歩いてみようと思いついた。種々の資料を集め、落とした第二外国語の追試の行われる前夜に決行した。それは東京から通学していたのでわざわざ追試のために1日だけ学校に行くのは貧乏学生としては汽車賃がもったいない、行きがけの駄賃にしてやれと考えたからである。お江戸日本橋を丁度、夜中の12時に出立した。朝6時過ぎに清水ヶ丘にたどり着き、部室で仮眠して9時からの試験に臨み、その日は藤沢止まりだった。東海道をとぼとぼ歩いていると、犬にほえられるわ、人には胡散臭そうに見られるわ、ついには近江近くの草津警察署で2時間近く尋問され、あわやブタ箱入り（当時、安保闘争のため大学生と警

察とは犬猿の仲であった)となったり、それでなくても暑さと疲労で何度も挫折しかかったが、曲がりなりにも京都にたどり着けたことが、今となっては私のワングル生活の中で一番の思い出となっている。ところが、京都にたどり着いた翌日に(後に伊勢湾台風と名付けられた)台風が伊勢湾に上陸し、線路が寸断され、4日間も京都に足止めを食った。罹災後最初の東京行き急行列車"銀河"に乗ってやれやれと思ったのも束の間、今度はいたるところで路線修復、少し行ってはまた路線修復、このために各駅停車はおろか長いところでは3時間も駅に留まり、ほぼ12時間かかりで東京駅に辿り着いたことが懐かしく思い出される。

ワンダーフォーゲル部は50年という年月を絶えることなく存続し、さらにテントはおろか山小屋まで自前で持つことができそれが今に続いている。私は、ワングル部員としては落ちこぼれであると自負しているが、それでも後輩には、1期生として厚遇されている。このようなワンダーフォーゲル部は私の誇りである。皆さんに感謝したい。



1957年夏合宿 浅間山山頂にて
前列左より2人目筆者、右隣堀内部長

ワングルの思い出

吉田 光志(1期)

大学1年の時、教養課程を立野で受けていた頃、受験の緊張感から解放されたためか、あるいは、ただノートを棒読みにするだけの何人かの先生の講義によるためなのか、大学生活に対して抱いていた期待とはなにか異質な味気なさを感じていました。

また、そのころの日本は、社会的には戦後の経済的復興も進展し、拡大途上にありながら、内蔵されてきた諸矛盾が大きく表面化し始めた時代の中に私たちはいたのではないかと思います。

私がワンダーフォーゲル部を知ったのはちょうどそんな時でした。

ドイツで1900年前後に起こったワンダーフォーゲル運動も、当時のドイツでは帝国主義の下、資本主義の発展とそれに伴う国内政治の混乱、労働貴族も含めた上流市民階級の退廃的社会生活に対する学生の反発、学生生活への不満などが背景にあったといわれます。そのような趣旨が私の心情と共鳴したのでした。

私の心に残るワンダリングは、2期の人たちと東北地方の山村をめぐり歩いた旅でした。1958年の7月には、猪苗代湖から磐梯山に登り、五色沼、桧原湖を通って米沢に出て、山形市内のお寺の本堂で宿泊し、その住職や家族に親切にしてもらい、汽車で松島に行くつもりでしたが、私が山形駅で食べたアイスクリームに食あたりしたため、途中の鳴子温泉で一泊休養し、松島のバラ園にバラにも勝る美人がいるとの情報で訪園しましたが、あいにくの不在でがっかりしたのを記憶しています。

翌年1959年の夏には1ヶ月の旅をしました。2期の人たちと新潟から佐渡を一周、本州に戻り、黒部峡谷をトロッコで樺平へ、ここから祖母谷沿いに白馬に登り、北アルプスを縦走し、上高地の徳沢園で夏合宿の本隊と合流しました。

佐渡では最高峰の金北山を目指す予定でしたが、米軍の制空秘密施設があり、登山不可であり、隣のドンデン山を目指しましたが、途中木の上から蛭の落下攻撃に遭い、たまらず両津に逃げ帰りました。



1958年7月 松島バラ園にて
美人に会えずみなガッカリ、前列中央筆者

当時は米がまだ配給統制の対象であり、リュックには米、みそ、醤油、缶詰、灯油、大鍋、シャベル、テント、シュラフ等々、全員40キロの重さになり、海拔0メートルからひたすら道なき道を1000m位まで登り、流石にバテて、休んだところへ蛭がふりそそぎ、音もなく四方から忍び寄ってくるのにはまいりました。しかし、金鉱跡地、地元の人でも滅多に見られないという大ザレの滝、真野御陵を見てまわる中で地元の人々の親切さには本当に感動しました。

浜辺でキャンプしていると、早朝には漁から帰る漁師の方から食べてくれと頂いた魚のみそ汁の旨かったこと、夕方には、近くの家々から風呂に入れと誘われて、そのうちの一軒にだけ行くのも悪いので、手分けして別々に各家に貰い風呂に行きました。

キャンプをしていると子供たちが遊びにきてくれました。

前年、東北旅行の時は、子供たちがはにかみ屋で遠くからこちらをうかがいなかなか近づいて来なかったのとは対照的に、ここの子等は明るく人懐っこく、一緒によく遊びました。

また、相川のお寺に宿泊させていただいた時には、住職とその奥さんが、食事、酒をふるまってくれた上、三味線で歓待してくれて私たちも大騒ぎしたことなども懐かしく思い出します。ワングルだからこそ出来た放浪旅行です。

社会人になってからは営業の関係で、静岡以西の主要都市は、五島列島も含めてほとんど回りました。また、1968年からは当時の南アフリカ、ローデシア、コンゴ、ナイジェリア、モロッコなどのアフ

リカ諸国、西ヨーロッパ、旧東ヨーロッパ等々を巡回しましたがどこも食事は問題ありませんでした。ワングル時代に培った何でも食べる習慣が役立つものと思います。

私のワングル活動は7月と12月に集中していますが、他のシーズンは硬式野球部で活躍し、練習やリーグ戦に臨んでいました。

ワングルで足腰を鍛えたためか、昭和34年秋の横浜5大学野球リーグ戦(現神奈川大学野球リーグ)では首位打者を獲ったりしました。

あの1年生の味気なかった思いもワングル活動により払拭し、その上ワングルを通してよき仲間恵まれ、感謝しております。

現在は退職しておりますが、町の環境ボランティアの会を立ち上げ、この会長をしております。

自然生活部会、4R部会、省エネ部会の3つの部会を作り、野鳥観察、生ごみリサイクルなど毎月の部会活動に顔を出している上、趣味で始めた30人の絵の展覧会の幹事もやっています。

2週間に1回の絵の教室の時間に、展覧会に向けて行うべき作業を、資料を渡して説明するのですが、なにせ、80歳を超えた人から40歳代までの人を対象とするので、忘れる人、私の言葉の中に理解できない単語がある人(どうも20~30年も年が離れると私の話す言葉を古語と思う人がいるようです)がいて手間暇のかかること。

毎日忙しく過ごしております。



佐渡金山跡にて

. 各期の活動の記録



1963年 飛騨夏合宿

入学：1957年（昭32）4月

卒業：1961年（昭36）3月

主 将	田上 栄一（経）				
部 員	嘉納 秀明（工）	吉田 輝義（工）	藤岡 暉生（工）	望月 元雄（経）	
	佐藤 文雄（経）	吉田 光志（経）	小野 三郎（経）	河野 哲（経）	
	桑原 忠雄（経）				
退部者	磯崎 節子（学）	加藤 宜子（学）	山上 和代（学）	鈴木 直美（学）	
	柏木 寛（学）	石黒 久弥（経）	堀内 肇（経）		
物故者	吉田 和夫（工）	松本 節子（学）	松本 正雄（経）		

創部早々、上記の他にも何名もの人々が入部した。発足の部員数が20名を超えるとは大したものだ。学生部に掛け合い部室をもらった。カマボコ型のトタン張り、机が真ん中に置かれているだけの部屋であった。この部屋は、もともとポート部のものであったが、そこに同居することになったのである。ところが、ワングルの部員はにぎやか揃い、落語の真似をするやら、すぐ歌を歌いだすやら、女性部員の笑いも絶えずという和気あいあい、時々来ていたポート部の人たちはすぐに港の艇庫のほうにばかり行くようになって、ワングル専用部室になってしまった。軒を貸して母屋を取られるとはこのことである。

早速に出かけたのが大磯の散策である。吉田光が案内人になり、滄浪閣、藤村旧宅、千畳敷山など歩き回った。次は嘉納が案内人で箱根金時山に登った。8月に夏合宿をすることとなった。しかし、装備も経験もないから、北軽井沢にバンガロー村があるのを見つけ、ここで宿泊した。当時は、草津と軽井沢を結ぶ草軽電鉄という単線の小さい電車が走っており、浅間山麓をぬけて北軽井沢にゆき、炎天下を浅間山に登った。

秋には一般公開ハイキングとして丹沢山に出かけた。この頃から、登山技術の向上と装備の充実の必要性が自覚されてきた。秋に乾徳・黒金山、と大菩薩嶺に、春に西伊豆をめぐる1年を終えた。元気な新入部員をむかえて、残雪の奥秩父をアタックしたり、夏には台風にあつて夏合宿が中断したりとトラブルが続いたが、1959年正月のスキー合宿、3月の雪山登山など技術の向上、リーダー制など

団体行動の規律がつけられていった。

反面、同好会的気分が薄れて、中退する一期部員もあったが、2期、3期、4期と活発な新入部員を迎えて、大学でも有数の大きな部に成長していた。

1960年12月10～11日、丹沢ユース山荘で、ワングル最初の追い出しコンパが行われ、1期は卒業して行きました。

その後のOB会組織をつくり上げたのも1期であり、山小屋建設の最初の発起人も1期の面々でした。



1957.8.7 浅間高原 白糸の滝にて



1958.3 伊豆半島にて

入学：1958年（昭33）4月

卒業：1962年（昭37）3月

主将 吉野大次郎（経）

部員 米屋 勝利（工） 塚原伸一郎（工） 藤林 徹（工） 宮崎 紘（工）
 渡邊 一良（工） 岩上 克尚（学） 斉藤 彦司（学） 北見（岩村）美智子（学）
 多田（氏平）裕子（学） 宮本（荻野）高子（学） 西村（倉田）郁代（学）

2期の私たちは1958年に入学し、当初の教養課程は立野分校でした。部室は米軍お下がりのかまぼこ型のドームです。上級生（2年生）はめったに部室に来ませんので、私たち1年生だけの気楽な部室でした。2期の部員は当初は20名くらいいましたが、少しずつ減って、卒業する頃には12名になっていました。

1年生のときの夏合宿は散々でした。初めての八ヶ岳縦走でしたが、台風で蓼科山頂小屋に2日間閉じ込められたあと、縦走をあきらめそこから逃げ帰りました。

2年生になると各学部に分れ、立野分校から清水ヶ丘、弘明寺、鎌倉へと分散しました。後輩（3期）も入部して1年生から3年生まで揃いました。夏合宿は上高地・徳沢にベースを張り、合宿1週間、サマーキャンプ（一般公開）1週間という2週間コースでした。釜トンネルが崩れ、重いリュックを背負って沢渡から歩かされました。

翌年の1960年になると全学年が揃い、部員数は100名を数えました。3年生の私たちが執行部です。この年の夏合宿の参加者は80名になりましたので、同一行動は困難ということから分散・集中方式をとりました。テーマは東北地方の探求で、下北津軽、十和田八甲田、八幡平、飯豊の4隊に分散し、二本松の岳温泉スキー場に集合しました。

この年は年間のスケジュールが定着し、追い出しコンパも初めて開催されました。

諸規程、規約類も整備され、冬山規制もこの年でできあがりしました。翌年のゴールデンウィークに前穂に登り、この冬山規制に触れて懲罰第1号を食らったのが、吉野と米屋です。

1961年、4年生になっても私たちは相変わらず部活動を続けていました。夏合宿は立山・弥陀ヶ原にベースをおき、この長い合宿を終えるとその足で白山、能登半島、針ノ木越え、仙人池から樺平、出雲・隠岐と各方面にパーワンを続けました。さらに上高地に回り、連続20日間山籠りという猛者もいました。夏休みの前に、突然フェリス女子短大から手紙がきました。旅行部を創設して登山をすることになったが、経験者がいなくて困っている。奥秩父を縦走したいのだが引率してもらえないかという内容です。3年生の高橋主将と私とその任に当たりました。8月中旬、胸をときめかせて出発しましたが、7名のお嬢様方はただただ足が遅くて退屈しただけという4日間でした。

卒業直前の1962年2月、2期だけで修学旅行に出かけました。夜叉神峠で白根三山を眺めたあと、桃の木鉱泉に泊まって、将来の抱負などを語り明かしました。このときの12名が、いま45年を経て1名も欠けることなくOB会で活躍している面々です。

1989年に始まったシニアの集い、1999年からスタートしたシニア月例登山には、毎回多くの2期生が参加しています。

また、毎年4月には、山に登れない人たちも含めて同期会を開催しています。関東近辺の名所旧跡を訪ね、お花見をして、おいしい食事を楽しみます。孫のいる年齢になりましたが、会えばワングル時代の昔に戻り、いつも同じ話をしています。



追い出しコンパ 1961.12.10

入学：1959年（昭34）4月

卒業：1963年（昭38）3月

主将 高橋 俊吾（経）
 部員 渡辺 享英（工） 吉村 元孝（工） 三神 廣臣（経） 井上 肇（工） 白井 信行（工）
 江崎 伴雄（工） 金田 精彦（工） 栗田武寿郎（工） 腰塚 典明（工） 平林 茂（学）
 芹沢（石田）陽子（学） 諸節 紀代子（学） 宮崎 裕子（学） 塩谷（甘粕）佐紀子（学）
 前田（平野）ミドリ（学） 森井（鋤柄）栄子（学） 井田 貞司（経） 永田 克己（工）
 物故者 斉藤 大樹（工） 横手 敏江（学）

3期は立野分校を知っている最後の期である。1959年入学後、1年生だけが桜木町駅前から市電で大和町まで行き、丘の上の分校に通った。分校のカマボコ部室で1年生だけでせっせと歌集作りをした。まず第1集、そして夏合宿前には第2集までも作り上げていた。

新人歓迎Wは川苔山だった。出来て3年目を迎えたばかりで、元気のよい1年生が先頭をどんどん行ってしまい、お腹が空いたと勝手に弁当を広げるなど、まだ統制のとれたWではなかった。

新人合宿は尾瀬だった。2日目三条の滝で雨が降り出した。原小屋で昼食を取っていると、3年生が「ここから富士見峠を越えて、今日中に帰ろう」と予定変更を言い出した。1年生は全員反対。そこで長蔵小屋まで行って、泊る人と先に帰る人と二手に分れる結末となった。

夏休みが終ると、清水ヶ丘に移動した。経済学部の中に1年生が入り込み、部室を占領した。

大学祭には参加せず、1年生だけで富士五湖めぐりに出掛けた。集合時間に遅れた人がいて二手に分かれて出発した。先発隊は紅葉台からこうもり穴を通過して樹海を抜けて西湖根場に行くはずが、湖畔に出たところで日暮れとなってしまった。後発隊は既に対岸の予定地に着いていた。そのままその日は分かれて夜明かしとなった。翌日、溶岩だらけの湖畔を迂回して歩いていくのは大変と、舟をチャーターし、あっと言う間に湖面を横切り、やっと合流することができた。

寒くなってきて、部室で毛糸の靴下編みをした。男子も慣れない手で編み棒をにぎった。

1960年、2年生になると、経済学部だけが清水ヶ丘に残り、工学部は弘明寺へ、学芸学部は鎌倉へと分かれていった。

1961年、3年生になる前の伊豆のL養成合宿で、合宿として初めて女子だけの隊を編成した。

3期も3年生となった。人数も多くなったので、奥日光での新人合宿は上野から1車両借り切って団体で出掛けた。

夏合宿は立山。ベースキャンプ方式で行った。富山から薪を持って上がり、弥陀ヶ原ではトラックをチャーターしてザックと薪とを運んだ。バスには人間だけを乗せてキャンプ地に向かった。敢えて危険は冒さないとの方針から剣行きは前剣までとした。

11月に初めて合Wを行った。相手は東京教育大、場所は奥多摩だった。

1963年3月、卒業式後、お別れWを南房総で行い、社会に巣立っていった。



新人合宿 尾瀬（1959年6月）



夏合宿雷鳥沢（1961年7月）

入学：1960年（昭和35）4月 卒業：1964年（昭和39）3月

主将 齋藤 貞夫（工）（四日市）
 部員 谷上 俊三（工）（伊勢原） 郡司 直樹（工）（横浜） 齋藤 伸一（工）（海老名）
 竹内 章二（工）（横浜） 谷 昭二（工）（静岡） 永田 明彦（工）（仙台）
 牧原 洋（工）（東京） 永田多恵子（学）旧姓安部（仙台） 原 隆子（学）（二宮）
 横山 幸子（学）旧姓広瀬（甲府） 大黒美代子（学）旧姓橋出（町田）
 泉 充子（学）旧姓織田（大阪） 高田 良子（学）旧姓寺沢（横浜）
 物故者 跡部 一博（経）（平塚） カッコ内 平成19年現在 居住地

4期の入学した年は60年安保騒動の最盛期であり教養課程のある清水ヶ丘の校門には登校するたびに自治会関係者からデモ参加を呼びかけられる騒然とした年でした。

ワングルは4期が執行部となった昭和37年には諸先輩のご努力によりサークルとしての組織、活動、運営法などの骨格がほぼ出来上がり、部員数も100名を超える程になりました。

しかしながらワングルの行動指針については体育的な面を目指す山派と文化面を主張する派との議論が盛んでした。方向を示す夏の合宿は、前年度は立山分散合宿だったので“故国を知る”というスローガンの下で岩手県の脊稜山脈から北上山地、三陸海岸など全域、集結地は網張温泉で、全員で岩手山に登りました。平成19年度NHK朝ドラ“どんど晴れ”の岩手山を見るたびに昔日のことが思いだされます。文化的色彩が濃い夏合宿でした。この年の冬から春先には数mを越す豪雪の南会津PW、当時パスポートが必要な沖縄PW、屋久島九州PWなども行われ4期が積極的にリーダーシップをとり活躍しました。

現在4期の方は表記したように関東からはなれ大阪、三重、静岡、山梨 宮城など地方にいてそれぞれの地域で元気に活躍しています。また郡司さん、谷上さんは地元の神奈川ですがシニアOB会の設立、企画、運営、広報（名物 写真屋）に積極的に参画され 大黒さん、原さんもシニア月例の常連です。

近年郡司さんは、日本百名山踏破、自転車による四国一周。谷上さんは、改造マイカーによる東北、北海道の登山と見聞。仙台の永田多恵子さんは、ご主人の留守を狙って年50回の山登りなど元気にやっています。ワングルOBが第2の生活と設計のひとつの方向を示しているとおもわれます。

4期は地方在住が多く手軽に同期会が開けませんが、写真は平成19年2月横浜での同期会のものです。



入学：1961年（昭36）4月

卒業：1965年（昭40）3月

主将 岡本 幸雄（工・故人） 部員 19名

5期は2007.6.3～5に上高地で毎年恒例の同期会を開催した。場所がよかったのか参加者は21名（男10、女11、元部員12、配偶者9）と盛況であった。中には写真を撮りに年に2回は来ている人（高須）やこの連休に来た人（中村）もいたが、ほとんどは40数年ぶりの訪問であった。

まず2車線の立派な釜トンネルにビックリしたが、吊り尾根も、西穂も奥穂も前穂も見覚えのある姿でありました。

まわりと比べ低く見えたのか矢島と向井が焼岳に登ると言い出し、皆は首をひねりながらも送り出した。ここにコースタイムを記し両君の足の健在を讃えたい。大正池ホテル 8:30 発、焼岳山頂着 13:30、同発 13:45、ホテル着 17:40。登り5時間、下り3時間55分でした。

残りは明神、徳沢に向けてワンダリングをした。大正池は立ち枯れの木は少ないが残ってはいた。沢からの土石で明らかに小さくなっていたが、東電が環境省と静かにチャンバラをしながら浚渫していると聞いた（亀井）。梓川は護岸工事のためか、昔足を洗い昼寝をした川原が見当たらなかった。道はすっかり整備され木道がアチコチと続き、河童橋も3尺巾が6尺巾と立派になっていた。花はニリンソウ、サンカヨウ、ツバメオモト、ラショウモンカズラ、シャクナゲ、イワカガミ、オオカメノキ、ムシカリなどなどを教えてくれた人達もいた。ヤマシャクヤクが明神の小屋裏で咲いており久しぶりの再会だった。オカリナを吹く人もいた（高須F）。来年はもう少し？ 夜は酔っ払いがいつもの通りに迷惑をかけていた。ゴメンナサイ



上高地にて5期の会



向井氏



矢島氏

思い出キーワード

同期会の話はOB会報へ、では困るので追記する。当時を思い出してください。

	5期	主将	夏合宿	トピックス 世の中、レコード大賞、言葉
1961 S36	入学	高橋俊吾	立山弥陀ヶ原ベ スキャンプ90名	ヴォストーク世界一周 鉄の壁できる 君恋し 地球は青かった
1962 S37	2年	斉藤貞夫	岩手網張温泉集結 71名	キューバ危機 堀江謙一太平洋横断 いつでも夢を スカッとさわやか
1963 S38	3年	岡本幸雄	飛騨高山集結 80名	黒4ダム完成 ケネディ暗殺 こんにちは赤ちゃん ヤーチャイカ
1964 S39	4年 23名	秋山 勉	山陰が集中豪雨で 中止。完全分散で	東海道新幹線 東京オリンピック 愛と死をみつめて おれについてこい

入学：1962（昭37）年4月 卒業：1966（昭41）年3月

主将 秋山 勉（経）
 部員 石井 靖政（経） 江角 喜一（経） 蓮尾 尚志（経） 近藤 博昭（工）
 清水宣次郎（工） 蜜島 英二（工） 柳原 隆夫（工） 久野 秀晴（工）
 斉藤 治重（工） 菅谷 光雄（工） 岡田 光豊（工） 岡本 次郎（工）
 岡田（岡崎）美奈子（学） 松本（長谷部）君子（学） 永井（山本）紀子（学）
 鈴木 浩（学） 原 隆（学） 桜井（宮城）素子（学） 古荘 敏子（学）

最新の名簿では、上記の20名が登録されていますが、部員番号から見れば、当初は32名以上の大人数で賑やかにスタートしました。

新人合宿は、吾妻連峰でした。未だ雪がかなり残っており、とある下り道を新人の何人がリュックを背負ったまま面白そうに滑り降りました。3年の故・跡部さんが、「滑るな！ 滑るな！」と大声で怒鳴りました。跡部さんが大きな声を出すのを聞いたのは、その時だけでした。変化に富んだ合宿は、これからのワングル生活の楽しさを教えてくれました。各人は、山に里にと、飛び出してゆき、夏合宿後の1年生だけのPWでは、テントを燃やすグループもありました。

2年の11月に、丹沢で神奈川県下の大学の合ワンがありました。その朝、アメリカから初めて中継されてきたテレビの映像に映ったのは、ケネディ大統領の暗殺のニュースでした。

3年になる春の御坂山塊でのリーダー養成合宿では、S君の行方不明事件が起き、この1年の前途を象徴しているようでした。先ず、志賀高原での新人合宿で、今度はK嬢が行方不明となりました。そして、最大のイベントである夏合宿では、合宿そのものが行方不明となりました。

集結地の偵察など、すべての準備が整い、出発を間近に控えた時点で、合宿地の山陰地方が集中豪雨に見舞われたのです。役場や学校なども連絡を取っていたので、被災地に何らかの手助けをしたいとの意見も強く、救助隊やボランティアを派遣すべし、との意見もありました。

混乱時に学生が出かけていくのはかえって迷惑かもしれないとの意見もあり、中止とするのがベターとの結論となりました。代替案として、各隊共に新たな合宿地を選定しました。その結果、かなり広範囲に分布し、どこかに集結するのは無理でしたので、完全な分散形式で行うことになりました。

「国大のワングルのことを言っている」と母に言われてテレビを見てみると、鎌倉の寮が、ワングル部室付近からの出火により火事とのことでした。初めてパトカーに乗って（乗せられて？）警察署に行き、調書を取られました。新聞でも報道されたので、学長にも報告しましたが、警察からも特段の追及はありませんでした。この火事で、大学祭で開いた沖縄W報告会でも使用した沖縄でのスライドなど、部室に保管してあった資料を焼失してしまいました。

春合宿では、初めて、台湾へ出かけたグループもありました。



1962.6.3 新人歓迎 白布高原にて

入学：1963（昭38）年4月

卒業：1967（昭42）年3月

主将 松本 弘道（工）
 部員 服部 七郎（経） 白神 逸夫（経） 細田 隆（工） 小林 秀臣（工）
 能地 尚文（工） 井上 義雄（工） 鈴木 正（工） 山田 信吾（工）
 林 誠一（工） 奥野 雅宏（工） 小木曾克彦（工） 橋本 明美（佐久間）（学）
 菅谷美智子（束田）（学） 北村 勲（学） 今井 忠男（学） 森田 正子（中島）（学）
 久保木克子（山室）（学） 坪 亜紀子（学） 鈴木 博子（学） 小林 桂子（駒形）（学）
 南雲 和江（佐々木）（学） 古宮智津子（荒川）（学） 北見 澄代（学）
 物故者 下村 弘道（工） 加納 和子（岡村）（学） 八島 明（経）

7期が入部した頃は、日本中で若者の登山が盛んでワングルも最盛期の時期でした。入部時の1年生部員は50名以上で、卒業時も上記27名というのは史上最大の人数となりました。

当時のワングルは、部室が工学部（弘明寺）、学芸学部（鎌倉）、経済学部・教養部（清水ヶ丘）と3箇所に分散していましたので、トレーニングも普段は各部で行い、時々合同でしていました。

しかし、我々が2年生の時に鎌倉の校舎が火災で焼失し、学芸学部が清水ヶ丘の仮校舎に移りました。清水ヶ丘と弘明寺は距離が近いので、清水ヶ丘に集まってトレーニングをする機会が増えました。

当時の合宿は、新宿を23:45発や上野を23:30発の最終夜行列車を利用し、早朝現地に到着して行動を開始しました。座席を確保するために、夕方6時前より列に並び、座りきれない者は座席の下や通路に新聞紙を敷いて横になって寝たことも懐かしい思い出です。

7期がリーダーの夏合宿は東北北部で、各隊（8隊）分散・集中方式で行い、最後は八甲田山麓の酸ヶ湯温泉キャンプ場に集結し、盛大なキャンプファイヤーで幕を閉じました。

卒業後は一時同期の仲間が集まる機会が少ない時期がありましたが、7期の幹事役を一手に引き受けてくれた下村弘道氏が平成12年に急逝した時、彼にのみ負担をかけたことを各自反省の上、その後はそれぞれが役務を分担しました。そして、年に数回の7期会を開いて、交流を続けています。

シニアOB山行においても、7期は最大の参加人数を維持しています。北見澄代氏以外の26名の消息が判っていて、YWW-7の共通メールで連絡を取りあっています。

ただ、下村氏に続き、「よい人から亡くなる」と言って役割分担を提案した加納氏自身やOB会の監査役を務めた八島氏が故人となってしまう、残念な思い出です。

ここ数年は、7期を中心としたOB仲間、山行や海外の旅行にも出かけています。



7期 リーダー養成合宿

入学:1964年(昭和39)4月 卒業:1968年(昭和43)3月

主将 飯村 治雄(経・故人)
 部員 平沼 茂(経) 畑中 誠(経) 明村 勝久(経) 小出 徹(経) 早坂 宗(経)
 岩科 健一(経) 芦川 智(工) 溝田 隆之(工) 須藤 昌博(工) 上島 雄助(工)
 佐木 誠夫(工) 池原 盛彦(工) 田中 稔(工) 小谷 昌男(経) 秦 郡治郎(学)
 武藤(桂原)直子(学) 楠(仲田)静子(学) 早坂(長坂)富美子(学)
 高橋 弓子(学) 松本(楢原)真理子(学) 綾部(鈴木)和子(学)
 物故者 飯村 治雄(経) 森 正之(工)

8期の卒業は23名だが、ピークは30名ほどいました。オリエンテーションで体育系ではなく、文化系サークルという説明には違和感もあったが、リーダー層は6期で「ワングルとは云々」とかなり理屈が多く、これでは文化系もしょうがないと後から思いました。

大所帯のサークルなのに、特に清水ヶ丘の部室は狭く、しかもバレー部と同居で、いつの時間にも部員が屯しており、部室の壁はPWのメンバー募集の紙で埋まっていました。

新人歓迎Wは帯那山、新人合宿は志賀高原。夏合宿は目指す山陰が集中豪雨のため一旦延期となり、所在をなくした何人かがマージャンで結束を固めました。仕切り直しの夏合宿は、紀伊半島周辺と福島方面への分散でしたが、紀伊半島組の三隊は奈良・桜井に集結、日焼けした多くの部員の笑顔に会えて、これが夏合宿だったんだなーと思えました。

清陵祭はワングル活躍の場で、キャンプファイアーを盛り上げましたが、模擬店の汁粉をひっくり返し、足に火傷を負う部員も出たりしました。また年明けの1月、学芸学部で火事があり、火元がワングル部室付近と疑われ、憤慨するやら心配するやらの事件がありました。初めての春合宿が北関東(矢板集結)で行なわれ議論の多い疲れる合宿で新人時代の1年間が終わりました。

2年生の夏合宿は北東北(酸ヶ湯集結)でした。白馬から槍までを目指したパーワンは天候悪化で、後立山縦走だけに終わりました。年明けに勃発した学芸紛争が長引き部活動にもかなり影響が出ました。3年生の夏合宿は北陸(浜黒崎集結)を舞台に分散・集中で実施しましたが、議論嫌いな我々8期は統一テーマを掲げず、自由ワンダリングとしました。夏の長期パーワンは南アルプス全山縦走でした。年末には山小屋資金集めのためのダンスパーティを企画しましたが、踊れる部員が少なく練習には苦労しました。3月の四国での春合宿では、ガソリンと水を間違えカレーが爆発し冬テンを焼き二人も火傷を負うという惨事を起こしてしまいました。大いに反省。

8期は残念ながら森君、飯村君の二人の仲間を失ってしまいましたが、還暦を迎えた頃から、年に一度は皆が顔を合わせ、近況報告や昔話に花を咲かせております。そろそろ職業人卒業の年頃になり、シニアOB会山行への参加も増えると思います。



YWV10周年記念登山大室山

入学：1965年（昭和40）4月

卒業：1969年（昭和44）3月

主 将 三浦煌太郎（経）
 部 員 朝倉 収（経） 一村健次郎（工） 上原 昌弘（経） 上原（加藤）優子（学）
 梶野（尾崎）美智子（学） 木下 三男（工） 近藤 元恵（工） 鈴木 弥栄男（工）
 松川 靖（工） 塚本 富造（学） 寺本 則登（経） 馬場 誠一（経）
 日渡 松男（工） 山縣 信義（学）
 物故者 天笠 宏道（経） 三浦 正継（工）

9 期は戦後のベビーブームの走りで 20 数名が入部。高校時代に山を経験した者はほんの一握り。大学に入り、天気の良い日に山をハイキングしたらさぞ気分が良いだろうなと入部した者が大半でした。4月の飯盛山歓迎ワンダリングではまだその雰囲気はありましたが、5月末からの2泊3日の北八ヶ岳の新人合宿で様相は一変。2尺4寸のザックに25キロの荷物を担ぎ、少しでも遅ければ、「遅れるな、前に続け」との先輩の激励。3日間下を向き、足にマメをつくり、ひたすら歩き通しました。「こんなはずではなかった」と皆ため息でした。

2 年生になり、ワンゲル生活もだいぶ板についてきて、部員数を増やそうと新入生勧誘に力を注いだ結果、女子が15名入部。部の雰囲気が一遍に華やかになりました。

3 年生になり、学校内では学芸学部が教育学部に変更となる計画が出され、学生から反対運動が起こり、他の大学でも学生運動が激しさを増してきた時代でした。

以前よりサークル運営は山派（山行を中心として自然に親しみ、団体生活を通じて研鑽を図ろう）と里派（山行だけでなく、社会、地域の人々と交流し、共同で活動しよう）と二つの考え方がありましたが、執行部で活動方針を巡り意見の対立が深まり、何度も話し合いがもたれましたが、溝は埋まらず、ついに67年6月、一部の執行部が退部。新たな執行部が組織され再スタートとなりました。7月25日から2週間東北・上越合宿を6隊で編成。大きな混乱の後、準備期間もあまり取れず、あわただしく合宿を迎え、8月7日に福島県沼沢沼に各隊が集結し、無事合宿を終えた時は感無量でした。

69年3月 学内紛争で卒業式は中止。騒然とした中で17名のメンバーは社会に巣立って行きました。卒業後は数人で山に行ったり、時々集まり食事をする程度でしたが、03年に同期の者が八ヶ岳に山荘を建ててから、ここを拠点として主として関東地区のメンバーが毎年集まり、近くをワンダリングしたり会食したりして楽しんでます。今年6月には全員定年になったため、山荘で定年退職のお祝いを行い、今後は皆で楽しもうと誓い合いました。ただ、この席に他界した天笠君と三浦正継君が出席できなかったことが残念でなりません。

尚、飯盛山に三浦正継君の「千の風」のメモリアルケルンを、また八ヶ岳の山荘の庭に天笠君の芍薬のメモリアル花壇を同期の者で作り、お二人のご冥福をお祈りしております。



68年追コン・三ノ塔



67年10周年記念大室山登山

入学：1966（昭41）年4月 卒業：1970（昭45）年5～6月（学園紛争のため学部により違う）

主将 伊藤 允彦（経済）

部員 関 政彦、山崎 重信、村田 尚雄、分部 貞夫（以上経済） 佐藤 一祥、山本 和美、森 慶三、武重 孝雄、本多 正一、林 俊宏、大塚 正夫、山本 陽一（以上工） 荒川 長子、合田 泰子、崎山 芳子、小川 道子、早川 蓉子、大塚美智子、北島 綾子、鈴木 令子、塩野入邦子、若林 明美、小牧 幸子、横田 満子、青柳 嘉祥、丸山 英明 原 智恵子 山本 紀子（以上教育）

我々は1966年に入学しました。次々とYWVに入部し、最多時には男子約20、女子約15、合計で約35人が在籍していました。6月初めの新人合宿では、7～8隊に分かれて大月～金山鉱泉～雁ヶ腹摺山～大峠～黒岳～湯ノ沢峠～滝子山～初狩を予定しました。しかし生憎の雨でコース変更になり、前半部分はパスして直接湯ノ沢峠に登りそこから滝子山経由で初狩に下りました。初狩近くの河原で、リーダーを川に投げ込むというウブな新人にとっては衝撃的な儀式を目の当たりにしました。夏の合宿は北陸方面。私の「名香山隊」は、長野～飯縄山～笹ヶ峰～妙高山～火打山～焼山～天狗原山～笹倉温泉～海谷山塊～集結場所。他の隊は、白山、能郷白山、槍ヶ岳などに行きました。加山雄三の「お嫁において」が流行っていました。

秋の学園祭では、酒に酔うという経験を初めてしました。また、時々何班かに分かれて清水ヶ丘の回りの周回コースで駅伝大会を行いました。これには、探検部という部員約2名の部が飛び入りで参加していました。土曜日午後のトレーニングでは、「北八つコース」を通過（今はICで有名になった狩場町の）外人墓地の横の児童遊園地まで走って往復したものでした。

年が明けると四国まで行って春合宿をやりました。テント内の火事があり2～3人が火傷をするという事故がありました。リーダー養成合宿では倉掛山～黒川鶏冠山～丹波。森山良子の「この広い野原いっぱい」がはやり始めた頃でした。

2年生の時には、山派と里派の対立がありました。ごたごたした挙げ句に導入されたのが班制度でした。考え方が似ているもの同士が集まってメンバーを固定した班を作り年間を通じて活動するというものです。お陰で次の合宿では誰々さんと一緒だと喜んだり、落胆したりということがなくなりました。夏の合宿は、東北方面に行きました。私の「あいづ隊」は、湯ノ小屋～笠ヶ岳～尾瀬ヶ原～御池～檜枝岐～会津駒ヶ岳～木賊温泉～七ヶ岳（滑沢で先に進めず）～集結場所（沼沢沼）。3年の合宿は台風で2回延期となりました。元々の計画では山小屋建設中の笹ヶ峰に集結するという計画でしたが、時期は各隊バラバラとなりました。人類が月に到着しても天候はどうにもならないと思いました。私の「くつべり隊」は、信濃追分～浅間神社～石尊山～火山館～浅間山 2568～黒斑山～車坂峠～水ノ塔山～籠ノ登山～地蔵峠～烏帽子岳～湯ノ丸山～角間山～鳥居峠～的岩～四阿山 2354～根子岳～浦倉山～土鍋山～破風山～五味池～（中野）～長野。

黛ジュンの「天使の誘惑」が大ヒットしました。1969年になると学生運動の高まりとともにYNUも無期限ストライキに入り、それとともにYWVの組織的活動は休止状態となりました。

4年の時は有志が集まって主に関東地方北部にPWに行きました。結局、卒業式もなく「流れ解散」のように別れ別れになりました。しかし細々と続いていた親交が再び太い流れとなり、横浜で2回同期会を開催しました。今年は10期も還暦の年で秋に3回目が予定されています。



2年 新人歓迎W・大峰沼

入学：1967（昭和42）年4月

卒業：1971（昭和46）年3月

主将	高橋 秀雄（工）	
部員	安藤 貞利（工）	榊原 福司（工）
	桜井 謙一（工）	石橋 泰祐（工）
	大森 常明（工）	丹羽 守裕（経）
	中林 康明（工）	稗田 省三（工）
	丸山 純（経）	野田 一夫（工）



11期は入学年次、卒業年次からわかるように、最近話題になっている団塊の世代で、かつ70年代の学園紛争（闘争）による学園封鎖などで半年以上、授業もクラブ活動も満足にできないという状態の普通では経験できない学生生活を送った。3年生のリーダー学年の年に新人合宿も夏合宿も出来ず、その活動の殆どがPWのみであったというワングルのなかでもまともにリーダーをほとんど経験していないという珍しい学年であった。

我々11期は1967年YVWに入部し、最初の新人合宿は浅間の石尊山から黒斑山への縦走であったと記憶している。新入部員は35名ほどおり、また女性も在部していた。

1年生の夏合宿は上越国境、会津、月山などに分散し、最後に会津の沼沢沼に集合する日程であった。2年の夏合宿は南ア、北アなど分散して行われた。なお、山小屋はこの年（1968年）の10月に完成し落成式が行われている。この年の冬には最初のスキー合宿が行われ、合宿メンバーは小屋の中にも雪が降るといった完成当初の楽しい経験？をしている。

一方で、当時は1970年の日米安保条約の改定が間近に迫り、日大全共闘の学園封鎖、東大全共闘の安田講堂占拠などの学生運動が燃え上がり、横浜国大においても学生運動が盛んになり、当然のことながらワングル活動も大きく影響された。

1年生の時にはワングルの基本的な活動方針（いわゆる山派と里派の対立）を巡り当時の3年生に大きな亀裂が走りワングルを去っていった人たちも現れた。ワングル活動をどうとらえるのか、社会への働きかけなのか、自然への回帰なのかといった命題が突きつけられ、解答のないまま、2年生の時には山行が主体の活動となっていった。

このような中で、2年生から3年生にかけて我々がリーダー学年になり、部の運営や完成した山小屋の運営を如何に行っていくかなど活動方針の議論をしているうちに、横浜国大でも学園封鎖が行われ、実質的な活動は休止状態となってしまった。このような状態で我々の学年でもワングルから1人去り2人去りし、最終的（卒業時）には上記のメンバーのみが残った。



入学：1968年（昭和43）4月 卒業：1972年（昭和47）3月

主将 山川 隆（経） 副将 松永 栄二（教）後に退部
チーフマネージャー 山下 久男（教） 審査委員長 榎本 吉夫（工）
部員 岡戸 秀夫（工） 左藤 清（工） 武者（桐生）真紀子（教育） 野口（望月）章子（教）

新人歓迎ワンダリングは雨の守屋山でした。当時の要項があったので新人の名前を羅列しますと、望月、天野、阿部、磯部純、馬場、神谷、関根、中村、菅野、日下、磯辺正、松永、南谷、北村喜、成瀬、西岡、葦崎、桐生、金子、上田、山下、山川、久志本、長谷川、岩崎、大鳥、宇野、江川、若月、河野、山口、川口、秋野、筒井、榎本、太田、左藤、白倉、納口、北村秀の計40名でした。記憶の薄れた現在、男女の別も定かでない者もいる反面、当時の記憶がよみがえる者もいる懐かしい思いです。

新人合宿は小金沢経由の大菩薩でした。7隊構成の総勢100名（名簿上です！）の大部隊でした。夏合宿は「関東甲信越《駿甲信上下岩佐羽越合宿》」のタイトルが示すように山あり島ありのバラエティに富んでいました。秋には、ワンゲル創設以来の大イベントであった妙高の山小屋苗名小屋の小屋開きがあり、秋の妙高の紅葉と雨上がりの虹の記憶が鮮明に残っています。また、秋には神奈川大学連合の合同ワンダリングも開催され、神大・関東の逞しさ、フェリスと鶴見女子の女性陣が記憶に残っています。冬の思い出は、雪の降る山小屋での初めての冬、寒くて楽しい夜の酒と語らいの場面でした。

年を明けてから、国大も大学紛争の時代に突入しました。ロックアウトになってからの部員たちの活動は様々で、闘争に参加し警察に捕まった者、学内の集会に参加するがノンポリを決め込む者、アルバイトに励む者等でした。その間のワンゲルでは、山小屋やPWの非公式？活動は継続しました。また、紛争の間に部の共同装備がほとんど残ってなく、その購入のための資金稼ぎに集団アルバイト活動を実施しかなり稼いだと思います。授業が再開された12月に13期を対象とした高松山での新人歓迎Wで部活動も再開、さらに年末には同じく13期対象の新人練成PWを丹沢主脈にて、11期主将の高橋さんがリーダーで実施しました。この間にも先のバイトは継続していました。そしてリーダー学年として、春合宿がスタートしました。新人合宿時42人（歓Wより2名増）いた同期は16名となっていました。春合宿は、丹沢、道志、九州祖母傾山の3隊でした。祖母で滑落事故があり、我々は始めから波乱含みのスタートでした。5月初めにL養合宿を試験とダブったため、小金沢大菩薩と奥秩父奥多摩の2回実施、5月末に丹沢で追コン&新人歓迎、そして夏合宿の準備に入りました。このときの計画では、飯豊、飯豊朝日、北ア、戸隠、白山、隠岐の6隊編成でした。7月19日（日）事故は北ア隊の丹沢三峰歩荷訓練Wでおき、新人の一年生川端良和君の尊い命を失う最悪の結果でした。当然、夏合宿を含む公式行事は中止となり、リーダー学年の活動は事実上終わりました。事故の検証、分析、原因究明の活動の中で、12期部員は減じていきました。この間、山小屋整備は実施され、初めてのトイレの汲み取りを行い、以後の恒例作業となりました。また、この年の晩秋、連合の合同ワンダリングにはリーダー学年として参加、思い返すと、3年連続で参加した合Wは何か我々にとって救いだったかもしれません。

現在の12期7名の状況は、大学時代から佃煮屋さんに行っていた山下以外の男性陣は皆、転籍・転職し、特に山川は？回の猛者です。

女性人は専業主婦として子育ても終わり、ますます意気盛んであります。



1968年4月28日 守屋山新人歓迎ワンダリング

入学：1969年（昭和44）4月 卒業：1973年（昭和48）3月

主将 宇佐川文恵（工・故人） 副将 村松 清一（工） 赤松 明（経）
 部員 中村 友二（工） 竹村 昇（工） 太田 繁信（教） 吉里 和美（教）
 小沢 陽子（教） 海保 茂道（教）

昭和44年（1969年）4月、我ら13期は、大学紛争真っ盛りでロックアウト中の大学に入学。勿論入学式もなく、ワングルも本格的な部活動は中止で、新人合宿もなく、個々に山に行っている状態でした。12月頃から授業も始まると共にワングルの活動も始まり、12月末に高松山で新人歓迎Wが行われました。45年3月春合宿を道志山塊や九州祖母山等にて実施。これが我らにとっての初めての本格的な合宿でした。こうして2年生になりました。

5月にL養成合宿を雁ヶ腹摺山～大菩薩峠で実施。新人合宿を奥秩父にて実施と順調に活動していたのですが、夏合宿に向けての歩荷訓練を宮が瀬～丹沢山で行った時に熱射病による事故が発生し、夏合宿も中止となりました。結局1・2年と本格的な夏合宿に参加することができず、技術面での弱体が懸念されました。それでも各自PWに参加したり、妙高の山小屋に入り浸ったりとそれぞれ活動していました。46年3月、我ら13期のためのL養成合宿が道志～丹沢へのルートで実施され、いよいよ活動の中心となる3年生となりました。

主将は宇佐川氏、寡黙でありながら実行力もあり人望もあり適任者でした。副将には誠実な人柄の村松氏、理論派であり情熱的な赤松氏の二人。チーフマネージャーは海保。山小屋運営委員長は山小屋をこよなく愛した竹村氏、審査委員長は山の技術ピカーで厳しく審査した中村氏。この陣容で3年生がスタートしました。46年5月に新人合宿を大菩薩嶺付近で実施。7月には夏合宿に向けて丹沢大倉尾根にて歩荷訓練。いよいよ夏合宿です。全部で6つの隊に分かれ、尾瀬周辺で実施しました。13期はそれまで夏合宿を経験したことがなく、リーダーとして引き連れていくことに不安はあったのですが、隊員の協力にもより無事実施することができ、大いなる達成感を得ることができました。

トレーニングはもっぱら山での実践でしょうか。パートワンダリングが盛んで、よく山に行っていました。清水ヶ丘の部室からマラソンで保土ヶ谷児童遊園地に出かけたこともあります。そして、授業がないときには部室に入り浸り。あと、横浜の喫茶店「上高地」などにも一杯のコーヒーで長い時間居座っていました。山の話から恋愛論まで、よく話をしたものです。

同期はかなり人数がいたのですが、徐々に抜け、最終的には9名となりました。特に女子は小沢陽子氏一人となってしまったのが残念です。同期の集まりも忙しさ故になかなか持つことができず、7・8年前に集まったのが最後。赤松氏と小沢氏とは連絡が取れず、心配していましたが、先日の関西支部の便りに小沢女史の名前を見つけて、うれしく思った次第です。赤松明氏について何か情報をお持ちの方はお知らせください。

夏合宿（会津駒ヶ岳・中門岳・平ヶ岳）の写真 S46年7月22日夜行～31日



三ツ岩岳から会津駒ヶ岳への途中



平ヶ岳近くの玉子石

入学：1970年（昭和45）4月 卒業：1974年（昭和49）3月

主将 小口 雄平（工） 副将 高木 展郎（教） 鈴木 道夫（工）
 部員 鷓飼 紀夫（工） 高橋（山ノ井）とし子（教） 狩野 一子（教） 日野 博文（工）
 吉田 忠（工） 鶴岡 一（工） 上野（西井）節子（教） 水本（曾根原）靖子（教）
 川端 良和（営、故人）

大学に入った頃は、ストライキは終わっていましたが、この間の長期にわたる YWV 活動の停滞が、部員の山行技術の低下やサークルとしてのあり方に対する議論の不足など、大きな影響を与えていました。当初、YWV に入ろうとした新人は 30 人以上いたと記憶しています。新人歓迎 W は、5 月に追コンと一緒に行われました。（1 年の 6 月頃の名簿では 27 人でした）その後、6 月に奥秩父で新人合宿があり、夏合宿に向けて 7 月に丹沢で歩荷訓練が行われました。歩荷訓練中の 7 月 19 日、同期の川端良和くんの死亡事故。あまりにも大きすぎる代償でしたが、活動が実際に死に直面することを学びました。夏合宿は結局中止となり、1 年も 20 人以下になってしまいましたが、8 月下旬には山小屋整備、その後も PW や連合合 W が行われました。

部員は弘明寺の工学部と清水ヶ丘の経済・経営・教育学部と分かれていて、部室も 2 つあったのですが、トレーニングや部会は毎週土曜日に主に清水ヶ丘で行われました。トレーニングも今思うと楽しい思い出です。

1 年の年末年始には山小屋を利用してスキー講習と冬山訓練が行われ、3 月には Leader 養成合宿がありました。

2 年生では、新人歓迎 W、新人合宿、歩荷訓練などがあり、尾瀬周辺で夏合宿が行われました。

執行部を担うことになり、方針の概略は、～「山」以外の方向が模索の状態である今、ワングルの合宿においては、活動の場を主に山に求める。我々にとって、合宿、PW、一つ一つの活動がワングルの実践であり、基盤である。今までワングル理念の具現化の場といわれてきた夏合宿を発展的に解消し、全ての活動におし拡げていこうではないか～ ある程度の山行技術は保つように配慮しました。方針自体はそのときの一致できる点（一致していなかったかもしれないが）を漠然と確認したにとどまります。夏は夏季ワンダリングという形で行いました。

「女の子はお客さん」のような意識ではなく、進んで計画実践しようと、女子 W を行ったりもしました。執行部を担った仲間には、下田昭くんや久保田智子さんもいます。昭和 47 年 7 月には、「SKYLINE」（15 周年）を発刊することができました。

4 年になっても部室にちょくちょく顔を出していた人、トレーニングや PW 等に参加していた人も何人かいました。

OB になってからも、山小屋の近くの直江津にいる鈴木道夫くんや長野にいる小口は、小屋へも、特に最近ちょくちょく整備・修繕や雪下ろしに行っています。近年の OB 山行に、狩野一子さんや上野、小口が参加したり、また、高木展郎くんにはワングルの部長を務めてもらっています。宇都宮にいる鷓飼紀夫くん、東海村にいる水本靖子さん、そして、日野博文くん、吉田忠くん、鶴岡一くん、高橋とし子さん、同期としてみんなではなかなか集まれないでいます。

団塊の世代のちょっと後で、子育てを卒業し親の介護や自分の健康が気になりになってくる私達は、職業人としてはラストパートにさしかかっていると云えます。これからあらためて、「山や自然」に目を向け、OB 山行にも参加する仲間がもっと出てくるのではないのでしょうか。

今振り返ってみると、我らのワングル現役時代も悪くなかったなと勝手に思っています。そして、参加しようと思えば、OB 山行や山小屋などで、先輩はじめ仲間と集える幸せを感じているこの頃です。



追いコン 14 期

入学：1971年（昭和46）4月

卒業：1975年（昭和50）3月

主 将 中島 一夫

部 員 小泉 啓治、牛窪 肖、萩生田 弘、岩船 芳人、中村 真知子（旧姓青木）、西浦
章予（旧姓谷島）、大島 誠（故人）元部員 村松江伊子（旧姓桜井）、赤松 祐子（旧姓八木）、川端 一司、福地 大蔵、加納 康、
野中 妙子、山田かずえ、実方 聡、松瀬三千代、広沢 寿子、榎本 静雄、
広瀬 勝昭、鈴木 まさ、田中 武憲、三島、三木、筒井、増田、秋本、阪本

15期は、確か上記の30人近い部員からスタートした。（スカイラインを調べたり、人に聞いたりしましたが、全員載せられなかったらごめんなさい！）

まだまだ、学生運動の名残りというか内ゲバがあったり、ストがあったりしたが、13期の執行部が激動の時代を乗り越えて、ワングルの活動を模索しながら、クラブの体制を立て直してくれた代に入って、ある意味では、充実した楽しんでやりたいことがやれた時代だったように思う。

また、時代的には、46年2月、尾瀬長蔵小屋の平野長靖氏の死。（著書『尾瀬に死す』に詳しい）不知火の水俣病の問題、環境破壊の問題。また、ベトナム戦争の最中（48年1月、和平条約締結）そして、「ワングル運動とは？」「ワングルはどうあるべきか？」だけでなく、社会について、生き方について模索し、先輩達や仲間とたくさん語り合うことができた時代である。

また、合宿やPWなどたくさんの山行を通して密度の濃い充実した時を共有することができたのかも知れない。たぶん、部内カップルが一番多いのが15期ではないだろうか？

・15期の活動方針は、部員に部員としての自覚を促すことと、クラブを今一度見直すことを目的とした。そこで、部員全員でクラブをつくりあげようという視点から、部員全体の接触の場を与えるために多くの合宿を行うこととし、その中で個人を生かしていくこととした。部員相互の意識の交流、部員相互の思いやりということを根底において活動していった。執行部が1月に交代し、3月に女性だけのパーティーを組みたいとの申し入れがあり、男子パーティー5隊、女子パーティー2隊でL養合宿を行った。この合宿の後16名いた執行部員のうち、7名が退部した。残った執行部は、一種の危機感を持って結束した。新人合宿、新人錬成合宿と矢継ぎ早に合宿を行い、夏合宿へ。夏合宿は分散集中形式で、藪こぎをすることを条件に、平ヶ岳に集結することとした。そして、2年生から新しい動きがでてきて、男女別パーティーでL養合宿を行った。

また、冬山訓練は男子の執行部員全員をはじめ総勢16名が参加し、ワングルとして初めて厳冬の火打山のピークに全員立つことができた。（スカイライン20号抜粋・中島）

・懐かしの山行記録（PWは除く）

1年生 4月：新人歓迎W、5・6月：新人合宿（大菩薩峠）、7月：歩荷訓練（丹沢）、7月：夏合宿（尾瀬周辺）、1月：スキー講習会、3月：旧人合宿（丹沢・道志）

2年生 4月：新人歓迎W（高水三山）、第一次新人合宿（丹沢三峰）、5・6月：新人錬成合宿（奥秩父）、7・8月：夏期W（全国各地）、8月：妙高山（山小屋集結山行）、12月：追い出しコンパ（丹沢）、12月：スキー講習会、3月：L養合宿（丹沢・道志・戸沢集結）



3年生 4月：新人歓迎W（丹沢高松山）、5月：第一次新人合宿（丹沢）、5・6月：新人錬成合宿（奥秩父）、7月：夏合宿準備W（丹沢・南アルプス）、7月：夏合宿（上越国境・尾瀬南会津ー平ヶ岳集結）、10月：L養合宿（日光・尾瀬・会津）、11月：合W（8大学）、12月：追い出しコンパ（丹沢）、12月：スキー講習会、12・1月：冬山訓練（火打山）

入学：1972（昭和47）年4月 卒業：1976（昭和51）年3月

主将 池谷 文明（工・化工）
 部員 板垣 雅訓（工・金属） 岩田 達志（工・応化） 植松 弘（工・安工）
 佐藤 善樹（工・金属） 中野 祥一（工・応化） 高橋 誠（工・造船）
 本多 賢（経済） 松田 康史（工・建築） 三好 正幸（工・機械）
 大竹みどり（教・心理） 長田 恭子（教・家政） 山崎 恵子（教・心理）
 村田由利子（教・家政） （旧姓のままとしました）

16期は、当時、弘明寺にあった工学部に男子部員のほとんどがいましたので、昼食時に、学食棟に併設されていた部室で顔を合わせることが多く、勉強しに大学にかよっていたのか、部活をしに大学に行っていたのかが、わからない程（正直、部活をしに大学に行っていました）でした。

3年次の夏の過ごし方については、大きく二つの主張がありました。ひとつには、自由な山行・活動を中心とするもの、そして、もうひとつが、昨年までのような、いわゆる合宿形式を中心とするものでした。それぞれには、それぞれの魅力があり、クラブ活動としての意味、山に対する自分の思い入れなど、議論があったものと思いますが、議論経過についての記憶はほとんど今はなく、実施されたのは、自由な企画競争による活動だということ、そして、その活動は、とても有意義だったということでした（クラブ活動としての制約活動の範囲を超えることの是非はともかくとして）。今ではごくあたりまえなのかも知れませんが沖縄無人島において過ごす活動から、いわゆるルートが確立していない未開拓ルートの山行（当時としてはまだ確立していない、宇奈月温泉から毛勝3山まで）など、幅広い活動が行われました。これこそが、16期の活動を一言で表現するにふさわしい、自由な発想による行動という「自由闊達」な活動でした。

日頃の訓練活動のひとつとしては、南太田の部室から、装備のある弘明寺にある部室までの「走り」、そして、装備点検をして、さらに、南太田の部室に「走って」戻って行くのが、思い出されます。この南太田へ戻るコースは、南太田の位置が高台にあることから、最後の上りのきつかったことが「今でも夢の1シーン」として蘇るのは、なぜでしょうか？

当時は、まだ自動車を持っている部員が多くなく、山小屋整備も重要な活動のひとつでした。山小屋整備の最大イベントは、ほとんどの部員が集合して行う夏の集中整備でした。トイレの肥溜めから排泄物をくみ出す行事、当然に、大きな穴を掘らなければなりません、むしろ、注目されるのは、「くみ出し」で、これが結構さまになる部員がいるのが不思議でした。くみ出しの経験などしたことがない部員なのに不思議です。その晩の食事は、決まってカレーでした。昔からの伝統でした。それから大変なのが、屋根のペンキ塗りでした。屋根の急傾斜ゆえに、そして、炎天下ゆえに、高度な？技術が求められ、誰もが行なえるものではありませんでした。部員皆が集まったの整備なので、整備最後の夜の宴会もすさまじいもので、朝になると、一升瓶があちらこちらにゴロゴロ、そして、部員の何人かは、小屋の外で熟睡で発見されたりして、一生懸命行なう姿に感動し、自己満足をしていました。ロマンもあったのだと思います。

秋の大学祭のときは、決まって行なっていたのが、「餅つき」でした。杵と臼で作ったつきたてのもちを売っていました。さらに、私たちが1年の頃と思いますが、山小屋の周りに自生している笹の葉にくるんだ五目寿司も好評でした。この笹を入手するために、小屋整備に行った部員にザック一杯の笹を運んでもらうこともしました。それから、焼き鳥も売りました。鳥肉を入手し、自らの手で串にさし、「秘伝のたれ」と称した醤油だれをつくり、一晩漬け込んだものを焼いて売りました。

われわれ自由闊達な16期の誰もが、このワングル活動の実践に、誇りと感謝の念を持ち、そして、さまざまな場面で、それぞれ行動の原点となっているのだと思います。

入学：1973（昭48）年4月 卒業：1977（昭52）年3月

主将 川俣 道夫（工）
 部員 長谷川（穴山）三津子（教） 石川 幸嗣（工） 市
 野 典明（教） 北沢（伊藤）由美子（教） 梅野 匡
 俊（経） 渡辺（小河）雅子（教） 木村 善行（営）
 小浜 一好（工）白須 謙治（営） 武田 治久（工）
 蜷川 欽也（経） 葛窪（菱沼）真紀子 松本 茂夫
 （工） 村山 保之（工） 山下 暁（工）



17期が入学した昭和48年は社会では第一次石油ショック、学内では学生運動のなごりの小競り合いがあるなど、世の中が不安定さを引きずっている時代でした。キャンパスは工学部が弘明寺、その他が清水ヶ丘と分かれていましたが、1年生は全員、清水ヶ丘でした。

入部した当時、同期は20名ほどいたと記憶していますが、現在に至るまで同期としてお付き合いしているメンバーは上記のとおり16名です。多種多才、個性派揃いの17期で現役当時、いろいろな場面で押し合いへし合いしていましたが、年齢50を幾年か超え、年に一度は集まり和気あいあい楽しんでいます。

1年生のときは新歓（高松山）、新錬一次（丹沢）、新錬二次（奥秩父）を経験した後、夏は平ヶ岳へ集結する方式の夏合宿が行われました。ある隊は尾瀬の至仏山から藪をこいで平ヶ岳というコースで、水場がないということで一人当たり2リットルのポリタンを3本ずつ背負っていくという山行でした。キスリングに這松がまとわりつき、至る所の穴に足をとられ結局途中で挫折して尾瀬に戻った思い出があります。また、ある隊は巻機山から奥利根源流の稜線を縦走して平ヶ岳へいたるものでした。三国山脈の主脈のせい、ところどころ踏み跡があらわれて比較的歩きやすいルートで、重要課題である水の確保も稜線近くに残っている雪渓が解決してくれました。

当時の記録を見ると、入山は7月20日でこの時静岡沖まで台風が来ていたのですが、夏の迷走台風でこの後この台風はこの海域をグルグル回り、何と我々が平ヶ岳に到着した7月30日ようやく頭上を駆け抜けていきました。

その後の小屋合宿、PW、L養、冬山訓練、スキーなどを通して山や自然に魅せられていったものです。特に苗名小屋は合宿やPW前後の集結場所として、冬は妙高杉の沢ゲレンデでのスキー講習会や冬山訓練のベースとして、部員たちの拠り所となっていたように思います。中でも冬山訓練は、小屋から笹ヶ峰、黒沢出合、富士見平、高谷池ヒュッテを経て火打山を山スキーと和かんじきで往復するものです。他の登山者と出会うことなく白銀の世界に自分達だけがいるという、めったにできない体験をさせてくれました。

今は無き23:55発の中央線（かなり混んでいた）で座席をはずして、ベッド代わりにしたこと、駅の通路に新聞を敷いてシュラフで寝たこと、ラジウスが重くて石油臭くなったこと、キスリングが幅をとって出入口でひっかかったこと、先輩に明日はサンゴーと言われて、ご飯を3合といたこと、など思い出話は尽きません。

2年生は待つ合宿形式でなくPW形式で行われました。筆者は南アルプスの縦走や奥美濃山行に参加しました。3年になり執行部となると各期にも見られるように活動方針の考え方に相違が見られました。焦点は夏の活動で、夏合宿派とPW派に別れ、時には激論が期内に生じましたが今となっては微笑をもって思い出されるエピソードです。結局PWとなり、筆者は北海道大雪山系の縦走に加えて、個人的に知床羅臼、利尻岳などに登り約3週間の北海道を堪能しました。

金はないけど時間は潤沢にあり、大自然に触れ、友と語り、ワングルは多感な青年期のひとつのステージでした。今こうして創立50周年（17期は卒業後30年）を迎えて想うとき、青春のほろ苦くて甘酸っぱい記憶が蘇ります。幸い同期は一人も欠けることなく、これからは退職後の人生に向けて、たまには同期で山に行こうと話しています。50周年がそのいいきっかけになれば幸いです。YVV50周年、おめでとうございませう、心からの感謝を込めて。

入学：1974年（昭和49）3月

卒業：1978年（昭和53）3月

主将 向井 良作（経）

部員 植草 慶一（済） 植草（井口）美智子（教） 上野 敏彦（済） 大橋 英一（済）
 岡田（早川）文子（教） 小山（広沢）多恵子（教） 河田 敏幸（済） 勝山（鈴木）謙太
 郎（工）塩川 朋久（工） 鈴木 栄（営） 伊達 誠一（工） 高田 有一（済） 壺井 久
 雄（営） 浜田 淳（済） 福田（岩田）淳子（教） 堀内 章子（教）
 山口（田村）幸子（教） 山口 貢三（工） 渡部 孝（済）

入学は清水ヶ丘と弘明寺、卒業は常盤台という世代です。新入当時 30 数名在籍、水無山荘で正式に追出されたのが6~7名と振幅の大きな期です。

入部直後の連休の苗名小屋でYVVの魅力にひきこまれ、新練2次のボッカに泣き、夏は北海道~沖縄へと個性的なPWに参加しました。

冬山訓練では火打を目指して高野池でリングワンで撤退。

スキー講習会では「ころばずに下までいく」スキーを教わりました。

1年次の経験がその後の2年3年の活動の基礎となり、僻地Wから沢登り、冬山まで活動の幅が大きく、3年の5月の北アでの事故でワングル活動の見直しを余儀なくされました。

部室、横浜西口のカトレア、金沢文庫での度重なる話し合いの結果「中級山岳」をフィールドに「自然と人間の関係」を念頭においた活動をする事とし、路線の違いから多くの同期と袂を分かつこととなりました。

ただ、苦勞を伴にした仲間として卒業後も連絡は密にしています。

ワングル内結婚が5組というのがその証左であります。



18期 2年 夏合宿 秩父

18期 3年春合宿
北八ヶ岳

入学：1975年（昭和50）4月 1979年：（昭和54）3月

主将 磯尾 典男（工） 副将 海野 和明（経） 小松（中村）真弓（教）
 部員 白川 正（教） 久保 守（工） 石井 啓介（工） 南 靖英（工） 富田 博之（工） 中
 島 輝夫（営） 野住（熊沢）智子（教） 戸田（和田）邦子（教） 石井（織内）忍（教） 林
 （弓削）厚子（教） 井上 晃（工） 大橋（横溝）玲子 岡本 豊（工） 笛木 久栄（教） 塩
 川（脇）雅代（教） 高木（今野）幸子（教） 石井 重雄（営） 松田（日比）美恵（教） 坂
 井 智（教） 高松（窪添）仁子（教） 徳繁 公一（営・故人）

19期が入学した1975年は、現在の常盤台キャンパスが完成したときで、私たちはその一期生でした。長く続いた学園紛争が終わり、新たな管理体制の下で大学運営が始まった頃でした。植樹されたばかりの苗木が弱々しく植えられたキャンパスは、雨が降れば造成されたばかりの坂道がズルズルすべるような様態でした。部室もプレハブでした。

17期、18期に比べて女性の入部者が多く部室はいつもにぎわっていました。弘明寺に残っていた工学部の先輩たちを入れると80名程度の大所帯だったように思います。

5月から6月は恒例の新人練成合宿で丹沢・奥秩父で思いもよらないつらいボッカを経験しました。夏合宿はPWとなり、北アルプスを初め藪山隊など各地に分散していきました。私は、北海道のトムラウシから旭岳に抜ける北海道・大雪山のコースに参加しました。

このあとはPWと山小屋合宿を経て秋のL養とスキー・冬山合宿と恒例の行事が出来上がっていました。しかし、その一方で、アルピニズムを求める志向も高まり始め、沢登り講習会や冬山合宿に多くの男性部員が参加し、技術志向も高まっていました。

こうした背景があって2年生の5月のPWは9隊が生まれ、この中に遭難事故を起こしてしまった北アルプス穂高隊も含まれていました。

この山行が部として認められるかどうかということが審査会を中心に何度となく論議された経過が、事故報告書に載っていますが、とにかく5月2日北アルプス奥穂高から前穂高にかけての吊り尾根で同期の徳繁公一君が滑落し、命を落とすという大事故が発生しました。

私も当時妙高の苗名小屋に行っていましたのでほとんどの部員が出払っている状態で、事故発生から対策本部立ち上げまでに随分と時間がかかりました。

多くの方々の協力によって彼の遺体を収容する事ができ、松本市で荼毘に付すことができたわけでしたが、この歳（50歳）になって当時のご両親の胸のうちのうちを察するに胸が詰まる思いです。

考えてみれば、自分たちが起こした事故の対策も十分できない程度の技術力しかない我ワングルが、冬山規制などを作成しても効力はなかったし、現実の対応もできないわけでしたが、当時はそこまでの思いも至らないまま山登りを続けていたということになります。

卒業してから10年ほど地元の社会人クラブの労山で登山を続けていたので、当時のワングルの遭難対策の脆弱さを改めて感じました。

その後の新執行部発足までの2ヶ月間ぐらいは、毎日のようにワングルはどうあるべきか、何をテーマに結束していくのかを話し合いました。

大学生活2年目の若者たちが何を誰と話し合ったか、すでに思い出すことはできませんが、残された19期は日に日に成長し、仲間としての絆を深めていったように思います。

18期では向井さんが主将として新体制が始まりました。夏合宿は北海道を舞台に分散・集結方式を取り、テーマは「多様性・協調性・進歩」として何とか部としての結束力を高めようと言う努力の結果でした。

3年生の執行部の年となり、安全対策に力を入れるようになりました。

まずリーダーになるには日本赤十字で開催している「救急講習」を二週間受けたり、残雪対策として

冬の奥多摩でキックステップの練習を重ねました。

さらに合宿前には一定のトレーニングメニューをこなしていないものは参加させないなど自分たちの力量にあった山登りを志向するようになりました。

年間のテーマも「自然破壊について」として学習会を通じて共通のテーマを追い続けました。丹沢でごみ拾い山行も行いました。

こうしているうちにこれまで数年間行われてこなかった全員での同一ルートでの夏合宿をしたいと言う思いが一つになって行きました。

選んだルートは南アルプス北部の大縦走でした。この頃には、これまでの上下関係にもとづく統制をやめて、一人ひとりが自分の中で山登りを楽しめるようにといろいろと工夫しました。

花に詳しい部員がみんなに紹介したり、星空に詳しい人は星座を教えたりと、山の持つ色々な側面からのアプローチをした事がクラブの結束力を増していくことになりました。

54名全員が、最後のピークである「北岳」に立ったとき、3年生が中心になって「みはるかす」を歌ったことが昨日のように思い出されます。

こうした活動は20期にも引き継がれ、4年生として参加した翌年は、聖・赤石を経て塩見岳まで縦走することができました。

わずか3年半程度の短期間のクラブ生活でしたが、やはり徳繁君の事故は終始忘れることなく、安全で楽しい山行を求めてきました。この精神が後輩たちにも受け継がれていったものであると信じています。



右から二番目が故・徳繁君（新人合宿）



笹ヶ峰の春スキー

入学：1976年（昭51）4月 卒業：1980年（昭55）3月

主将 西田 雅典（経）

部員 青山 功（工） 石垣 秀敏（営） 板倉 欽也（工） 太田 信幸（工） 太田（小泉）真弓（教） 大村 貞良（工） 岡本 健（経） 加賀 友規（工） 木村（臼井）真理子（故人）（教） 作山 栄一（工） 下村 厚志（工） 滝本（田本）敦子（教） 玉木 慎二（経） 林（田中）栄美子（教） 古橋 達行（工） 古橋（遠田）初美（教） 増田 敬子（教） 水田 徹（工） 向井（清水）恵子（教） 武藤由紀雄（故人）（工） 武藤 功二（工） 安武 和俊（営）

20期は23人の個性溢れる部員が集まり「花の20期」を自称した。ただ、個性的ゆえ「まとまりのない20期」とも言われたが、最近では年数回集まって懇親している。

執行部年次（昭和53年度）に50人以上の大所帯合宿14件、個性的PW32件を実施。

メインの夏合宿（7/19～31）は、南ア南部を静かに楽しむ方の輦蹙顧みず全7隊・59人による南アルプス南部（仁田岳～聖～赤石～悪沢～塩見）縦走。全般、尾根歩き主体だが基礎技術取得のための合宿（スキー、雪上、藪コギ）やフィールド拡大で里合宿（雁坂峠越え）も行った。

一方、PWは早池峰（主催・作山）後立山（下村）北ア（岡本）妙高火打（清水）奥日光（安武）苗場（板倉）奥秩父（古橋）白馬（青山）などの山行以外に、猿払原野（武藤功）八十里越（石垣）等も企画されバラエティに富んだ。中には那覇定住（加賀）神津島定住（増田）など旅行に近い悪乗りPWもあったが今思えば「花の20期」に色を添えた。

皆が思い思いのPW等を主催（詳細はスカイライン79年号参照）し下記「セクション活動」も通じて迷いながらも充実した一年であったと思う。

混乱の大学祭では、数に物言わずYWVの総動員が開催実現に大きく貢献し、我々YWVの活動成果も広く発表できた。

傷ましい事故が一年生の時に起こりYWVの方向性について熱い議論が重ねられ、賛否両論あったが結論として山行に文化的要素に取り入れることとなった。

20期もその方向性を踏襲、昭和53年度は「現代ワンダラー批判」（年間テーマ）を設定。

□ワンダラーの目的意識（「なぜ山に行くか」のアンケート実施など）

□芭蕉・西行など過去のワンダラーの歴史研究

□生態系の研究

□自然破壊の現況調査 の4つのセクションのいずれかに全員が参加し、ワンダリングに際して事前調査や山中議論を行い、事後部会等で活動内容を共有した。

年間の総括として夏合宿後の山小屋合宿（水田）で「日常生活とワンダリング」や「社会人と学生のワンダリング」といったサブテーマを議論しYWVは単に山に行く仲良し集団ではなく、「自然の現況を理解しながら自然を探求する集団である」といった議論を行なった。

最後に、故木村（臼井）真理子さん、故武藤由紀雄さんのご冥福をお祈りし、YWV50周年を共有したい。



入学：1977年（昭和52）4月

卒業：1981年（昭和56）3月

主将 村松 俊明（工・電気）
 部員 鳥井 正志（工・船舶） 藤倉 大介（工・機械） 溝畑 晃道（教・技術）
 山崎 俊夫（経済） 岩崎 泰夫（工・機械） 山本 規雄（工・船舶）
 籠橋 泰憲（工・船舶） 横溝 真司（経済） 中川 雅邦（教・社会・故人）
 山田（故人） 白木 政隆（経済） 石見 忠良（工・機械）
 長尾 晴美（旧姓 山室）（教・美術） 河辺 直子（旧姓 山中）（教・美術）
 村石 節子（旧姓 椋代）（教・国語） 坂元 朋子（旧姓 渡部）（教・美術）

主な山行：1年 新練1次 丹沢（塔ヶ岳）・新練2次（奥秩父）・夏合宿（南アルプス中北部縦走）・L養合宿（尾瀬）
 2年 春合宿（丹沢縦走）・夏合宿（南アルプス南部縦走）・L養合宿（北八ヶ岳）
 3年 春合宿（鈴鹿）・夏合宿（大雪山縦走）

日頃のトレーニング：各自で常盤台のキャンパスの外周道路を一回りしていました。

21期の特徴：同期は前記の17名のほかに2~3名いましたが、1年次の夏合宿終了くらいまでに退部していました。この17名は総じて仲が良く、1年次の冬には三浦半島に皆でみかん狩りに行ったり、卒業前も丹沢のバンガローに行った思い出があります。

残念なのは、2年に進級する直前の4月に山田君が江ノ島で不慮の事故で亡くなった事と、卒業後に中川君が三ツ峠で滑落死したことです。前後の期には部内結婚がかなりありましたが、同期仲のいい我々には1組しかありませんでした。それも中川君の死亡でゼロとなりました。

卒業後もここ数年はアメリカ在住の村松君の帰国にあわせて行方不明の岩見君を除く多くの者が集まっています。「宴会大好き」が今も昔も21期の特徴と言えます。

3年次の活動：執行部を執った3年次には村松主将のリーダーシップの下「人間と自然破壊」というテーマで下界では研究学習活動して、山に登っていました。

もうひとつの21期の特徴は天候に恵まれない期でした。1年次の最初の山行で大雨に降られたのに始まり、丹沢で一晩に40センチもの雪に積もられたり、鈴鹿では、強風でテントが飛ばされたり、テントのポールが折れたり、北海道でも雨で6隊中5隊が小屋に逃げ込んだりといった4年間でした。



北岳山頂にて
1年夏合宿 1788年8月

（後列左より）
 岩崎・籠橋・藤倉・村松・
 山田・山崎
 （中列左より）
 山本・鳥井・山室
 （前列左より）
 山本・横溝・石田・岩見
 溝畑・山中・渡部

入学：1978年（昭和53）4月

卒業：1982年（昭和57）3月

主将 寺島 一希(工)/ 副将 浅沼 芳弘(工)/ 部員 鴨志田岳志(教) 西田(佐藤)晶子(教)
立波 和也(工) 谷内 佳子(教) 津江 真行(経済) 中丸 正明(経営:故人) 津江(成田)
裕子(教) 西田 博司(工) 松田 裕(工) 山崎 晃(経営) 寺島(山田)美佐緒(教) 山
本 為朝(工) 渡辺 清子(教)/ 準部員 酒井 俊一(工) 林田(佐々木)陽子(教) 成島 和
仁(経済) 橋岡 崇史(経営) 三好 正浩(経済)

我々22期は、入部した際には20人以上の大所帯であった。途中で何人かがやめてしまったが、今でも「よし22期で皆で集まろう。」と言って連絡を取り合う仲間は、凡そ上記の20人ではないだろうか。入部した際には、先輩からは文化的活動とか環境破壊とか、何やら難しい話を聞かされて育った。事故3年後だったこともあり、二度と事故を起こさないようにとも随分と教わった。しかし今だから白状するが、所詮は屈託のない大学1年生、時に神妙にして先輩の話を聞いてはいるものの、内実は「山に登りたい、仲間と大いに騒ぎたい。」というのが本音であった。個性派であり盛上げ役でもあった津江君を中心に、いつも同期の飲み会は盛況であった。同期男子のほとんどが相鉄線沿線に下宿していたことも、時間外の部活動(?)が異様に盛り上がった要因ではなかったかとも思う。

そんな無邪気な1年生も、諸先輩の温かい(?)ご指導のもと2年生になることができ、更には秋のリーダー養成合宿を経て執行部を執ることになった。何か活動目標を決めなくてはということになり、これまでの執行部に倣って何やら難しいテーマを設定してみたが、どうにも上手く行かなかったことを覚えている。詳しくはスカイライン25周年号にあるが、その内容たるや、今考えればお恥ずかしい限りである。よく後輩諸氏がこんな執行部について来てくれたものだと、今更ながら感謝している。

そんな不出来な我々ではあったが、期せずして後輩諸氏に貴重な教訓を身をもって伝えることが出来たことが1つある。それは、部内の老朽化した装備の更新の必要性であった。我々22期執行部での夏合宿は南アルプス北部。初日、2日目までは好天に恵まれたものの、それ以降は数度に亘る前線通過、暴風雨に見舞われ、各隊とも幾度となくテントを潰された。先輩諸氏をご存知の通り、当時はドームテントなど無く、10人用大型三角テントであり、3000m級の稜線には不向きであった。その上、小生の隊などは最も老朽化したテントをあてがわれたこともあり、一発目の暴風雨でテント支柱脇の本体生地が数10cmに亘って裂けてしまい、それを裁縫用の木綿糸と針で縫い繕って合宿を続けた記憶がある。学生ならではの大胆不敵な行為である。無事下山出来たものの、その後の執行部では、「金が無いとは言え、多少はマシな装備で山に行こう」と話し合った。その後、賢明な後輩諸氏の手により、部内の装備は順次更新され、また大所帯での一斉合宿というスタイルも見直されたと聞き安堵した。

そんな我々も今はもう40歳代の後半(あと少しで50歳)であり、仕事、家庭、余暇にと何かと忙しい日々を過ごしている。機会をみては当時の仲間が集まって酒を酌み交わし、思い出話をして、ほのぼのとしている。典型的な中年の過ごし方なのだろうか。いずれにしても健在である。

2年前の6月のとある日、突然、小生の携帯電話に津江氏からの呼び出しがあった。なんと、同期の中丸正明氏が交通事故で急逝したとの連絡であった。絶句。あの温かな人柄が偲ばれる。通夜では泣いた。昨年の一周年には同期の皆で仏前に焼香した。合掌。



昭和54年
新人練成
二次合宿



昭和55年夏合宿(南ア)
手前は故中丸氏

入学：1979（昭54）年4月

卒業：1983（昭58）年3月

主将 木村 真行（工）
 部員 伊藤 忠彦（工） 吉田 豊（工） 武藤 秀二（工） 丸茂 俊二（工） 荒井 吉則（工）
 高岡 智彦（工） 高山 昭彦（教） 仙名 英資（経） 根岸 正彦（経） 吉田 剛（経）
 中戸 康文（営） 大津山 誠（営） 加藤 英二（営） 桶田 浩志（営） 神谷 康弘（営）
 森嶋 千唐（営） 湯浅 祐光（営）

1. どんな仲間がいた？

『23期は少し控え目で！』という先輩の勧誘方針により、新練1次は控えめ過ぎて少数精鋭。2次、3次と重ねて、ようやく期の体をなした。ほとんどが山のビギナーで、がつがつ、どたばた、とにかく山に入り、山と自分たちを見つめ直していました。話し好きが多く、よく議論をしたのはワングルの伝統。単なる妥協を潔しとはせず、ぶつけ合った。

2. どんな風が吹いていた？

穂高の事故を教訓として、『事故は起こすな！』という暗黙の了解が強く働き、『山に入ったら、自分たちの責任ですべてを実施』という理念は、組織文化のレベルになっていた。それでいて、『わくわくするような事がしたい！』という欲求を如何にバランスさせるか？自分たちの山の領域での力量把握を正確にすればするほど、限界や新領域へ挑戦は無制限には志向できず、『文化サークル的な社会派テーマの追究』を挙げつつも、主軸にはなり得ず、さりとして『完全なる個人的快樂の追求』をするのならば個人で活動すればいい。結局、解決策を見出せなかった。執行部方針とか夏合宿パンフの裏ページには、主将のによろよる字があったが、ごめん、まったく覚えていない。だが人が入れ替わる学生クラブの良いところ、クラブ自体は同じように見える活動を繰り返しながら、徐々に軌道修正をして行った。

3. 合宿はどこへ？（BGMは大滝泳一、山下達郎、サザン、そしてジョンレノンのラストアルバムかな）

春の小屋合宿：56豪雪で小屋が消えた。投入された先行部隊が見たのは、真っ平らな平原のみ、自分達の足元が少し盛り上がっていたので、そこを屋根と推測し、掘り起こしと井戸確保に明け暮れた。30人近い部員に支えられた土木工事だった。

分散合宿を取り入れた春合宿：金の無さと雪の状況を考えると、丹沢！という選択。3隊を1グループにして2グループで丹沢を走り回れという志向、1隊途中エスケープという危機もあったが、何とかクリア。道なき山は楽しかった！

地域のパターン化が進み始めた夏合宿：日高に入る器量はないし、北アは社会人になれば行けるなんて打算も働き、自然と南ア南部（三伏～茶臼）に決定。天候には恵まれたが、聖の下りで1名すべて向う脛を深くえぐる怪我、あえなくエスケープ。今から思えば隊を分解してでも最後までいけるように最初から準備しておけばな～と反省。

ワングルを育て預けていただいた先輩の方々、我々からのバトンを受け取り、今まで続けていただいた後輩の方々に改めて御礼。

あの時代、いい風に吹かれていた。そして同じ風が今でも吹いているはず。

ご同輩！しがらみにかからめとられたその中で、あの時の君の熱き心を忘れるな！老いた父と語れ、同志である妻に語れ、最愛の息子と娘に示せ。そして鏡の中の自分に問え！



S57.12 追いコン（4年生/丹沢にて）

前列左から 伊藤・大津山・武藤・高岡・中戸
 後列左から 木村・荒井・根岸・仙名・高山・加藤・吉田(剛)
 あと写真には写っていないが・・・丸茂・吉田(豊)

入学：1980年（昭和55）4月

卒業：1984年（昭和59）3月

主将 岡田 拓（工・船舶） 副将 岡田（浦野）雅代（工・建築）
 部員 安藤 利光（工・情） 上野 隆行（経済）
 大津 真嗣（経済） 鴨志田（太田）周子（教・美）
 北沢 浩一（経済）
 木宮 聖至（経営） 酒井 文隆（工・情）
 田沢 充康（経済） 津留 賢治（工・化）
 成田（旧姓佐々木） 弘美（教・国）
 早川 恭二（工・材） 広瀬 芳秋（経営）
 丸山 活輝（工・電） 八木 肇（経営）
 満留（横山）周子（教・心）
 山辺 俊樹（工・電）

1年の頃は熊谷 警君、横山和子さん、中本俊也君もいました。



北海道夏合宿での写真
顔が見えないのは木宮君

1年：新錬一次は丹沢、塔～鍋割山。新錬二次は瑞牆～金峰山～西沢溪谷。

夏合宿は南アルプス北部。三伏～塩見～農鳥～間ノ岳～北岳～広河原。

天候の為停滞が多かったと記憶している。農鳥では嵐に見舞われ、テントの中でも雨漏りがひどく傘を差してすごしたが、その後、避難小屋に駆け込んで夜を明かした。

春合宿は丹沢。総勢50人位がキスリングを背負って丹沢中を歩きまわった。

2年：新錬一次は丹沢、塔～鍋割山。新入生を騙して枕や楽器を持ってこさせようとしたが失敗に終わった。

夏合宿は南アルプス南部。荒川～赤石～兎～聖。

途中負傷者が出て、聖からエスケープ。

夏のPWで離島（トカラ列島）があったりし、島や原野といった山以外のフィールドも出現。

春合宿は伊豆の山を歩いた。

3年：新錬一次は丹沢、新錬二次は奥秩父。

夏合宿は北海道。十勝岳～トムラウシ～忠別～白雲～旭岳

ケイコという熊が出没しているという情報があった。本州とは違う北海道の山を堪能。たくさんの残雪とどこまでも続く山並、稜線に出ると高低差が少なくがんがんに距離を歩けたのが印象的だった。

苗名小屋：ところ狭しと小屋に人があふれた。夕飯を食べ始めたかと思うと、もう釜の前には行列がで始めるという食欲に圧倒された。ギネスブックが流行っていて、大黒柱にセミのごとくかじりつく時間を競ったり、リフトで一度に運べるロールの数を競ったりしていた。

サザンオールスターズが流行りだしたところで、箒をギター代わりにして流行の歌をみんなで夜遅くまで歌っていた。

スキー：お昼はいつもサンアントン。サービスの野沢菜とスキー汁。Jバーリフトには、みんななかなかうまく乗れなかった。

24期はおそらく、在籍部員が一番多かった時代ではないかと思う。あの人数で山に入って、今思うと相当迷惑をかけていただろう。24期のみんなは、いつもにぎやかで、活気があって、笑いがあって、そして若かった。また小屋でみんなに会いたいな。

入学：1981年（昭和56）4月

卒業：1985年（昭和60）3月

主将 阿美 雅之（済）

部員 小佐野敬子（教） 柏木 修一（教） 砂賀 晴美（教） 高橋 道子（教） 竹内 和俊（教）
 濱崎 信行（教） 齋藤友喜彦（済） 高野 利洋（済） 毛利 雅夫（済） 永田 武（営） 小野
 文男（工） 手塚 正志（工） 古川 圭一（工）

< 当時の活動状況 >

50年の歴史を誇るYVWのちょうど真中の世代にあたる25期は、アットホーム的でまとまっていた14名だった。一方で安定的に10名を超える部員で構成できた時代の終焉とも言える。合宿7回（偵察3回）、PW21回。

春合宿：長野（丹沢）～蛭ヶ岳～大室山～山伏峠～御正体山～高畑山

過去の山行データを参考にし、丹沢・道志のコースに決定。二日目、予想以上の時間を要したため犬越路の避難小屋に1泊するハプニング発生。早々と予備日を消化。その後は順調だったが、雨あり残雪あり車道ルートありと、天候と山容の変化に富んだ合宿だった。

夏合宿：三伏峠～塩見岳～間ノ岳～北岳～北沢峠～甲斐駒ヶ岳～仙丈ヶ岳

3,000m級の山々を大人数で縦走可能なフィールドであること、および当時の南ア北部→南ア南部→北海道の3年周期法則により、合宿地を執行部全員一致で南ア北部（三伏峠～塩見岳～間ノ岳～北岳～仙丈ヶ岳～北沢峠～甲斐駒ヶ岳）に決定。前半はなかなか明けぬ梅雨にたたられた合宿だった。特に塩見岳登頂は大げさに言えば壮絶な自然との戦い。頂上でのレストもままならず、強風と雨の中、足取りをふらつかせながら逃げ込むようにして雪投沢の天場に。その後、富士山に次ぐ標高第二位の名峰北岳もガスの中の登頂。雨男、雨女は誰なのか恨みたくもなる。北岳～両俣間が増水しているとの情報から、広河原へ一旦下山し、スーパー林道を経由して再び北部の山域、北沢峠から仙丈と甲斐駒をピストンするコースへと変更する。仙丈、甲斐駒とも峠からはかなりの標高差だが、軽装であることと快晴の中での山行で皆の足取りは軽やかだった。

とにかく自然の厳しさとすばらしさを皆で共有できた山行だった。

PW：北アルプス（樺平～剣～薬師） 北アルプス（燕～常念～蝶） 西穂、八ヶ岳等、険峻的な山域が上げられる一方、会津駒、秋田駒、果ては神津島、ムカラク島もフィールドとしており、バラエティーに富んでいた。

番外：当時は当たり前と思って厳守していたこと（今にして思うと・・・？）

- ・合宿で使用するザックは必ずキスリング。アタックザックはPWでのみ使用可。
- ・アルコール類は合宿では禁止、PWでは可。

< 現況 >

阿美：オリンパス光学、野呂（旧姓小佐野）：横浜市教員、柏木：東京消防庁、上村（旧姓砂賀）：佐野市教員、高木（旧姓高橋）：鎌倉市教員、竹内：松本市教員、濱崎：横浜市教員、齋藤：住商アグロインターナショナル、高野：UFJ信託、毛利：日本IBM、永田：伊藤忠、小野：故人、手塚：NEC、古川：富士通



1982年冬トレ合宿にて

入学：1982(昭57)年4月 卒業：1986(昭61)年3月

主将 関根 弘之(工) 副主将 千田 善浩(営) 藤原 芳樹(経)
 部員 大村 泰宏(工) 川邊 茂寿(工) 小宮 茂樹(教) 坂田 将美(工)
 辰馬 克也(工) 松下 恵子(教) 水島 貴志(教) 高畠 淳(営)

~26期 当時の報告書から 活動記録に代えて~

<春トレ総括集より(苗名小屋周辺)> □「春トレ」という言葉を最初に使ったのは実はこの俺である。それまでは冬トレであったのだが、冬トレはやめてそのかわり夏トレ、夏合宿と同じ関係で春トレ、春合宿をやろうと言ったのであった。(K) □今年から苗名小屋を利用して周辺登山をやろうということになった。(まあ林道歩きだが)そこで問題となつてまずあがつたのが、25期をどう説得するかであった。(F) □春トレ、あの合宿をやったことによって俺はとてつもなく雪山をやりたくなつた、ということは痛烈に感じる。しかし、うちのワングル部では本格的な雪山はできない。ひどいジレンマを感じる。ああ、白銀の世界に浸りたい!! (T)

<春合宿総括集より> □とにかく hard な合宿だった。水はない、道はない、おまけにテン場までないという三拍子そろつたステキな山々だった。やはり九州一の縦走路だけある。(O) □今回26期にとって初めての長期合宿であると同時に、新しい試みである分散合宿を行った。そして得るところも大きかったが、反省すべき点が多く目立った。・・・予想外の事態が続々と出現するのには全く参つた。一時は大村と本気でエスケープを考えたりしたものだ。従つて終わった時の感慨はひとしおであった。(K) <夏合宿総括集より(南アルプス南部)> □昨年に続いて南 Alps に行ったが、北部と南部では開発の度合いが全く違つていて新鮮な山域という感じがした。・・・とにかくもう2度と行く機会が無いと思われるコースを全部歩き回つたことも満足感のおかげか、南 Alps という山がすごくよい山に思われた。去年の夏合宿では全くつまらない山だと思つていた南アは北部がつまらないというだけで南部はいい山でした。(S)

<L養成合宿総括集より> □私がこの“ワンダーフォーゲル部”に対していつも思つていたこと、誇りに思つていたことがある。それは、「ユウレイ部員がいないこと」である。「あれ。あんな人いたっけ？」ということがないのである。誰か「ワンダーフォーゲル部は人間関係のサークルである」って言つてたよな。(M)

<26期総括集より> □最近部室で、はまつたのはまらないだのバカ話をしていることがあるが、所詮人間どこにもはまらずに生きてゆけるわけでもなく、そこが人間が社会的動物だと言われるゆえんだらうけれど、そのはまり方如何で私他の差があるなということがちょっとわかつた・・・。

YWV という集団に何らかの形で関わる人間が集まり山行を企画し、責任範囲内において自由な発想のもとサークルを盛り上げてゆくことにはかわりない。(S) □「ファイト」「もうすぐだ」「がんばれ」先輩の声が空に響く。俺は「ハイ!」「オスツ!」と苦しい息を吐きながら答える。「もうすぐだ」という声が自分にとっては“無”であると思いつつも、なんとなく期待してしまう。(S) □では一体私は執行部員としていったい何に満足したのでしょうか。ハイそれは知る人ぞ知る「槍薬師PW」です。思い返してもうっとりするいい経験です。(T) □ワングルをやつてきたことに、そして26期であることに、こうして引退の身となつた今、悲しいくらい嬉しいのです。(M) □先日(正確には本日)の徹マンのためか単細胞で定評のある私の頭はショートしてしまつて何も書くことができなくなつてしまつた・・・。とにかく細心の注意と大なる大胆さを持つて頑張りたまえ27期28期諸兄。(K) *総括集を大事に保管し、快く貸して下さつた川邊くん。感謝です!



夏合宿 赤石岳頂

入学：1983年（昭58）4月

卒業：1987年（昭62）3月

主将 池野 元（工） 副将 遠藤 勝哉（工） 高畠 淳（経営）

部員 中田 英樹（経営） 遠藤 幹（教）

この度はYVW50周年おめでとうございます。50周年という長い歴史の中で、我々27期がその1頁に参加できたことは非常に嬉しく思います。以下に簡単ですが我々の足跡を紹介したいと思います。我々が在籍した1983～1987年はバブル崩壊前の日本経済の成長期であり勢いのある時代でした。理系は企業奨学金、文系は多数の内定をもらい、音楽ではサザン、漫画では、わたせせいぞうなどが流行っていました。ある意味スマートに軽く流れていくのが好まれた時代でした。

その中で泥臭くある意味ディープなYVWに集まった仲間は、自然と親しむという同じ価値観を共有し強い仲間意識を持っていたと思います。

我々は5人と少なく単独で執行部を運営していくことが困難だったので、28期に入ってもらい合同執行部という体制をとりました。そのためリーダー養成合宿を2回行いました。27期の方針として自分たちのオリジナリティを出そうといろいろ工夫しました。まず春合宿を北八ヶ岳、鈴鹿山系の分散形式で行ったこと、このような方式は今まで合宿は全員で纏まってという慣習から離れた初めての試みでした。この頃からアルピニズムを求め険しい岩山を求める組と、仲間とともに自然に親しむ組とに分かれてきた感じがします。新入生スタートの新練一次から転倒負傷による救急車要請、新練二次では歩荷によるザック麻痺と大事故にはならなかったが波乱含みの幕開けでした。夏トレは新しく入った新人2人の練成も兼ねて行いましたがコースタイムが大幅に遅れてエスケープとなりました。

7月の前期試験が終了すると私たちは夏合宿の北海道に向けて全速で走り出しました。隊ごとに集まり地獄の和田町階段5往復など筋トレをこなし、長いコースタイム、エスケープルートやコース状況を試験並みに勉強し審査会に望んだものの覚えきれずに再審査となった隊もありました。北海道はヒグマの危険があったので対策教育も行い、日本赤十字社のご指導をお願いして赤十字救急医療員の資格を皆で取りました。また費用もかかるため皆で集まって高島屋のお中元のバイトを行いました。その日の飲み代に消えてしまったことも多くありました。

十勝岳が噴火して入山禁止の危険もありましたが何とか入山でき、十勝岳の噴煙の脇を登っていきましました。この頃ヒグマの活動も活発で、初日からテントの荷物が何者かに荒らされるという事件も発生し怖いスタートでした。また途中すれ違った登山者からヒグマがよく出ると聞かされた場所でヒグマの足跡も見ました。このような中でも天気はほぼ快晴で北海道の原野の素晴らしさを十分感じることができました。合宿後半には他パーティーの負傷者の救助要請を受けエスケープの危険もありましたが、ヘリでの救助が可能となり我々は無事全員で旭岳に到達し皆で最終日を迎えました。8月、夏のPW週間で終え我々27期の活動は終了しました。

我々もすでに40代となり仕事と家庭に忙殺される毎日に追われています。なかなか会えない仲間と今度の50周年記念式典で会えることを楽しみにしています。最後に剣で他界してしまった28期故岡本佳久君のご冥福を心からお祈りします。



左から 「競馬・日本酒狂いの幹ちゃん」、「山でダニとランデブーのダニー中田」、「ゲロ吐き根性男のゲン」、「後輩いじめ・毒舌のシンスケ」、「無口・頼りがい・むっつりの淳」の悪党メンバー

（遠藤シンスケ勝哉記）

入学：1984年（昭和59）4月 卒業：1988年（昭和63）3月

主将 山本 先隆（工） 副将 大庭也寸志（工） 副将 松本 亘弘（経）
 部員 岡本 佳久（工）（故人） 楠本なぎさ（教） 坂川 尚司（経） 和井田基房（工）
 直井 忍（工） 中西 信之（工） 木綱 祐貴（工） 久米 一弘（経） 直井 朋子
 （荒木地）（教） 梅田 祥司（教） 小久保裕之（教） 井口 次郎（営） 和多 治（工） 芳
 賀 剛志（工）

28期は、当時の前後の期と比較して部員数も多く、個性の強い楽しい集団でした。わけも分からず、新練一次・二次合宿と続き、新歓コンパでは、伊勢佐木町の道端に冷凍マグロのごとくずらっと並べられていた酔いつぶれた我らも、最初のPWで「ああ山っていいなあ。」と、各々が思ったのではないのでしょうか。

そして、最初の夏合宿は南アルプス南部。天候にも恵まれ、すばらしい合宿でした。当時は、PW（ところでパーワンて、今でもこんな言葉は使われているのかな？）も盛んに計画されて、夏休みには、メンバーがそれぞれ全国に散らばるといような様子でした。内容も、おまたくん（失礼！山本君）などは北アルプスの南北縦走（山中何泊したのか・・・）にトライしたり、中には沖縄の無人島へ行く強者もあり、なかなか個性的な活動が行われていました。

夏の小屋ではお決まりのキジ隊、冬は小屋スキー、春の遭難対策合宿では笹ヶ峰へ雪上ツアーと、山行以外でも、よく金があったなという程にみんな精力的に活動していました。まあもちろん、そのためのバイトは欠かせないものでしたが・・・。

2年次の夏合宿は北海道。K子という熊に怯え、エキノコックスにびびり、でもその中で停滞の日に、トムラウシの手前でんびり過ごした時に眺めた残雪の景色は、今でも脳裏に焼きついています。

3年次の夏合宿はその当時のローテーションどおりに南アルプス北部へ。最後の夏合宿ということで、期するところがそれぞれあったかと思いますが、合宿最終日、甲斐駒の山頂で、全体写真に始まり、色々なこじ付けでの集合写真を撮り合いながら、抜けるような青空の下でみんなが笑顔で過ごしていた時間を今思い返してみると、その後起こる事実と相俟って、何だかそのときが最も輝いていた一瞬だったようにも思われます。

8月26日。薬師・剣PWの最終日に、リーダーを務めていた岡本佳久君が折尾谷で、不慮の事故死。未熟だった当時の我々には、何をどうすればよいのか、足が地に着かない感覚のまま、宇奈月へ行き、彼の遺体と共に寺で一晩を過ごし、そして、横浜での通夜、葬儀とあわただしく時間だけが過ぎていきました。

その後の事故報告書や遺稿集の作成に費やした日々も含めて、なんだかふわふわとした夢の中での出来事だったようにも感じられますが、残った者として、彼の仲間として、我々28期の結束が格段に強まったこともまた事実といえましょう。

その後、ワングルでは大きな事故はないと聞いています。それが何よりです。これからも安全第一で楽しく活動が続けられることを切に願っています。

2年ほど前に、久しぶりで同期会をしました。皆それぞれの立場で、それなりに忙しい年代に差し掛かっていることもあり、集合できたのは10人だけでしたが、会った瞬間にあの当時の感覚に戻れたという事は嬉しい限りでした。相変わらずの酒量とピッチではありましたが、皆がちゃんと終電をわきまえていて、それぞれの電車に乗って家路に着いたのも大人になった証拠でしょう。（あたりまえか・・・）

世の中のタガが緩みっぱなしの、その責任の一端は我々ミドルエイジにもあるのでしょうか。今が踏ん張りどころ。でも、そんな時こそ、学生時代の仲間の損得勘定抜きの話りが大事なのです。幹事は頼んだよ。坂川君。

28 期の仲間達



3年の夏 甲斐駒ヶ岳頂上にて

29 期の仲間達



1987.7.29 夏合宿 南ア荒川前岳頂上より赤石岳を望む
福島 中嶋 山本 舟本 松本 関 木虎 禅 小寺

入学：1985年（昭和60）4月 卒業：1989年（平成元）3月

主将 禅 知明（工・物質） 副将・会計 木虎 正和（工・電情） 副将・小屋委員長 小寺 慶康（営・管理） 記録・編集・OB委員長 関 隆広（工・生産） 文サ・マネージャー・渉外委員長 中嶋淳一郎（工・電情） 医療・トレーニング委員長 福島 昌彦（教・社会） 遭難対策委員長（保険） 舟本 昌弘（済・国経） 装備委員長 松本 和之（工・電情）

審査委員長 山本 博之（済・国経） 部員 井上 裕司（工） 長沼 克拓（工）

当初は部員数13~14名ほど。「北海道に行ける！」という新人勧誘に釣られた部員多し。経験者わずか2名。28期と30期が15名以上の大所帯だったので（合宿で隊が分かれてしまうため）同期と一緒に山行に行く機会は少なかった。2年生の夏に28期岡本氏を遭難事故で亡くし動揺が大きく数名の部員が部を離れた。29期執行部を立ち上げるには執行部方針・遭対規約・審査会事項・山岳保険の大幅な見直しを行うことになり素案をOB諸氏に諮り数度の修正を経た。

しかし部員は放課後アルバイトもあるためミーティングはある1名の鶴ヶ峰駅近くの下宿に三々五々集まって連日泊まりで行い、そこから通学する日が少なくなかった。トレーニング委員会も新設し山行前のトレーニングを個人管理に任せずに各山行に担当者をつくりチェックさせるようにし、実際トレーニングが十分でない審査会でその時点では山行不参加の印を押した。事故を起こさないようにという意識が強く、山を心より楽しんだという記憶はなかった。

卒業してしばらくは何人かで山行に行くこともあったが、その後は結婚式等で会えるくらい。40歳代に突入し仕事と家庭に時間を割かれ同期で会うことはほとんどなく年賀状や電子メールでお互いの消息を知るくらい。もう10年くらいすれば会ったり山にも行ったりできるかも、などと憶測の域を出ない現状。しかし同じ釜の飯を食った同胞の信頼は変わらない。

29期 執行部主催の山行記録 (1987~1988)

冬トレ 【大倉 大倉尾根 塔ノ岳 表尾根 富士見山荘】
 雪上ツアー 3/9~10【苗名小屋 笹ヶ峰京大ヒュッテ前 苗名小屋】
 春合宿 4/3~6【ピラタス 横岳(北横) 縞枯山 麦草峠 白駒池 高見石 渋ノ湯】
 春合宿 4/4~6【三条の湯 雲取山 石尾根 奥多摩駅】
 安本(新練)1次 4/18~19【六本木峠 大菩薩嶺 福ちゃん荘 大菩薩峠 黒岳 小菅】
 安本(新練)2次 5/3~4【笹子駅 清八峠 三ツ峠山 母の白滝 河口】
 新練1次 5/16~17【大倉 大倉尾根 塔ノ岳 表尾根 富士見山荘】
 新練2次 5/29~6/1【梓山 千曲川水源 甲武信ヶ岳 雁坂峠 雁峠 新地平】
 安達太良PW 6/13~14【湯川渓谷 くろがね小屋 安達太良山 鬼面山 野地温泉】
 南八ッPW 6/19~22【美濃戸口 行者小屋 阿弥陀岳・赤岳 硫黄岳 夏沢峠 天狗岳 麦草峠】 Escape
 谷川PW 6/19~21【土合 西黒尾根 谷川岳 万太郎山 平標山 元橋】 Escape
 燕常念蝶PW 6/19~23【中房温泉 燕岳 常念岳 蝶ヶ岳 徳沢 河童橋】
 夏トレ 7/4~5【西丹沢篝沢 西沢 畦ヶ丸 大滝峠上 大滝沢 西丹沢篝沢】
 夏合宿(偵察有) 7/22~7/30【畑雑ダム 茶臼岳 聖岳 赤石岳 荒川三山 榎島 畑雑ダム】
 裏表銀座PW 8/5~8/11【七倉 烏帽子岳 水晶岳 鷲羽岳 槍ヶ岳 (燕岳 中房温泉)】
 河童橋へ Escape
 雲ノ平PW 8/5~12【折立 薬師平 薬師岳 高天原 雲ノ平 水晶岳 双六岳 笠ヶ岳 新穂高温泉】
 岡本氏追悼山行 8/7【樺平 水平歩道 オリオ谷(現場) 水平歩道 樺平】
 与那国島・波照間島PW 8/12~14【与那国島・波照間島】
 穂高PW 8/22~26【河童橋 涸沢 北穂高岳・奥穂高岳 涸沢 パノラマ新道 徳沢 河童橋】
 妙高PW 10/23~25【笹ヶ峰 高谷池ヒュッテ 火打山 黒沢池ヒュッテ 妙高山 光明池 燕温泉】
 谷川PW 10/30~11/1【土合 西黒尾根 谷川岳 万太郎山 平標山 元橋】
 L養 12/5~6【寄 雨山峠 鍋割山 大倉尾根 大倉】塔ノ岳はCut
 西丹沢PW(偵察有) 1/5~7【西丹沢篝沢 峠 畦ヶ丸 孤釣山 山伏峠】

入学：1986年(昭和61)4月 卒業：1990年(平成2)3月

主将 土生 達也(教) 副将 竹澤 智(済) 福田(山田)幸治(工)

部員 麻生 啓介(済) 荒木 伸一(工) 岡島 準(工) 勝見 健(済) 北林 一俊(工) 坂井 一成(済) 佐川 武男(工) 笹倉 実(工) 下出 直孝(工) 田中 隆一(工) 服部 宣久(教) 藤尾 信之(済) 藤田 昌幸(工) 藤森 朝詩(済) 宮崎 英樹(済) 安本健一(済)

YWV50周年おめでとうございます。30期一同心からお祝い申し上げます。もうすでに私たちが現役のところから、どこかで「部の存続」を気かけなければならなかった状況を考えて、50年を無事迎えたこと、さらに苗名小屋が存在し、それに笹倉をはじめ、同期が少なからず貢献したことがとてもうれしく、ありがたく感じます。また、こうした歴史を今も支えてくれている現役部員にも感謝したいと思います。

当時の流行ものも思い出せませんが、私たちが執行部だった1988年は、昭和天皇の容態が悪化し、わが中日ドラゴンズの優勝パレードすら自粛しなければならなかった、個人的には特別な年でした。(きっと他の人にとってはどうでもいいことでしょうが...)

入学して初めての夏合宿後に故岡本さんの事故があり、29期から執行部を引き継いだ私たちの活動方針も“責任や義務を果たすこと”“もう二度と事故を起こさないこと”に重きを置いていたように思います。遭難対策誌の編集、夏合宿前の上級生のボッカ訓練や健康診断などにその方針が表れていました。トレーニング不足と判断され、行けなくなってしまったPWもありました。ただし、だからといって暗く寂しい活動だったわけでもなく、同期の人数が多いからこそ趣味嗜好の幅も広く、それぞれが存分に自然を満喫していました。(それが時として、まとまりを欠くことにもなりましたが...)

リーダーとしての春合宿は、屋久島・久住・北八ヶ岳の分散。そして夏合宿は、開通したばかりの青函トンネルを抜け、寝台列車「北斗星」を1両借りきって北海道に上陸しました。合宿中は、本州が異常気象で雨続きの中、奇跡的に10日間ずっと天気恵まれ、停滞した日に見たトムラウシ近辺の景色も合わせて、「カムイの存在を感じずには...」と表現したくなるほどの充実した山行でした。

用もないのに部室で時間をつぶしたり、下出や笹倉のアパートで麻雀をしたり(山田のアコギな上がり手が脳裏に焼き付いている)それもまた私たちにとってのワングルの一部だったのかもしれない。お世辞にもスマートな学生生活とは言えないけど、私たちの「今」を支える重要なもの、それがワングルであると思っています。

あれから18年。

全国に、そして海外にも散在している私たちも、今年多くのものが40を迎える歳となりました。もう少し暇になったらみんなで山にでも...と思うのは、どの年代でも同じだと思います。

でも決して全員がそろってまとまって動くことはない...それが30期の可笑しさであり、良さであるのです。



1988年夏合宿(北海道)背景はトムラウシ

入学：1987年（昭和62）4月 卒業1991年：（平成3）3月以降

主将 松尾 真治（教） 副将 岡野 正彦（経） 松田 哲治（教）
部員 伊藤 明広（経） 久保 哲博（工） 増田 高康（工）

「（前略）31期執行部の基本方針は、『Y.W.V.に対する責任と義務を自覚し、自然との触れ合いの中で、同じ時を共有する仲間との親睦を深める。そのために自然全般を活動範囲とし、万全を期したワンダリングへの限りない努力と創意工夫を信条としてこれにのぞむ。』

一字一句決めるのにももめたこの方針の中で、特に重点を置いて話されたのは『責任と義務』、『共通体験』の二つであった。執行部員が6人しかいない為、一人でも欠けると成り立たない一年間を覚悟しそこからミーティング、トレーニング、様々な規約等のことに話に移り、それぞれ『責任と義務』について考え、結局、『自分達の決めたことは守る』との明快かつ困難な結論に落ち着いた。『共通体験』については部員それぞれが独自の自然観、人間観を持つことは当然であるが、Y.W.V.に居る以上、同じフィールドで同じものを見て、それぞれに違った見方をし、それが全体に還元された上でさらに自己の向上をはかることに存在価値があると考え、今まで以上に合宿の全員参加の項目にこだわり、『共通体験』に重きを置いた。（中略）

執行部をとる段階で重きを置いた『共通体験』は、冬トレのエスケープ、春合宿中止、そして、夏合宿エスケープとあり、合宿数・日数が不足したのは残念である。しかし、同じフィールドに立つことの重要性は再確認できた。

『責任と義務』は（中略）個人の集団に対する役割はもとより、集団の個人に対する役割を考える機会を持てたことは収穫である。集団は自分から離れたところにあるのではない。自分を含めた集団が個人に果たす役割を一年間考え、妥協しなかったことは評価できる。

少人数でやってきたことを後悔していない。（中略）人数が少ないことからくる自覚が、より深くワンダリングを考える結果になったことは思わぬ産物であった。（中略）

『終わっちゃったなあ、もう』12月20日の執行部会での一言である。我々6人はY.W.V.に対して、他の部員に対して思う存分自分をぶつけました。（後略）

（1990年1月13日付 31期執行部総括（文責：主将 松尾真治）より抜粋）

岡山在住の松尾の上京に合わせて、今でも年一回ぐらいのペースで集まって飲んでいます。



1989年10月29日（日）L養一次（三ツ峠）にて
後列左から 松尾、伊藤、岡野 前列左から 久保、増田、松田

入学：1988年（昭和63）4月 卒業：1992年（平成4）3月

主将 八重尾俊之（教・物理） 副将 宮崎 徹（工）
部員 藤尾（遠藤）美佳（教・美術） 藤森（高瀬）潤子（教・物理）

【1年の歓迎W】 丹沢 塔ノ岳

大所帯でパワフルな30期、個性的で勧誘上手な31期の熱烈歓迎を受け、10人が32期として賑やかに入部しました。数年ぶりの女子部員ともてはやされた遠藤と高瀬（旧姓）の2人。現役女子部員の先輩がいなかったのに、よく入部したものだと思えます。大倉高原山の家で一泊して、初めてのコッフェル掃除も体験！

塔ノ岳までの急な登りがしんどかったことをよく覚えています。

【夏合宿 1年】 北海道 十勝岳温泉から入って、十勝、トムラウシ、旭岳と天気にも恵まれとても楽しい、約10日の縦走でした。なだらかな稜線、花畑とキタキツネ、テン場で毎晩見上げた燃えるような夕焼け。今でも、また行ってみたいと懐かしく思い出します。でもこの後、春合宿の頃までに6人の32期が退部することになりました。議論を戦わせ、春合宿は中止に。退部理由はそれぞれでしたが、残された4人には心細さと共に小さな責任感、そして山への憧れがあったと思います。

【夏合宿 2年】 南アルプス 北部

天気にも恵まれず、北岳に登る手前でエスケープしました。その後、宮崎は北岳に登っていないことが気になって、大学卒業後に登りました。その頂上で、偶然にも藤尾さんに会ったことを覚えています。

【夏合宿 3年】 北アルプス

富山折立から入って、薬師、雲ノ平、三俣蓮華、黒部五郎、双六、新穂高温泉に下山しました。天気にも恵まれ、スター級の山々を堪能できるコースで歩き易く、とても楽しい縦走でした。

32期が4人だったため、33期との合同執行部で進めた一年間でした。33期には一年早くから責任を負わせてしまうことになりましたが、その積極的な参加で支えてもらいました。31期の先輩方も多くの場面で応援してくださり、皆さんのお陰で最後まで続けていけたことを感謝しています。

【そして現在】 卒業して15年ほど経ちました。この原稿を書くにあたってYWVでの総括など読み返してみましたが、恥ずかしさに赤面してしまいます。未熟で真面目で真剣だった私たち。青春だったなと感じます。

現在、八重尾は福岡で中学校教員、宮崎は湘南台で会社勤め、藤尾（遠藤）は横浜で小学校教員（現在4人！の子育てのため育休中）、藤森（高瀬）は夫の赴任先から戻り横浜で中学校教員に復帰しています。それぞれ仕事と子育てに多忙を極める毎日です。そのため山からは遠のいてしまっていますが、YWVで自然に入る喜びと術を学んだことは大きな財産になっています。

最後になりますが、皆様のご健勝をお祈り致しますと共に、私たちも健康に気をつけ、山登り（ハイキング）を一生涯の趣味としていきたいと思えます。

3年 夏合宿 北アルプス



入学：1989年（平成1）4月

卒業：1993年（平成5）3月以降

主将 木村 堅一（教）
 副将 福島 弘之（経済） 河上 力哉（教）
 部員 鈴木 秀治（教） 藤井謙一郎（経済） 原 倫江（教） 横井 英記（経営）
 合掌 顕（教） 赤羽 直雄（工・故人） 大西 浩二（経済・故人）

夏合宿 1年 夏合宿 南ア（甲斐駒～仙丈～北岳～間）
 2年 夏合宿 北ア（薬師～黒部五郎～鷲羽～三俣蓮華～双六）
 3年 夏合宿 大雪（富良野～十勝～トムラウシ～忠別～旭）

【入部の頃】昭和天皇が崩御し、故小淵元首相が「平成」の元号を発表した1989年に33期10人は入部した。同期の合掌氏に誘われ、私はYWVの扉を叩いた。ガソリン臭と軽音のドラムで五官が完全麻痺するYWVの部室。見知らぬ顔に興味津々の目が注がれる。その夕方、大学近くの「ねぎし」でカキフライ定食を御馳走になった。31期の増田さんと松尾さんだっただと思う（間違っていたらご免なさい）。極貧の田舎者が、満腹という幸せを感じ、入部を決意した瞬間だった。

また、29期の福島さんが住んだ「鶴ヶ峰小屋」（電気・水道・風呂無）に入れ替わりで私が入居した奇遇に、強い縁を感じた。

一週間後、鶴見の「IBS」に行き、2万円弱する登山靴を借金して買うことに。今では絶対には買わない重い革靴。すぐに部室に戻って、キウイ社のミンクオイルで磨いた。いかにも素人っぽいベージュ色が恥ずかしかった。部室に転がる黒光りした山靴が憧れだった。

新歓は「バカ尾根」に登るのが常。何県のどんな山なのか、何が必要か、よく分らないまま、筋トレ、テント・ストーブの扱い、地図折り、天気図、基礎知識とコースタイムは丸暗記した。その後、「審査会」という恐ろしいイベントがあった（これ以上緊張して勉強した経験はない）。

出発日、部室で新品のYWVシャツとダボダボのニッカ・ポッカーに着替えた。先輩から「好きな女の名前を紙に書け」と言われ、なぜか「浅香唯」と書いた。胸にその紙を貼り、和田町駅まで歩いた。同級生には指をさされたが、私には少し快感だった（登山に向いているマゾ性を確認）。この悪戯のお陰か、初山行の緊張の糸がほぐれていった。

【執行部の頃】32期が少数だったため、32期は33期と合同執行部を営むことになった。良い意味でも悪い意味でも、33期は他期と異なる体験をした。入部2年目は思春期に似た時期。自由に考え、執行部から一歩身を引き、自分の役割を見つける時期。だが、合同執行部下ではYWVから距離を置いて評価する時間的・精神的ゆとりはなかった。3年目、自らの独自性や新鮮さを発見できないまま、33期6名は単独執行部での運営を選択した。幸いにも34期や35期の新メンバーに支えられ、夢にまでみた十勝・大雪を全員で縦走できた。33期の最大の業績は、YWVの伝統を絶やさず、2年間続けて春・夏合宿・PWを企画・運営し続けたことにあると素直に思う。

【入部18年後】33期で忘れられないことは、卒業後、33期の西沢氏と赤羽氏、35期の大隅氏が早すぎる死を迎えたことである。その衝撃は今も消えていない。あの3名は、共に山に登った仲間の生き方を天国からじっと見ているはず。YWV50周年を迎えたこの時期、久しぶりに一同会して、現役時代のこと、今のこと、未来のこと、じっくりと話をしてみたいなあ。そういえば、大西氏が置き土産として遺していった「ヘネシーVSOP」（未開栓）は、私が自宅で大切に保管しております。皆さん、ぜひ集まる機会をつくって乾杯しましょう。



西沢・不老山 前列左から：合掌・鈴木
 後列左から 木村・福島・原・河上・藤井・
 横井・大西

入学：1990年（平成2）4月 卒業：1994年（平成6）3月

主将 田中 義人（経済）
 副将 田村 顕洋（工） 村山 浩樹（工）
 部員 井口健太郎（工） 小野恵美子（経済） 影井 康弘（工） 古平 暁子（教育）
 親跡 冬樹（教育） 長谷川 義高（工） 松下 淳朗（工） 宮本 薫（教育）

横浜国大常磐台キャンパス。さながら山城の如く高台に居を構えたそこに、入学してはじめて登校したとき、機動隊の装甲車が国大南通用門の脇に停車していたのを思い出します。

不穏な昭和40年代の残響が残っているかのような、いささか古びた校舎の群れから離れたところに、半分廃墟と化したサークル棟が建っていました（あ、今も建っていますね）。

ワングルの部室にどうして足を向け、転んで入ったものが、今となっては定かではありませんが、かくして34期としてワングルの一員に。しかし最初の新練一次のとき、荷物を詰めたキスリング（そう、当時は部にまだ残っていた）を背負って、南通用門からサークル棟に上がる坂を登るだけで一苦勞。ホント大丈夫かよ、と内心思っていました。

しかし存外どうにかなるもので、一年生として迎えた北アルプスにおける夏合宿では、御来光の前、明けの明星が空に輝く様に打たれて、下山してから松本にあった喫茶山小屋のノートに感動を書きつづった覚えがあります。その喫茶山小屋もなくなって久しいですが。

やがてワングルは32期・33期合同執行部から33期単独執行部の時代へ。夏合宿はヒグマが跳梁する十勝・大雪を縦走。雨とぬかるみに苦しめられ、餓えのあまり非常食に手をつけたのも、今となっては良い思い出……かなあ。

そしてわれわれ34期が執行部を引き継ぐ時が。やはり白眉は、南アルプス南部を縦走した夏合宿でしょうか。子細に見れば色々な生き物がいるのですが、見た目草木一本とてなく、紫色がかった岩肌がむき出しになった峰々。その荒涼とした有様はわたしの目に、たとえようもなく美しく映りました。

ワングル時代を振り返れば、なんと短かったことかと嘆息させられます。学生時代お世話になった飲み屋さんの「奴」も「岡沢ポウル」も今はなく、世の移ろいを感じさせます。

しかし南アルプス南部を踏破して、「まだ行けるぞ！」と意気軒昂だった日々の記憶は、今も胸に残っております。



32、33、34期 集合写真

入学：1991年（平成3）4月 卒業：1995年（平成7）3月

主将 福島龍三郎（教育）
部員 大隅 邦臣（経営） 越智久美子（教育） 曾根 康博（経済） 富澤 理子（教育）
土方 康裕（工） 山中 晶貴（教育） 吉田 啓史（教育） 渡辺 浩志（工）

35期の当初メンバーは上記の9名でした。1学年上のメンバーが3名いることもあり（越智・富澤・渡辺）1期上の34期とは比較的親密・一体的に活動していたと思います。熱い心を持った33期執行部の方々ともども、ご指導を受けながら、山に対する知識や想いを身につけることが出来たと思います。

思い出深いのは1年の北海道夏合宿です。天候にはあまり恵まれなかったものの、北海道の雄大な自然に圧倒され、2年後にリベンジの合宿をすることとなります。その際は、一転して好天が続き、その素晴らしさを再確認しました。しかし、苦労が多いほど記憶に残るのか、水びたしの天場やぬかるみの中のルート・時折現れる晴れ間から覗く眺望・遠くに確認した野生熊など一年時の体験は今も忘れることが出来ません。

また、分散して開催した春合宿でも2年連続で屋久島・九州に挑戦しています。こちらも雨にたたられることが多かったですが、本州の山とはまた違う自然の奥深さを感じることが出来ました。

34期執行部に率いられた2年時の夏合宿は南ア南部を縦走しました。個性的な執行部の方々と共に歩いた南アは、その深き山容とともに山の楽しさを再認識させられるものとなりました。

途中で退部した者（山中）もあり、執行部メンバーは最終的に5名となりました。この5名は学部も違えば性格もそれぞれ違い、それゆえに少人数ながらもお互いに補い合いながらなんとか執行部を務め上げることができたと思います。福島（教育）は大雑把な面があるものの責任感の強いリーダータイプ。大隅（経営）はマイペースに自分の好きな山をとことん楽しむタイプ。曾根（経済）は比較的淡々と物事をこなすタイプ。土方（工）は段取りを取り仕切る実務家タイプ。吉田（教育）は文章・イラスト類はお手のものの芸術家タイプ。残念ながら大隅は亡くなりましたが、少ない人数で密な時間を過ごしたため、今でも会えば年月の隔たりもなく気軽に話し合える仲間です。



入学：1992年（平成4）4月 卒業：1996年（平成8）3月

主将 渡邊 隆史（工）
 部員 大池 智之（工） 岡村 希望（工） 辻 昌宏（工） 富倉 愛（済） はが 巖（工）
 原田 修平（教） Penelope Ann Pryor（済）

私達がいた頃の年間スケジュールは次のようなものだった。新錬1、2次、6月PW、夏トレ、夏合宿、夏小屋合宿、夏PW、秋PW、L養1、2次、春小屋合宿、雪上ツアー、春合宿。いつ頃からこのスケジュールが出来上がったのかわからないが、私達がいた4年間はともかくこれを踏襲する形で1年を過ごした。

山行とメンバーが決まると隊ごとの活動が始まる。昼休みに週3回くらい行うトレーニングでは、最後にリーダー、サブリーダーがおごってくれるジュースが楽しみだった。ミーティングではコースタイムやコース状況、医療、気象、遭難対策の知識をせっせと詰め込む。そしてやばいところが当たらないようにと願いながら審査会に臨んだ。山に登る前に燃え尽きてしまいそうだ。オーストラリアからの留学生ペニーはなおさら大変だったはずだ。改めてすごかったなあと思う。

山に入ってから衝撃は何と言ってもコッヘル掃除である。これもいつから行われていたのかわからないので、OBにも知らない人がいるかもしれない。ぜひ文章に残しておこう。食後のコッヘルなどにこびりついた残飯やコゲをブキでこそぎ落とし、集める。米の場合、炊き方によっては糊のようになっていたり、炭のようになっていたりするが、ともかくかき集め、そして...食べる。これだけではきれいにならない。ここにお茶を投入し、さらにブキで汚れをかきとり、溶かし込む。このためYVWのテントからは食後、シャカシャカという金属的な音が聞こえ、一般登山者からは不思議に思われていたろう。そして汚れが溶け込み、濁った元お茶を...飲む。慣れないうちはどうしても味わってしまうが、そのうち味覚を殺すことができるようになる。これを何度か繰り返し、お茶が濁らなくなると終わりが近い。最後に小さくちぎったロールで拭き上げてリーダーチェックにまわす。「ここにまだコゲが残っている」なんて細かい指摘をするリーダーがいるのもまた一興。私の父が田部井淳子さんの講演会でこの話を紹介したところ、田部井さんも「そこまでするとは」と驚いていたそうだ。慣れてしまえば、何てことないのですけどね。

本題の36期の話。33期河上さん、35期吉田さんの影響で島がはやっていた。屋久島、小笠原、利尻、対馬。この頃はまだ縄文杉に触れることもでき、屋久島は本当に素朴だった。知床に行った人もいた。東北もちょっとブームになっていて、鳥海、朝日、飯豊、平ヶ岳といったPWが連発。それからペニーが連れて行ってくれたオーストラリアPW。先輩から「アルプスにも連れてってやれよ」とたしなめられたりもした。山行を計画する奴がマイナー志向で、自分の計画にのめりこみ、溺れていく傾向があったかもしれない。付き合わされた後輩は気の毒だっただろうか。

大体みんなちょっと変わっていた。大池は装備分けのために天気図用紙1枚の重さまで量っていたし、岡村はいつもよれよれのズボンをはいて股をかいていた。辻はバイトでいくら稼ぐかを自慢の種にしていたし、富倉は女の癖にシュラフの中でズボンを脱いで寝ていた。はがは松原商店街でいかに安く食糧を買い出すかに情熱を燃やしていたし、原田は実習だ第九だと休んでばかりいた。ペニーは大酒飲みで、なぜか妊婦用のタイツをはいてトレーニングしていた。まともなのは私くらいだ。ぶつぶつ。でもみんな山に入ればたくましく、頼りがいのある仲間だった。50周年記念式典では久しぶりに集まれるかと期待している。



入学：1993年（平成5）4月

卒業：1997年（平成9）3月

主将 佐々健太郎（工）
 副将 堀越 壮平（工） 柳田 史昭（工）
 部員 小野 裕（工） 富士田誠之（工） 伊藤 栄二（経）

1. 37期紹介

37期は1993年の春と秋にワンゲルに入り、1994年12月から1995年12月まで執行部を執った。37期は1年生の終わりには9人であったが、その後、石附、柴田、榎原、結城の4人が退部し、執行部を引き継ぐ時点では5人になっていた。部員数を考えるとリーダー、サブリーダーが6人は必要であったので、38期で我々と同学年の伊藤（栄）を加えて1年間、執行部を執った（現在、伊藤（栄）は37期扱い）。

時代背景：我々が執行部を執ったのは阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件のあった年である。復興まなならぬ神戸を徒歩で通り抜け春合宿に向かった思い出がある。

2. 現役当時の活動の様子

山行：当時の活動の様子を示すには、登った山を記すのが一番わかりやすいと思う。以下、執行部を執っている間に行われた山行を記載する。なお、沢登り、岩登り、雪山での活動は禁止されていた。

- ・冬小屋合宿：苗名小屋（1月）・春小屋合宿及び雪上ツアー：苗名小屋（2月）
- ・春合宿：四国（青少年旅行村 - 三嶺 - 剣山 - 剣橋バス停・下津池 - 笹ヶ峰 - 瓶ヶ森 - 土小屋 - 関門（石鎚山の予定が途中エスケープ））、屋久島（白谷雲水峡 - 宮之浦岳 - 尾立峠）、屋久島（淀川登山口 - 宮之浦岳 - 楠川）
- ・新練1次合宿：丹沢（大倉 - 二俣 - 鍋割山 - 塔ノ岳 - ヤビツ峠）
- ・新練2次合宿：鳳凰三山（夜叉神峠 - 薬師岳 - 観音岳 - 地藏岳 - 御座石鉱泉）
- ・6月PW：八ヶ岳（渋の湯 - 硫黄岳 - 赤岳 - 阿弥陀岳 - 美濃戸）
- ・赤羽1次合宿：丹沢（焼山登山口 - 蛭ヶ岳 - 檜洞丸 - 西丹沢自然教室）
- ・夏トレ合宿：大菩薩嶺（裂石 - 石丸峠 - 大菩薩嶺 - 丸川峠 - 裂石）
- ・夏小屋合宿：苗名小屋（小屋整備、笹ヶ峰での野球、仙人池での水泳）
- ・夏合宿：南アルプス（榎島 - 赤石岳 - 悪沢岳 - 塩見岳 - 塩川小屋）
- ・夏PW：南アルプス（広河原 - 北岳 - 間ノ岳 - 農鳥岳 - 奈良田）、北アルプス（中房温泉 - 燕 - 大天井 - 槍ヶ岳 - 南岳 - 新穂高温泉）、飯豊連峰（弥平四郎 - 三国岳 - 大日岳 - 飯豊山 - 杵差岳 - 大石）
- ・10月PW：巻機（土合 - 朝日岳 - 柄沢山 - 巻機山 - 清水）、妙高（笹ヶ峰 - 火打山 - 妙高山 - 笹ヶ峰）
- ・リーダー養成1次合宿：乾徳山
- ・関・池田1次合宿：乾徳山
- ・リーダー養成2次合宿：丹沢（焼山登山口 - 蛭ヶ岳 - 丹沢山 - 塔ノ岳 - 大倉）
- * その他、日帰り、1泊程度の軽い山行あり。

トレーニングなど

- ・昼休みを使って校舎外周マラソン、階段の上り下り、筋トレなど。夏合宿前はサッカーをやったり、その後ガラガラの50mプールで泳いだりした。懐かしい思い出である。
- ・山行前には審査会なるものがあって、医療知識、気象知識および山行コースを覚える必要があった。これに通らないと山に行けない！

3. 最後に

- ・苦しいことも多かった。しかし先輩、後輩に支えられながら、山とワンゲルから実に多くのことを学んだと37期の皆は実感していることと思う。

入学：1994年（平成6）4月

卒業：1998年（平成10）3月

主将 細谷 慎一（工） 副将 神谷 信貴（工） 堀 環（工）
部員 伊藤 剛司（工） 岡安 貴裕（工） 加納 伸哉（工）

YVW38期は、入部当初は10人ぐらいだった。執行部員になったのは、伊藤剛司、岡安、加納、神谷、堀、細谷の6名だった。執行部定数ぎりぎりだったような気がする。

38期が執行部だった平成8年は、アトランタ五輪女子マラソンで有森裕子さんが銅メダル、その年の流行語大賞は、「自分で自分をほめたい」だった。また当時、巨人軍の監督だった長嶋茂雄さんの「メークドラマ」は、“友垣”に加納君の字で書かれていた言葉だった。このようなことが、かなり昔のことのように思えるのは私だけでしょうか？

夏合宿は、北海道（十勝・旭岳）であった。十勝岳の噴煙を見ながらの登山は、大自然を実感し、印象的であった。最終日まで予備日を使用しなかったこともあり、終盤は相当疲労がたまっていた。最終下山に際して、黒岳からロープウェイで下山する案もあったが、リー会の結果、自分たちの足で下山した。ロープウェイがあるにもかかわらず、使用しないのは学生ぐらいだろうから、今となっては、良い思い出となった。

さて、振り返ってみると、38期が執行部だった頃は、ワングル少人数化への入り口に差し掛かっていたころであった。入部した頃の夏合宿は、7-8人のパーティーが4つほどあったと思う。日進月歩する登山用具、そして携帯電話の普及など、従来のワングルのやり方（審査会、トレーニング、計画書作成）などに束縛されない山登りが身近な趣味になりつつあったのであろうか？

ワンダーフォーゲル離れが進み、われわれが卒業する頃は、7-8人のパーティーが1つだったような気がする。

しかし、われわれがいた頃は、まだ賑やかなほうであった。7-8人のパーティーが3つぐらいできた。部室には、必ず誰かがいて、山溪を読んでいたり、先輩のレポートを写していたり、エリアマップを広げたりしていた。そういえば、堀君がコンビニバイトの夜勤明けでよく寝ていた。

それにしても、周りのクラブ活動の爆音の中、よく審査会をやっていたなと思う。一方、山は自然の音のみ、その変化がまたいい。また、いろんなことに気がつく岡安君だった。昔のワングルの定額貯金の残金に気がつき、失効してしまう数百万円を保護していただき感謝だった。

最後に、現在の38期について。追い出しコンパから早くも、10年が過ぎようとしている。最近は、誰かが結婚するたびに会う程度であるが、それぞれ、仕事に家庭に充実した日々を過ごしていることと思う。いつか機会を作り、みんなでまた山に登りたいと思うのはどの世代も同じだろう。私もそう思う。学生時代にワンダーフォーゲルという活動を通して、かけがえのない経験と感動、そして時間を共有する仲間ができたことに感謝している。



入学：1995年（平成7）4月

卒業：1999年（平成11）3月

主将 後藤 誠史（工） 副将 四方 領（工）
部員 赤羽 剛史（教） 池田 征史（教） 山崎 美穂（教） 竹内めぐみ（教）
水野 秀俊（教） 関 大輔（教）

この度はYVW50周年おめでとうございます。我々の代から既に10年以上も経過していると思うと、時の流れの早さを痛感せざるを得ません。

39期は1995年に入部しました。当時はまだ部員が比較的多く、山行では3~4隊の複数隊を編成しておりました。39期が執行部を引き継いだのは1996年末でした。年が明けて春合宿の計画を立てる頃に39期と40期で活動方針に意見の相違があり、しばらく活動内容についての議論がなされました。結局意見の歩みよりはできず、残念ながら40期の大量退部という結果となってしまいました。39期も一部が抜け、最終的に残ったのは5人でした。この5人に40期 覚田（2年入部の40期）を加え、名目上39・40期合同執行部のような体制をとり、新年度を迎えました。97年度は41期3人を迎え、小規模な団体とはなりましたが、活動は継続して行うことができました。

合宿は春の鎌倉アルプスハイキングに始まり、表丹沢、初夏の雲取、そして夏は北アルプスでした。当初は笠ヶ岳から槍ヶ岳までの縦走コースを計画していましたが、メンバーの日ごろの行いが悪かったのか、悪天の中での合宿となってしまいました。初日から川の増水のため入山できず停滞。翌日、入山はしたものの、途中の沢が増水で移動が難儀でした。それでも稀に晴れ間も見ることができて、まずまずの日もありました。ところが、不運は続いて台風の来襲があり、残念ながら槍ヶ岳に踏み跡を残すことなくエスケープせざるを得なくなり、せっかくの夏合宿、しかも39期にとっては最後の夏合宿が、北アルプスでも比較的マイナーな(?)笠ヶ岳のみという少々さびしい結果となってしまいました。また、秋はリベンジを狙うかのように金峰・瑞牆、高妻・戸隠、妙高等々精力的に活動を行いました、なぜか毎度毎度ピークではガスの中でした。

結局一年を通してピークで晴れたことはほとんどなかったかもしれません。

また、この年は前年実施できなかった雪上ツアーも計画していたのですが、当時参加ができ、リーダーをできるメンバー（即ち経験者）が後藤しかいませんでした。ところが直前で後藤は病欠、さらにメンバー1名がけがで欠席という事態となり、中止となってしまいました。実はこれ以降雪上ツアーは実施されていません。あの雪上ツアーはなかなか貴重な体験ですので、いつか復活させたいと思っておりましたが、実現できないまま何年も経ってしまいました。

総部員の減少により、複数隊の編成ができなくなったことは残念でしたが、機動力は実により高くなりました。山中はもちろんのこと、下山後に行った先々での観光なども含めて、言ってみれば「行き当たりばったり」ではありましたが、非常に楽しいものでした（もちろん山中は計画書通りの行動でしたが）。

40期の大量退部は、39期にとっても大変ショックでした。そしてこの後に立てた活動方針は初心に戻り「山を楽しむ」でした。39期がいろいろリーダーシップを発揮したとはとても思えませんが、今のYVWにもつながっていていてくれるということは大変うれしく思います。

我々39期もいつの間にか子育ての世代、仕事も中堅となり、皆公私共に忙しい日々を送っております。なかなか会えない面子にも今回のYVW50周年を機に会えることを期待しております。

入学：1996年（平成8）4月 卒業：2000年（平成12）3月

覚田 陽一（工） 中村 悦子（教） 柚洞 綾子（教）

YVW40期は、順当に考えれば1996年入学の部員で構成されるはずですが、自分は同じ電子情報工学科だった後藤（39）の紹介で大学2年から入部したので40期扱いとなっています。入部当初の1996年春～夏合宿くらいまでは、ワンゲル活動の少人数化が進んでいるとは思えないくらい次々に入部者が相次ぎました。森嶋、徳本、柚洞、鈴木、甲斐、野口、坂本……。しかし学祭が過ぎた辺りから、部の活動方針を巡る意見相違（ワンダーフォーゲル部の活動拠点をこれまで通り山に限定するのか、海などにも活動フィールドを広げるのか）が顕著になり、40期のほとんどの部員が去ってしまいました。

一時期は部が消滅するのではないかと思えるほどの状況でしたが、1997年4月には41期として石川・笠原・新井など頼もしいメンバーが入部してきたおかげで、部の活動も息を吹き返し、1隊のみの山行が中心となりましたが活動が続きました。このため40期の活動は、39期主将の後藤が中心となり41期とともに行われました。

記憶に残る山行としては、1996年の夏合宿（北海道）、1997年の夏合宿（北アルプス）、1998年の春合宿（屋久島）があります。長期合宿では天候に恵まれた記憶がないですが、そんな時はテントの中ではトランプゲームをしてすごしました。（ドボンが流行っていて、延々とやっていた覚えがあります。戸隠の山行では騒ぎすぎて隣のテントから怒られたこともありました）

あとYVW活動における苗名小屋の存在も大切で、初めて小屋に行った時の暗がりの中に建つ苗名小屋に入っていき時の心細さなど、今でも記憶に残っています。メンツで日本酒「農林一號」を飲んで記憶がなくなったこともあります。今では楽しい思い出として残っています。

自分にとって、YVW抜きの大学生活は考えられません。「何故、きつい思いをして山に登っているんだろう？」と急坂などを登っている時など、疑問に思った事もありました。しかし自分で主体的に登らなければ得られないものがあると思います。もっと活動に打ち込んでおけば良かったと後悔することもあります。これもYVWに居たから学べた事です。

今はみんな社会人となって、子供もでき仕事も忙しそうです。自分も仕事の合間をみて、YVW50周年記念行事の準備などに参加して部に恩返しができると思っています。今後、入部する部員にとって50年間の活動・山行記録は良いデータベースとなると思います。過去にとらわれず、自分たちの活動の参考として利用すれば、いろいろな面で参考になると思います。



屋久島にて 右から後藤（39）石川（41）笠原（41）新井（41）覚田（40）

入学：1997年（平成9）4月 卒業：2001年（平成13）3月

主将 石川 真（工）
部員 新井 悠司（営） 笠原 正大（教） 平田明日美（工）

41期の部員数は、最大時で4名。部の運営では、合宿に苗名小屋整備にと、とにかく人数不足で随分と悩まされたものです。ですが、主将の石川を中心として「とにかく山に登り、存分に楽しむ」ことを執行部が望んでいましたから、苦労は多くとも愉快的な山行の日々を送ることができました。小屋の運営でも、OB会の支援を多く受けられたお陰でどうにか無事に務めを果たすことができ、様々な意味で人に恵まれた幸せな期だったと思っています。

当時の山行で今でもしばしば思い出すのは、北海道の大雪山・トムラウシ山の縦走を計画した夏合宿のことです。麓の天候が安定していたために油断して山中に入った私たちは、2日目の夜から猛烈な暴風雨に襲われました。ただ、私のいたテントは張った場所が良かったのか、暴風でもテント上部が派手に凹んで座っている人の頭を押してくる程度で済んでいました。私たちは「まあ、あっちのテント（テント2張りで行動していました）も似たようなもんだろう」とそのまま消灯して皆、安眠状態に。次の日の長距離行程への備えは万全と言えました。

事態が急展開したのは、その日の深夜2時頃だったでしょうか。突如、「開ける！」の声と共に、もう一方のテントの部員たちが私たちのテントへと雪崩れ込んできたのです。どうやら場所が悪かったのか、テントが風と雨に耐えきれず、ポールは折れるし床は池状態になるしで、どうしようもなくなって逃げ出してきたとのこと。皆、ほとんど一睡もせず中からテントが壊れないよう支えていたそうです。かくして、5人定員のテントに10人が入り込み、朝まで暴風雨に耐えるという構図が生じました。ずぶ濡れのまま、精根尽き果てて折り重なるように倒れ込んで「俺らは寝てないんだ！」と怒りをぶちまける崩壊テントのメンバーに対し、私たち安眠組は熟睡の効果を存分に発揮して寛容に接し、火をおこして寝ずの番を務めたのでした。当然、次の日にエスケープが決定されました。今となってはいい思い出です。

思い返せば、北アルプスの縦走でも豪雨で足止めを食らった挙げ句、山頂間近で雷雲に取り囲まれてハイマツの中で避雷姿勢をとったりしたこともありましたが（その後ビパークとなって次の日にエスケープ決定）。これも今となってはいい思い出なのですが、それにしても天候にはつくづく恵まれていません。・・・誰か雨男でもいたのでしょうか。

そんなこんなで、決して平穏な合宿ばかりしていた訳でもないのですが、とにかく密度の濃い毎日でした。たとえ部員数が少なくとも、他の期の先輩方と比べても遜色のない、充実した活動ができた期だったと自負しています。



塔ノ岳山頂にて



2年夏合宿 南アルプス

後左より 笠原 新井 石川
前左より 古谷 金丸 佐野

入学：1998年（平成10）4月 卒業：2002年（平成14）3月

主将 金丸 雄介（経済）
部員 古谷 未央（工・物工） 佐野 哲也（育人間・地環）

「どうも～、ご馳走、さまでした～」見知らぬ街の道端で、時には関内や新宿の繁華街の中で、半ば投げやりな感じで声を合わせる。先輩からタダ飯を食わせてもらった時の儀式だ。

これには振りが付いていて、まず跪いて両手をピンとのぼし耳につけ、はじめの2フレーズでアラーの神に祈るように右、左とやる。次はちょっとリズム感が必要とされるのだが、「様！」に合わせて先輩を正面に平伏し、「でした！」で万歳をする。万歳が先で平伏するのが後だったかも知れないし、上半身を脱ぐ必要もあったかもしれない。

僕たちが居た頃のワングルにはこんな儀式があった。橋から飛び降りるといったどっかの県警みたいな荒業ではないものの、いまだきの学生や女子には受けが悪いだろう。

しかも、こういった儀式の類はやらされる直前まで秘密裏にされていることが多いからたちが悪い。僕たちがこの儀式の存在を知らされたのも、初めての夏合宿後に行った勝沼ぶどう郷のレストランでたらふくワインを飲みステーキを食った後だった。

ただ、変なものでこういった下界に降りてからやる儀式（集結なども含む）が1つ1つの山行を思い出するためのメルクマールとなっているのは事実で、今も続いているといいナと思う。

たしか3人の中ではじめに部室を訪問したのは自分（佐野）で、石川さん率いる“ぶっこうズ”の面々に面接を受けたような記憶がある。当時、雀聖・阿佐田哲也（＝色川武大）をモデルにした漫画がはやっていたこともあって麻雀の話題がでた。部室の隅には雀卓もあってあって女性部員が近づく雰囲気ではなかった。

現役中は大きな事故はなかったが、多くの災難に遭遇したし、結構テキトーな4人がそろったせいもあって山頂にたどりつけなかったこともある。

北海道の旭岳ではテントを風に吹き飛ばされ不安な夜を過ごしたし、利尻山麓の幕営地では浸水被害に遭った。

屋久島の淀川小屋から尾之間に至る道は石川さんがいなかったら死んでいたと思う。妙高山行の前に苗名小屋で休んで起きたら朝の10時位だったなんてときもあった。

新宿のふぐ料理屋の前で例の儀式で追い出されたわけだが、あれから同期の間で連絡を取り合ったことなんて全くない。皆アバウトなのだ。だから、この文章にだって旧人紹介（これも儀式の一つ）の例の禁じ手を使って「実物を参照してネ♥、みんな行方不明だけど●」ってな感じにしていまいたかったのだけど、42期だけこうだとバツが悪いというか、数字的に縁起が悪いので勝手に書いてしまいました。金丸、古谷、すべっていたらごめんなさい。あと連絡ください。

横浜国大ワンダーフォーゲル部創部50周年を祝って乾杯ませう!!



後左より 古谷 佐野 笠原
前左より 石川 新井 金丸



左より 古谷 佐野 赤井 金丸 石川 笠原

入学：1999年（平成11）4月

卒業：2003年（平成15）3月

（43期のおもひでぼろぼろ）

43期には私赤井と、学年的には一つ下の梶ヶ谷（後の首相？）、小林（後の官房長官？）、小川壮平、釘宮穂高がいました。夏合宿は、北海道に行ったのですが、自衛隊が降りてくるほどの悪天候を登りきったという、何というかも楽しくて仕方ない山行でした。

さて、最近の私の近況ですが、担当教授との人間関係がなかなかうまくいかず、いつも喧嘩ばかりしています。研究室で先生に面と向かって文句を言うのは私だけであり、それ以外の学生に関しては、41期のI氏（当時横須賀在住）とK氏（当時川崎在住）の関係を想像していただければ、非常に判りやすいかと思います。確かに入部当時は、I氏の体的劇的接触を耐え抜くK氏は、かなり強者で影の支配者なのではと考えたときありましたが、あれは単に恐怖した人は、笑顔で対応するしかないというラオウ伝説の一節にも刻まれている通りの、悲しいほどの弱い人間のサガなのだと思ったのが、入部1週間程したときでした。

さてさて、我々の代はとともOB・OGにかわいがられた時期でもありました。私個人としては、笹倉氏には小屋などで大変かわいがってもらいました。再三、パラグライダーに誘ってもらっているのに、なかなかお応えできなかったのは大学院のせいにしてという言い訳にも呆れることなく誘っていただけたことに、まじで感謝しています。

さて、ここで私がなぜ大阪に来たかを語らねばなりません。大阪に来たときに、偶然ではありますが、横国大出身の先生が経済学研究科におられまして、この先生と話して「あぁ自分もこんなところで頑張りたいなぁ」と思った次第です。なぜこのような話をしましたかということ、この感触が私が入部したときの感触に非常に似ていたからです。

当時私は大学1年で、生協のバイトで「いらっしゃいませ。ありがとうございます」という以外は人との会話がないうち非常に寂しい日々を送っていました。2年になり高校時代やっていた山に再挑戦しようとして部室を訪れたとき、そこにいらっしゃったのが今となっては神様のような後藤氏(39期)です。後藤氏は非常に勧誘とは程遠い感じのおしゃべりで当時入部を迷っていた私の心をがっしりわしづかみにしました。結果、私の入部になったというわけです。この他にも、塾のバイトで一緒だった、オムロンに就職された岡安氏には大変お世話になりました。

塾バイトの帰りに、いつも談笑しながら帰ったのが楽しくて仕方なかったです。

と、当時たくさんの先輩方に、かわいがられながら育ってきた43期にも後輩ができました。私も研究室では最年長となりつつありまして、現在たくさんの後輩に囲まれております。先日も先生と喧嘩した際に「あんたは体育会系か!？」と言われたので「中学からずっとそうですよ!」と答えてやりました。どうも社会科学系では体育会系の先輩から後輩への命令形式は好まれないようです。

さて、後輩としては、当時政界を席捲していた赤井派に志賀、屈強なる首相派にロッキンロールな横須賀あたりに在住の野島太郎と、佐野派にはモー娘のきもい子担当の横須賀在住の杉浦康之が入りました。この頃をワングル部三国志時代と呼んだとか呼ばなかったとか、まあいろいろありますが、一番部活が充実していた時期でもあります。そういやあI氏は無事大学院に合格されまして、後藤さんも就職が決まって、本当にいい時期だったなぁと思います。

さて、私が怪我のためになかなか全員で山行ができなかったのですが、一番の思い出といえば、丹沢で遭難しかけたのも楽しかったし、利尻も楽しかったし、日光も楽しかったし、なんつーか楽しかったことがいっぱいありすぎんだけど記憶が曖昧で。でも、一つだけ言うならば、ワングルを出るときに後輩からもらった3千円の造花はワングル規則に則り、いまだに部屋に飾ってあります。それが何よりの思い出でして、大学から今まで唯一保持している物です。あれ綺麗にまとめすぎですか？もしこの文章に何か不服がございましたら、現役の部員達を叱咤激励することで不満のはけ口にしてくださいませ。それでは、改めまして皆様今後よろしくお祈りいたします。

入学：2000年（平成12）4月 卒業：2004年（平成16）3月

主将 志賀 圭（経済）

部員 杉浦 康之（工・物質工学科） 野島 太郎（工・物質工学科）

現役時代の活動

- 1年の歓迎Wは・・・入部時期が私は遅かったので他の2人とは別でした。
先輩方に丹沢（ヤビツから塔ノ岳だったと思いますが・・・）に連れて行ってもらいました。
- 1～4年での合宿場所は・・・
 - 1年目 夏：北アルプス 春：剣山、三嶺（四国）
 - 2年目 夏：大雪山 春：屋久島
 - 3年目 夏：南アルプス

私は大雪山が一番印象に残っています。またいつか44期のメンバーと行きたいですね。彼らに会え、いっしょに山に行けたことがワンゲルでの最大の収穫です。



2001年夏 大雪山の三川台付近にて
左上：杉浦 左下：野島 右下：志賀 右上の赤シャツは43期の梶ヶ谷さん

入学：2002年（平成14）4月 卒業：2006年（平成18）3月

主将 塩野 貴之（教人）

部員 佐久間大策（工） 肥塚 愛（経済） Karagits Andiras（経済）

46期は、全員年齢が違いましたが個性的なメンバーが集まりました。しかし45期がない上に、山に関しては全員ほとんど素人にも関わらず、自己主張の強い面々だったので44期には多大な迷惑をかけました。

1年生最初の幕営山行が残雪の火打山で、ジョギングシューズや軽登山靴で来た46期には厳しい山でしたが、日本にこのような天上の楽園があることに感動を覚えました。夏合宿は南アルプス縦走で林道を含めて110Kmに及ぶ長い道のり。44期の先輩に励まされながら、様々な強烈な思い出をつくることができました。この年の10月に7年ぶりとなる女性部員、肥塚が入部し、大学祭では3人で24時間営業の模擬店のカレー屋を守りぬいたのも良い思い出です。

12月には新執行部を発足させ、新入生を受け入れる前に積極的に山へ行き、経験を積みました。大雪の笹子大沢山、46期の2名が人生初スキーでコースアウトを繰り返し、苗名小屋入りに苦労したこと、カラスに食料を奪われ空腹に耐えた坊ガツル、夜を騒ぎ明かした湯ノ沢峠避難小屋とこの時期の愉快的思い出は尽きません。

2年生の5月、新入生を連れての初の幕営山行だった黒姫山で、痛恨の滑落事故を起こし、肥塚が靭帯損傷の大怪我を負い、執行部の体制が揺れました。反省会を重ね、何としても夏合宿までに新入生を養成することに決め、すぐさま活動を再開しました。そして夏合宿は北アルプスの薬師岳から槍ヶ岳まで、台風の直撃を受けながらも予定のコースを歩くことができました。しかし、下山後の打ち上げで46期の2名が急性アルコール中毒で倒れ、うち1名は救急車で運ばれ、46期で何事もなくワンダリングを終えるのは無理なのか、と思ったものです。

46期の特徴として、山で美味しいものを食べるというものがあります。山頂で小麦粉を練ってすいとんを作ったり、本格的なステーキやフレンチトースト、すき焼きを食べたりと、他の登山者から奇異な目で見られたものです。またボッカでは山頂でスイカを手刀で割るというお約束の儀式もありました。

2年目の春合宿は屋久島。鈍行列車を乗り継いで3泊かけて屋久島まで行き、残雪と大雨に苦しめられながらも登頂を果たしました。執行部2年目の3年生時、肥塚はドイツ留学、佐久間は諸事情あって活動できず、アンディは4年生になり、活動できるのは主将一人となって活動が危機に陥りました。先輩後輩との感情的対立もあって一時的にワンゲル活動を休止したものの、部則や審査会事項を改訂し、47期に執行部の仕事を補佐してもらうことで活動を再開。夏に3000m峰全てを登って日本横断するという目標を立て、七面山、鳳凰三山、谷川岳、女峰山と後輩を連れて歩き、鍛えあげました。そして40日間かけて日本横断を達成。先輩後輩に多大な迷惑をかけたものの、もうワンゲルでやりたいことは全てやったという満足感がありました。

3年生時に46期が集まって山に行くことが一度もできなかったのが、卒業を控えた晩秋に、アンディを除いた3人で、南アルプス深南部の黒法師三山を歩き卒業ワンダリングとしました。46期は、多くの事件が起こったこともあって、思い出は無数にあります。YVV100周年のときに集まって、楽しくお酒を飲んで思い出話をして笑いたいものです。



入学：2003年（平成15）4月

卒業：2007年（平成19）3月

主将 井上 朋香（教人）

部員 小原 博一（教人）

47期は1年生の時には部員が3名いましたが、1人が退部し、以後2人で活動してきました。しかし小原くんは2年生以後、ワンダリングにほとんど参加できず、3年生の時は48期の協力を得て活動を行いました。

入学後初めての山行で、先輩が小麦粉をねってすいとんを作り始めたのには、47期になりそうだった人たち全員が驚かされました。その後、肥塚先輩が新練合宿の黒姫山で滑落して怪我をしたり、小原くんが自転車から飛び降りて全治一ヶ月の大怪我を負ったりなど、入学当初は不幸が続きました。それでも7月には、十二ヶ岳において47期全員がフルーツ山行を行ない、スイカ2個とパイナップル1個を、47期の3人で持ち、全て食べ尽くしたのは良い思い出となっています。

2年生になってからは、46期を補佐して部の運営を行ないました。しかしなぜか、活動している部員が一人となってしまいました。

そして3年生となりましたが、49期が6人も入部したため、新入部員の養成には苦勞しました。48期はもちろん、当時すでにOBだった44期の志賀、野島両先輩や、46期の方々にリーダーやサブリーダーを頼み、新人練成を行ないました。夏休みまでの約三ヶ月で、7回も新人を率いて山へ登り、山の生活技術を教えるのは本当に大変でした。残雪に手間取り、高速バスに乗り遅れた6月の燧ヶ岳、交通費を節約するため大山から塔ノ岳まで歩いた灼熱の歩荷訓練等々、本当に笑いが止まりませんでした。

そして夏合宿は8人も参加して、大雪山旭岳からトムラウシまで縦走しました。途中でメンバーがお漏らししたり、ばてたり、足を故障したりして、その面倒を見たり、大量の荷物を持ったりと苦勞した。心労で食事が取れなくなるほどでした。

秋には、夏合宿に参加できなかった部員を連れて、甲武信ヶ岳から金峰山、瑞牆山まで縦走して、YVVでの実質的な活動を終わりました。

このような苦勞を重ねながらもようやくったのう。えらいえらい。



2003年夏合宿 槍ヶ岳の前で 右から井上 小原 青井

入学：2004年（平成16）4月

卒業予定：2008年（平成20）3月

主将 ♂安田 遥（教育人間科学部マルチメディア文化課程）

副主将 ♀島田 静香（教育人間科学部国際共生社会課程）

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部も50周年という長い歴史があり、その中の一つとして、数えてもらえることは大変うれしいことではないかとおもっております。48期はこの原稿を書いている時点で、現役唯一の女性部員がいる代となってしまっています。近年の傾向として、経験者、それも男性が多いという事態になってきており、私としましても切に女性の入部を期待するところではあります。また、女性と言えど、私よりも体力があるのではないかと思うぐらい、忍耐力があり、大変助けられた面も多いのではないかと考えています。

私たちが執行学年を努めた、2006年度は、他のサークルや部活との掛け持ちをしているものも多く、また主将の手腕の無さも露呈し、振り返ってみると、あまり山に行っていないのではないかという結果となってしまっています。各人の都合を考慮して、山行計画を立てるとなかなかうまくいかないというのが現状でした。それでも、先輩の助けなどもあり3名の新入部員を迎えることもできました。新人歓迎登山では奥多摩の大岳山に行きましたが、ここでは新入生の体力のすごさに驚かされるばかりでした。その後も順調に、新人錬成、歩荷訓練などをし、歩荷訓練では、持って行ったスイカに登山中にザック内で亀裂が入り、大変なことになるという事件も起こりました。

年間を通してみると、いろいろと考えさせられる、転換期であったのではないかと思います。旧来からの習慣を重視し、ワンダーフォーゲル部を運営するのか、また、新しい風を吹かせて運営をするのか。どちらかと言えば後者になりました。それは、一つにみんながわがままになった所以かもしれません。結果的にそれが良かったのか悪かったのかは分かりませんが・・・

現在は二人とも去年よりも時間に余裕ができ、今年は山に行くぞと燃えております。僕は大学最後の年となってしまいましたので、大学生のうちにかいけい山にいろいろ登りたいと考えております。安田は就職、島田は進学ということになり、ばらばらにはなりますが、また山の上で会えれば良いのではないかと考えています。



（左）島田 （右）安田 大菩薩嶺山頂にて

入学：2005年（平成17）4月 卒業予定：2009年（平成21）3月

主将 小林 貴志（工）
 部員 西元浩太郎（経営） 岸本 雄介（教人） 白鳥 達也（経営） 佐竹 勉（特殊教育）
 村田 良太（工）

49期は同学年の部員が3名と2年次に入部した1名、4年時に入部した1名、特殊教育の1名の6名で年齢層の広い期です。また、同学年の3名の部員のうち、2人は高校山岳部出身ということもあり、経験者の割合は高いほうであったと思います。しかし、逆にそれが変な過信へとつながり、ワングルの方針に反発するなど、先輩方には大変迷惑をかけた期だと思えます。

1年の新歓期には箱根・奥多摩に行き、そこで個性豊かなワングルの先輩方と出会い、49期のワングルでの活動がスタートしました。しかし何かと忙しい、というよりは各時期にワングルの活動よりも優先すべき事を個々人が抱えていたため、5名全員で山に行くということが非常に困難でした。

初めての幕営山行は山梨の大菩薩嶺で、初めての山での朝日や山頂からの風景に魅了されました。その後、ワングル恒例のポッカ山行が諸事情により、奥多摩、甲斐駒ヶ岳、尾瀬の3回にわけて行われました。1年が30キロを背負うというこのポッカは奥多摩では暑さに、甲斐駒ヶ岳では降雨と山頂と登山口の標高差2200メートル、刃渡りと鎖場に、そして尾瀬では残雪にそれぞれ苦しめられ、よい意味でも悪い意味でも各人にとってポッカは思い出深いものとなりました。

1年の夏合宿では約2日かけて鈍行列車とバスに揺られて北海道の大雪山系に行き、合宿中天候にも恵まれ、北海道の雄大な自然を体感しました。また、この合宿ではオモラン事件やシャモジ事件、ゆず味うどん事件、歯磨き事件、エキノコックス疑惑などの珍事件が数多くおこり、非常に楽しいものとなりました。

学年があがって2年になると2名が大学を卒業し、残る4名も兼部や学業優先からか山行に参加することが少なくなってしまいました。2年時の合宿では、北アルプスの白馬三山では急遽3年の先輩が病気で来られないこととなり、昨年は大雪渓土砂崩落で死亡事故も起きているため、

1、2年だけでの山行に不安があり合宿決行が危ぶまれました。しかし、OGである肥塚先輩の参加もあり合宿は無事決行されました。

2007年現在、執行部はわれわれ49期となっていますが49期がほぼ活動していないということもあり、その実体は50期に移っています。これにはいろいろと意見もあり、49期としては情けないことではありますが良策だったのではないかと考えております。



左から岸本、安田（48期）小林、佐竹、西元、白鳥

入学：2006年（平18）4月 卒業予定：2010年（平成22）3月

部員（写真右から）高岩 玲生（工・物工・浪人） 関 友也（工・物工・現役）
御園 直樹（工・物工・浪人） 石倉 研（経済・シ・現役）

50期は全体として「どんより」とした素晴らしい期で、最近のワングルとしては珍しく横のつながりが強く、4人で行動することも多いです。部室の大掃除を3日間にわたって行い、またゲーム機や電子レンジを設置したりと「住み心地の良い部室」を作ることに専念しており、良くも悪くも部室への部員の常駐化を再開した期です。その副作用として勝手に部室を使っていた民研はいつの間にかいなくなり、また部がアットホームな雰囲気になった気がします・・・が部室を私物化しているとの指摘や、なれ合いは事故を招くのでアットホームなのも考え物だという危惧もあり、今後どのような方針でワングルを運営すればよいのか探っている状況にあります。

3年生があまり山に来ないため、2年にもかかわらず山でリーダーをすることもありますが、力不足を感じています。もっと山に関する知識を習得し、リーダーとして十分任を果たせるようになりたいです。

近況：とりあえず部全体の体力向上を図るため全体でのトレーニングを開始（再開）しました。

夏季休暇中に夏合宿と秋合宿の期間をそれぞれ1週間設けました。

一年生が6人も入りました。そして減る気配が見られません。なんでだ。

部員紹介

高岩：部室に住み着いている変な生き物。山には歩くために行っており、別に山じゃなくても歩けばどこにでも行きたい。サイクリングも趣味で1年の夏には自転車で横浜から岡山に野宿のみで帰省した。

御園：ワングラーにしては常識のある一般人。高岩に連れられてワングルに入り、高岩に連れられて山に行く。シンクロで有名な川越高校水泳部出身で体力はある。よく食べる。見かけによらずジブリとディズニーが好き。

石倉：ワングルの事務一般を取り仕切る人。でも変なことをよく言う、山に登る理由を聞いたら「自然の中に身をおき自分を見つめなおすことができる。美しい自然の中で感動を与えられ、一瞬一瞬のドラマを味わえるのが良い。」と答えてくれた。頭大丈夫か？

関：準部員。よくゲーム（稀に勉強）をしに部室に来る。山にもたまに来る。高岩と御園に翻弄される自称京都府民の奈良県民。



入学：2007年（平成19）4月 卒業予定：2011年（平成23）3月

部員 田沼 健司（工） 中野未樹人（工） 茂呂 将典（工） 吉原 宏貴（工）
渡邊 充史（工）

以下、友垣の新人紹介からの抜粋。

田沼・・・僕がワンゲルに入ろうと思ったのは、山に登ることが最終目的ではなくて、感動して泣くという行為そのものでした。受験期、あまりにつらくて、自身が本当に生きているか分からなくなる時が、しょっちゅうでした。だから、どうやったら自分の生きている証拠というかアイデンティティを確かめられるか、と考えていた時、ふと思ったのが「泣くこと」です。実際、初めて山に登った後、気付いたんですけど全然泣けないですね。ただ疲れていた記憶しかありません。でも星がすごくきれいだったので、もっと体力つけて心から山を楽しめるようになりたいです。みんなとても優しく、本当に部会の日とか楽しいです。

中野・・・獣医になりたかったのですが、落ちてしまい、たまたま引っかかっていた横国に理由もなく来てしまいました。三人兄弟の次男として大阪で生まれました。ちなみに育ちは横浜市の青葉台というところです。家での地位はおそらく最下位です。趣味は映画鑑賞です。（以下映画についての批評）

茂呂・・・高校では山岳部に入っていました。入部を決めた理由も覚えていません。山岳部って山に登ること以外、何もやることがないんですよ。部活は毎日ありましたが、適当にランニングしたり、歩荷したり。山には年8回くらい登りました。大学を横国に決めた理由は何となくです。いや、俺って、昔から将来の夢とか何になりたいとか特になんかありませんよ。つまらない人間ですね。しいて言えば、一人暮らしがしたかったから。自分は依存癖が強くて、実家にいるとどうしても親とかに甘えてしまうんですよ。朝、一人で起きられなかったりとか。それでこのままだと自分がダメ人間になってしまいそうで、一人暮らしをしようと思立ったわけです。しかしいざ一人暮らしを始めてみると金銭面で余計に親を頼る状況になってしまっている現実。どうしようもないですね。何とかせねば。

吉原・・・自分は1989年（平成元年）3月9日生まれです。成人式は、法律上酒が飲めないという悲しい現状です。国大に入ったのはただたんに偏差値がちょうどよかったからです。趣味は「信長の野望」です。自分が織田家でやるのがお気に入りなのですが、武田家と本願寺家が本当にウザイです。（以下「信長の野望」について論述）

渡辺...志望大は3年の秋くらいまで東北大一本でした。しかし夏に受けた模試で撃沈してしまい、なんとなくここにしました。入試科目が苦手な数学と未体験の面接であり、本当にうつ病か老衰で死ぬかと思うくらいつらかったです。しかしなんとか受かって今に至ります。いやー横浜ってものすごく住みにくい都市ですねえ。こんなにup downが激しい街だとは思っていませんでした。横浜に住みたいと思って住む人の気が知れないです。あと水がまずいです。初めて飲んだ時、トイレの水を飲んでいるかと思いました。親も登山していた時期があってなんとなく山岳部に入りました。いやーいいですねえ、この自由な雰囲気。（中略）YWVもそんな（高校の山岳部のような）かなり自由な雰囲気があって楽しいです。

． 広がる活動の場

他大学との交流

合同ワンダリングに参加 して

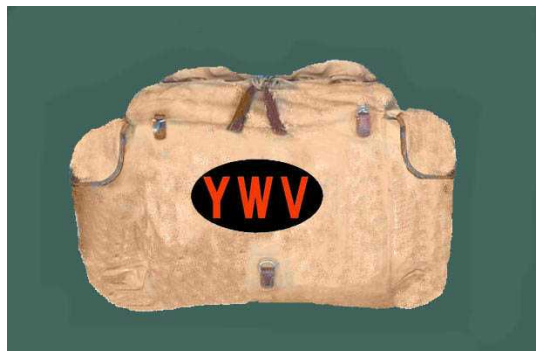
初の海外 返還前の沖縄 P W

回想の沖縄

第 2 次沖縄 P W

第 1 次台湾 P W 紀行

台湾 P W



他大学との交流

斎藤 伸一（4期）

YWV は、家族的で和やかで心地よい雰囲気でしたが、これが理想なのか、もっと違った形はないのか、昭和 35 年入部の時から素朴な疑問がありました。YWV を、もっと外の世界にオープンにしていきたい、また他大学のワンゲルを知りたいという気持ちで、昭和 36 年から昭和 38 年にかけて、積極的に他大学との交流を図りました。その例を、記憶の範囲で報告致します。

間違いがあれば、ご指摘ください。

1 東京教育大学（現筑波大学）との合ワン

昭和 36 年 11 月 於：奥多摩

比較的、似通ったワンゲルで、日原河畔で楽しくキャンプし、翌日鷹ノ巣山へ登りました。

2 山梨大学、信州大学、金沢大学との研修会

昭和 36 年 於：山梨大学

山梨大学の豊田主将が主催し、顧問の先生も参加され、ワンゲルはどうあるべきかを議論しましたが、詳細は覚えておりません。4 期ホームページから、斎藤伸一の頁を開いていただくと、私の司会している研修会の写真があります。

3 全日本学生 WV 連盟合ワン

少なくとも、諸角さん、所さん、斎藤伸一の 3 名は参加したと思います。

関西の大学生は面白い人が多く、いろいろ教えていただきました。

今でも覚えているのが、ごはんの歌の前振りです。

1 月、2 月、3 月 チョン

4 月、菜種の花盛り

お百姓さん、摘んでは籠に放り込んで

それを油屋へ持っていったら

その頃、はやりの唄うとうた

その唄、なんやと聞いたなら

それ、1 と 2 と 3 と 4 と

ごはんだ、ごはんだ、さあ食べよ コリヤコリヤ

4 全日本学生 WV 関東支部月例ミーティング

毎月東京でやっていたので、オブザーバーで 3 回参加しました。

たいした話はありませんでしたが、毎月開催している熱心さは感じ取りました。

5 神奈川県学生 WV 連合設立

近場で他大学との交流ができないかと考え、横浜市立大学、関東学院大学、神奈川大学に声をかけ、さらにフェリス大学もオブザーバーで参加したと思いますが、連合設立に漕ぎ着けました。ミーティングや合ワンをやったと思いますが、活動の詳細は、記憶していません。現在、ネットに記事が無いので、消滅しているかもしれません。

合同ワンダリングに参加して

諸角（所）絢子（5期）

1963年に参加した、初めての合ワンについて書くように云われました。なにしろ40年以上前のことで、記憶は定かではないのですが、思い出せる限りがんばってみます。

全日本学生 WV 連盟主催全日本合同 W

蓼科牧場 63.6.7~10

YWV 参加者 5名

おぼえているのはスズランの強い香りとレンゲツツジのオレンジ色ととにかく大勢の参加者（1000人位？）が蓼科第二牧場の付近に全国から集まったのですが、全体像は見え、写真によれば我が班は13名だったようで、何となく楽しくしゃべって、散歩して帰ってきたのでした。

結局連盟に入る、入らないについてはどうだったのか？

運営の当番校になったら大変だなあと思ったのは確か。あとで現地に行ってみたのですが、テントを張ったあたりはすっかり別荘地になっていました。



ワラビをつみながら散策 カッコウの声につつまれた

全日本学生 WV 連盟関東支部主催女子合同 W

霞ヶ浦浮島 63.6.21~26 YWV 参加者 4名

スカイライン VOL6.NO2 の須賀（中村）栄子氏の感想によると、女子だけで合Wを取り仕切った学校の実力に感心したとあります。他校の活動振りを知り自分たちの活動を考えるにもよい機会になった、とありますが以後どうなったでしょう。

神奈川県下大学 WV 連合同 W

西丹沢、地藏平 63.11.23~24

横浜国大、横浜市大、関東学院大、神奈川大 4校による神奈川県下大学合同WV連合の発足にともなう第1回合同Wが、未加入校のフェリス女子大、相模女子大の参加も得て行われました。女子大2校の参加で男子部員はニコニコだったように憶えています。松田の駅に帰ってくるとなにやら街中が騒がしいのです。

なんと日本~アメリカ同時衛星中継によるケネディ大統領の暗殺の報があったと知り、忘れられない合Wとなりました。



おいしい親子丼つくるから待ってて！

初の海外 返還前の沖縄PW

斎藤 伸一（4期）

詳細は、昭和38年4月-6月の横浜国立大学新聞に掲載されています。

期 日 昭和38年3月13日-3月30日（沖縄現地12日間）

メンバー CL：斎藤 伸一（3年） SL：高須 梓（2年）

隊員：金子 洋吾（2年） 須賀 栄子（2年） 佐々木祥子（2年） 喜多村秧子（2年） 諸角 壮弐（2年） 所 絢子（2年） 矢島 拓自（2年） 秋山 勉（1年） 菅谷 光雄（1年） （11名）

私がリーダーになっていますが、返還前の沖縄に関心の高かった高須さんが、具体的な計画を練り、私はそれに乗った形です。

返還前ということで、現地沖縄の人からの受入保証、横浜港検疫所へ行っての予防接種、また、安全対策としてのハブ血清など、現在、考えられないような準備が必要でした。飛行機ではなく、往復とも、鹿児島から24時間の船旅です。

対象は沖縄本島のみですが、南から反時計回りに、ほぼ一周を踏破しました。

各地で、琉球大学ワングル、神戸商大ワングル、学校の先生、青年団の皆さん、婦人会の皆さん、集まってくる子供たちとの交流がありました。

基地の街、嘉手納、普天間、コザ、辺野古の現実、行進する米兵との遭遇、北部国頭村の昔ながらのたたずまい、昔の沖縄文化をしのばせる守礼の門（その頃、首里城は復元されていませんでした）、パイン、砂糖キビ、蘇鉄、パイアヤ、アダン、ガジュマルなどの南方特有の植物、様々な出会いがありました。

海底の雲丹のトゲまで見える透明な海でのひと泳ぎは感激です。今でも、この透明度が保てているでしょうか。

一番の思い出は、その頃、日本南端の与論島を望める沖縄本島北端の辺土（へど）の皆さんとの交流です。集会所のキャンドルファイヤーで、私たちは、沖縄印象記を寸劇で披露、沖縄の皆さんは沖縄の踊りを手ほどきしてくれました。婦人会の皆さんが雨の九段坂を沖縄民謡風にアレンジした踊りは、胸に迫るものがありました。各地で感じた損得抜きの本土復帰への熱い思い、米からできた沖縄泡盛コーラ割りの味は今でも忘れられません。

回想の沖縄

高須 梓（5期）

沖縄ワンダリングの概要はリーダーの斎藤伸一氏が書かれており、詳細は昭和38年の横浜国大新聞に3回に分けて「沖縄を歩く」として記載しているので、ここではキーワードを基にその記憶をたどってみる。

「親善訪問」

手元に「沖縄ワンダリング趣意書」が残っている。そこにこの合宿目的が書かれている。

『私たちはワンダーフォーゲル運動の精神に基づき、また学生として規律ある団体行動をとり、常に研究的態度をもって沖縄の自然、文化に接し、現地の人々と積極的に交わることによって、相互理解を深め親睦を図ることを目的とします』

当時、沖縄は本土復帰前で通貨はドル、渡航証明書が必要であった。パスポート（内閣総理大臣 池田勇人署名）にも渡航目的が「親善訪問」と明記されている。

「3日と3時間」

今、羽田から那覇へは、空路2時間半、3時間もかからない。当時の我々は鈍行列車（ワングルは鈍行列車利用と決まっていた）で24時間かけて鹿児島まで行き、



いざ沖縄へ 鹿児島港にて

城山公園に幕営し一泊。連絡船（船底特等席）でさらに 24 時間。沖縄まで延べ 3 日間かけている。当時のパンフレットによれば、那覇～鹿児島、二等 8 ドル 10 セントとある。時間だけはたっぷりであった驚沢な時代であった。

「柔道場」

沖縄合宿の宿泊は原則テント。畳の上に寝たのは琉球大学の柔道場だけだった。他は主に小中学校の校庭。海辺にも幕営した。 キャンプサイトの安田の浜から見た日没はすばらしかった。

「アメリカ」

当時、「沖縄の中に基地があるのではなく、基地の中に沖縄がある」といわれていた。

照りつける南国の太陽の下、我々はワングルファッションに身をかため、キスリングを背負い、有事には滑走路にもなるという軍用道路を歩き、米軍住宅群のかたわらで休み、基地の街コザではその異景に驚き、山間部では米軍レンジャー部隊の演習にも遭遇した。

各地で物珍しいのか子供たちの歓迎を受け、そのころ現地で流行っていたのか、サイン責めに合ったりした。ある時、集まってきた子どもの一人から、我々の山靴ファッションを見てか、「おめーアメリカか?」と言われたのには強い衝撃を受けた。



米軍住宅地で休む

「てんさぐの花」

我々の最初の目的地は、本土の与論島が望めるという沖縄最北端の辺戸岬であった。

この地に達し、はるか日本の方向を眺めた時は、達成感と共に「沖縄は日本だ」とのナショナルリズムの高まりまで感じたものであった。

各地で沖縄の人々の熱い歓迎を受け、学生、子どもたち、青年団、婦人会の方々との交流があったが、辺戸での交歓会は強い印象を残した。

夏川りみの歌などで今ではポピュラーになった「てんさぐの花」を、沖縄の言葉で、その意味も含めて教えてもらったのは、今でも記憶の底に深く残っている。

この歌を聞くたびに当時の沖縄の人々の本土復帰への熱い思いがよみがえってくる。



子ども達との交流

しかるに、復帰後の沖縄はどうだったのか。今でも基地の中にあることに基本的には変わりはないし、昨今の集団自決をめぐる教科書問題など、問われているものは大きい。

「テープ舞う」

合宿を終え、帰路も船。那覇港を出港する「波の上丸」を見送る大勢の人々が桟橋につめかけ、テープが舞った。集団就職で本土に渡る人々や、見送る子どもたちの輝く瞳が浮かんでくる。

あのエメラルドグリーンの海は、隊員全員の心に、今も残っていると思う。



コザの街を歩く



辺戸岬に着く



海を望む舗装道路を行く

第2次沖縄PW

永井 紀子(6期)

メンバー：須賀 栄子(3年) 秋山 勉(2年) 清水宣次郎(2年) 菅谷 光雄(2年)
蓮尾 尚志(2年) 原 隆(2年) 古荘 敏子(2年) 山本 紀子(2年)
小木曾克彦(1年) 奥野 雅宏(1年) 下村 弘道(1年) 林 誠一(1年)

期 日：1964年(昭和39)3月4日~27日

初めての沖縄PWが実施された翌1964年(昭和39)3月に2回目の沖縄PWが計画されました。先発隊と後発隊(原、古荘、山本)に分かれての出発でした。

先発隊は前年度の本島に引き続き、先島の人々との交流をめざし沖縄本島に向かい、そこで船を乗り換え、宮古島へ渡りました。宮古島では石垣島行き船が出るまでの3時間ほどの間島内を歩き回りました。本土から来た私たちは皆歓迎され、大人も子供も向こうから話しかけてくれました。

石垣島では白砂の浜辺にテントを張り1泊しました。岩のりを探っていた小学生が貴重な食料を分けてくれました。女の子からは、我々の住所を書いて欲しいと言われ、なんとと言っても私たちは本土から来た憧れの人たちであったようです。その子から何年か後に、「今、埼玉の病院で働いています」との手紙が来ました。

次の日、船で西表島に渡り小学校を探しました。春休み中で小学生はいませんでした。仕事で出勤していた先生達が、本土からの突然の訪問者である私たちを大歓迎してくれました。沖縄の教科書は日本語なので、算数の問題では「が 円」という記述です。でも現実の生活はドル、セントでした。「ひよこは親鳥と離されてもいつかは親の所に戻りたいと願うように、私たちは困難でも頑張っているのです」と言っていた先生達の、本土復帰への熱い思いが心に残りました。

帰りにも石垣島に寄り後発隊と合流し、高校生と交流をしました。石垣島を離れるときは交流した高校生達が見送りに来て、涙を流して別れを惜んでくれました。

この沖縄PWの身元引受人は、5期の時田さんと鎌倉の蒼翠寮で一緒であった石川さん(沖縄石川市出身)のご家族にお願いしました。石川さんには手続きのために何度も那覇の役所に出向いていただき、大変お世話になりました。お礼にとお宅を訪問したのですが、大勢の部員が昼食までご

馳走になってしまいました。

後発で参加した3人が、合流前に出会った沖縄の新聞社の方が、作り始めたばかりの「平和の礎」や戦中に隠れていたガマに連れて行ってくれました。人骨やヘルメットが残っているじめじめした洞窟の中で、沖縄の人々の辛い過去に触れ衝撃を受けました。高校生との交流では、大学生の私たちより政治意識が高く、沖縄の現実と教育の力を知らされました。教職に就く身に、信念と使命感を感じたワンダリングでした。



第1次台湾PW紀行

1965年(昭和40)3月21日~4月22日

小木曾克彦(7期)

(A) 時代的背景

我々の活動した昭和30年代の後半は所得倍増計画の効果が出始め、昭和39年には新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された頃である。サークル活動の中でもワンダーフォーゲル活動が人気を博していて、中には上級生の新入部員に対する過激なシゴキ事件が新聞記事を賑わしたこともあった。そんな中であって、我がYWVはそのようなことは無く、僅かに高校時代からの経験豊富な山派と、そうではないが山だけにこだわらない里派が漠然といて、それぞれPWを企画して行動していたような気がする。当時、各大学のワンゲルが沖縄へ行くようになり、YWVも昭和38年頃から毎年出かけていた。海外旅行は、今のように一般的ではなく、まして学生身分では夢のまた夢の時代で、日本復帰前の沖縄といえども、パスポートと日本政府発行の身分証明書が必要であった。また、台湾と日本の間は吉田書簡問題で国交断絶状態にあり、日本から直接行くことができなかった。そこで我々は、何回かの沖縄ワンダリングを経験していたこともあって、一旦沖縄に渡り、琉球民政府の許可を貰って中華民國台湾へ入国したのであった。

(B) 行程

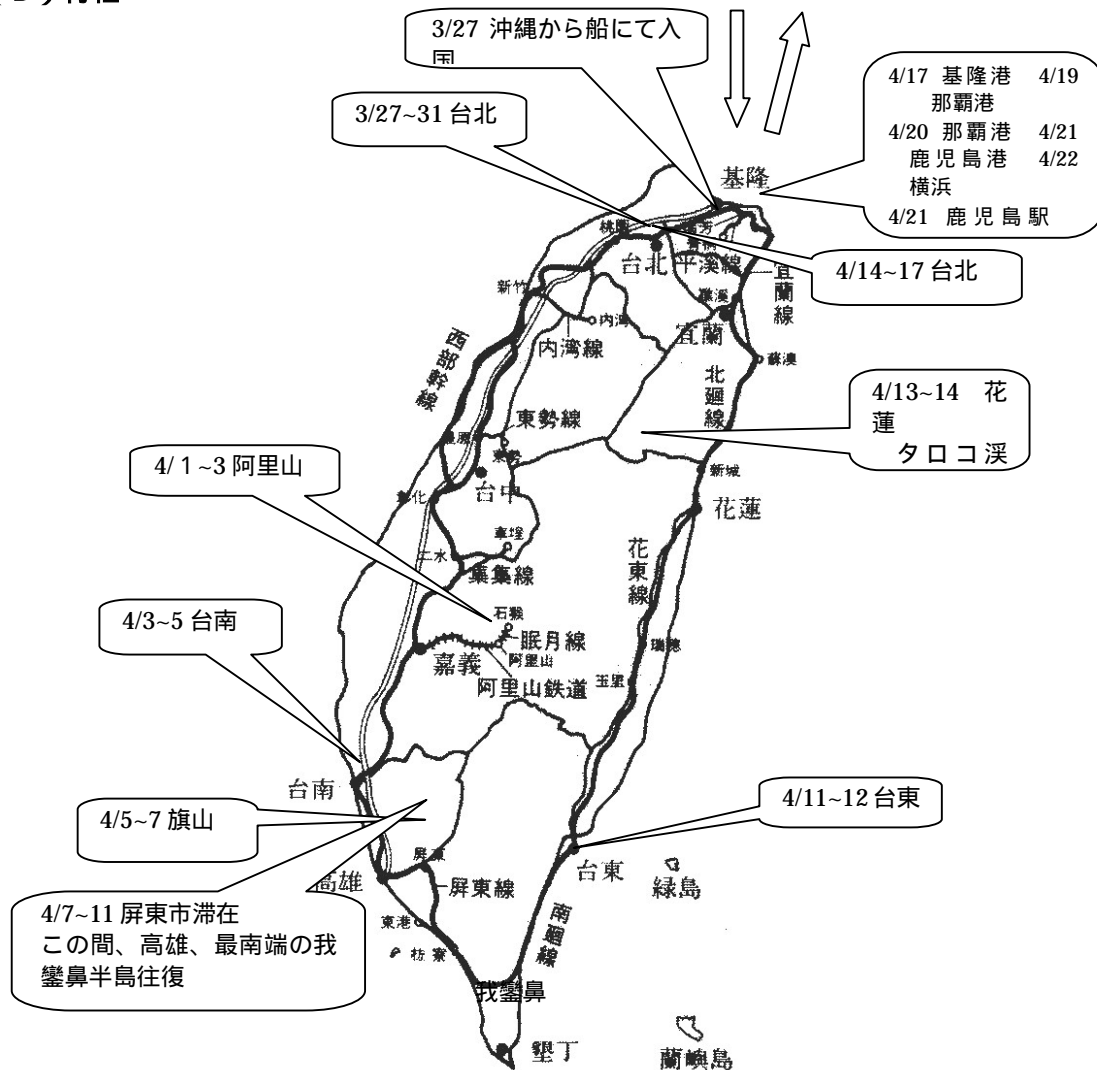


図 - 1 第1回台湾PW全行

(C) 参加者

リーダー：井上 義雄（7期） マネージャー：小木曾克彦（7期）
岡田 光豊（6期） 岡本 次郎（6期） 蓮尾 尚志（6期）
柳原 隆夫（6期） 岩科 健一（8期） の計7名



図-2 阿里山駅で修学旅行を引率されていた台湾省立屏東女子中学の李和庭先生と一緒に記念写真（1965.4.2撮影）
左から 柳原隆夫 井上義雄 小木曾克彦 李和庭先生 岩科健一 岡田光豊 蓮尾尚志 岡本次郎

(D) 出発前の準備

誰がこの企画を言い出したか定かではないが、沖縄PWに積極的であった菅谷さん（6期）かもしれない。6期が4年となることで、7期の井上義雄君がリーダー、小木曾がマネージャーとなった。まずは、沖縄へ渡るための日本政府総理府の身分証明書を2月に発行してもらい、それを持って、中華民国駐横浜領事館でビザを貰うために奔走した。台湾と国交断絶状態と言えども、入国には予め中華民国のビザが必要であった。そのために、沖縄での保証人には、琉球大ワングルOBで琉球銀行の照屋氏、また台湾での保証人には、当時応用化学科に留学していた方のご親族で台北在住のやはり銀行員の李東哲氏にお願いする事ができた。この留学生には台湾へ行ってから、屏東滞在に当たり、春休みの帰省中であった事もあって当地でお世話になった。

また、台湾の事情をお聞きする目的で、蓮尾氏がたまたま名前を知っていた台湾独立運動家であって、当時の蒋介石総統政権から日本へ亡命していた明治大学の王育徳先生に面会を申し込んだところ、ご快諾戴き、学士会館で直接様々な話をお聞きする事ができた。さすがの先生は東大ご出身で、流暢な日本語であり、別れ際に台湾独立運動に関するご自身の著書を全員に一冊ずつ下さった。



図-3 沖縄へ渡るための身分証明

(E) 横浜から沖縄へ

当時の新学期は4月20日頃から始まったと記憶しており、決して授業をサボって約1ヶ月あまりも旅行していた訳ではない。また、参加者の大半が大学最終学年の年で、今ならば就職活動が大切な時期で、とても考えられないであろう。

3月21日、東京駅発西鹿児島駅行きの夜行列車に乗り込み、出発だ。20時間以上の長旅であるにも拘らず、連結されているのは寝台車ではなく、対面ボックスシートの普通車である。

終着の西鹿児島駅近くの西本願寺境内に例年の如くテントを張り、那覇行き“ひめゆり丸”に翌日午後乗船。那覇に着くや、台湾へ入国するためには大学の在籍証明書が必要と分かり、一堂途方に暮れてしまった。大学へ連絡しようにも、国際電話なんて無く、電報以外なさそうで、しかも何時送られてくるかも分からない。そこで、マネージャーの小木曾の父がNHK松本放送局にいた関係を思いつき、NHK沖縄特派員事務所を連絡も無く訪れた。

そこは、階段下のような狭い事務所に一人。対応して下さったのは、饗庭さんであった。饗庭さんはその後、ワシントン総局長などされ、今でも外交評論家としてTVで良く見かける方である。事情を話し、大学事務局に書類を送ってくれるようお願いした。恥も外聞も無い要請に、全く非常識なことだと睨み付けられたが、どうやら連絡してくれたらしい。後で、大学事務局から咎められたと聞かすが、時々饗庭さんをTVで拝見するときは、いつも自己嫌悪に陥っている。ともかく、これで石垣経由台湾へ行く事になった訳である。

(F) 基隆(キールン)入港から台北市内滞在

今なら、飛行機で2時間半もあれば行ける台湾へ、横浜を出てから何と一週間かかって、やっと入国できた。基隆は一年365日雨降り、と言われるとおり霧雨の港は黒一色で、その昔ポルトガル人が“緑の島”、フォルモッサと呼んだ景色とは凡そかけ離れた第一印象である。しかしながら初めて外国の地に足を踏み込んだのだという感激を味わったものである。

列車で台北駅へ向かい、警察署へテント張りの許可を申請に行ったところ、対応した係官が“ウチの家の内がホテルをやっているから、そこへ泊まれば良いではないか”と言ってくれ、確か数部屋タダで貸してもらうことができた。奥さんはとても朗らかな方で、台所らしき所は特別無いらしく、風呂場で手際よく行っていた。

後々にも出てくるが、日本軍が引揚げてからというもの、蒋介石の引連れて外省人が大陸から雪崩れ込み、それまでの内省人の権限、ポジションを奪ってしまった結果、内省人は大いに不満を持っていた。多分、この警察官の奥さんもそうであったからこそ、すでに薄らいだ旧日本軍圧政をさておいて、20年ぶりに会う我々日本人に対して好意的であったのかもしれない。事実、台北市内のバスか電車の中で会った男性教師が『かつての日本人はオイコラで怖かったが、番犬のように我々を守ってくれた。それに対して外省人はブタだ』とはき捨てるように言っていた事を思い出す。湿気の多い基隆と異なり、台北はカラリとした好天続きであった。今のようにガイドブック等無かったせいもあって、名所旧跡などの観光は思いも付かず、もっぱら阿里山登山や高雄の工場見学等について、外事部(外省省)商工部(通産省)との折衝をそれぞれ分担して行った。また、王育徳先生のご紹介により、国立台湾大学の先生の研究室を訪問したり、ホテルの子供達の通っている小学校を見学した。二部交代の授業を行わねばならないほどの物凄い学童数に驚かされると共に、我々戦後世代では最早知らなかった全校生徒による軍事訓練を見るにつけ、また旧日本兵による一般人への斬首を描かせた子供達の絵を垣間見て、大陸との対立の深さと、蒋介石政権の反日教育の徹底ぶりを一同、身をもって感じたものである。

(G) 阿里山

北回歸線上の嘉義駅に降り立つと、ピンロウの街路樹。その実はタバコと同じ効果があるそうで、石灰の粉と一緒に嘔むと口の中が血のようになり、汚いからと禁じられていたようであるが、我々には珍しく感じられた。その一方、マネージャーが当時日本では珍しかったバナナを買い込んでくると、一斉に皆が捕り合って食べる姿の集団を見ていた人たちが、『日本人か?』と好奇の目で寄ってくる。とても親しげだ。

阿里山鉄道は坊ちゃんに出てくるような小さな蒸気機関車に連結されたボギー車輜。ゆっくりごく自転車くらいのスピード。後に運輸省高級官僚となる岡田氏が、やおら列車から飛び降りて伴走しはじめたくらいだ。暫く平地を走った後、スイッチバックを繰り返しながらあえぎあえぎ登ってゆく。途中から全て竹でできた家など、昔ながらの山岳民族らしい集落が見え出し、途中駅では物売りが一斉に大声を掛けてくる。終点の阿里山駅はさすがに肌寒い。たまたま、高雄の女子中学校生徒を引率して来られていた李和庭先生が懐かしそうに声を掛けてこられ、その時記念に撮った写真が冒頭の図-2である。

日本語を勉強している生徒が居て、帰国後も文通を続けていた仲間も居たようである。

ここから新高山へ登る予定であったが、雪が多く登山禁止で、やむなく散策することにした。ちょうど桜が満開で、お花見客が結構いる。蒋介石政府により台湾の日本神社の多くは取り壊されていたが、ここではまだ残っていて、さながら日本に居るような錯覚に陥った。

(H) 台南の成功工科大学学生との交流

阿里山から嘉義へ戻り、日本の京都のように台湾の歴史にとって由緒深い台南市に滞在した。

そこにある成功工科大学は当時、台湾で最も難関な工科大学であった。何故その学生寮に潜り込めたか今になっては不明だが、外省人の師弟が台湾大学とすれば、内省人の優秀な師弟が集まった大学だったのかもしれない。あまり開けっぴろげに政府批判をしてはいけないご時世に、どこからか借金までして我々を大きなロータリーの食堂街に連れて行って奢ってくれたり、聴いてはいけない大陸からの放送が聴けるラジオを組立て見せてくれた学生も居た。翌早朝、数人の学生が100年に亘るオランダ支配から開放した鄭成功の上陸した海岸へ連れて行ってくれた。

そこは、ゼアランジャ城の遺跡があるだけで、台湾独立の為の、いわば象徴的な場所だったのだ。

そこで天皇制を揶揄した君が代を彼らは肩組んで笑いながら合唱し始めたのであった。

(I) 旗山のバナナ農家勤労奉仕と旗山中学

台湾の人の心を知るには勤労奉仕して見ようとの蓮尾氏の提案で、バナナ栽培の盛んな旗山バナナ農家に飛び入りで頼み込み、半日ほどバナナの植え替え作業を全員で手伝った。

その農家の方とのコミュニケーションがあったかどうか忘れてしまったが、たまたま旗山中学の校長先生が東京農大ご出身ということで、中学の立派なゲストハウスに泊まらせていただいた。

とても大きな学校で、その晩はPTA役員さんを含めた大歓迎を受けた。翌日の昼には校長宅に呼ばれ、奥様手作りのクレープのようなものを馳走になった。ピーナッツの粉をふんだんに使った珍しい食べ物だと記憶している。ここでも、20年ぶりに会う日本人ということで歓迎してくれたのであろう。

(J) 屏東市、高雄、我鑿鼻半島

旗山からバスで屏東市へ向かう。途中、ニューメキシコカッパードキアのような草木が全く無い多数の尖塔を見る。降雨量が極めて少ないところだそう。

屏東市内に降り立つと、30℃以上であるにも関わらず、カラッとしていて気持ちが良い。そのせいもあってか、町全体が豚肉料理の匂いの空気が覆っている。早速、応用化学科へ留学している学生宅を尋ねる。目抜き通りに面した藤家具の店である。少し離れた旧日本神社の境内に案内していただき、テントを張る。鳥居や本殿はあったが、祭事は全く行われている様子が無い。

ここをベースにして、列車を利用して高雄の工場見学に出かけた。高炉は無いが鋼線を圧延している製鉄所、石油精製工場、花王の洗剤を箱詰めしている工場等の見学を行った。石油精製会社では、案内してくれた技師がエレベータで精製塔の最上階へ連れて行ってきて、蒋介石政権に対する痛烈な批判を聞かせてくれた。多分、最も安心できる場所だったからであろう。

また別の日は、台湾の最南端、我鑿鼻へ行った。そこには高さ20mくらいはあったであろうか、大陸に向かって睨み付ける巨大な蒋介石の銅像が建っていた。

(K) 台東のアミ族の大歓迎

台東はネイティブな部族間の融和が暫くうまくいかず、当時ですら西海岸とは孤立していて、日本人が行くことは殆ど無かったようである。しかし、部族間の共通語が日本語であったため、我々一行が日本から来たと分かると、台東最大民族のアミ族酋長が直々に我々に会いに来られ、「今夜、歓迎会をやるから、来てくれ」とのお招きを受けた。酋長といっても、恰好は村長さんみたいな開襟シャツで、何も特別なデコレーションをしているわけではない。世話役さんにアドバイスされ、確か酒を2~3升持って行った。すると広場には、すでに約100~200人位が集まっていて、電飾された盆踊りのような舞台と共に我々の座る席が設けられていた。なにやら酋長の挨拶の後、アミ族の正装をした男女が歌と踊りで大歓迎してくれた。これは、今回最大の驚きでもあり、何故我々のような学生連中をこれほどまでに歓迎してくれるのか、と不思議に思ったくらいである。たまたま、予定にあった催物と重なっていたのでは無かったことは確かである。

翌日、世話役さんが、アミ族出身で1960年のローマ五輪十種目競技で台湾に初めての銀メダルをもたらした「アジアの鉄人」揚伝広の家へ案内してくれた。榮譽を称えて国家から贈られた家の壁には、鮮やかな五輪マークが装飾されていたが、本人はすでにカルフォルニアへ行ってしまっていて、住んで

いないとのことであった。アミ族にとって、彼は最高の誇りの象徴であったのだ。

(L) 花蓮、太魯閣(タロコ)渓谷から台北、帰国

台東駅で若いアミ族の女性たちに見送られて夜行に乗り込み、花蓮に向かった。トンネルの多い路線である上、夜行のため折角の東海岸の車窓の記憶は全く無い。

花蓮駅の背後には絶壁の山が迫っている。タロコ渓谷は西海岸との貫通道路を作る目的で、蒋介石軍が連れてきた独身者や、妻子を大陸に残してきて老齢になってしまった兵士達が硬い岩を砕いて造った道路である。我々が行った時はまだ工事中で、疲れ切った無気力そうな老兵士を見かけたような気がする。しかし、想像を絶する切り立った岩山、トンネル、美しい川の流れに驚嘆した。

これで、台湾一周をほぼ終え、未舗装の道路を走るバスで、顔や頭まで真っ白になるほど全身砂ぼこりにまみれながら、蘇澳→宜蘭→台北へ帰り、その後、入国と全く同じ逆コースで那覇を經由し、横浜、東京へ帰ってきた。

(M) まとめ

- 1) 鹿児島から基隆往復船賃が約 2 万円 (\$ 50×360 ¥ / \$)、その他一切合財で 4 万円くらいであった。当時の大卒初任給の平均、2.5 万円の約 1.5 倍程度か。
- 2) 戦後 20 年ぶりに会う我々日本人に対して、内省人の方々からは懐かしがられ、歓待もされた。しかしながら蒋介石亡き後もなお、今度は大陸政府が唯一の中国であると国際的に扱われ、台湾人は変わらない心境でおられる方が多いのではないか。
- 3) 多感な時代の我々にとって、独立国家の平和が如何に大切かを身にしみて理解できた 1 ヶ月であったような気がする。

以上、42 年も前のことで、当時の記録、写真等を探してみたが、それぞれ就職、転居などで殆ど見つからず、苦労した。

台湾PW

馬場 誠一（9期）

40年という時の流れのあなたに、台湾PWという小岩が濃い霧の中にかすんで見える。パーワンという言葉も忘れていたなあ。今も使っているのだろうか。

そういえば、30年ぶりに山に戻っていったときに、山小屋で同室した若い男からあなた方の時代のあの大きなザックは何といいましたっけと問われて、キスリングの名前を思い出したときは、急に清水ヶ丘の部室の匂いがしたものだ。

今となっては、なぜ台湾に行ったのか、誰が言い始めたのかほとんど覚えていない。しかし、過去にあった事柄はなくなってしまったのではなく、時間の堆積の中に埋もれているだけ。記憶の遺跡をいねいに発掘すれば、それは蘇るはず。

新人合宿で行ったことも忘れて40年ぶりに北八ヶ岳の森の中に入ったときに苔むした倒木の中を、落葉松の落ち葉を踏みながら歩いている20歳の自分に僕は確かに会った。そして、40年前の記憶が鮮やかに蘇った。ああ、俺はこの道を通ったことがある。

あの時、時代は今よりも確かに熱かった。清水ヶ丘の坂の上の立て看板は校門より高かったし、食堂ではセクトの諸君が殴り合いの喧嘩をしていた。新宿は燃え、安田講堂は崩れた。そのうち、授業もなくなった。

お金も無かったなあ。でも何も怖いものはなかった。そしてなんでもできそうだった。

東京から鹿児島まで列車でいって、鹿児島から沖縄経由で基隆に入港して台南・高雄まで下った約1ヶ月間のワンダリングだった。帰りも同じ貨物船で鹿児島まで着いて、列車で東京まで帰ってきた。

旅で出会った人もいい人ばかりだった。日本の学生が大勢ザックを担いでやってきたというので、行く先々の町でご招待を受けた。この世界は、善意で出来ていると思っていたよ。

岩科先輩、小谷先輩、お元気ですか。和田ちゃん、舟見ちゃん、どうしてしていますか。加藤ちゃんや尾崎ちゃんとは時々会います。本多ともこの間会いました。天笠はさっさと天国へのワンダリングに出かけてしまった。でも、みんなとはどこかの街角で、どこぞの酒場の隅で、どこかの山小屋でまたお会いするような気がするよ。



2007年5月 五竜岳で同期の上原氏と共に

・悲しい出来事

Y W V 5 0 年に起こった重大事故・
遭難事故

春合宿九州隊事故

丹沢三峰歩荷訓練遭難事故

北アルプス・穂高岳 PW 遭難事故

黒部峡谷水平歩道遭難事故

大島君を偲んで



夏の仙丈ヶ岳山頂

YWV 50年に起こった重大事故・遭難事故

西浦 章予(15期)

ワンダーフォーゲル部 50年の歴史の中には、さまざまな事件や事故がありました。

1970年(昭和45)には遠く離れた九州での転落事故と、ホームグラウンドである丹沢・三峰山での遭難事故が相次いで起こりました。

1976年(昭和51)の5月の連休には、奥穂高岳で滑落し死亡するという事故が起こり、ワンゲル内外に大きな衝撃が走りました。

多くの関係各位からの物心両面の支援のお陰で捜索活動ができたものの、YWVには辛い反省事項が山積みされました。

またこの年には、この捜索活動に参加していたOBの一人が、遭難事故からわずか1ヶ月後の6月に、谷川岳で遭難をするという、痛ましい事故も起こりました。

このような事故の反省を受けて、ワンダーフォーゲル部のあり方が討議され、部則の見直しも行われました。1980年(昭和55)には遭難対策規約が確立されました。

しかし、その6年後の1986年(昭和61)の夏に黒部峡谷で滑落事故が起きてしまい、かけがえのない仲間を失ってしまいました。

その後17年余は大きな事故もなく活動してきましたが、2003年(平成15)5月の黒姫山で痛恨の滑落事故が起こってしまいました。靱帯損傷という大けがを負ったものの命に別状がなかったことが幸いでした。

創部50周年にあたり、今まで起こった事故を振り返り、今後の教訓としたいと思い、当時の事故報告書をひもとき、4件の事故について年代順に掘り起こしてみました。

なお谷川岳の事故については、追悼文をここに掲載します。

若くしてかけがえのない命を落とされた仲間のご冥福を祈ると共に、今後、いつまでも安全で有意義なYWVの活動が実践されますことを願ってやみません。



半夏生

春合宿九州隊事故

- 1 発生日時：1970年（昭和45）3月21日 17:00
- 2 発生場所：大分県竹田市 祖母山登山道の本コース5合目小屋上 7合目付近
- 3 負傷者：13期 垣内 陽子（教育学部1年）
メンバー：4年生（1名） 2年生（6名） 1年生（10名） 計17名
- 4 事故発生前後の状況と経過
日程・コース
3/20 東京駅発
3/21 大分駅着 大分駅発（8:39） - 竹田駅着（9:45） - （大正公園にて休息） - 竹田発（11:10）
- 神原着（12:00） - 神原発（12:35） - R1 - R2 - R3 - R4（5合目小屋） - R5 - R6
- R7 - 事故発生（17:00）
(R = 休憩)
3/22 尾平起
3/23 九折起
3/24 見立鉾山
3/25 三里河原
3/26 上祝子
3/27 延岡

事故発生時の状況と対応

- ・計画していたメンノツラ新道について部落の人に尋ねると距離的には近いが間違いやすいとのこと、バスに同乗していた登山者は、3年前メンノツラ新道を行こうとしたが女子だけでは不安とのことと本道を勧められたとのこと。そこで、多少時間はかかるが本コースに決定。（後で聞いた話によると今ではメンノツラ新道は整備されていてよく使われるとのこと）
- ・5合目小屋にテントを張るか迷うが隊員の健康状態も快調に思えた。女子に聞いても順調とのこと。下りてきた人に聞くと国見峠まで1時間30分、荷が重いので2時間ぐらいという話。途中にもテントサイトがあるとのこと。翌日のコースの厳しさを考え出発を決定。
1年の女子の荷物を11~12kgと軽くする。
- ・テントサイトまで5分。幅80cm~100cmの尾根を乗り越える道にて事故発生。
道に雪が数cmついていて、少し凍り始めた頃、左に曲がるカーブで前につかえてしまったため全員が立ち止まったとき、足を滑らせ右側のヤブを通過して沢に落ちる。立ち止まったとたん木の根ですべり、立ち上がるうとしてさらにバランスを崩してうつぶせに5mほどヤブをすべり落ちる。そこで1回転して今度は仰向けになって沢に落ちていった。
上から名前を呼ぶと返事があった。10mのロープをもって下に降りる。ケガの状態を聞くと、左半身を打っており頭が痛く、左の肩及び左足の膝付近が非常に痛いとのこと。骨には異常はない様子。意識ははっきりしている。リーダーが垣内さんを背負い、沢に沿って10mほどヤブを下り、そこから登り始め、救助に下りてきた2年生に垣内さんをロープで結び、リーダーが後ろからカバーする形をとりながら縦走路に出る。小倉アルペンクラブの人たちが救援に来てくれており、5合目小屋の方へ下ろしてくれる。他の隊員は到着した4年生の誘導で小屋へ行っていた。
- ・5合目小屋下1kmの所から神原消防団の人のオート三輪で神原に出て、そこから救急車で竹田医師会病院へ収容。リーダーと他1名が付き添う。
横浜への第一報は、垣内さん救出中にメンバーの1名によってなされる。
この時同時に地元警察への連絡、消防団の出動の要請、及び5合目小屋にいた人たちへの協力依頼がなされる。

事後処理

- 3/21 垣内さん宅へ現地及び留守番本部から事故のことを連絡。
- 3/22 臨時遭難対策委員会
 - ・合宿中止（留守番本部21日決定）
 - ・リーダーと他1名は最後まで垣内さんに付き添う。
 - ・全パーティー横浜に戻り自宅待機。
 - ・丹沢隊に参加中の主将を呼びに行く。
- 3/24 主将は、遭難対策費をもって九州へ出発。
- 3/25 主将九州着。垣内さんの様態を確認し、横浜へ連絡した後、五合目小屋へ。

サブリーダー、横浜着、垣内さん宅へあいさつ。

- 3/26 主将、リーダー、他 2 名で遭難現場の調査。
リーダー、他 1 名 を除く九州隊は夜行で横浜へ帰る。
リーダー、現地各地での折衝。
- 3/28 主将、リーダー帰横。報告会を開く。
- 3/31 垣内さんと付き添い人 1 名は病院にお礼をしてから横浜へ出発。
(脳は検査異常なし、頭部、肩、胸、左膝部打撲傷)
- 4/1 垣内さん、付添人 東京着
リーダー学年、OB、その他によって今後の協議の概要を決める。
- 4/2 ~ 4/4 事後処理と活動の再検討。

5 事故原因の究明と反省

原因に対する考察

- ・経験不足・・・10ヶ月余りの全学スト後の活動開始であったため、1年生が山に不慣れ、リーダー学年も経験不足であった。
- ・長旅の疲れ・・・東京から竹田まで20時間以上の長旅の疲れを計算に入れなかった。
(慣例では長旅の翌日は、行動時間を2、3時間以内にする)
- ・メンバー構成がアンバランス・・・メンバーに関して執行部で手を加えなかったため1年が多く、3年生が0であった。
- ・準備期間不足・・・3月上~中旬にメンバー、コースの決定、及び審査会、同月下旬出発というあわただしい経過。そのため問い合わせの返事が届いていない。
- ・遠隔地・・・九州が遠隔地であるため過去の記録がない。メンバーの一人(4年生)が九州出身で、予定コースはよく知っていたが、事故は彼の到着前に起こってしまった。
- ・遅い行動終了・・・5合目小屋着が15時であった。祖母山のような1000~2000mの山は、3月までは15時を過ぎると気温が下がって路面の凍結、体力の消耗があり得る。5合目小屋に泊まることが望ましかった。審査会でバスの時間によって17時30分まで行動することを認めたのは、予定のメンノツラ新道が全て林道であるためであった。

問題点と今後の対策

- ・新入生を迎える前段階としてリーダー養成合宿のような合宿を企画すべき。
- ・リーダーが動きすぎ、指揮系統が不明瞭となった。状況を充分把握しないまま、救援を頼みに行ったり、残りのメンバーが暗くなるまで動けなかったりした。救出は他のメンバーに頼み、リーダーは指揮をとる。
- ・合宿に対するリーダー学年の姿勢、部員の体力、技術を客観的に判断する。合宿を各隊に任せてしまい執行部が係わっていなかった。合宿とPWの意義について再考する必要がある。
- ・合宿の中止は妥当であったか。中止か否かは、留守番本部が行う。
留守番本部は必ず審査会に出席する。(原則としてリーダー学年、それ以上の上級生も)
また、計画書と遭難対策費を備えて待機。自宅を動いてはならない。
- ・遠方に出かける場合は、計画書を提出する。(一般的には現地警察で受け付けてくれる)
- ・学生部には、メンバー、コース、日時を提出。部長には計画書を提出。
- ・審査会制度についても反省をし、対策を講じた。
参加者は全員審査会に出席。山行記録、トレーニング状況をマネージャーが把握。それによって審査会でメンバーに手を加える。審査会基準を明確にする。
PWの計画書は2週間前。合宿は2ヶ月前に計画書を審査会に提出する。

6 お世話になった関係各位

- ・小倉アルペンクラブの方々
- ・竹田警察署 長野部長
- ・神原消防団 三田井分団長
- ・横国大 YWV 部長 田中 裕先生
- ・横国大 YWVOB 飯村氏、木村氏、並びに OB 各位
- ・三井東圧化学 山田正臣氏
- ・竹田消防署 内田係長
- ・竹田医師会病院の方々

丹沢三峰歩荷訓練遭難事故

- 1 発生日時：1970年（昭和45）7月19日（日）
- 2 発生場所：丹沢三峰山（夏合宿に向けての歩荷訓練中）
- 3 遭難者：14期 川端 良和（経営学部1年）
メンバー：4年生（1名）3年生（3名）2年生（1名）1年生（2名）計7名
- 4 遭難事故発生前後の状況と経過
日程・コース
7/17（金）国大工学部（14:45）- 本厚木 - 宮ヶ瀬大橋（17:20）- 岩道館キャンプ場（17:45）
7/18（土）キャンプ場（6:45）- 丹沢山登山口（7:00）- R1 - 宮ヶ瀬への分岐（7:35）- 塔ノ岳へ13000mの道標（7:50）- R2 - R3 - R4 - R5 第1昼食（10:10）- 塔ノ岳へ13000mの道標 - R6 - 高島山道標（11:58）- R7 札掛への分岐の頭（12:50）- R8 第2昼食（13:20～14:55）（石を降ろす）- 金冷やしの道標（川端氏疲れが出る）- R9 - 塔ノ岳へ13000mの道標（16:10）- R10 - R11（川端氏荷を空に）- 幕営地到着（17:40）（本間ノ頭直下15分）
7/19（日）起床（7:00）本間ノ頭ピストン出発（8:00）- 幕営地着（9:00）（朝食）幕営地発（10:05）- R1（札掛への分岐、宮ヶ瀬へ1時間40分の道標）（11:25）- 川端氏落ちる（12:10）・川端氏寝かせる（12:15）

事故発生前後の対応

7月19日（日）午前7時頃起床。8時に川端氏と他3名の計4人に、一つもピークを踏まずに帰るのは残念だからと、本間ノ頭へピストンさせた。

9時に幕営地に戻り朝食としてパンと紅茶を取った。出発後30～40分歩いた頃、川端氏が「休みましょう」と言ったが下りだけであったし、実働2時間余りでバス停に着けると思い、そのまま歩いた。

札掛への分岐で休みを取り（R1）、クラッカーとレモン各自1/8個（川端氏は1/4個）を食べた。天候は晴れ、微風があったものの草の生い茂った所では昨日と同様、草いきれがひどかった。

川端氏の荷は、個人装備の他には、フライシートとポールだけであり、ポリタンクは持っていなかったため17kg弱であった。

分岐で20分程休み、再び出発。30分程歩いたところで川端氏が一度転んだが、立つように言うと立ち上がり歩き続けた。この時、川端氏には疲労があるものの、前の者から離れるようなことはなく、下りばかり30分程で馬場に着くと思われたので歩かせ続けた。

12時10分、緩い斜面の雑木林の北西斜面をまいている道で、左側の15度程度の斜面に2mほど川端氏が落ちた。4年生と3年生の2人が降りていってザックをはずさせ、頭が下になっていたので「足を下に向けろ」と言うと、「こうですか」と答えた。

川端氏は足を踏みはずした時、滑り落ちるようにして倒れたので、特に頭を打つようなことはなかった。

自力で道まで上がったところで、錯乱状態になり反対側（右側）の斜面を1mほど登っていったが止め、下に降ろした。日陰を探したが見つからず、木の下わずかな日陰に、肩をかして運び、ザックを敷いて寝かせた。木陰に寝かせたとき、川端氏はすでに意識不明の状態であった。脈拍数160、体温38度7分。この状態より日射病ではないかと判断して川端氏の胸をはだけ、ぬれタオルで頭を冷やし、帽子で仰いで寝かせた。

医師の指示を仰ぎ、できれば現場に出向いてもらうようにメンバー2名を馬場に下山させた。下山した2名は、12時40分馬場の売店より鳥屋の診療所へ電話をするも日曜日のため医者が不在。駐在所へ行ったが警官が不在だったので、電話で厚木署の人と話すが、救急車は行政区が異なるので余程のことがない限り来ないとのことであった。

2人はポリタンクに水を補給して13時25分に現場に戻る。川端氏の呼吸は荒く不規則で、体温は40度6分と高かった。ちょうどその時、別の隊が下山してきたので、リーダーと他1名が救急車と医師の要請のため馬場へ向かった。

その後、13時35分に川端氏の呼吸が停止しすぐに人工呼吸を始めた。人工呼吸は、3人で交代で行なった。14時45分、脈わからず、耳、顔は紫色となっていた。同時に心臓マッサージを始めた。

その間、下山した2人は13時40分駐在所に到着。宮ヶ瀬の遭難対策委員を通じて医者に現場まで来てもらうように要請した。しかし医者は高齢なため無理とのこと、馬場まで患者を降ろせばなんとかなるのではないかとわれ、留守番本部に事故の概略を報告した後、1名は現場に向かう。15時に到着。だが、人工呼吸を1時間30分も続けている状態では、下に降ろすことはできないので、至急医師と人

工呼吸のできる者の派遣、酸素吸入装置の要請のために再び下山。その後、駐在所に帰ってきた警官 2 名にも現場に向かってもらった。

現場では、下山途中通りかかった千葉県の広瀬氏が人工呼吸を手伝ってくれた。警察を通じてもう一度医師に来てもらうよう頼み、この時川端氏の家にも連絡をした。16 時 30 分、厚木より救急車が酸素吸入装置を積んで到着、下山していた部員とともに現場に向かう。現場到着 17 時。

しかし、手足とも硬直していたので、酸素が入らなかった。17 時 20 分、医師が到着。注射を打ったが反応なく死亡と断定した。(医師の推定によれば、死因は日射病と前日の疲労による心筋梗塞。また、死亡時刻は 13 時 35 分とのことであった)

5 事故原因の究明および反省

YWV の部としての低迷が続いている現状、および、技術不足。加えて、1969 年からの長期大学紛争による経験不足および技術不足。

- ・合宿におけるリーダー経験のない 4 年生と 2 年生部員を経験したことのない 3 年生、ほんの数回しかワンダリングをしたことのない 2 年生という構成であった。
- ・川端氏は、4 月に入部したものの 6 月 10 日まで自宅待機であったため、連絡が途絶えていた。そのため、健康診断、新人合宿、トレーニング等の重要な期間を逃してしまい、数回のトレーニングを行い、その間に装備なども準備して歩荷訓練に参加することとなった。

コースに対する反省

- ・宮ヶ瀬 - 丹沢山のコースは、高度差 1300m、距離 11km、コースタイム 6 時間で、当部では過去何回も歩荷訓練のためのコースとして利用してきた。しかし、実際 2 つの隊が丹沢山につけず、当日の異常な気象条件を考えても、計画が過去の記録に頼り切っていて、たぶん今年もいけるだろうという安易さがあったことは否定できない。

歩荷訓練の企画に対する反省

- ・夏合宿での危険をできる限り減らそうとして歩荷を行うのであるが、歩荷それ自体がすでに危険なものである。
- ・1 年男子の歩荷量は 35 ~ 40kg ならば妥当であるといえるが、実際にはトレーニングなどを始めてから日が浅く、新人合宿に行っていない川端氏の荷物が 40kg になったことは、重大な手落ちであった。彼は、前段階の新人合宿での 25 ~ 30kg の重量を経験しておらず、18 日に 40kg を背負ったことが、19 日に倒れるに至った大きな原因になっていると考えられる。

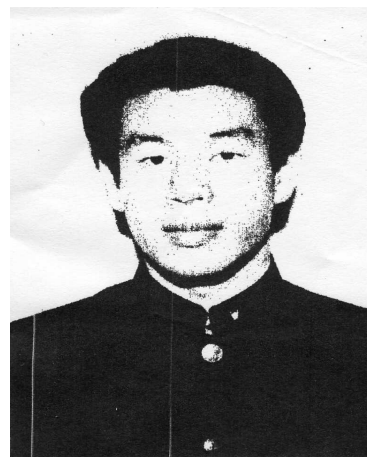
単にリーダーによる健康状態の判断、その他の技術的なもののみならず、日常のトレーニング、健康診断、我々の受けついできた方法の科学性を問い直し、日常活動も含めて、部活動の根底から我々の行っていることを総点検しなければならないと考える。

その他

- ・19 日が休休日である日曜日であったのは、実に不運であった。計画時に清川村には、救急車も病院もないということをもっとよく調べておくべきだった。
- ・応急手当の方法、人工呼吸の方法などは、安全対策として全員がいざという時に正しく行えるように日頃から練習しておくべきである。

6 お世話になった関係各位

- ・厚木警察署 菊池氏、松枝氏 以下署員各位
- ・宮ヶ瀬駐在所の方々
- ・厚木消防署
- ・医師 岡田清資氏
- ・宮ヶ瀬遭難対策委員 川瀬忠夫氏
- ・横浜市 中井登志夫氏
- ・千葉県 広瀬昌彦氏、塚田政夫氏
- ・田中 裕ワンダーフォーゲル部長
- ・横国大関係各位



7 その他

川端氏の亡くなった場所には、白いペンキ塗りの道標がたててあるとのこと。

また、追悼ワンダリングのときに、白いクチナシの苗木を植樹したそうである。
(スカイライン 30 周年記念号 左藤氏の自由投稿文より)

<1 周忌に出された「事故報告書」P23「復刻版平成 8 年 12 月 1 日発行」P22 を参照>

北アルプス・穂高岳 PW 遭難事故

- 1 発生日時：1976 年（昭和 51）5 月 2 日
- 2 発生場所：北アルプス奥穂高岳から前穂高岳へ至る吊尾根
- 3 遭難者：19 期 徳繁 公一（経営学部 2 年 元部員）
メンバー：リーダー・OB1 名 3 年生 1 名 2 年生 2 名 計 4 名
- 4 遭難事故発生前後の状況と経過
日程・コース
5/1（雨）入山 松本 - 上高地（6:55）- 涸沢ベースキャンプ（14:00）
5/2（晴）テント（6:25）- ザイテングラード - R1 - R2 - 白出コル着（8:30）・発（9:00）
- 奥穂高山頂着（9:55）・前穂高岳に向け出発（10:45）- 徳繁氏吊尾根より滑落（10:50）

事故発生前時の状況と対応

4 時過ぎに起床、朝食の後 6:25 ザイテングラードに向かう。途中 2 回休憩をとり 8:30 白出コルに着いた。予想通りすごい人出。9:00 にコルを出発し、鎖場も順調に通過して 9:55 には奥穂高の山頂に立った。山頂からの展望は抜群で南アルプスはもとより富士山まではっきりみえた。

50 分間ゆっくり休んで 10:45 元気に前穂高岳に向かった。

10:50 徳繁氏が吊尾根より滑落。コールするも返答なし。現場に居合わせた 2 人パーティーの小倉山岳会のトランシーバーを借り、緊急発信で、上高地の派出所と連絡。徳繁氏の滑落を知らせ岳沢の国大山岳部への連絡を依頼。

11:10 現場を離れる。奥穂高山頂にて、現場が南陵の頭であり、滝沢左俣を滑落したことが判明。派出所と連絡。

14:00 涸沢のベースキャンプに帰る。留守番本部との連絡は横尾や徳沢ではつかず、20:15 明神館にてようやく取れた。

<現場の状況>

アイゼンがよく効いていた雪面が、南陵の頭を超えたところではぐさぐさに腐った雪となり、表面がフィルムクラフトの状態になっていた。また、そこで縦走路は段をなしていた。

徳繁氏はパーティーの 3 番目を歩いていた。雪が腐っているためアイゼンがダンゴになり、またステップが足元から崩れたためおお向けに滑って行った。右にあった岩につかまろうとして体を反転させたが失敗。ピッケルストップも試みたが体は完全に伸びきってしまい、その雪面は硬く、ピッケルははねられてしまいうつぶせ状態で滑っていった。沢筋は右に曲がっているため、すぐに視界から消えていった。

<横浜本部から>

連休中の山行は 9 パーティーが予定され、5 月 2 日にはすでに 7 パーティーが出発し、残りのパーティーも当日夜出発の予定であった。3 年生以下の不参加者はわずか数名。全パーティーの留守番本部は、蜷川宅になっており全ての連絡がここを通してなされることになっていた。「徳繁氏、北アで遭難」の報告が本部に入ったのは 15 時 30 分。下宿先からの知らせを受けた、部員からの電話によるものだった。本部では、すぐに各方面への確認の電話をかけ、長野県警に問い合わせ、確認。「奥穂高岳から前穂高岳へ至る吊尾根を縦走中、岳沢側へ滑落。行方不明」との情報を得る。4 年と OB への連絡を急いだが、

大半が外出中のため、現役部員 2 名に救援準備をさせるとともに、留守番本部でも装備を用意 18 時 20 分、豊科署に問い合わせたが、依然行方不明とのことだった。このころからは各方面からの問い合わせが殺到していた。20 時遭難対策本部を設置し、4 年部員を招集した。OB 等の連絡等は、斉藤氏に依頼して中心になっていただいた。

20 時 15 分、現地明神岳のリーダーより第一報がはいった。「大至急救援隊を送れ」との要請に OB 三好氏と現役 2 名を夜行アルプス 8 号で派遣。当日出発予定だったパーティーの食糧、装備をもたせた。その後、OB 小口氏（在、上諏訪）に、上高地での指揮を依頼。22 時すぎには、8 名の現役部員が到着し、以後の活動を相談した。

翌 3 日、現場では岳沢ヒュッテをベースに救援中ということなので、それに合わせて資金、装備、食糧、人員を手配。地元遭対協の要請を指示するとともに、OB 6 名、現役 1 名を東京から、主将を山行中の妙高から、順次上高地に送った。以後の連絡は、岳沢ヒュッテ、上高地派出所、横浜遭対本部の三者間で相互に行うこととなった。また、東京、横浜残留の部員には、電話連絡網を作り直して 1 日 1 回状況説明を行った。入部間もない 1 年部員の連絡はもう少し様子を見てからにした。このころから計画書と行動のくい違いが問題になり始めた。

4 日 徳繁氏の加盟する高松高校 OB 山岳会から「現地での救助活動の用意がある」との申し出を受けた。この日初めて田中部長と連絡がとれ、それまでの状況を説明し指示を仰いだ。現地では、悪天のため地元救助隊の捜索を打ち切り、国大独自の捜索を検討していた。

5 日 この日に遺体が発見できなければ連絡員以外はいったん引き上げるつもりだったが、16 時 50 分に遺体発見の報告が入ってからは状況は一転。その頃までに他山域から続々と下山してきた部員に対して自宅待機の命令を発して遺体収容の準備を進めた。

一方事故の責任の所在と資金問題について討議するため、横浜で OB 会を開催した。

6 日 部員の動揺を和らげるため、国大内で説明会を開き、事故発生から遺体発見までの概要を知らせた。

7 日 現地からの報告待ち。遺体収容は困難な模様。計画書とのくい違い、部の存続、資金繰りなどの問題が一段と大きくなってきた。

8 日 遺体収容できないまま全員いったん横浜へ引き上げた。

9 日 国大内にて OB も含めた説明会を開いた。以後本部を蜷川宅から堀内宅へ移し、第一次遭対本部を解散した。

< 遺体収容 >

5 月 16 日（曇り、午後小雨）4:15 収容隊、大滝に向けて出発。メンバーは高松高校 OB 山岳会の 4 名、法政大学岳稜会の 2 名、国大 OB 5 名の計 11 名。

遺体は雪に埋まっていた。遺体は大滝第一テラスより滝の上部に引き上げ、南陵づたいに降ろされたが作業は難航し、ヒュッテ到着は 14:30 になった。

タンカをつくって遺体を載せ 16:00 にヒュッテを出発し、暗くなってから木村小屋に到着した。徳繁氏の御両親、高松高校山岳部顧問の先生方は、すでに木村小屋に到着していた。

21:00 過ぎにはクラスの代表 3 名も駆けつけてくれた。

17 日早朝、整形外科にて検死の結果、死因は頭蓋陥没による即死であった。遺体は松本でご両親、高松高校山岳部顧問の先生方、同 OB 山岳会、田中部長、クラス代表、ワンゲル現役部員、同 OB らに見守られて茶毘に付された後、ご両親と共に高松へ帰った。

5 事故に関する反省

パーティー面の反省

- ・ミーティング不足のため各自の目的、技量を正しく把握しないまま計画がもたれてしまった。「雪の穂高」という願望の実現にばかり気を取られた。また、涸沢周辺には大勢の入山者がありトレースが着いていて大丈夫だろうという安易さがあり、山に対する冷静な判断力を欠き、審査会で許可されたものとは違った計画をし、行動してしまったことを反省する。

いかなる事情があってもミーティングによる十分な検討、パーティーの技量の把握、計画立案の重要性を忘れてはならない。

捜索および遺体収容に関する反省

- ・最大の反省点は、捜索活動が YWVOB、国大山岳部、高松高校 OB 山岳会、法政大学岳稜会、遭対協等に全面的の頼らざるを得なかったことである。
- ・7 年前の丹沢での事故以来、全部員で遭難対策費を積み立ててきたが、その金額は事故当初 36 万円程であまりにも少なすぎた。保険にも加入していなかったなど、事故に対する金銭面での認識の甘さ

を反省する。

- ・現地における搜索以外の仕事として、会計、記録、食糧、装備、渉外に分け 1~2 名の人員を配置した。会計では正確な金銭管理がなされたが他の係は、搜索状況が刻々変わり、先の見通しが立たなかったり、次々と人員が入れ替わったことにより効率よく仕事がなされなかった。記録がメモや紙切れに走り書きしたものばかりで後で整理するのもにも苦労した。できる限り一つのものにまとめるべきだ。
- ・遭難対策規約が規定されていたが、従わなかったことを反省する。
規約の内容についても再考。
執行部方針・体制の反省
- ・51 年度執行部方針は「多様性・協調・進歩」である。
「多様性」とは各部員が主体的に自分の目的を自分のやれる範囲で追究していくということであり、ワンゲルの一つの独自性である。しかし、共通の体験が持てなくなり、クラブ員としての意識の低下と技術差の拡大を招く危険性を生んだ。それは、自分達の起こす事故に対し、自身の力で対処できない程の部員問題意識の隔たりをもたらしていたことを反省する。
執行部方針の新たなる道を生み出して行かねばならない。
- ・51 年執行部体制は、今までになかった少人数代表制である。（部員 80 名のうち 3 年 4 名、2 年 1 年 各 2 名（1 年は 10 月より）から成る）
前年度までの執行部は 3 年が自動的になっていたが、合宿案が部会において否決されたため、執行部が挫折するという苦い体験を味わった。そこで、クラブ員の最大多数の意見を取り入れるため、各学年の代表を含んだ少人数制の執行部を組織した。そして各学年は学年別ミーティングを持ち、特に 3 年生はリーダー会を組織した。しかしリーダー会の開催は少なく、その立場は不明確となり、クラブのまとめりやクラブに対する責任を考える義務を忘れた。リーダー学年は自分たちの責任の持てる範囲で活動すべく強い態度で臨まなければならない。
審査委員会の反省
- ・審査委員 7 名は兼任が多く多忙なため個々に審査しがちで、提出された山行計画に対する意見交換、統一的判断がなされていなかった。また、ここ 1、2 年は積雪期の山行が急増し審査会は審査不能に対し麻痺状態となってしまった。遭難対策についてもほとんど検討されていなかったことを反省する。クラブの活動の安全を図るため、審査会事項の大幅な改定が行われた。

6 お世話になった関係各位

- ・上高地派出所 滝沢氏、小泉氏、渡部氏
- ・小倉山岳会 樋口氏、吉田氏
- ・上条氏はじめ岳沢ヒュッテの方々
- ・長沼氏を初めとする横浜国大山岳部各位
- ・木村小屋 木村氏
- ・遭難防止対策協議会救助隊各位
- ・高松高校 OB 会各位
- ・法政大学岳稜会各位
- ・横浜国大関係 久保村学長、経営学部 林氏、
学生部 平井氏
- ・田中 裕ワンダーフォーゲル部長
- ・斉藤氏、小口氏、山口氏を初めとするワンゲル
OB 各位



黒部峡谷水平歩道遭難事故

- 1 発生日時：1986年（昭和61年）8月26日
- 2 発生場所：黒部峡谷水平歩道
- 3 遭難者：27期 岡本 佳久（工学部3年）
メンバー：4年生1名 3年生2名 2年生1名 計4名
- 4 遭難事故発生前後の状況と経過
日程・コース
8/18 21:01 上野発「急行能登」
8/19 折立 - 薬師峠（テント泊）
8/20 薬師峠 - 薬師岳 - スゴ小屋（テント泊）
8/21 スゴ小屋 - 越中沢岳 - 五色ヶ原（テント泊）
8/22 五色ヶ原 - 劔沢小屋（テント泊）
8/23 劔沢小屋 - 劔岳 - 劔沢小屋（テント泊）
8/24 劔沢小屋（悪天候、休養のため停滞）
8/25 劔沢小屋 - 真砂沢ヒュッテ - 仙人峠 - 池ノ平（テント泊）
8/26 起床（4:00） - 出発（5:25） - R1 池ノ平小屋（5:35～5:48） - R2 仙人池（6:25～6:50） - R3（7:40～7:50） - R4 仙人湯小屋（8:10～8:25） - R5 樹林の中の日陰（9:15～9:30） - R6 阿曾原小屋（10:30～11:05） - 水平歩道始まる（11:30） - R7（11:56～12:10） - 岡本氏滑落（12:37） - 櫛平

事故発生前後の状況と対応

10:30 阿曾原小屋着。このころ暑さのピークであったと思われる。2名の疲労が目立つので、岡本氏は後4時間歩けるかどうか2人に尋ねる。大丈夫と答えたので、行動続行を決定。

岡本氏メンツ飯を食べる。

（ここまでで、実働時間はアルペンガイドのコースタイムより20分ほどオーバー）

11:05 出発。標高差140m程の急登。この登りで、岡本氏はメンバー同様かなり辛そうであった。

11:30 水平歩道始まる。ここから事故現場までは、道幅も比較的広く、あまり高度感もなく散歩道のようなルート。水平歩道に入ってすぐの所で、岡本氏は足を滑らせたのか、ふらついたのか、バランスをくずし、一瞬しゃがみ込むような姿勢をとり、すぐ立ち上がる。無言で苦笑いをする。ケガはなし。

少し行くと細い沢がある。前の3人は顔を濡らし、岡本氏はかぶっていた帽子に沢の水を汲み、そのままかぶって歩く。沢の水もぬるい。水平歩道から少しだけ高巻いて行く道があったが、その登りの途中で、岡本氏は疲労が目立つ2年生に対して「がんばれよ」と声をかける。

11:56 7回目の休息。日陰だが暑く、4人とも余り元気がない。行動水を4人で1L程飲む。

岡本氏は出発際に「退屈だからラジオでも聞きながら行きましょうか」と言ってザックからラジオを出す。そのため出発の際他の3人に比べザックを背負うのがやや遅れるが、特に辛い様子ではない。

岡本氏の前を歩いていた3人はラジオの音を聞いていないので、実際に彼がラジオをつけていたか、あるいは、つけようとしていたかなどは不明。岡本氏、2年生に対して「おまえのザック一番大きいから、岩にひっかけないように」と注意する。

12:37 「ドスッ」という感じの音で岡本氏の前を歩いていたメンバーが振り返る。

「岡本さんが道のへりに手をかけていた。堪える間もなかった。走り寄ると、岡本さんがものすごい勢いで落ちて行くのが見えた。ずっと岡本さんの顔は見えていた。しまったという様な、あっけにとられたという様な顔だった」（岡本佳久追悼文より）

岡本氏、足を下にザックを谷川に向け、3m程ズルズル滑り落ち、そのまま10m程空中を落下。たまたまそこに張り出した大きな岩にザックをぶつけ、バランスをくずし何回転かしながら、視界から消える。

この間、聞こえたのは落下して行く音だけで、本人の声は3人とも聞いてない。

直後、落下の音も止まり、岡本氏がどこかに停止したことが分かる。のぞき込んだが確認できず。コールを繰り返すが応答なし。滑落したと思われる地点の路肩が若干削れたようになっているのを確認。しかし岡本氏はラストを歩いていたので、滑落の瞬間を3人とも目撃しておらず、直接的原因は推測の域を出ない。

現場はほとんど絶壁状態で自力で下りることは不可能と判断し、救助の要請を考える。

12:40 単独行の登山者 2 人が時間を置いて現場に通るかかる。事情を説明し、現場が折尾谷か少し手前の送電線が通る下であることを確認。相談し 3 人の実力、動揺などを考慮し、3 人が統一行動をとることに決定。3 人は動揺が激しく浮き足立っていたので、時間を置いて樺平に向かうことを伝え、計画書を上記の登山者に渡し、樺平での救助要請を依頼し、先に下山してもらう。荷物は軽量化と捜査の目印のために、残りはデポする。

13:30 折尾谷のトンネルを抜けて数分後、対岸の崖（水平歩道から河原まで 2/3 くらいの高さ、水平歩道から目測で約 50m の地点）に岡本氏のザックを発見。ザックは背負う側が下で、また、岡本氏はザックのすぐ右下で、向かって左側を向き、体を少し丸めるような姿勢で横たわっているように見えた。生死、ケガの状態などは全く不明。コールを繰り返し、手を振ったりしながら観察するも反応は分らず。

17:05 樺平駅着。駅事務所で、警察に電話で事情説明。

既に岡本氏の自宅へは、警察から電話連絡が行っており、また明朝一番の峡谷鉄道で救助隊が樺平へ上がってくるとの連絡を受ける。

18:3 留守番本部へ連絡。事故報告。駅員から、弟さんからヘリコプターの要請あり、臨時便で救助隊が上がってくるとの連絡を受ける。

22:30 富山県警山岳救助隊と合流。

8/27 5:37 関西電力上部専用鉄道臨時便にて樺平出発。

6:00 折尾谷横抗着。川原へ出る。

6:05 岡本氏とザックを発見。死亡確認連絡を留守番本部へ入れる。

11:45 宇奈月駅着の岡本氏の御両親、親戚の方と引き合わせ、主将、部員 10 数名と合流。黒部本署にて検死。「全身打撲による即死」とのこと。

5 事故原因の究明および反省

パーティー面での反省

- ・この事故の直接的原因としては、極度の疲労のためある種の異常をきたし、本人の不注意（後で事故現場から発見された、ラジオ、地図、コンパスから推測）、疲労と気の緩みが複合した注意力散漫などが考えられる。
- ・この人数で、この山行を計画するのであれば、装備、食糧等の軽量化にもっと細心の注意をはらうべきであった。しかし、実際の食糧計画はメンバーの歩荷力を無視したような贅沢なものとなり、装備に関しては、例えば燃料の EPI ガスに対する知識不足のため必要以上のカートリッジを持つことになった。岡本氏自身も酒の差し入れや、下山後の普段着など必要以上の装備を歩荷しており、事故当日もおそらく岡本氏のザックが最も重かったと推測される。
リーダーは本来、適切な判断を下せるように肉体的負担を極力軽くすべき立場にある。
- ・トレーニング不足。7 月下旬の夏合宿以降、メンバー 4 人ともトレーニングは皆無であり、30kg 近い荷を背負うであろうことは初めから予想されていた。にもかかわらずトレーニングを怠ったことを反省しなければならない。また、山行前のミーティングも不足していた。

行動面での反省

- ・入山日から事故発生日の前日まではごく順調に行程を進めていたと考える。しかしながら、リーダーとしての精神的、肉体的負担が大きかったことも事実だろう。
- ・事故発生前日は就寝時間がいつもより 1 時間遅れ、このため翌日の起床時間も 1 時間遅れたが、これは、下山を前にした気の緩みの表れだったと反省する。
- ・当日の暑さ、道の歩きづらさからくる疲労、長期の山行による疲労の蓄積等を考慮し、阿曾原小屋では停滞すべきであった。そもそも阿曾原小屋は予備の場として計画に組み込まれており、予備日も 2 日残っていた。
- ・サブリーダーは、メンバーだけでなく、リーダーの体調も把握し、リーダーの判断に盲従することなく適切な対応をとらなくてはならないことを反省する。
- ・水平歩道についてはかなり緊張するだろうと予想していたが、しばらく続いた散歩道のようなルートの安心感と下山当日ということが気の緩みを招いたと思われる。山においては、いかなる時も決して気を抜いてはいけないという大原則が守られなかったことを反省する。

執行部としての反省と今後について

- ・執行部は、一部のメンバーは合同執行部として前年度から経験していたが、多人数であることも重な

って、新たに自分たちが執行部を動かしていくという責任感と自覚が一人一人に欠けていたということが考えられる。

- ・我々は長い歴史を持ちながら「YVV とはこういう団体だ」という答えさえ見いだしていない。しかし、最近では、個人の趣向性重視の側面と、全員が真剣に山に取り組むという側面を合わせ持っているからこそワングルが楽しいんだ、という考え方が多くの部員にあった。

しかし、実際には現在の YVV は、個人の趣向性を尊重する方向に気を取られていた。

そのため、クラブ全体としての山に対する（危険に対する）共通な意識が薄れてしまった。

- ・事故後のミーティングにおいて意見を交わし、「ある程度のレベルの山に登り続ける以上、部の構成員全員が山に対して共通の意識を持ち、危険を防いでいく事が当然の責任である。もし仮にクラブ員個々の趣向を尊重するのであれば、フィールドの縮小、山の上限の引き下げ等により危険を少なくすることが必要である。しかしこれは、我々の望むことではない」という結論に達した。



6 お世話になった方々

- ・富山県警察本部
- ・黒部警察署 樽見氏、清水氏、伊藤氏 他各位
- ・宇奈月方面山岳遭難救助隊
- ・黒部峡谷鉄道株式会社
廣田氏、長谷川氏、川口氏 他各位
- ・黒部峡谷鉄道株式会社上部専用鉄道 千田氏 他各位
- ・関西電力株式会社 黒部川電力所 大場氏、五十嵐氏 他各位
- ・奥黒部猿飛山山荘株式会社 志廣氏
- ・アサヒ航洋
- ・熊友一郎氏、斉藤陽一氏
- ・横浜国大 横山学長、小川学生部長、太田工学部長、長原幸雄ワンダーフォーゲル部長
他大学関係各位

7 その他

岡本氏山行記録：合宿回数 19 回、PW 回数 7 回、雪上ツアー参加回数 2 回
合計山行回数 28 回

「遙けくも望みやまぬ峰々（岡本佳久遺作集）」から

最後に……

ここに載せるにあたって、参考にさせていただいた 1 件の事故報告書、3 件の遭難報告書、岡本佳久氏の遺稿集は、どれも、決して彼らの死を無駄にしたいくない、事故を二度と起こしてはならないという、真摯な熱い思いがひしひしと伝わってくるものでした。また、YVV50 年の歴史の中で、YVV のあるべき姿について、また、自然と人間の関わりについて真剣に求め、考える姿がありました。機会がありましたら、手にとって読んでみてください。

そして、事故報告書としては残っていませんが、昭和 51 年 5 月の徳繁氏の事故の救援隊の一人として加わった、15 期の大島 誠氏が同年 6 月に谷川岳の一の倉沢で滑落事故を起こし帰らぬ人となりましたことをここに記しておきます。事故報告書の代わりに、同期友人の手記を掲載させていただくことをお許しください。

西浦 章予（15 期）

大島君を偲んで

牛窪 肖 (15期)

大島君が谷川岳 一ノ倉沢で亡くなってからもう 30 年になる。

彼が亡くなったのは今と同じちょうど梅雨時のどんよりとした曇り空の一日だった。

大島君は一年先輩の Tさんと、確か一ノ倉の 2 ルンゼ～B ルンゼを登る予定で出かけ、天候が芳しくないで南稜のテラスまで上ったところで計画を中止し、写真を撮って引き返そうとしたときに恐らく本谷バンドへのトラバースで足を踏み外し、一ノ倉沢本谷に落ちそのまま帰らぬ人となったのだった。

南稜のテラスまでは気をつけなければいけない所もあるが、アプローチの範囲であり通常特にザイルをつけることもなく行き来しているところである。本谷バンドへのトラバースもアンザイレンの必要は特に感じられないところである。

大島・Tさんペアも南稜のテラスまでは問題なく到達し、先を慮って計画を中止した。Tさんは大島が落ちたとき、離れた位置にいたため目撃はしていなかったと聞いている。

私は、そのとき大島から同計画に誘われていたが、人より遅く国大を卒業して就職何ヶ月目だったためと、今から思えば恐らく一ノ倉に怖気づいて、同級の H君と広沢寺のゲレンデに行ったのだった。帰宅したとたん大島君の事故の報を聞き、上野駅に集合しほかの方々と土合に駆けつけた。

ちょうど、当時 YWV で懇意にしていたいた登山用品店のジャヌーの古川さんが、ラジオで大島の事故のニュースを聞きすぐに土合まで駆け付けていただいていたおり、土合山の家で古川さんの JCC の方々と他の YWV 関係者に的確な指示を与えていただいていたおり、幸いまだ残雪が多い時期だったため翌朝早いうちに大島君の遺体を一ノ倉出合い近くまで下ろしていただき、速やかな収容ができた。

私は、経験も少ないため収容要員ではなくサポート要員で遺体収容作業を見守っていた。シュラフにくるまれた大島君を一ノ倉出合いに近い雪渓まで下ろすと、体をきれいにしあげようと誰かが言い出し、私は血のついたヘルメットを水で洗ったのだった。

大島君の実家は目白の閑静な所にあり、1 年浪人して国大の工学部に入ると同時にワングルに入部し、当時工学部があった弘明寺の丘の上の下宿に住んでいた。

同期は 20 名以上いた。ワングルの何回目かの黄金期といえる時代で、私も同期 (15 期) 入部。歓迎 W、新人合宿、夏合宿などをこなし、妙高の山小屋の冬合宿では、山スキーで三田原山へ行ったメンバーになっていたと思う。

大島は、漫画の「まるでだめ男」にどこなく似た風貌で 160cm 強の小柄な体ながら歩荷力もあり、上級生の信頼も厚かったと思う。リーダー学年の 3 年になるころには同期は 6・7 人に減っていたが、大島君は審査委員長として活躍し後輩にも親切な人だった。

ワングル仲間横浜に飲みに行くと隣で飲んでいたグループが先に帰ったりすると知らない人たちの残したものでもまだ食えるぞと言って勝手になべの残りを突っついたりする豪放なところもあった。もちろん他の皆もそのお相伴に預かったものだ。

彼はもともと心臓に少し持病があったが、医者に相談したところ Rh - の人が山に登るようなものだといわれたとあってあっけらかんと山に登っていた。3 年を終了すると当時は OB 予備軍扱いで比較的自由な行動が許された。そんな中で大島君は山にだんだんのめりこんでいき、頭は良いのに単位を修得せず 1 年・2 年と留年していった。

当時は、学園紛争が沈静化していたとはいえまだまだ社会が騒がしい時期で、国大でも内ゲバで死者が出たりしたこともあった。大島君は中々の論客であったが、あまり政治的なことには関心を持っていなかったように覚えている。

4 年次から 5 年次には当時誰もやっていなかった沢登りや岩登りにも興味を示し、50cc のバイクを買って色々なところへ行っていた。時には国道 246 のバイパスを、50cc のバイクでスピードを出しすぎて白バイに捕まったなどと話していた。

仲間には、1 年先輩の Tさん、同期の H、1 年下の H などがいてよく大島君の下宿に集まって飲んだりしゃべったり楽しく過ごし、また追浜まで行って鷹取山で岩登りの練習をしていた。

そんな話を聞き同じく留年した私も仲間に入れてくれと頼んで丹沢の沢登りに連れて行ってもらったのが最初だった。その後、丹沢や八ヶ岳、谷川周辺の沢に行ったり鷹取や広沢寺のゲレンデに行ったりしながら、いよいよ谷川岳に行こうという話が出たのだった。

大島君は、写真にも凝っていて、下宿の押入れで現像をしたりしていた。山にはいつもカメラ持参で私の古いアルバムにも彼からもらった写真がいくつもある。

愛すべき大島君を亡くした穴は、肉親のみならず僕らにもぼっかり空いたのだった。

大島君（家）の墓は、青山墓地にある。

合掌



苗名小屋と共に

山小屋建設の趣旨と経緯
やっぱり山小屋はいい
小屋日誌より



春を待つ苗名小屋

山小屋建設の趣旨と経緯

小屋委員 郡司 直樹（４期）

昭和 39 年夏ごろ現役・OB それぞれに、心の故郷となる自分たちの山小屋を持ちたいという機運が芽生えました。そこで、同年 11 月に現役・OB 合同で、山小屋建設の可能性を探るため山小屋調査研究会が発足しました。調査研究会では、他大学 WV 部の山小屋保有状況調査、候補地への郵便による問い合わせなどを行いましたが、結局は現地調査が必要なが分かりました。一方、建設資金は他校の調査例から、百万円規模の資金が必要になることも明らかになりました。

昭和 40 年 3 月に、山小屋建設に関する全体討議のため第 1 回現役・OB 合同総総会が開かれ、これまでの調査結果報告を受けて YWV 創設 10 周年記念事業の一環として、山小屋建設を行うことが決定され、現役・OB 合同の山小屋建設準備委員会が発足しました。

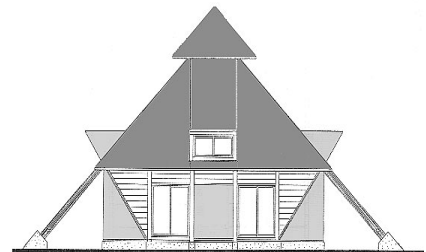
準備委員会は手分けして栃木、群馬、新潟、長野の県内を現地調査して、山行、スキー、交通の便などの条件から、銀山平（奥只見）と笹ヶ峰（妙高高原）を第一級候補地として選定しました。10 月には銀山平と笹ヶ峰を第二次現地調査して、現地の状況がより明確になりました。

同年 11 月に準備委員会がその任務を完了して解散し、山小屋建設委員会が発足しました。しかし、現役側は山小屋建設には資金だけではなく労働の提供も求められるとして、当時の現役執行部は「恒例の年間行事に支障をきたさない範囲でしか山小屋建設に協力できない」という意向であることが確認され、現役と OB の山小屋に対する取組み温度に差が認められるようになりました。それでも、翌年現役の新委員が両候補地について総合的に詳細な現地調査を行った結果、銀山平は積雪期の交通機関に問題が、笹ヶ峰は水場の確保に問題があることが明らかになりましたが、建設委員会からは広く周辺を調査して水場を確保する条件付きで笹ヶ峰を山小屋建設予定地として最適であると答申されました。11 月の第 2 回現役・OB 合同総総会で、山小屋建設構想は原案通り採択され、今後、昭和 41 年冬期の現地状況調査、42 年夏水場確保の現地偵察と土地賃貸契約、43 年春建設会社と工事請負契約、43 年夏山小屋建設、43 年秋山小屋落成のスケジュールで進めることになりました。このときの予算は、総額 110 万円で、現役負担分 50 万円、OB 負担分 60 万円でしたが、実際には山小屋建設費 145 万円以外にも現地偵察費などがかかり総額約 220 万円を要したので、現役は毎月 100 円 / 人の山小屋建設費積立てだけではとても足りず、資金稼ぎにダンスパーティーを開いたり、大学祭模擬店で収益をあげたり、個人的にアルバイトをしたりと大変苦労されたそうです。OB 負担分も山小屋建設寄付金を 1 万円 / 口で募りましたが、田中部長、柴田前部長、富丘会会員からの寄付まで頂戴しても最終的には足りず個人的に約 20 万円の借金をして帳尻を合わせました。

昭和 42 年正月の積雪期現地調査では、当初予定の池の峰付近が積雪量、風雪の向き、借地問題などで難点が抽出されましたが、夏の現地調査隊が現在の立地に岡田悟氏所有の造林小屋と古井戸を見つけ、岡田さんと交渉の結果、同年末に土地賃貸借用契約を締結しました。200 坪を年額 4 千円で使用でき、周囲千坪が幕営などの目的で無料使用できる破格の条件でした。

山小屋の建築設計は工学部建築学科出身で（株）日建設計勤務の久野（6 期）氏が担当し、屋根が自然落雪する傾斜構造で、頂上にストーブの煙を逃がす小屋根を設け、豪雪対策として建家四辺のコーナーを斜柱で補強する斬新なデザインの 30 名収容規模の小屋でしたが、何分皆豪雪地域での生活経験がなかったために、実際に使用してみるといろいろな問題が発生しました。建設工事は地元杉野沢の和信建設と昭和 43 年 8 月に建設工事請負契約を結び、9 月上棟式、10 月落成式を迎える運びとなりました。現地での落成式には遠間妙高高原町長をはじめ地元の来賓 6 名、田中部長以下現役部員 35 名、松本会長以下 OB 会員 20 名が参列して盛大に挙行されました。

落成式当日に「妙高苗名小屋」と命名されたわれわれの山小屋は、YWV の活動の根拠地として、現役・OB が心をつなぐ場所としてその歩みを始めたのであります。



やっぱり山小屋はいい

小屋委員 小口 雄平（14期）

YWV 50周年、おめでとうございます。

妙高の山小屋ができたのは昭和43年。YWV 10周年の記念事業だという。

今つくづく、小屋があって本当に良かったと思っていて、小屋を造っていただいた先輩諸兄姉に深く感謝いたします。

私が初めて山小屋に行ったのは、入部間もない昭和45年の4月下旬であった。大学ストライキのあとや3月の九州での事故を受けて、ワングルもまだ十分に機能していない状態であったが、3年や2年の先輩たちが小屋へ行くというときにちょうど部室にいて、1年生で1人だけ付いていくことになった。

<現役のころ>

- ・ふつう小屋へ行くのは、上野発の夜行であった。駅名は田口だった。
- ・小屋の周りは開けた草原のようで、遠くまで見通せて明るく、カラマツがとても細かった。
- ・夏の小屋整備ではトイレのキジ汲みは1年生の仕事で、その日の晩飯はカレーだった。ペンキや防錆剤塗りもやった。
- ・夏は井戸が涸れて、五八木までポリタンをしょって水汲みに行った。・五八木荘の稲刈りの手伝いをした。
- ・2階に上るのは、木の垂直のはしごだった。・妙高高原駅から小屋までよく歩いた。
- ・冬、重いキスリングをしょってスキーを履いて長い林間リフトに乗り、途中で何人かは落ち、何人かはザックを落とした。



1970年4月1回目の山小屋 まだ庭側も小屋内部が拡がっていない



掘コタツ囲んで

・冬、小屋の2階で寝ていたら、顔の横に雪が積もっていた。

・冬、井戸の掘出しにはとても苦労した。

・早稲田の小屋はスキー場の中に、また、武庫川女子大の小屋はYWVの小屋より先の三本木のところにあった。

・石炭ストーブを入れたが、冬期間、煙突がもたず、使わなくなった。



キジ汲み

<OB時代>

・何とか大学も4年で卒業させていただき、自然に近いところで働きたいと思って、長野県に就職した。最初の赴任地が諏訪で、暫くはよく小屋に行った。冬にも1人でよく雪下ろしをした。あまりの雪の多さに絶望的なこともあった（特に昭和50年代）。本当に本当によくぞ小屋がいままで潰れずにいたものだと感じている。

・近年は、太陽光発電とバッテリーで灯りが点いたり、井戸から水が引けたり、トイレが洋式になったり、1階の倉庫に窓が付いたり、2階が広がったりして、使いよくなった。

山小屋は、ワンダラーにとって翼を休めたり、次の目的のための準備、あるいは、小屋に居ること自体が目的でもいい、いろんな意味でとてもいいところである。周りの環境にも大変恵まれている。

私たちの世代以降は、妙高の山小屋は最初からワングルと一体のものであったと言ってよいと思う。私にとっても山小屋は、強烈な、静かな、楽しい、せつない、なつかしい、恥ずかしい思い出が一杯で、自分史の大事な部分であり、一生の付き合いとなったようだ。

またこれからも、楽しませていただきたいと思っている。



小屋から少し先に行ったところにある大きな木 小屋に行けばたいていあいさつに行く

小屋日誌より

昭和 43 年 10 月 27 日(日) 曇後晴

落成式参加者

部長 田中裕

来賓 岡田悟様

竹田表治様(和信建設社長)他 2 名

遠間徳三郎様(妙高高原町長)

竹田之保様(杉野沢財産区管理会会長)

OB

1 期松本正雄・嘉納秀明

2 期米屋勝利・宮崎紘

3 期井上肇・井田貞司・江崎伴雄

4 期跡部一博・郡司直樹・谷上俊三、
永見(谷上友人)

6 期菅谷光雄・密島英二

7 期束田美智子

8 期森正之・溝田隆之・佐木誠夫・田中稔・
高橋弓子・鈴木和子・芦川智

現役

9 期(4 年)三浦煌太郎・鈴木弥栄男・朝倉
収・木下三男・近藤元恵・加藤優子

10 期(3 年)伊藤充彦・丸山英明・村田尚
雄・山本陽一・佐藤一祥・鈴木紀子・
林俊宏

11 期(2 年)高橋秀雄・中林康明・稗田省
三・丸山純・野田一夫・桜井謙一・二村
絹江・長谷川

12 期(1 年)岡戸秀夫・桐生真紀子・中村・
久志本・阿部・神谷・本間千賀子・秋野
直子・日下育子・上田・北村(さ)

27 日の朝は冷え切った北の空に妙高の外輪山
が白いペールをうっすらと、まとっていた。

紅葉に色取られた妙高山、黒姫山の雄々しき姿
すべてをすっぱり包み込むような野尻湖の静寂
を保ち水面を見晴らすこの地に、我等の山小屋は、
より雄大により閑寂に立っている。

これから我々はこの山小屋の柱に、どれ程の思
い出を刻み込むことであろうか...

我等の故郷、この山小屋の為に盃を交わそう!

H.M.



昭和 43 年 11 月 23 日(土) 晴

11/22 10:59 上野発(実際は発車が 10 分遅れ
た)

11/23 6:50 田口着 7:30 杉野沢着

杉野沢では岡田さん宅へまず行って横浜より
持ってきた落成式記念品と、主将にたのまれた
YVW SKYLINE の Back-Number 3 冊を渡した。
ベランダの板張りはしないという伝言を言い始
めると、岡田さんは言下に、「板張りせにゃあの
山小屋一年もせぬうちにだめになるよ」と、俺達
の言うことを押さえて、積雪のものすごい重みの
ことを強調し、俺たちは返す言葉もなく、ことわ
るにことわり切れず、岡田さん宅を後にした。無
駄だといわれたが、山下が苦勞してもってきたビ
ニール、言われた通りベランダに張ることに、山
下と竹内さん宅へ行く途中で決めた。

主将がたのんでおいた角材とベニヤ、何寸角か
(連絡が不徹底だったとみえ)分からなかったと
かで 竹内さんではまだ用意しておらず、すぐ電
気ノコで一吋角の角材一間の長さのもの 16 本引
いてもらった。山下と二人でその間買い出しをし
ていたところ、岡田さんが又来て、山小屋までの
車の調達をしてくれた。そのお礼にたばこを・・・
といわれ、2 箱買って来た。原材を運ぶためのよ
うな大型のトラックで、山下と俺の他、3 人の中
年の男の人と後の荷台に便乗した。車がでるとき
あわてたので、途中で竹内さんに用意してもら
った釘を忘れてきた事に気付いたが、又杉野沢へ
買い出しに行くこともあるとそのまま小屋まで
行った。トラックからおりる時、運チャンにたば
こをあげたが「いい、いい」と、なかなか受け取
らなかった。

9:00 山小屋着 山小屋の入口の扉がガラス戸
なのは意外だった。ひととおり山小屋の中を見て
一服してから食料の必要なものを調べて 10:30
杉野沢へと出かけた。行きはランニングと歩き、
帰りは杉野沢から妙高高原スキーロッジまで小
型トラックに乗せてもらい、その後歩き。

12:20 山小屋着 それから山下とインスタン
トラメンをつくり食べた。2:00 まで昼寝など
してから、ベランダにビニール張りの作業をはじ
めた。歌の文句ではないが、作業中、『無駄と知
りつつ張りました♪♪』などと思った。

ビニールはたっぷりあったが、テープがまった
くたりず、最後は手を抜いた仕事をやることにな
ってしまった。・・・ワングルの連中の考えるこ
とは甘いな・・・ベランダの前に板張りしないで
一冬もつと考えたり・・・YVW 部員 = 甘い考えの
持主、オポチュニスト。

3:30 作業終了 雨戸は明日北村も来てからつ
くことにした。

5:00 メシの準備(4:00 山下が天気図をとる)

これから 3 日分と・・・8 皿用のカレーのもと
で具をたくさんいれ、随分水増しして液状のカレ
ーをつくった。それでも国大の食堂のカレーより

うまかった。(本当に！)

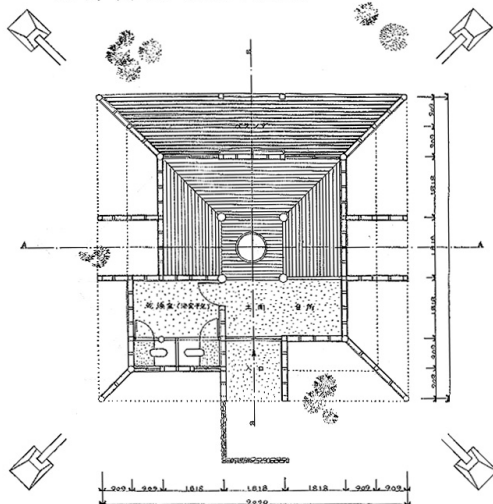
7:00 から 11:00 まで、歌をうたったりだべったり・・・二人でワングル観、サークル論(?)をたたかわせた。さえた二人が話し合ったんだから内容はおして知るべし!! 用たしに外に出てあおぐ空に星がこぼれんばかりに輝いていた。そういえばラジオでも先程、明日の天気は快晴と告げていたっけ。空にある星すべてが今俺の頭上にあるという気がした。星の名前位おぼえたい。それから星についていろいろな秘められた物語も知りたいと思った。野尻湖方面の街の光も星座のように輝き、その光がゆらゆらゆれていた。小屋の中で二人のはなしもつき 11:00 山下が先に寝て、俺もしばらくして眠りについた。

今日考えたこと

* この山小屋はどのくらいもつだろうか?
(山下と二人で昼間小屋の中で横になり休んでいるとき、少々強い風がふいた時、小屋がゆれたのにはびっくりした。)

太田

設計図面(1階平面図)



昭和 43 年 12 月 29 日 (日) 雪

佐木、池原、佐木(弟)入山。高谷池をねらうため、スキー冬山装備多く、2回に分けて荷上げ。第1回目、杉野沢リフトは歩き、第1・第2リフトは乗ったがキスリングでは不安定。決死の覚悟である。第2回目、杉野沢リフトは乗ったが、第1・第2リフトは時間切れ、歩き。結局杉野沢から全コース歩いたことになる。全荷上げを終わったのは夜6時。

すでに真っ暗である。積雪 40cm。

8期 佐木 誠夫

昭和 43 年 12 月 30 日 (月) にわか雪

森入山。小屋に人無く、三人は高谷池へのテイスツに向かっているらしい。

21:30 就寝。

明日の行動予定(池原、佐木×2)

12月31日 4時30分起床 5時30分出発
笹ヶ峰を経て、今日の荷上げ地点まで行き、高谷池に向かう。高谷池泊まり。

1月1日 火打。アタックの機会をねらうが無理せず、その日のうちに帰る。ピバーク用具、スキー用具一式、食糧1月3日朝まで。他に予備2食。

8期 森 正之

昭和 44 年 1 月 1 日(水)

明けましておめでとうございます。

昨年1年間はワングルにとっても画期的な年でありました。10周年を迎えてこの山小屋を心のふるさととして益々発展せんことを心から望んでおります。ここまでクラブを発展させ、山小屋まで建てるに至った諸先輩方、又、現役皆様様に新年の挨拶と共に、感謝申し上げたいと思います。私、個人としても 昨年は色々な事があった年でした。卒業・入社 又個人的生活、精神的な面にも記念すべき年でした。この1年が 今年の実績に通じるか、墮落に通じるか、今申し上げる自信はありませんが、自分なりに納得のいく年にしていきたいと思います。

昭和 44 年元旦

8期 森 正之

昭和 44 年 1 月 19 日(日) 天候 晴

神奈川大学 WV 国大山小屋偵察隊

渡辺、宮崎、猪俣 以上3名

雪積 約 1.5m

上野 Sat. 10:59 田口 am 6:57

バス 田口 st 7:00 お宮前 am 7:20

お宮前より岡田さん宅にて状況を聞き、9:30 小屋に向かって出発。林間コースのゲレンデに沿って歩く。まさに、ゲレンデにゲルの穴を1コ1コつけながら、申し訳ない、リーダー命令。11:20 半分バテぎみながら到着。

偵察内容

1. 小屋までのアプローチ

2. 小屋の環境(内外)

3. 小屋の利用環境

4. スキー場 etc

1) →未完成な小屋。外見は近代的な建築、板の間の上に雪が約3cm積もっていた。

2) →スキー場、広々としてゲレンデの人もまばら。雪質悪し。リフトも長くていいが、それに比例してリフト代も高い。

- - - 感じたこと - - -

未完成な山小屋の物語。

早く一人前の小屋になりたい。温かい小屋であ

りたい、そう願うのです。この小屋へ泊まる人々よ、もし私を本当に愛しているなら、温かいストーブをそなえつけておくれ。夏に君達の運んでくれたマキが、小屋の中に在りさえすれば、きっと、君達の友達になれるでしょう。小屋のエントツから出る煙にむせびたいの・・・。

- キザなやつ - 神大 WV

昭和 45 年 11 月 5 日(木)

ローソクの光の中で、そして傍らに あったかあいストーブにあたりながら、やっとできた 2 階をながめて、やっと「一人前になったナー」と感じたのです。今度で丁度、山小屋に来るのは、10 回目になりました。その「できあがった山小屋」を、初めに使えるなんて...。素直に書きましようか。「アタリメーダ。オレタンチンが一生懸命やったんだから」。でも、それはどうでもよいことでしょうか。なにしろ、使用可能条件をなんとか越えたのではないですか。これで少しは、人間の生活ができる目処がついたのでしょうか。ふと、天井を見上げて、もう露骨というか、ダイナミックと言うか、迫力のある、けれど、余りと言えばあまりにも芸術的な空間は消え、代わりに 2 階という仕切りができました。畳も入り、今まで行くのが難しかったベランダの上に、目をつぶっても行かれるなんて。最初、山小屋委員会で改修工事の計画を練った時、こんなになりっぱになるとは、想像も出来なかったのです。ちょっと高いかなとも思われる 23 万円ですが、出来栄は素敵だな、と思います。一つ一つ良くしてゆくことが、これからは、山小屋の肉になるのでしょうか。ローソクは燃えて無くなってしまふけれど、山小屋は一つ一つ大きく立派になってゆかなければならないのかしら。山小屋が大人になるには、まだまだこれからなんだろうね。でも何故か、うれしいんです。でも間違えては困ります。A と一緒だからだと思ふけれど、でも考えすぎても困ります。いろいろあるのですから。でも・・・。でも、安心しました。

オカド

昭和 46 年 8 月 3 日(月)

山小屋整備：8：30 - 仕事 - 10：00 (休み)

10：30 - 仕事 - 12：00 (昼食、食休み)

13：30 - 仕事 - 15：00

(小屋の周りの整頓、整地、ゴミ穴掘り、溝掘り、床のペーパーかけ、煙突直し、防腐剤塗り)

朝、高橋さんが入る。4,5,6 隊が上の事をやり、1,2,3 隊は、下の風呂へ入りに行った。午前中陽射しが強くて参りました。...昼休みは もっと欲しいヨー

3 年 竹村昇 13 期

新しい防腐剤を塗る。草を刈る。取る。穴を掘る。溝を作る。床を磨く。この続きは後で書くとしよう。今は眠たい。

夏合宿、終わった。唯、無事に終わって嬉しいという気持ち。明日からは科の合宿、今、皆の居る小屋を去りたくない。山小屋、僕の YWV 存在の中の大半を占めている。現時点における夏合宿の総括。

まず第 1 に感じたのは、二年とは一体全体何なのか分からない。中途半端な存在、来年僕たちが夏合宿を行っていけるのか、まとまりの無いことが頭の中に浮かぶだけ。ただ一つ嬉しかったのは、僕の今まで行なってきた行動の一部ではあるが、一年生に理解された事、それも最後の銀山平で言われた時嬉しかった。これだけでも僕が夏合宿に参加して良かったと思う点である。数々のことあった、言いたいこともたくさんある、これから一つ一つじっくり考えたい、今はただ疲れた、それだけ。

2 年 高木展郎 14 期

8/3 山小屋、現役連中多数。

今回の予定、8/1 戸隠、8/2 笹ヶ峰、8/3 野尻湖、8/4 帰京という家庭サービスの予定であったが、娘、風邪の為ワイフ共々不参加。小生一人にて、8/2・3 と山小屋の見物。外見、開所の頃と変わらず、内部造作かなり増加。人間、ハーフ OB の桜井、高橋両君以外、見知るもの皆無。時代が変わった。

OB 井田貞司 3 期

昭和 50 年 12 月 29 日(月)

今日、冬山訓練 21 名 元気に小屋を出ていきました。小生、22 日の夜行で上野を発ち、23,24 日とスキー講習会の始まる 25 日午後までスキーの練習を元気にやっていたのですが、25 日午後 3 時頃右足首、右足膝を捻挫。今日まで小屋から一步も出ずに、じっとがまんしているのです。スキーが出来ないのは、まだ我慢ができます。だけど、無い金をはたいて装備をそろえ、寒空の下で冬山の為だと我慢して交通量調査などというバイトを 2 日間やって...授業には出なくても meeting には参加して、冬山の本を買って勉強して、天気図も取って・・・。這いつくばって行けるものなら行きたかった。昨日の夜、みんながパッキングしているとき、何と足の怨めしかったことか。みんなが出ていった後のひっそりした小屋に居ると気が滅入ってくる。こんな事、いくら書いてみても仕方がないのだ。今はもう、唯みんなが元気で帰ってくる事を。

今回のスキー講習会は事故が多かった。昨日は井上と弓削が熱を出してスノーボードで下って

行った。井上も今頃は横浜で残念がっているのだろうか。

また午後には、村山さんが足を骨折。僕の捻挫なんて忘れられた存在だ。

今日は一年の女の子も3人残っているけど、明日からはOB連に囲まれて小屋に残んなきゃ。

1年 徳繁 19期

昭和59年8月25日(土)

一日早く小屋に来ました。明日から小屋合宿が始まります。今年は小屋前に頸城に行くつもりだったんですが、焼山の活動がまた盛んになってきたということで中止になってしまいました。岡田さん、丸山さんだいじょうぶだったんでしょうかねえ・・・。

そんな訳で暇になった(本当のところちょっと暇ではないが)のでチャリンコで来ることにしました。マジに「やるう」と決めたのは出発前日でしたけど。

24日午前0時に下宿を出てR16を通過して入間市へ行きそこから東松山を通過して熊谷にでました。あとはR17で高崎、そこからR18で妙高です。・・・(略)・・・

下の柱、見事に折れてますねえ。これからどうするか。非常に頭の痛い問題であります。再建のためのお金を集める前に維持のための金集めで苦労するなんて・・・

26期 大村

昭和59年8月26日(日) 12:40~

小谷温泉—金山—焼山—火打山—妙高山—燕温泉のはずだった。私も左の大村君同様、妙高のP.W.がつぶれて残念に思っているところです。約10ヶ月ぶりの山行にむけて熱心にトレーニングを積んだ上、ニッカポッカを新調したばかりでした。

今年先に逆コースをのぼったOBムトウさんのお話では静かなお花畑が広がっていたそうで。上り下りはきつそうだけれど、妙高から見た小屋とか高谷池付近の湿原とか妙高の火山地形などなかなか楽しみにしていました。・・・(略)・・・

やはりこの小屋をたてたOBの方々も、この地を選んだのにはそれなりに素晴らしい自然が周りにあるからなのです。

ちょっと興味をもったら、妙高山の5万図を広げてみると、結構いろんなことが分かって楽しいし、また「妙高山」の地図は、他の地域に負けず劣らず魅力的なものです。

まず、妙高山は大きい。火山地形で、赤倉~三田原などの外輪山が妙高山の周りにはっきりしている。そして妙高山のピークと外輪山の鞍部には、池や湿地があり、沢もそこから出ている。天狗の庭付近も湿地帯で、花々も多そうである。何

と言っても、この妙高~火打~焼山~金山~雨飾山(これは「小滝」の5万図)の頸城アルプスは山々が静かである。

2年前のPWに行った人達の談(現小屋委員長 辰馬氏 etc)を聞くのも良いでしょう。山の麓には湿原も豊富である。

みんなが良く行く笹ヶ峰は、沢がいくつも集まるところである。この豪雪地帯の雪融の水が笹ヶ峰ダムに集まり、そこから流れ出て、その豊かな水量は川底をどんどん削ったようだ。関川のまわりの等高線は密だ。

1年生は5月の苗名滝を見たでしょうか? 滝のスケールの大きさも、冬、春にこの小屋に来てみると納得します。やっぱり、雪なのですね。

地図でこの小屋の位置が分かりますか? 「シブタミ川」の「シ」の字あたりになります。ちょうど苗名の北の断崖を登ったところになりますね。このチョロチョロのシブタミも滝に通じているようですね。また南側には黒姫山もあって興味は尽きませんが「戸隠」の地図なので、興味のある人は買ってみると良いと思います。私は昨年夏、戸隠に登りましたが岩ゴツゴツのなかなかおもしろい山でした。

けれど、何と言ってもやはり「妙高山」を買うことをすすめる地図です。この小屋を整備するだけでなく、どんどん利用して、このまわりのやまやま、自然に出かけましょう。

25期 高橋みち子

昭和61年3月8日(土)

えーっと、井戸を掘ること約4時間、今年も井戸の位置には苦労しました。そこで来年からは一発で見つかるようにひもを張っておきました。

28キ Syoji Umeda

昭和62年3月12日(木)

山本主将のあとを継いだ29期主将の禅知明(ゆずりとあき)です。中国人でも朝鮮人でもありません。純日本人です。生まれだけはU.S.A.のシカゴです。・・・(略)・・・

今回小屋では遭難対策合宿と言っても、渡渉と雪上歩行とロープワークと雪洞作りしかやっていません。それと雪上ツアーを行いました。笹ヶ峰の京大ヒュッテ前にテントを張ったのですが、猛吹雪で雪洞内も雪で埋まり、なかなかスリルがありました。

が、今後課題が多く残ることになりますでしょう。・・・(略)・・・

29期 禅知明

昭和62年8月30日(日)

小屋委員長の小寺です。只今夏小屋合宿中です。

今年は少し小屋費をふんばつしているいろいろなものを買いそろえました。冬に発生した北側の柱のひび割れも直すはずでしたが、GW小屋宿泊時に依頼した杉野澤の山崎大工さんの都合で直っていません。あとで必ず直すように頼んでおきたいと思います。

苗名小屋も20年目をむかえ、歴史の重みをひしひしと感じています。みなさん小屋を愛して下さい。

P.S. 少し気になることを書いておきます。

- 1.五八木の水が年々減少している。(井戸も心配)
- 2.石油が足りるか(ガスも)足りるでしょう。
- 3.冬に小屋がつぶれないか？

29期 小寺(19代小屋委員長)

平成1年1月3日(火) AM 9:00

・・・(略)・・・今シーズンは豪雪で小屋入りは苦労した。4人乗高速第2リフト(フード付き)の登場でスキー場の人気は高まり、スキー屋の質(おしゃれ度)が進み、ますます我々にとってやりづらくなった。ザックもリフトで上げるのにも神経を使う。だが何よりも嘆かわしいのは、我々ワングルの人間もスキーウェアが主流になってしまったことである。小屋にワンピースは似合わない。基本はニッカ、セパレーツ上下だ。

30期 宮崎

平成2年12月29日(土) PM 10:40

27日に小屋に入りました。夏小屋につづいて2度目の小屋です。こんなに沢山の雪を生まれて始めてみました。よくわからないけど感動してしまいました。自分の知らない世界ってまだまだたくさんあるなーと思いました。冬の小屋は何だか妙に落ち着けます。私は小屋が大好きになりました。いつまでも建っていて欲しい。

頑張れ 苗名小屋！！！！

今、土生さん宮崎さん松尾さんを中心に歌を歌いまくっています。とても楽しい。こんな雰囲気大好きです。

明日には帰ります。90年もうすぐおしまい。

来年はきっといい年にしよう！

34期 小野恵美子

この文章に、小野さんの素直な心に感動してしまいました。ホントに。素直に感動することが最近ほとんどない。

23キ、ムト、25キ、竹 30キ田中も

平成3年2月20日(水)

O.B.になってもまだ現役と雪下ろしにきている。雪が多く昨日小屋に全員着いたのは昼近く、柱と屋根だけで一日が終わってしまった。夕方6時頃までやったとゆーのに。

今朝起きると20cmも新たに積った。あ～あ、朝イチでかえりたかったのに。

それにしても屋根。雪と軒下の雪がくっついて小屋がすっぽりうもれてるのを見たのははじめてだ。

31期 伊藤



平成3年4月2日~4月5日

4月2日

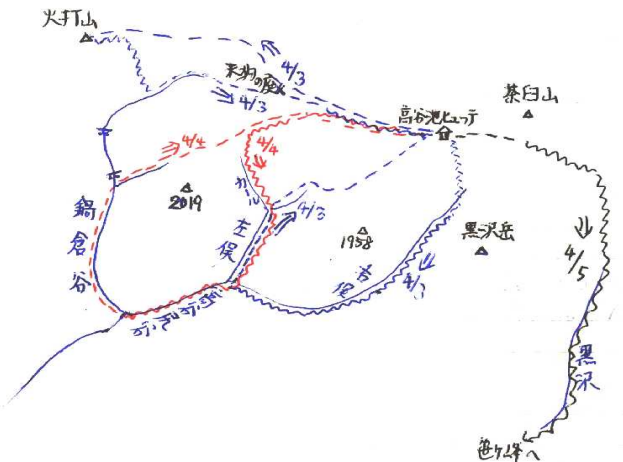
4時半起床。5:43 出発。今回のメンバーは宮崎(30キ)松尾・増田(31キ)。予定では3泊4日で高谷池ヒュッテ定着で周辺の山や谷を滑りまくるつもり。前回の3/29~30の時は笹ヶ峰経由で行ってけっこう時間がかかったので、今回は三本木から池の峰尾根 1950m 地点までは順調に進んだ。ちなみに天気は晴れ。そこから山腹を巻き気味に三田原山へ出ようとしたのがいけなかった。柄沢の源流の深い谷を 2170m地点で渡ろうとする。右岸はやや雪庇ぎみになっていて、40度くらいの斜面を進まなければならない。雪が堅くてかなりこわい。松尾・増田が先に通過する。いけると判断するが、途中でストックの握り部分にピックルのピックに似たものを取り付けられるようになっていたので制動をかけるがとまらない。20mくらいずり落ちて自然に止まった。そんなバカな。これくらいの斜面で滑るはずはないと挑戦すること4回、全然ダメで合計50mくらい高度を失った。途中で気付いたのだが、シールが両スキーの前半分くらいはがれてしまってエッジが全く効かなかったのだった。あきらめてスキーをぬいてザックにつけてキックステップで登る。当然ながら登れる。シブタミ川の滑落の時も

そうだが、スキーは万能ではないのだから、危険箇所ではスキーを外すことを考えなければいけない。

まだまだその辺の判断が甘いようだ。結局シールのりを塗って三田原山山頂まではつぼ足で登った。その後は順調に黒沢池まで滑降。茶臼岳と黒沢岳の鞍部までシール登行。そこからシールを外して高谷池ヒュッテまで滑った。小屋到着 14:45。

トラブルのせいで笹ヶ峰経由のときと比べても全然時間短縮にならなかった。トラブルといえば雪質のせいでシールに雪がダンゴのようになっていて歩行の障害になった。スキンワックスとやらの使用も考えねば。天気予報によるとこれから2日間は晴れるらしい。

- 4月3日快晴
.....(略).....
- 4月4日快晴
.....(略).....
- 4月5日



今日は下るだけだ。晴れ。茶臼～黒沢岳鞍部から黒沢池へ滑り下りる。一度も転倒せずに黒沢池まで下った。そこから南へ黒沢の流下口まで滑走。ほとんど平ら。黒沢へ入る。途中まで快適に滑る。中盤から兩岸が切り立ってくる。流れが出ている部分があって左岸のシュプールに従って高巻こうとするが行き詰まる。横滑りというか、横ずりおちで切り抜けた。その難所を過ぎると真夏の渡渉点近くに出る。流れの出ている地点で水を汲むが、ポリタンごと沢に落としてしまった。それを拾うのに四苦八苦する。その後は京大ヒュッテまで緩斜面の樹林帯を、木を右に左によけながら快適に下りる。今日はそんなに暑くなくて助かる。笹ヶ峰からは山スキー2人はシールをつけて、私はノーシールで滑走する。時々、この4日間というか12日間というか余韻を惜しむかのように大休止してぼんやりとする。苗名小屋 12:33。今回の山スキーは、天候に恵まれ、冬山の要素もほとんど無かった。しかし何度も滑降したりして怖い目があった。これから山スキーを始めようという人も、十分に覚悟して、技術と知恵を駆使して楽しんで欲しい。妙高・火打山塊は奥が深い。西の天狗原山・金山・焼山北面や高松山・昼間山なんかはまだ手もつけていない。この山塊は日本でも最もスキーに適した山の一つだ。その山麓に山小屋を持っているのだから利用しない手はない。

30キ 宮崎

平成3年9月9日(日)

夏期合宿に度々お訪ね下さったが多忙のためリーダの木村様(主将:33期)に御逢い出来ず残念でした。

今春杉野沢区長と財産区管理会長へ陳情した飲料水の件、お逢い致して再三再四督促を御願いして頂き度かったのですが、実現出来ず残念であった。

仲々困難な問題であるが、熱心に運動継続しないと遅々として進まず来年と云はずに両者に手紙でも良いから御願いをして見て頂き度く、清酒1級2本宛寄贈して頂きたく思ひます。以上

管理人 岡田 悟

平成5年12月29日(水) 18:00

34期数名に裏切られながらも今年もやってきました。冬小屋1年生3人と私とでおとといの夜出発してきたのですが、いやー昨日はひどい目にあった。リフトの運行は16:00迄と放送で何度も言っていたにもかかわらず、何故か15:30頃止まってしまい、サンアントンから30kg近い荷物を歩荷して、しかもスキー靴で、小屋に向かったのだがJバー乗場付近で日が暮れてしまい、新雪の中をラッセルして小屋に着くのは無理と判断、そこから引き返してグレンデにもどったはいけど明かりははるか先、という状況でマジでヤバかった。スキー場で遭難なんて笑い話にもならないので、根性で杉野沢までおりた。途中で両足がケイレンし始め、すごーく恐かった。下に着いたのが19:30頃で、五八木荘に泣きついて泊めてもらった。今日はなんとか無事につけたが、やはりはじめてスキーを履く人にザックまでもたせて滑らせるのは無謀ですね。

34期 村山

重いザックを背負いJバーリフトの事務所前で引き返すことを決めたときは本当にどうなるのかと思った。雪は強くなってくるし、日は暮れてくるし……。しかし唯一の頼りはナイターの光だった。この光のおかげでどれだけ助かっただろう。しかし、この光も一時ガスのせいで見えなくなり、この時は本当に焦った。まあともかく今日こうして無事に小屋にいたことができて本当によかった。

37期 佐々

平成6年8月3日~4日

夜、外へ出たら満天の星空だった。星が多すぎて星座がよくわからないと妻はボヤいているが……。空がせまいせいでもあるだろう。

噂の苗名小屋……。とうとうやってきました。あっ、申し遅れました。私共、横国の卒業生でもなければ、(勿論ですが)YVVの卒業生でもあ

りません。36期渡邊の両親でございます。

息子共が年に何度も出かける苗名小屋を一目見んとて、下界は気象庁観測史以来の猛暑の中はるばる妙高へとやってきました。思いの外、大きくて立派な小屋で快適な一夜を過ごしました。ノートをのぞけば、現役、OBの人々に有効に活用されている様子が伺え、大学にも出身WVにも山小屋を持たない身としては大変羨ましく感じた次第。いつまでも、この苗名小屋を大切に下さって下さい。

PS その昔覚えたこんな歌を思い出しました。

みすばらしくとも 心やすけく

日毎の糧は貧しく

ふしどを巡りてネズミたわむる

古びし我が山の小屋

丸木の柱にガラスなき窓

屋根よりもれくる吹雪

荒野をさまよう飢えし狼

古びと我が山の小屋

誰の作曲か忘れましたが(外国の曲です)短調の深く沈んだ哀愁のある曲です。

大変お世話様でした。それでは又訪れる機会があることを願いつつ、小屋を去ります。

平成6年8月4日 (快晴)

渡辺文隆(50才) 京子(47才)

平成7年3月1日 (水)

春小屋合宿でやってきました。2月23日~2月26日までの4日間雪下ろしをし、2月27日、28日と雪上ツアーを決行。天気の方はこの一週間大きく崩れることもなく順調に日程を消化できホッとしています。今年は近年まれに見る大雪のため雪下ろしが大変で、はじめにみた小屋は全身雪に覆われまるでUFOのようになっていました。まあこの雪に耐えられるようならこの小屋もまだ大丈夫でしょう。

□ワングル現役現勢力

3年生7人(36期) (男5人、女2人)

2年生6人(37,38期)→現役執行部(男6人)

1年生6人(38期) (男6人)

現役は次回5月の連休の後半に、新1年生を連れて来る予定です。

37期 佐々健太郎

平成7年8月11日(金)

10年ぶりに小屋に来ました。子供連れで、女房とここに来るのが、昔からの夢でした。本当になつかしく思います。現役の皆さん、本当に小屋をきれいにしてくれるみたいで、本当に有難う。これからも頑張ってください。お酒1本置いておきます。今まで何もしていないOBで申し訳ありません。

20~26期位の仲間とは時々会っています。小屋の再建、小生も元小屋委員長、前後の仲間へ声掛けして、微力ながら頑張ります。また、よろしく

22期 津江 真行

平成7年9月13日(水)

山林管理のため来て小屋を見る。よく整理整頓されて居り、サスガ横浜国大ワングルだと驚き感嘆する。

管理人の五八木荘主人 岡田悟

平成7年12月31日(日) (滞在6日目)

今朝、先生がお帰りになられた。そして又、僕は小屋とふたりきりになった。土生先生との語り合いのひと時は、あっという間に時間が経ったようでとても充実していました。先生には本をじっくり読むのを妨害して申し訳なかったように思います。でも、僕にとっては山小屋でしか会うことの出来ないOBの方との出会いは山小屋の存在目的のひとつでもある「OBとの交流」が初めて実践できたようで感激ものでした。ありがとうございました。

また今日も快晴の中ゲレンデに出ようと思う。そして新たな訪問者が来るのをわずかに期待しながら過ごそうと思う。

38期 伊藤栄二

平成8年8月16日(金)

27年前に夫とはじめて会った国大山小屋。その時のノートがまだ残されていたので、驚き喜んでます。山小屋がとてもきれいに使われていたの感謝します。

フェリスWV OG 村田敏子(旧姓 森)

平成9年7月19日(土)

小屋に来たのは1年の雪上以来だから1年4ヶ月ぶり。4月に一回やめた私が1年生と共に小屋に来ているなんて・・・続けてよかったなあと思う。それに今日はOBの方々もたくさんいらして、嬉しい限りです。人数が減ってもやらなくては・・・と思いながらやってきて、最近やっと自分が続けていることに納得できるようになってきた。

明日早いのでまた下山後に。

39期 山崎美穂・養護科3年

平成9年10月12日(日)

昨夜の飲みっぷり、暴れっぷりはすごかった。きっとパラグライダーの方々も、もう来ない、と思ってんじゃないかなあ。二階から板4枚も降ってくるわ、日本酒ふっかけられるわ、で。それ

もこれもみーんな主将のせい。

38th(岡安さん)が来るとかいつて誰も来てないから、未だに39&40thの飲み会は38thには知られていない・・・。

夏に来て年内にまた来れるとは思っていなかった。紅葉のときに来てよかった。

39期 みほ

平成10年8月13日(木)

10分程立ち寄り。

両親が小屋を見たいというので、連れて来ました。越後の地酒(2本)は父よりの寄贈です。

「案外キレイ」というのが感想だそうです。

34期 村山

平成11年5月3日(月)

現役新歓小屋

なかなかの惨状で参りました。雪下ろしが足りないのは承知していましたが、確実に仕上げたおいた筈の柱まで折れていようとは・・・。

崩壊しなかった事が救いなのかもしれません。

41期 笠原

平成11年11月21日(日)

YWVのみなさまへ

OB小屋委員会がH11年総会に於いて正式に発足いたしました。小屋委員長に就任いたしました。小屋の整備、さらには再建に向けて頑張ります。又、まだまだ力不足ですので、みなさんの参加をおねがいいたします。

30期 笹倉 実

平成12年7月30日(日)

小屋利用状況調査(その2) またまた日帰りです。北村さん骨折で入院中とのこと。その為、小屋までの下草刈りができず、岡田さんはだいぶ気をもんでいた。9月に現役・OB みんなで来てやります、と伝えるとかなり嬉しそうな顔をしていた。小屋に来るワゲルは帰省した孫のよう、とのこと。

岡田さんも歳をとられた。

31期 伊藤明広

平成12年8月9日(水)

大雪対策ほんとうにごくろうさまでした。

何もお手伝いできず、夏になって立ち寄らせてもらいちょっと心苦しいのですが、昨夜池の平に泊まって今朝一番で家族でやってきました。

子どもたちは「へえ～、すご～い」と目をまん丸にして・・・。

卒業して20年、小屋周辺は昔のままですね。なつかしいです。山小屋のそうじ、8月下旬にや

られるのでしょうか。

現役のみなさん、がんばってください。

21期 長尾晴美

平成13年12月29日(土)

今年もお世話になりました。1年間楽しみにしておりましたスキーキャンプです。子供達も大変心待ちにしておりました。ありがとうございました。

ボーイスカウト横須賀11団 助川

平成14年2月4日(月)

ちょっとだけ滞在しました。30分ぐらい。来週また来ます。スノーシュー最高。昨日は戸隠の奥社まで、今日は小屋まで、楽しんでました。

38期 細谷慎一

39期 竹内めぐみ

平成14年6月2日(日)

6/1~2と5期同窓会を苗名小屋にて実施。総勢18名、内会員14名、カップル参加7組。他の期も続け。

5期 諸角絢子



平成14年12月29日(日)

横須賀ボーイスカウト11団の保護者です。ダウン症の息子(小学5年12歳)が、今年ボーイ隊に進みました。大変なスキーキャンプと聞いて、その大変さを共有したくて一緒にやってきました。

親子して皆さんに助けてもらいながら何とかたどり着きました。まわりの景色を見たり山小屋の生活を楽しむ余裕はありませんでしたが、良い経験をさせて頂きました。息子にとってもこれからの人生の力になってくれると思います。本当にありがとうございました。

保護者 D

平成16年8月15日(日)

父の思い出をたどってやってまいりました。5年前、父が亡くなった後、母が若いころの話をよくするようになり、たびたび話に出てきたのが、

この妙高の小屋でした。縁あって上越の女性と一緒にになり、この辺まで来ることもしばしばでしたが、苗名小屋まで来られようとは思っていませんでした。

このたび、ふとしたことから、また、父の 60 歳になったであろう誕生日を迎え、訪ねてみることを思い立ちました。

母の乏しい記憶だけでなく、8 期池原様のアドバイスを頂き、また、五八木荘の岡田様の協力を頂き、やっとの思い、たどり着きました。ありがとうございました。小屋創設当時、父が資金集めにアルバイトをしていたこと、建設時に柱材の材木運びをしたことを聞き、この小屋に父の汗がしみているのかと思うと、万感胸にせまる想いです。

国大WV部の大切な小屋に立ち入らせて頂きましたこと、お許し下さい。大変貴重な体験をさせて頂きました。

この小屋が何年も続きますよう、祈っております。

森 良太(父 森 正之(8期))

平成 17 年 6 月 4 日(土)

小屋整備の呼びかけが笹倉さんからあって、池原さん、鈴木、親跡さん、遅れて小口君が参加します。

- ・鈴木、親跡君は、東側雪囲い支柱折損箇所を取り外しました。十手も支柱から外しましたので新しい支柱に取り付けましょう。
- ・西側トイレ窓、物置窓の雪よけ板を取り外しました。
- ・今年は雪が多くて、ここまで雪が来るほどでした。
- ・トイレの排気(換気)筒が雪で折損しないか心配でした。無事で安心しました。
- ・五八木荘のおじいさん、おばあさんに池原、笹倉、鈴木の3名で挨拶に寄りました。
- ・おじいさんだいぶ弱くなりました。

14 期 鈴木道夫



平成 17 年 12 月 29 日(木)

'06 年度第 1 次雪下し隊(安藤 11 期、鈴木 14 期、笹倉 30 期、伊藤 31 期、村山 34 期)



一同はすでに 4~5 年雪下しに来ているが、今回が最も積雪がある。今年 12 月の雪は非常に多かった。これは事前に分かっていたことです。笹ヶ峰は現在積雪 4m、900kg/m² と、記録的なものである。

14 期 鈴木道夫

平成 18 年 11 月 4 日(土)

昨日から小屋整備のため入小屋。今 14:00 ですが、池原さん以下 5 人は風呂のため杉野沢へ。戻ってきたら、今夜は京都大学の京大ヒュッテで 4 大学懇親会です(京大・早稲田・武庫川・国大)。武庫川の小屋は昔は国大より笹ヶ峰牧場寄りの三本木のところにありました。早稲田の小屋がスキー場の真中から今の場所に動いたのはいつでしたっけ。

ずっと同じ場所にあるのは京大と国大ですね。さらに、最初の建物なのは国大だけです。

14 期 小口

YWVOB 会ホームページより



元旦 夜明けの妙高山



朝焼け落葉松



晩秋の日が差す小屋西側

・ 部室のつばやき

部室ノート「友垣」より



YWV の部室には、何時の頃からか雑記帳「友垣」が置かれています。
連絡事項を書く。何となく書く。意見交換をするために書く。山への思いを書く。
徒然に感じたままを書く。悩みを聞いて欲しくて書く。嬉しくって書く。
・・・このようにして青春の日々が書き綴られてきました。

横浜国立大学の弘明寺・清水ヶ丘キャンパスから常盤台キャンパスへの移転に伴って、行方不明になってしまったノートも多数ありますが、現在も面々と受け継がれ、134冊にもなりました。

「友垣」は今後も YWV 部員の歴史を記録してくれることでしょう。

部室ノート「友垣」より

1959年（昭和34年）

4月 新人歓迎Wは、朝、新宿駅集合。1期小野さんが見送りに来ていました。そして川苔山へ。「あれ、先頭をわらじを履いて歩いているの小野さんじゃない」。その小野さんは山に登ると必ず逆立ちをします。川苔山でも切り株を見つけて逆立ちをしていました。

1960年（昭和35年）

4月 サークルオリエンテーション。山の姿をしてワングルが登場。壇上の2期の吉野さん。開口一番。「お疲れ様、けつが痛くなったでしょう。ざまあみろ。ワングルはけつなんか痛くならねえんだ」
6月 新人合宿はA、B、Cの3隊に分かれて、北八ヶ岳の大河原に集結。翌朝3期の渡辺さんが「3班起きろ」と叫びました。食当のC隊3班は慌てて起きました。つられて起こされたA隊3班の2期岩上さんのぼやくことぼやくこと。

1963年（昭和38年）

3月 まだパスポートが必要だった沖縄に行った5期須賀さん達。内緒でハブを生きたまま持ち帰ってきました。結局は剥製にしましたが。

1964年（昭和39年）

12月 鎌倉学芸学部が火事で焼けました。ワングルの部室も焼けました。そして、学芸学部の人達は清水ヶ丘に移動です。

1965年（昭和40年）

7月～8月 夏合宿。上野駅から家に「これから出掛ける」と電話したら、宿題の期日が変更になったと知らされ、涙をのんで出発を取りやめた8期の桂原さんと仲田さん。
金魚の歌がはやっています。1年生のコンパで加藤さんの赤い服を三浦煌太郎さんが着て金魚になっていました。夏合宿酸ヶ湯温泉で終わり、その後、弘前から奥羽線経由上野行き鈍行に乗りました。秋田駅に着くとホームの反対側に羽越線経由上野行き鈍行が止まっていた。そちらに乗り換えた7期の下村さん、服部さん達。これから鳥海山に行くのです。

1966年（昭和41年）

2月 清水ヶ丘。L会が弘明寺であるというのに、清水ヶ丘にやってきたのは、8期の上島さんに田中さん。9期の上原さん、加藤さんは春合宿の通知作り。9期の和田さんと10期小牧さんは夏合宿の総括作り。そんな中9期の渡辺さんが一言。「ワングルもそのうち分裂しそうだ」と。

1968年（昭和43年）

横国大ワングルを真に我々のサークルとしよう！学年ごとの対立のような形で問題が起きた。その原因は、6月の総会が流れたこと、常に事務的なこと、形式的なことが優先されること、大学祭展示のこと、山小屋建設途上に起こった整備、落成式の問題、その他、数々の要因があると思う。そういうことに対する反省が、全部員に必要なのではないだろうか。90名もの多くの人間を組織し、それを組み込んでいくことは大変なことだろうと思う。（中略）その改善のためには、まず部会に全員出ること、そしてそれぞれ自己を主張すること。YWVの活動の主なものがワンダリングのみならず、部会にあるということ徹底させること。さらに、有名無実化された書記でなく、書記が責任をもって議事録を作成し、常に弘明寺と清水ヶ丘の部会の内容を、互いに議事録を見ればわかるようにすることが最低の条件だと思う。

1972年（昭和47年）

7月 戦車搬出についての政府はあまりにヒドイ。オレは今、安保が正しいのか正しくないのか、いやそうじゃなくて、どのような方向に「防衛」という問題をもっていくのがいいのかはよくわからないが、少なくとも1人の人間として、戦車がベトナムに送られることには絶対に反対である。安保は日本の平和のためという。しかし、その平和を求める過程で戦争があって、どうして平和を得ることが

できよう。ベトナムの地での戦争であろうとも、ボクラは他人の犠牲の上であるなら安閑としていられるのだろうか。もし道義（最低でも）というものが麻痺してしまったなら平和が維持できるのだろうか。（後略）

1978年（昭和53年）

4月 久方ぶりの沈黙を打ち破って、またまた『友垣』の登場であります。このクラブノートは、工学部の移転が始まった3年ほど前より行方不明になってしまい、現在の部員の多くは、その存在すら知らない状態であります。ここに、4年生の責任として、常盤台に『友垣』を復活させようと、大金「120円也」を投資した次第であります。『友垣』は、部員相互の親睦を深めるために、何でも書きたいことを書く場を設ける役目を果たしてきました。これからは、このノートをフルに活用し、美しい思い出を創っていききたいものであります。（後略）

1979年（昭和54年）

6月4日 合宿明けの早朝通学はかくべつにキツイ。それにしても1年生おつかれさま。うちの隊の武藤が酔っぱらってダウン。うわごとのように「歩荷はいやだ」「はやくうちに帰ってシュラフじゃないところでねたい」「ザックをけとばしたい」とかボケーともらしていた。 鳥井

1981年（昭和56年）

10月30日 知能検査やりたい人がいたら検査します。いえ、検査させて下さい。定員3名。
職業適性検査をやりたい人がいたら言って下さい。定員2名。（1時間ちょっとでできるよ）どちらも近期中！！・・・学祭後1週間以内。 研究に燃える周子でした

11月13日 火曜日に定期券を落としてしまい、往復920円の交通費が惜しいのでみつかるまで学校を休むことにしました。2日ぶりの学校です。（無事みつかりました） 道子

12月14日 せっかく新練3次の苦しみもいえてきたと思ったのに・・・今朝起きてみると腹が・・・ウウウ、イタイ。神ノ川ヒュッテの水の復讐を受けてしまった。歩荷訓練で持ったポリタンの水を抜くのを忘れて追いコンにそのまま持っていったのだ。入れかえるのを忘れてその水でポカリスエットを作って、4隊の人はみんなウマイ、ウマイと飲んだのでした。メデタシ、メデタシ 25期 浜崎

12月16日 浜崎、お前のおかげで高山と俺は腹痛、ゲリになやまされている。コノヤロー少しは反省しろ。おこるぞー 中戸

1982年（昭和57年）

3月26日 地図が値あがりするぞー！ 5万図：150→200円 2.5万図：140→190円
春合宿中には値あがりしている（4月1日）から、今のうちに買っておこうと！！？？？
編集者注 5万図 単色刷り ¥35（'60年代） ¥60（'70年代）
二色刷り ¥45（'60年代） ¥70（'70年代） ¥220（'88年） ¥290（'07年）
2.5万図 多色刷り ¥200（'88年） ¥270（'07年）

4月12日 勧誘のダンドリ

1. なにをやる部か 自然の中に入って生活する
2. どこへ行くか 例えば、南アルプス（夏） 北アルプス（夏） 北海道（夏）
冬には妙高に所有するクラブの小屋を利用してSkiをする
3. どのように 合宿（全員参加）山
それとP.W.と言って自分の好きな山に行く
4. 雰 囲 気 部員は50人ぐらい
ワンゲルはfamilyだ
酒はよく飲める（1年はfree タダ）
好きなことのできる有意義なクラブです
5. 小 屋 新潟県の妙高Ski場にあるクラブ所有の小屋、2階だて50畳100人収容可

1983年（昭和58年）

10月8日 活動予告。突然ですが、FW研究会です。
第1弾。部室→（43km）→渋沢→（7km）→大倉高原山の家→塔ノ岳で日の出を見る。50km歩けば

あんたもハッピー。

10月31日 FW研究会結成記念ワンダリング、国大～大倉PWは無事成功しました。10時間歩けば簡単に行けます。電車賃のない人はあるいて行こう。さて、FW研のシンボルマークがこのほど決まりました。これはぶっつけられたシナプスを象徴したものです。(シンボル省略)

1984年(昭和59年)

10月3日 大先輩が君に教える!・教育学部の君は出席さえしっかりすれば卒業できます。

・経済・経営の君達はひたすら遊んで下さい。・工学部の君達は気を付けなさい。遊んでいると卒業できません。(中略)以上は僕が実行しなかった為苦しんだ事なので、これらを守れば、君の未来は明るい。僕の未来は暗い。最近、卒業する気になったOB

11月2日 普通の先輩が君に教える!・工学部は、勉強さえしていれば、就職できる!

・経済・経営は遊んで、体力つければ就職できる!・教育学部は... 教員への道は暗く険しい。企業への道は冷たい。 25th ♀

1985年(昭和60年)

1月29日 昼休み、1食前で寮連合の集会を開きます。これは廃寮と新々寮建設に反対する声を大学当局にぶつけるためのものです。詳しくは机の中のパンフレットを読んで下さい。多分300名以上集まると思います。その後、学長と団体交渉を行うつもりです。よけいな心配はまったくありません。君も一人の横国大生として、この集会に参加しよう!!

生まれて初めて友垣に字を書いた Don

1989年(平成元年)

3月7日 なぜか学校にいる。そのわけは大家さんに「太ったんじゃない。顔がまるい感じがする」と言われたショックで走りに来たというわけさ。 30期 宮崎

3月15日 審査委員会きのうは午前2時、今日は午後11時。医療講習会でおぼえることがだんだんたまってゆくのに、睡眠時間はだんだん減ってゆく。あーねむい。

8月27日 昨日30期の人達と一緒に岡本さんの墓参りに行って来た。改めて事の悲痛さを思い起こされた。ご両親も来ておられ昼食を取りながら様々な話を聞いてきた。3年の月日というものは偉大なもので、ご両親も岡本さんのことを笑い顔で語れるようになっていた。

31期 伊藤

9月13日 大ニュースですよ。26期大村泰宏さんともとも28期の黒川利華さんが平成2年3月25日に御結婚することになりました。2次会はワングルの人を集めてやりたいと言っていました6年越しのお付き合いが実ったわけです。パチパチ。 32期 遠藤

10月23日 今度L養一次で行く三つ峠は、21期中川氏が87年5月24日転落死した場所である。中川氏はワングル卒業以後、スピターニエ同人に入会し、ヒマラヤ8000m峰のバリエーションルートを目指してのトレーニング中の事故だった。これは今月号の山溪を読んでいて中川氏の名前が出てきたので思い出したのだ。

1990年(平成2年)

4月24日 25期柏木です。今日は、山小屋の再建、OB総会の相談などで来ました。いろいろ現役生の話を聞くと、ワングルは昔とあまりに変わっていないのには驚きました。私は教育学部地理の出身で、S62/3院を修了し、今、東京消防庁に勤務しています。

10月22日 学祭のことで：米一人五合徴収、ピシバシ徴収します。絶対徴収します。電気炊飯器、家から持ち出せる人貸してください。以上よろしくお願いします。 カレー屋会計

11月15日 連夜のMeeting ごくろうさまです。みんなワングルのことを真剣に考えていて、活発に意見が出ていました。これがたった1年上の先輩かとただただ驚くばかりです。来期の活動がより充実したものになる事を期待してます。 34期 田中

12月7日 明日は追コンで部屋中がざわめいている。うーん、師走、師走・・・。

1991年(平成3年)

1月17日 16日AM9:30～17日PM3:45、横浜の港で働いていました。おかげで、イラクの戦争が

はじまったのを今知りました。3万5千円かせいだのですが、これがただの紙切れにならないことを祈ります。すくなくとも、あと、十日間は日本も平和でいてほしいです。それでは、頭の中が、仕事疲れでもうろうとしている。 32期 八重尾

- 3月15日 上の帽子は私のです。ありがとうございました。部屋がきれいになっていてびっくり！気持ちいいですね。 田中くん ありがとう！ 34期 小野
田中くん ありがとう！ 33期 原
田中くん ありがとう！ 34期 古平
- 5月7日 ゴールデンウィークも終わり、電車の中はまたいつものようにサラリーマンや学生で一杯になっていた。5/4(土)にニュースで鹿島槍で国大OB 3人が遭難した。もしやと思ったが、25期ワングルOBであった。小野さんの行方が気が気でない・・・。 33期 木村

1992年(平成4年)

- 6月23日 後立山連峰PW主催の土方さん及び福島さんへ：参加したいと思ったけど、コースを調べたらめっちゃめっちゃこわいことが分かったので、もう少し考えさせて下さい。不帰キレットの“不帰”が気になる。 36期 岡村
P.S.会づこま行きたい。←—よしよし CLちかあと
- 7月25日 ・ザックがたくさん。ということはまだ出発していなかったんだね。まさか出発していないとは・・・おどろき！予備日を一日使ってしまったということか。何がどーなっているのかよく分からないが、ユカイなことには変わらない。 33期 河上
・夏合宿というのは大いに楽しみだが、困難と苦労も大きい。大切な予備日も使ってしまったし、ブレイガイドの手違いには参ってしまう。 34期 井口
・今11時32分みんな出発してゆきます。どでかなくなったザックにびびる1年生を見ていると、何だか感無量。今度こそちゃんと行って来い！！がんばってきなさい！！ 33期 福島
- 9月5日 なんとなく部室に来てしもた。なんか体力も気力も全部抜けてしもた感じ。せやけど部室に来たらちょっと気が楽になったんはなんでやる。不思議やね。 34期 影井
- 10月7日 今日の昼休み、トレーニングで外周を走っていたら、突然、蜂に刺されてしまった。何ぶん肩なのでザックがしょえるかわからないとつぶやいたら、親跡さんが、装備を「おたま&しゃもじ」onlyにしてくれてluckyである。大丈夫だったら申し訳ないので差し入れをたくさん持って行こう。by the way文化祭の出資金を集めている。期を問わず、1人3000円です。すすんで支払いましょう。 36期 渡邊(隆)
- 11月18日 友垣No.86開幕にあたって。先号、あまりに薄すぎるといふ不平の声があったため、今回は思いきってハードカバー、厚々得本とする。これで、皆紙の心配をせず書きたいことをいくらでも書けるだろう。伝達事項から身の上話、五目並べ、講座、近況報告、なんでも書いておくれ。(後略) 35期 吉田

1993年(平成5年)

- 2月2日 昨日、山溪の宮崎さんからTELがありました。4月号の山溪で山道具の特集をやるので、そのモデル兼雑用係をやってくれる者を探しているの、誰かいないかとのことでした。
条件は、登山歴1年ぐらい、ルックス人並み、性格がいい、気がきく、奴隷のようにはたらく、というめっちゃくちゃなもの。ワングルにあきたりず、もっとBigになりたいと思っている君！！全国に顔を広めるチャンスだ！輝かしい未来が待っているぞ。 33期 福島
- 6月3日 健康診断の日程が決まりました。6月16日(水)朝9時より保健管理センターにてワングル部員のための健康診断を行います。授業もさぼりなさい。1~3年生は全員必ず出席すること。(中略)16日の朝には体調を整えておくようにしましょうね。

保健トレーニング委員長より

- 8月31日 今日、丹沢の東側にある「谷太郎川」沿いを歩いていたら、車道終点を過ぎたあたりでシカの白骨を発見した。ツノが見あたらなかったのが若いオスかメスだろう。骨といっても頭骨と背骨の半分が残っている程度で他の部分はあまりなかった。トリや犬が持っていくのだろうか。(トリは無理?)死因は何だったのかと考えながらその場を後にした。そういえばサルもいたし、丹沢東部の川といえども動物は結構いるようだ。ちなみに断っておく。沢登りをやっていたわけではないので、そこんどこ、よろしく。 34期 親跡

1994年(平成6年)

4月15日 新人ノートを見たら何と12人も来ていて、しかも女の子の名前がちらほら・・・
驚いた！やはり「ピラ」の効果があったのだろうか？よかった、よかった。37期 フジタ

→→ 看板の効果らしいぞ→→ いや、ピラだ！ →→ いや、看板だ！

*取り乱すな、フジタ。喜ぶのはまだ早いぞ！

35期 吉田

11月12日 本当にひさーしぶりな気がする、この部屋。「こんにちはー！」とって明るくきて、明るく迎えられたかったのに、どうして誰もいないのー?! いやいやこれが 34期なんだな。立派な社会人として7ヶ月生活してきた私は、約束の時間10分前にやってきたのに・・・。誰か早くきて～!・・・ってきつとどこかにいるんだろうなー

カレー屋さん行ってみようかなー。とりあえず影井さまがきたから、おわり。

34期 小野

↓
そこまで気をつかわずとも・・・

12月7日 あー、試験だよ、試験。やだなー試験は。しかも必修だよ。できなかつたらどーしよう。あーやだ、やだ。ったくよー、何で試験なんかあるんだよー。はー、もう時間がないから、行ってくるよ。

36th 岡村

↓
続編：何だよ。試験なんて大したことないじゃん、OK、OK。いやーなんだかすがすがしいな。

36th 岡村

1995年(平成7年)

5月1日 愛さん、ペニーさんへ、

お元気ですか。美穂です。昨日初めて登山してみて愛さんペニーさんのお話を聞かせていただきたいと思いました。4年生ということで就職活動等お忙しいと思います。お時間のあるときいつになっても構いません。いまのところ39期の女の子は竹内めぐみと山崎美穂の二人です。よろしくお願いします。先輩方へ、昨日はどうもありがとうございました。(ごちそうさまでした!) 私は楽しかったと自己満足しています。

楽しくなかった人でもいるのかな! From 加納

いないと思います from 美穂

6月21日

岡村さんが内定? そんなの無いって。

▲うーん、捨てるっていうかポイだね。うーん、君はちなみに頼りないね! ちなみに僕だったら「内定2万マイル」だね。シブ知ってどこかにや。「のび太の内定きがん城」って考えたやつは、はっきりいって才能ないよね。

Advised by T.H.

昨日、とうとう内定通知きたよ。泣いて喜んだね。

岡村

12月1日 勝手にこのノートを読んだり書いたりして申し訳ありません。

私たち軽音楽部はあなた方の部室を使用させて頂いたり、昼間の騒音で迷惑かけたりと大変お世話になっております。何か形としてフォローをいれられれば良いと思うのですが、どうしたらよいかもわからず、ここに書かせてもらいます。

これからも迷惑かけるとおもいますが、よろしくお願いします。

1996年(平成8年)

11月13日 40期へ。炊飯器をかりたなら洗って返せ。

来年はもうかしません。

加納

あとかたづけに来なくて誠にすみませんでした。

このおわびに森嶋くんを焼くなり煮るなりして下さい。

坂本静香

11月29日 明日から山らしい。どうやら。全然そんな気がしない。なぜか。オレはどれだけのものを山に持っていつているか。「山は持っていっただけのものを返してくれる。それ以上も、それ以下も、決して返してくれないのである」がオレの持論である。オレはだんだんと山に持っていくものが少なくなっているのかもしれない。それは同じ時間と同じお金を使っても、得るものが少ないということだ。それは悔しい。どうすれば多くのものを山に持っていけるのか。考えながら今回、山に登ろうと思う。

かつを

12月2日 To かつを。持論というほどではないが、ワングルでのボクの経験では「山に何ももって行

かなくても得るものはたくさんあったよ」と思える。でも強く何かを求めようとする気持ちも大切だよね。
T. Hori.

1997年(平成9年)

1月29日 恥ずかしくて口に出しては言えないが、「やっぱり僕はワングルを愛していたんだ」と日が経つにつれて益々痛切に感ずる。僕は大学に入って初めてそれまでの小中高とは明らかに違うより広範なパラダイムの中で主体性を発揮すべき組織としてのワングルに身をおいて、人生というか社会と
いうのか、そういったものの初歩を学んだ気がしている。(中略)最後に全く関係ないが最近非常に
心に残った言葉を、これから頑張ろうとしている諸君に捧げよう。「英雄的気魂を欠いた善良さは空
しい」
EYito.

2月28日 今、皆が重荷に感じているのはあまりにも「一体感」というものを大切にしすぎていて、
多様性を無視しているからではないでしょうか。もう執行部が、そんなに「世話好き」になる必要は
ないと思います。山に価値を見出せない人間に、山に行こうと言ってもムリだと思います。「自分で
各自が楽しいことを見つける」ことを目標にする時が来たと思います。

2月28日 ワングルの40年の歴史を中途半端な状態で幕を下ろさないでください。勇気を出そう!

5月14日 いつから何か問題が起こるたびに「辞める」とか「辞めろ」とかいう短絡的な解決法を用
いるようになったの?結局「辞めても」「辞めさせても」根本的なものは解決しないんだから。つまら
ない意地の張り合いで部員を減らしていても、結局双方共に「損」なんではないのか。

きちんと議論もしないで「辞めろ」は問題の解決への放棄でしか無いように感じるし、見苦しいよ
ね。
加納

7月25日 こんにちは。36th 渡辺です。海の日の日連休で妙高へ行ったら、期せずして岡村隊、笹倉隊、
現役隊に会うことができました。山や山小屋で仲間達と会うのは楽しく、嬉しいものです。現役の皆
様は歩荷、夏小屋ごくろうさま。そして黒沢池ではお世話になりました。一時は存続も危ぶまれてい
たのに、ちゃんと持ち直してまとまりのある部を作っているようですね。頑張れ、頑張れ。

1998年(平成10年)

6月15日 はじめて書きます。これからよろしく。土曜の新歓には驚きました。酒を飲むとみんな性
格かわるんですね。
42期 古谷

1999年(平成11年)

1月25日 今日で最後の授業となりました。たいした授業じゃないのに、実習でけっこう休んだから
出なきゃいけない。卒論あとちょっと残っているのにい。ま、とにかくテストを除けば今日で終わり
だ。4年間もあって、まだ他にも何かできることがあったんじゃないかと終わってから思うのもなん
だか情けない。けれど、その時々でやることをやったと思えば、いろいろあったし、充実していたか
な。みんなにもこの時が来るってことを伝えたかったのよ。
みほ

2000年(平成12年)

4月19日 なんて誰もトレーニングに出てこないんだよ。空中分解か42期で、ワングルは。

金丸

4月19日 部会を開いて今後の活動予定を決めなさい。見たところこの頃少し、皆自分勝手しすぎで
す。今からこんなでは今期の活動は成立しないぞ。とにかく部会を早急に開くこと!

まこと

2001年(平成13年)

1月9日 前世紀最後と今世紀最初の書き込みはオレじゃー。世紀越しの小屋はなかなか良い雰囲気
で、また来年も行きたいですな。
まこと

7月6日 新人がいらないため今週の新歓山行は中止します。
44期 志賀

11月4日 みなさん学祭のカレー屋さん、おつかれさま。35期トミザワです。お久しぶりです。古い
友垣を見ていたら、夫が36期の辻くんが書いた「とみざわさんはやっぱり可愛い」という文を見つ
けて大喜びしていた。失礼ね!夫、それから辻!こらっ。文字は残るから面白いよね。変なコト書
かれないようにみなさん気をつけましょう。
35期 富澤理子

2002年(平成14年)

6月4日 火打山、苗名小屋とても楽しかったです。先輩の方々、お世話になりました。お礼に何とかして、女子部員を入部させます。 46期 塩野

12月6日 山で信頼できるものは、最終的には自分だけです。登山をしたければ、まずは、己を知らなければなりません。山とは人間の本质が表になる場です。だから、私は好きなのです。46期執行部が、ワングルの新たな歴史を加えてくれることを願ってやみません。 44期 志賀

2003年(平成15年)

3月26日 たぶん学生最後の書き込み。いろいろな思いのあるこの部屋。皆こうやって巣立つのかな？ 6年間ありがとうございました。 石川 41st

4月18日 なえな小屋の35年余りの歴史の中で今、屋根改修とともになえな小屋は大きな転換点を迎えています。現在のOB小屋委員会と現役の行動如何によってなえな小屋の未来はほろびるか栄えるか大きく異なります。なえな小屋を愛する現役諸君、今こそ立ち上がる時です。 新人も同様、なるべく春小屋合宿に参加しましょう。

2004年(平成16年)

1月23日 ザックもらったんです。緑です。カッコいいでしょ。でもひもがいっぱいびろびろでどうするのかよくわかりません。お父さん、山行くの怒ってるのかと思ってたけど、こんなのくれるってことは、もっと山行けてことですよ。よかったです。 井上

2月4日 発見！部室から富士山、よく見えるんだ...今日は最高に展望が利きます、すばらしい。

塩野

6月29日 「友垣132」も残り1ページ。最後に偉大なる44期主将「志賀圭」が遺した、深みのある言葉を記そう。志賀先輩をたたえるために...

- ・山は精神力だ(2002年L養、中央アルプス氷点下2の朝。半そで←全身とりはだでいる志賀先輩談)
- ・「吐きそう」...「グフェ！」...「ああ、申し訳ない、本当に申し訳ないことをした、ああ、ズボンがゲロまみれだ...」(2002年夏合宿、テント内で吐く)
- ・OBはワングルの宝だ、OBを遠慮なく使え(僕がOBとの関係で苦悩しているのを見て)
- ・46期を信じてやれ(肥塚さん滑落事故後)
- ・ワングルは山に行かなくなったらおしまいだ(滑落事故、山を自粛しようと話しているとき)
- ・野島には野島の考え方がある。(塩野vs野島危機にて僕がワングルをやめると言ったとき)
- ・塩野の悩みは俺の悩みだ(ワングル関係で僕が悩んでいる時)
- ・俺はいい後輩をもって幸せだ(志賀先輩との最後のお食事会、スキヤキを食べながら)
- ・塩野には俺にもっと甘えてほしかった(イギリス留学前、最後に)
- ・ワングルを頼んだ(旅立ちの時)
- ・俺はもう家族を捨てたと思われても後悔はしない
- ・おやじの涙を見た時、おやじも年をとったな、と俺も泣きそうになった(志賀先輩の帰郷を喜ぶ父親を見て) そして志賀圭23才は、イギリスへと旅立っていった。 塩野

10月18日 こんにちは。35期の富澤です。サークル棟のニオイ、懐かしすぎてグッと来ました。「そうそうこの匂いだよ」って何のニオイなんでしょう？ホコリ？ペンキ？

2007年(平成19年)

2月15日 これから自分が生きていく時代はどうなるのだろうか。でもそれを乗り越えなければいけない。今はそのために自分を高めていきたい。(中略)僕の周りには塩野先輩をはじめ肥塚先輩など多くの偉大な先輩がいます。その先輩方を越えられるような人になりたいです。そのためにも今は精進し、努力し続けたいと思います。

いしくらけん

6月18日 過去の友垣からの抜粋(131~133)を昨日やり終えました。131、132は読んでいてすごく考えさせられ、またとても面白いものでした。が、133はちょっと...熱く、何かについて議論することがほとんどなく、連絡ノートの感じ。それに一石を投じようと、孤軍奮闘しているわけですが、果たして意味があるのか、いやなくても書きますけどね。(中略)

思えばもうすぐ 20 才。一つの節目を迎えます。せめてその時からは自分を誇れるような生き方をしたい。

石倉



・ YWV 創部 50 周年 記念山行記録

YWV50 周年記念海外山行台湾玉山
YWV50 周年記念山行畦ヶ丸



台湾の最高峰玉山山頂からの眺め

YWV 50周年記念海外山行 台湾 玉山 (3952m)

(2007年4月29日-5月4日)

記念山行分科会長 安藤 貞利 (11期)



メンバー 郡司 直樹 (4期) 松本 弘道 (7期) 佐木 誠夫 (8期)
下村 蓉子 (10期) 丸山 純 (11期) 安藤 貞利 (11期)
榎本 吉夫 (12期) 小野恵美子 (34期)
不参加 林 誠一 (7期)

行動記録

4月29日(日) 晴 14:15 成田 = 16:45 台北 = 20:15 天成ホテル着
4月30日(月) 晴/雨 8:00 マイクロバスホテル発、10:15 台湾高鉄組台北駅発 = 11:45 嘉義駅着/12:25
マイクロバス組嘉義駅合流 = 14:30 昼食、買い出し = 17:30 阿里山閣ホテル着
5月1日(火) 雨 7:30 マイクロバスにてホテル発 = 8:20 上東埔 = 9:00 塔塔加 - 9:45 孟緑亭休憩所 -
11:30 西峰観光台昼食 12:00 発 - 12:50 大峭壁 13:00 - 14:15 排雲山荘
5月2日(水) 晴 2:50 排雲山荘発 - 5:20 玉山山頂 6:00 - 7:20 排雲山荘 8:00 - 8:40 大峭壁 8:45 - 9:35
西峰観光台 9:45 - 11:10 孟緑亭 11:15 - 12:00 塔塔加 = 12:20 上東埔 13:30 = 19:00 台北
康華ホテル
5月3日(木) 關渡自然公園、故宮博物院
5月4日(金) 14:20 台北 = 18:30 成田 6名帰国
5月7日(月) 14:20 台北 = 18:30 成田 2名帰国

YWV50周年記念に海外山行を实行しようとの案があがり募集をかけたところ、9名の申し込みがありました。旅行社はアドベンチャーロードに依頼。我々だけのグループで現地ガイド、登山届け、宿泊予約をしました。玉山登山には、まず宿泊する排雲山荘の予約を取るという第1関門ありました。山荘は定員が80~100名で1ヶ月前の抽選で宿泊が決められるとのことでした。

幸い4月初めに抽選を無事通過して行けることになりましたが、後で調べると土曜日の宿泊は、倍率が10倍前後あり週末でなくて助かったわけです。

玉山は、高度が4000m弱で高山病の心配もあり、メンバーの体調を整える意味で、4月7日(土)に奥多摩の六石山(1478m)へトレーニングに出かけました。参加者は林さんを含めて6名でした。頂上近くは4日前に降った雪が残り、また境部落下りる途中で、雨にも見舞われ丁度良いトレーニングとなりました。林さんは、残念ながら出発前日に母上が亡くなられ参加できなくなり、8名での山行となりました。ご冥福をお祈りいたします。

4月29日(日) 出発日

連休で混雑が予想される為、3時間前に成田空港集合。50周年記念行事実行委員長の鈴木弥栄男氏の見送りを受け、総勢8名元気に成田を出発しました。台湾国際空港では、1人が入国票を忘れ、改めて書き直しというトラブルもありましたが、無事現地ガイドとも落ち合い、マイクロバスで台北へ移動。そのまま欣葉で台湾料理のテーブルを囲み夕食となりましたが、これが食の国での最初の食事。旅の疲れも忘れ次々に出される料理に舌鼓を打ちました。これから帰国するまで、夕食は必ず丸テーブルを全員で囲み、出される食事を端から平らげていくといった次第で、今回の山行はとにかくよく食べました。

4月30日(月)

阿里山に向け2グループに分かれての移動日。今回の山行ガイドをする林国華さんがマイクロバスの運転手と共にホテルに現れ、マイクロバス組4名は朝8時に、嘉義で12時に落ち合うべく出発しました。台湾高鉄組は10:15台北発の列車に乗り、時間通り11:49に嘉義駅着。運行トラブルが多いと聞いていた台湾高鉄ですが、全く問題なく快適な乗車でした。ここでマイクロバスを待っていましたが、マイクロバスの運転手は在来駅へと向かい途中で小野さんの指摘で高鉄駅に進路変更。20分遅れで無事落ち合うことができました。嘉義では中信大飯店で昼食後、果物と燃料ガスボンベ、酸素ボンベを仕入れ阿里山へと出発しました。



マイクロバスは、標高2200mにある阿里山公園へ、一気に2時間半で登って行きました。途中、椰子の木の亜熱帯林から、茶畑が広がる山間を抜け、大きく尾根を回ると鬱蒼とした杉の森林で、この辺

から霧が出て雨が降り、阿里山駅駐車場に着いたときは土砂降りの雨となっていました。ここでホテルのバスに乗り換えて今夜の宿、阿里山閣大飯店へ到着。夕飯は 7:30 と遅くなりましたが、次々と料理が運ばれて、思ったより豪華な食事となりました。夕食後、明日からの山行のため作戦会議を開きました。そこで昼に仕入れたドラゴンフルーツ（火龍果）マンゴ（芒果）をすべて食べ尽くし、持ち込んだウイスキーを飲んで玉山前夜祭を終えました。ドラゴンフルーツは、甘さ抑えめで小さな種の食感がキウィのようであり独特の味で、ピタヤとも呼ばれています。

5月1日（火）

明け方暗いうちに沼平駅から祝山駅に向け、玉山からの日の出見物の観光客を乗せた阿里山森林鉄道の電車が出発していく音が聞こえたかと思うと、そのうち鳥の囀りが聞こえ始めました。

5 時過ぎに散歩に出かけましたが、ホテル前にはすでにカメラを構えて 10 人位が鳥を観察していました。ホテルの照明に集まった虫を求めて鳥が集まって来ているのです。6:30 の朝食を食べ出発準備をしていると、祝山からの登山電車が戻って来ました。この阿里山鉄道は、アンデス鉄道とインド鉄道と合わせて世界三大高山鉄道と呼ばれています。嘉義駅から 2274m の阿里山駅まで日本の統治時代 1911 年に完成した木材を運び出すための鉄道で、現在は観光用に 1 日 2 往復運行されています。

7:30 ホテルのバスに乗り、阿里山駐車場まで戻り、そこからわれわれが乗ってきたマイクロバスで上東埔駐車場へ移動し、さらに小型マイクロバスで良く舗装された道を塔塔加の登山口まで行きました。この道路をマイクロバスで送り迎えするのは最近になってからで、1 時間は短縮。この道の途中の警察分隊にガイドの林さんが登山届けを出し出発準備が終わり、いざ出発となったところで、雨が降り始めました。天気予報では、晴れなのにと恨めしく思いながら雨具を着けて塔塔加（2610m）を 9:00 に出発。道は良く踏まれた幅 1m の登山道で、時々小屋からゴミを背負って下りてくる現地歩荷とすれ違う。排雲山荘と塔塔加間は、8.6km で 500m おきに道標があり、ほぼ 30 分に 1 本の割合で道標が現れる。



9:45 孟緑亭のアズマヤで休憩。この休憩所のすぐ上に自然浄化槽のついたトイレがあり、台湾でも山のトイレ設備は工夫されていました。

10:25 台湾百山になっている玉山前峰への分岐を通り過ぎ、石楠花の咲く巻き道や岩をくり貫いた道を通り、尾根を巻いて登っていく。谷を渡る所や、ガレ場にはすべて太い鉄パイプを溶接したフレームの上に板橋をつけてあり、道は良くメンテされていました。この橋には、すべてに番号がつけられていて、玉山頂上までに 86 箇所ありました。この 2~3 年で整備されたものと思われ、非常に良くメンテされています。この間、前日登って下山するパーティと次々にすれ違い、その中で 1 組の日本人パーティにも会いました。このパーティは、玉山頂上は踏んだものの、雨で何も見えなかったとのこと。明日は、晴れることを祈りました。



11:30 西峰観光台休憩所（3096m）に着き昼食。先の台湾グループと日本人グループ 30 人ほどが屋根の下で、雨を避けながら食べていました。台湾グループは、大きな鍋で野菜たっぷりの中華麺を作っていました。圧倒されながら、それぞれ濡れない場所でスペースを作り、宿で作ったチャーハンを立てたままで食べました。

12:00 休憩所を出発。12:50 杉の樹林帯を登りしばらくして大峭壁という 1 枚岩の岩壁につき、先に行く日本人パーティに追いつきました。13:40 対岸に水墨画を思わせる切り立った岩壁が、見え隠れし、谷底の水音が聞こえるところで休憩。その後ペースを落として 3400m の排雲山荘には 14:15 到着。

小屋には先行の日本人パーティが到着しているだけで、我々は一番奥の向かい合わせのところを 10 人分を確保しました。ここで早速ビールという声が挙がりましたが、台湾の小屋では販売用のビール、ジュース缶等飲み物を一切置いていないことがわかり、がっかり。代わりに薬用茶を無料で飲ませてもらいました。幸い夕方には雨もあがり、夕飯まで散歩をしたり、お茶を飲んだり時間を過ごしました。

小屋での夕飯は、3 グループに分かれて外で食べます。我々は台湾人グループに混じり、各自食器を

持って待っていると大きな鍋に入ったご飯が、次に洗面器のような鍋に入った料理が1つ1つ出てきました。食気盛んな若い台湾人と張り合って急いで料理を盛りつけましたが、実はこの後も料理が出てきて全く慌てる必要がなかったわけです。5~6種類の料理とスープが十分な量あり、日本の山小屋の食事に慣れている我々には驚きの夕食でした。

この小屋は、室内での飲食が禁止されており、お茶を飲むのも外、お菓子も外でした。小屋は毎日満員という事情を考えると、当然のことと納得できました。しかし、雨の日はどうするのかと心配もありました。また、トイレは別棟に石作りの立派な建物となっており、水洗というのが素晴らしいところでした。(ついでに、バイオ処理までできていれば満点でした)

暗くなり始める頃には雲間から青空も見え、明日こそは晴れると期待を膨らませながら7:00には寝袋に入って休みました。

5月2日(水)

午前1:45起床。頂上ピストンの荷物だけを持ち、身支度を整え、お粥を食べて2:50出発。ヘッドランプで足元を照らしながら、ほとんど眠れなかった自分の体調を気にかけて、登っていきました。4:00樹林帯を抜けジグザグにハイマツのような低木帯を登る途中で1本。上部には先発隊の明かりが見え、下からは後続隊の明かりが登ってきます。頂上まで0.9km地点から岩場となり急勾配を鎖につかまりながら登っていくと、落石よけの為に鉄骨でできたシェルターが100m位の間つけられており、ここを通り過ぎると北峰への分岐となっている尾根に出ました。

このシェルターは、丁度褶曲地層に沿ってつけられていて、これは下山途中に双眼鏡で確認できました。夜明け前で少しずつ周りが見え始め、また尾根筋のため急に風が吹き寒くなりました。そこから、10分であっけなく頂上で、5:20登頂。太陽は雲に隠れていましたが、360度の展望。記念撮影をしてお茶を飲み休んでいると続々後続隊が到着し、にぎやかになってきました。下山を始めようとしたとき、太陽が顔を出して、素晴らしい頂上での写真が撮れました。

6:00下山開始。下りは、明るくなったせいもあり快調に下山して、7:20に小屋に戻ってきました。8:00出発。太陽が、照りつける中を快調に下り、9:35に西峰観光台につき玉山を背景に記念撮影。このコースで玉山山頂を眺められるところがほとんどなく、山行中唯一のところでした。

ここの観光台には台湾固有種と思われる金翼白眉(White-whiskered laughing thrush)がいて、人の食べ物のおこぼれを狙ってすぐ近くまで現れ、休憩中ずっと近くを飛び回っていました。

この後、丸山さんが四国巡礼中に痛めた膝関節がまた痛くなり、かなり辛そうでしたが何とか塔塔加の登山口に戻ってきました。丁度12:00でした。

ここから、マイクロバスで、上東埔ロッジに向かい昼食をとりました。ここでも円卓を囲んでの中華でしたが、残念なことに飲み物は、ジュースのみ。肝心の打ち上げ用のビールが置いてありませんでした。結局、台湾の山小屋は持ち込み以外アルコールは一切置いていないということが、判明しました。帰りは、来た道とは違う南投県を通る裏道を台北へと下りていきました。山道を少し下ったところで、これが玉山かという三角のピークが連なり見え、角度により違う山に見えることを発見しました。7時頃台北着。宿泊する康華大飯店で打ち上げ会が催されました。

5月3日(木)

この日は台北観光。9:00ロビーで私の古くからの付き合いの劉さんと待ち合わせました。劉さんは、



台湾野鳥の会の指導員をしており、淡水河と基隆河の交わる所にある關渡自然公園を案内していただくことになりました。台北市から電車で 20 分、關渡駅から歩いて 15 分の所にあるこの公園は、周りは団地と工場に囲まれ、かろうじて開発を免れて今は自然保護区になっているところで、湿地帯で渡り鳥の飛来地ともなっているとのこと。午後は、故宮博物院へ行き改装になった展示物を見て回りました。その後は小野さんのスケジュールに従って、士林夜市を一回りして、信義路にある飲茶のレストランへ直行。お目当てのレストランは、日本人観光客で行列ができていて入れず、劉さんにその裏にあるレストランへ連れていってもらいました。この日は、日本語堪能な劉さんに案内され、山とは違う台湾を楽しんだ 1 日でした。

5 月 4 日(金)

この日 6 人が帰国、2 人が 7 日まで滞在。午前中台北 101 ビルグループとお茶屋グループに分かれ行動。10 時 30 分にホテルへ戻り、帰国組はリムジンバスで登園国際空港から帰国。

今回の海外山行は、皆さんそれぞれに準備をされ、六石山のトレーニング山行以外にトレーニングを重ねて、体調もよく全員が登頂できました。全員満足できた山行でした。

ガイドの林国華さんは、日本語はあまりできませんでしたが、温厚な方でいろいろ気を配って頂き、また松本さんに通訳を務めて頂き問題なく、楽しい山行ができました。台湾は、隣国であり登山の盛んな国で、3000mのピークは 293 座あるそうです。玉山以外にもたくさん登る山があり、鳥、蝶、花と楽しめるものがあります。この山行記録をまとめていく間に、インターネットのホームページに“美しい台湾山の会”というどこかの首相が作ったような山の会を見つけました。

山地民族の人が中心となり日本人向けの台湾の山ガイドのホームページです。これを参考にぜひ皆さんも台湾の山へ行かれることをお勧めします。

<http://www.beautymountain88.com.tw/yushanclimbingcourse/indexj.htm>

YWV 50周年記念山行 畦ヶ丸

記念山行分科会委員 白神 逸夫(7期)



畦ヶ丸山行前夜は、夜遅くまでドタキャン、ドタ参加の連絡、それに伴う自動車の分乗割り振り変更などメールが飛び交い、あわただしい前夜ではあった。

明けて翌5月12日(土)朝は、気分一新の快晴、8時15分に小田急新松田駅、及びJR松田駅付近に、OB、同伴家族計25名、現役計3名、総勢28名の参加者が集結、中にはワングルOGの奥様、小学生のお子様同伴の参加者もあった。その後8時40分、前夜の急な変更にもかかわらず、さしたる混乱も無く、参加者は、各自割り振られた車に分乗、一路登山口である西丹沢自然教室に向かった。

登山口では、11期・安藤貞利分科会長の登山開始の辞、嘉納秀明OB会長のご挨拶に次いで各自の自己紹介が行われたが、最も若手では平成生まれの「丹沢は初めて」と言う新入部員や、バルト三国の一つ、ラトビアからの留学生の特別参加もあり、「昭和は遠くなりけり」の思いを強くした。



9時40分、吊り橋を起点に、山行委員長の34期小野恵美子さんを先頭に畦ヶ丸に向け出発、シニアOBはいずれも健脚者揃い、若手OB、現役は元気一杯で、ペースは快調。新緑の中、久しぶりの山の空気はうまい。

こんな機会は滅多に無いと川から溢れるオゾン胸一杯に吸う。光の反射する明るい清流を眼下に眺めながら丸木橋をどんどん渡り返して川原の中を順調に進み、高度を稼ぐ。丸木橋に取り付く際、バランスを失いそうでヒヤリとする。陽の照るわりには暑くなく、汗はあまりかかない。途中、先輩、後輩が現役当時の思い出を語り合う姿や、シニアOBが、平成生まれの

新人に話しかけている父子の会話のような微笑ましい場面も見られる。また、120mの高さの滝見物に寄り道するグループもいる。まもなく山腹に取り付いたが、かなりの急傾斜で注意が必要だ。何か落とせば谷底まで落ちて二度と戻らないだろう。やがて尾根筋に出ると、遠く大室山、檜洞丸が木の間越しに垣間見られ、また山つつじや、藤の花が時折我々の眼を楽しませてくれる。畦ヶ丸頂上直下、木の階段が続き、足がつかないが、もうすぐ食事だと気力で登る。12時15分、畦ヶ丸頂上に到着、記念撮影もそこそこに、頂上直下の避難小屋付近で待望の昼食となる。

13時、下山開始の際、今回の余興であるくじ引きを行った。景品は1等2000万円の宝くじである。くじ引き当選者は、「賞金の一部をOB会に寄付したい」などの冗談も飛び出しながら下山を続け、15時前には下山口の大滝橋付近に到着した。その場で、景品である宝くじの受け渡しが行われ、後日抽選待ち、乞うご期待ということになった。その後、安藤貞利分科会長による解散の辞、嘉納秀明OB会長

によるご挨拶があり、一同は車道に出て、15時30分頃自然解散、宿泊組は本日の宿である中川温泉「蒼の山荘」に急行、直行組と合流した。

宿は、露天風呂もあり夜の宴会に備え、疲れを取ることが出来た。

18時から20時にかけて行われた宴会では、20名のOBが出席、安藤貞利分科会会長の開会の辞、嘉納秀明OB会長のご挨拶、鈴木弥栄男50周年記念実行委員長の乾杯の音頭に続き、17期小浜一好氏の軽妙な司会により、現役時の写真、スライドも利用して、各期の現役時代の活動の思い出、現況などがユーモアを交えて披露された。その後、当夜のメインイベントである台湾玉山遠征報告が12期・榎本吉夫氏の解説でスライド上映された。

話によると、小屋泊まり、食事は昼の弁当を含めてオール中華、登頂前日は激しい雨、当日は午前1時半に起床、睡眠不足のまま懐中電灯を手に出発したそうで、それだけに頂上に立った時の喜びも大きかったであろうと、察せられた。

宴会の最後は、全員で肩を組み、出だしの調子はやや怪しかったが「みはるかす」を合唱、次いで、8期・池原盛彦氏の力強いエールにより締めくくりとなった。

宴会終了後、別室での二次会は、9期・鈴木弥栄男委員長編集の歌集を手に、歌中心に遅くまで盛り上がったが、シニアOBは、若手OBから引き継がれていない歌を教えてほしいと希望され、久しぶりに歌ってはみるものの、日頃カラオケ以外の音楽に接していない悲しさで調はずれの歌となってしまうことが多く、正調が伝えられなかったのが悔やまれる。その中で1期・嘉納秀明氏が、自らの作詞・作曲による「冬の山」を歌われ、一同さすがと感じ入ることしきりであった。

翌5月13日(日)も快晴、活発なご飯のお代わりに続く現役時代を彷彿とさせるにぎやかな朝食の後、付近の台地で8期・池原盛彦氏による3.4mの長さのアルプホルンや小型のアコーディオンのようなシュバイツァーエルガリーの独奏が行われ、音色は朗々と丹沢の空に響きわたった。アルプホルンを試しに吹かせてもらう者もいたが、口の形、息の吹き方にコツがあるようで、なかなか難しかったようだ。話によれば、アルプホルンの同好者は全国に600人、10団体あるとのことで意外に多い。

少し早いとは思うものの、9時30分には車に分乗、宿を後にし、50周年記念畦ヶ丸山行は終わった。

最後に上記のように事故も無く無事に、且つ充実した50周年記念山行を行うことが出来たのは、ひとえに参加された皆様方のご支援とご協力によるところが大きく、ここで誌面をお借りして、山行分科会一同深く感謝の意を表したい。



・ YWV 創部50周年に 思うこと

体験を共有すること
私と登山活動
山小屋の思い出
シニアOB月例山行雑感
これからのワンゲルを担って



体験を共有すること

伊藤 明広(31期)

卒業して3年目頃のOB総会であったと思う、シニアの方々が大勢いらっしやった。最近のそれとは違い、OB総会に出席されるシニアの方というと4期の郡司さんしか存じ上げない世代であった為、私にとってはほぼ全員の方が「初めまして」という状況のはずであった。しかしながら順々に自己紹介をうかがっていくと、私の中では「お久しぶりです」と感じる方がほとんど。不思議な感覚であった。その訳は現役時代に遡る。

現役(3年生)のときに記録編集委員長を兼任していたこともあり、部室倉庫の記録簿保管キャビネ内にある記録類全てをひとりで再整理したことがあった。後輩にとっては宝の山のはずである先輩方の諸記録が、整理されていないが故に誰にも閲覧されることなくただ詰め込まれたままで眠っているのはもったいない、後輩が先輩方の残した記録から学ぶこと(反面教師的なものも含め)も多いのでは、と思ったからである。やり始めると作業は遅々として進まない。一人だから?量が多いから?そうではない。ついつい読みふけてしまうからである。感心する事しきりのものもあれば、啞然としてしまうこと、腹筋が鍛えられるぐらい笑ってしまうもの、様々であった。

共通するのは、現役として活動しておられたその時々のお姿が容易に想像できたこと、自分たちの活動と重ね合わせて共感できたこと。言い過ぎかもしれないが、今まさしくその方々とその場で同じ体験をしているかのような錯覚をしまっていた。

念というかパワーというか、幾星霜をへて今なおその文面から行間からあふれ出ている、そんな感じであった。

今でも忘れられないのは14期のS木さんと24期の旧姓U野さん。前者は小屋でよくお会いするが、なるほどその通りの方であった。後者の方とも是非一度お会いしたいと今でも心から切望している。

そんなことがあったため、OB総会でシニアの方々が自己紹介されたとき、倉庫整理の際に読んだ資料に出てくる名前や内容が思い出され、久しぶりにお会いした、そういう感覚になったのであろう。何より、倉庫で一人埃まみれになってやっていたことが思わぬところでつながったことが嬉しかった。

この時のOB総会を契機にシニアの方々とも交流する機会が増え、その中でOB小屋委員会も発足した。発足当初、小屋の利用促進活動の一環として、小屋での活動・利用状況を広く知ってもらおうという趣旨から小屋日誌の電子データ化・公表を行った。「電子化は自分がするのですまないが伊藤さん小屋日誌を取ってきてはくれませんか」との菅谷さん(6期)からのお願い。

小屋日誌を長期で持ち出すのはよろしくないと思い、一旦持ち帰ってコピーをし、翌週末にまた小屋に返しに行った。菅谷さんにコピーをお渡しして数ヶ月後のこと、別件で頂いたメールには追伸で以下のようなことが書いてあった。

「蛇足ですが、小屋日誌を丹念に読んでいきますと、日誌の傍らに照合しながら見ているOB会員名簿から、小屋で青春を過ごした人達が次々に、その人格を私の前に露わにしてくれます。

さっきまで記号にしか見えなかった名前が、全く変わってしまいます。

会ったこともないのに顔が浮かぶんです。時々、見てはいけないモノを見てしまったような後ろめたさを感じることもあります。素晴らしいですね。小生はこの日誌を、小屋に行った人しか見ることが出来ないのは、勿体ない。これを読んだら、その人にメールの一つも出してみたいとか、総会に出席する、などと聞いて胸がワクワクしてきたり、スカイラインを読み返して新しい感動におそわれたりしております。今回の総会には、日誌の中で生き生きしていた方々に会えるのを楽しみにしております」(2000年10月27日)

部室倉庫の保管記録と小屋日誌の違いはあれど、奇しくも菅谷さんも同じことを感じておられたのだ。

記録を書くこと、記録を保存すること、記録を共有すること。これらのことは、とりもなおさず、体験を共有した同期となることに等しいように思う。創部50周年を記念して発行されるこの記念誌が、5年後10年後さらには50年後までも、様々な世代に亘るYVWの方々の仲を取り持つ絆のひとつにならんことを、祈念する。

私と登山活動

石川 真(41期)

現在私は年齢約 30 歳、登山歴約 14 年、100 名山は 51 座目を踏破。もちろん何度も登ったことのある山もあるし、100 名山だけが山という訳ではないので、登山回数とすればもう少し増えると思う。

一つ一つの山には思い出もあるが、それを一つずつ語るわけにもいけないため、私と YWV をはじめとするアウトドアに関わる自分の想いについて文章にしてみた。

文才はないと自覚しているの、読みにくく見苦しい文章になっていると思うが、ご容赦願いたい。

私は父親の影響からかその土地柄の影響からか、横須賀という比較的街中で育った割に自然が好きな性質であった。

特に、小学校 4 年から続けているボーイスカウト(始めはどちらかと言うと父親にイヤイヤ入れられた)のおかげでキャンプなどのアウトドアに目覚めた。

今思えばガスストーブやナイフなど、キャンプの道具は機能美にあふれ、子供心にも所有する楽しさが何とも言えないものであった。

(その頃入手した道具は今でも使っているものが多い)

そういったところが更にのめり込む原因の一つでもあったらう。

また、自分達で立てた計画に従い、活動を行なうという点ではその頃も大学時代もちろん今も変わらない。それを小学校の時分からやると言うのは貴重な体験であった。

この様な少年時代を経たため、高校で山岳部に所属し、大学で山登りに関わる部活に興味を抱いたのも当然である。

ただし、ホントに山岳部のように岩や氷を登るような活動までは想像がつかなかったため、手ごろな活動内容の YWV にたどり着いたのは幸運であったと思う。

その頃の YWV は分裂による危機的状況の最中だったが、その頃から働いていた『鈍感力』のおかげか余り気にすることもなく、月に 1 度の登山を楽しんでいた。

多くても 10 名に満たない程度の少人数パーティーの機動力を生かした活動は、結局卒業するまで変わらなかった。(要するに部員数は 4 年間ほとんど変わらなかった)

なお、YWV に引き込んでくれた後藤さん・覚田さん・山崎さん(現、後藤夫人)の 3 人の先輩方には特に感謝している。

妙高高原の苗名小屋は大学 1 年からもちろん利用しているが、実は当時の私には今ほどの愛着はなかった。

大学 3 年のときに初めて小屋で年越しをした。その時、ボーイスカウトのメンバーを連れ苗名小屋を初めて利用し、そのまま YWV 現役メンバーが年越しをするために小屋に残る形になった。丁度 20~21 世紀の世紀跨ぎを小屋で行なったことになる。

元旦に早めに起き出し、誰もいないゲレンデを皆で初滑りした事など楽しい思い出となった。これをきっかけに修士 2 年まで、小屋での年越しは恒例行事となった。



今は自分の状況が許さないため年越しは封印しているが、年末のボーイスカウトでの小屋入りはその

年を締めくくる大事な行事となっている。(過去に8年間8回開催、私は私用により1回欠席)

また、長年お世話になっているボーイスカウトに活動の場を提供すると言った形で恩返しできるのも、YWVの懐の深さのおかげであると思う。

毎年年末に小屋を利用させていただく立場(ボーイのリーダー)として、この場を借りてお礼を申し上げたい。

YWVを引退した後も、大学院在学中は研究室をチョコチョコ抜け出しては山に登っていた。同じ敷地内にいる現役に声をかけ、動きの良いやつらを連れ出しては学生時代にしか行けない様な山奥に行ったりもしていた。サボって出かけた山の山頂付近で、研究室の教授に電話し『体調が悪いので...』と告げたこともあった。

しかし社会人ともなると、結婚したと言う理由もあるが、そうそう山にばかりは行けない身分になってしまった。

特に子供が生まれてからはなお更のことである。

勤め始めてからの3年間はこれまでと比較すると山から離れた生活をしてきた。しかしそれでもバイクでのツーリングと称しては小屋に顔を出し、夏には奥さんの許可を取ってアルプスに出没し、ボーイスカウトの活動では意識的に丹沢登山を取り入れたりもした。もちろん年末の小屋は外せなかった。

この春からは息子も若干体力が付き始め、自分の足で1時間ほどの登山はできるようになってきた。

丁度その頃に会社で定期的に登山(と言ってもまずはハイキングレベルから...)を楽しむ仲間達を見つけ、4月には赤城山、そして5月には天城山と、関東近辺の山に登るようになった。

この仲間はほぼ登山未経験のメンバーばかりなので、YWVの新人部員に対する様な気持ちで見ている。いつか皆が思い思いのメンバーと安全に登山を楽しめるスキルを持って欲しいと思い、トレーニングしているところである。



また、自分の息子には山の楽しさを知って欲しいと思い、事あるごとに連れ出して山歩きをさせている。もちろん成長したときには荷物持ちとして活躍してくれることも期待している。

ボーイスカウトやYWVなど、私の今の生活の礎となっている活動を通して、仲間と出かける楽しさや、自然の雄大さを知ることができた。

より多くの人たちと楽しみを共有するため、今後も活動を続けていきたいものだと思つた。しかし最大の問題は、私の体力維持と奥さんの理解である。

しかも、この難問の解決が最も難しいと思われる....



山小屋の思い出

細谷 慎一（38期）

私が山小屋に初めて行ったのは、大学1年生の新歓小屋のときでした。

建設当時の先輩方に申し訳ないのですが、周りから、「相当ぼろい」と聞かされていたので、見た時は「そんなにぼろくないじゃん」と思いました。静かな森の中にある赤い屋根の山小屋。そのようなはじめの印象が私を、山小屋好きにさせたのかもしれない。

私は栃木県で育ちましたが、県の南の方で、雪が降るのは年に数回だけ。雪国は経験したことがありません。そして、横浜に行ったのに雪国に行くなんて、思ってもいませんでした。

学生の頃、横浜から雪下ろしに行くときには、電車を使って行きました。初めての雪下ろしでの移動には、青春18切符を使いました。授業が終わってからの移動だったので、その日は長野駅までの移動でした。当時は、長野駅は善光寺の形をした駅舎でした。当然、長野駅で駅寝をしました。駅寝は、大学1年の秋のPWで平ヶ岳に登ったときに経験していましたので、さほど驚きませんでした。しかし、「階段で寝たのは寒かった」と記憶しています。翌朝待合室に行くと、ストーブが炊いてあってホッとしました。

別の年は、シュプール号を使って行ったこともありました。「トンネルを抜けると・・・」ではありませんが、朝起きるとまさに雪国でした。

さて、冬の妙高、本当に雪が多い。2年生の2月の雪下ろし（1996年2月）のときの事です。行ってみると、小屋周辺は、こんもりした雪山になっていました。

玄関から小屋へ入るのですが、立っている場所から2階も下になるほどの雪でした。（ちょっといいすぎか？）まず、小屋を掘り出さなければなりません。掘っても掘っても、小屋は見えません。ようやく小屋が見えたら、一人が小屋に入って、スコップを取り出し、作業開始です。

このときは、10人ぐらいで2日間の雪下ろし（雪あげ？）でしたが、終わらなかったのではないのでしょうか。雪下ろしの基本は、周りからです。その後、柱、屋根、側面と掘り出していくのです。あまりにも多量の雪で、いくらやっても終わらなく、「めんどろだ」と、屋根上の雪に亀裂を入れて、雪を一度に落とそうなんてしていたら、突然、屋根の雪が「どっ、どどどー」と、滑り出し、数人の体が少し埋まってしまいました。

あの時は、誰も、怪我をしなくて本当に良かったです。私は雪の上に乗っていましたが、雪が「ぐっぐ」と鈍い音がしたのを感じたら、もう足元全体が滑り落ちていました。雪崩の始まりってこんな感じかなと、変なことを思ったりしました。

夕方になると、小屋の中では、小屋委員長と食事当番の人が夕飯の支度をしてきていました。スコップやそりを片付けて、靴や長靴についた雪を払って、小屋に入ると、中はランタンやヘッドランプの明かり。電気のない生活も、たまにはいいものでした。小屋に入ると、ともかくコタツ。

そうこうしているうちに、メンツ（面桶）にカレーが入り、それはもういいにおいが小屋に充満した。みんなで一緒に食べた食事は、おいしかった。

そういえば、雪がまだ残っている屋根の上から見た月夜の妙高山のきれいだったことを思い出します。本当に貴重な時間を過ごしていたと思います。

さて、無事雪下ろしが終わって帰ります。なんととっても楽しみは、まだ誰も滑っていないゲレンデを一番に滑走することでした。それこそ、シュプールを描くように滑ることができます。

学生のときは、杉の沢からバスに乗って、雪の壁の中に揺られながら、池の平の「かんぼの宿」で温泉に入り、妙高駅へと向かうパターンが楽しみでした。妙高駅の真っ白い線路の中から電車が来たとき



は、「電車ってすごいなー。こんなに雪があっても走れるんだ。これで帰れる」と感動しました。それでも、雪が多くて遅れたこともありました。

電車を待つときに、駅の近くにあった「やおとく」で食事をするのも楽しみの一つでした。（在学中に、「やおとく」は駅周辺の道路建設で、100m ぐらい移動した）

味噌カツ定食がとてもおいしかったです。当時「やおとく」にいた小学生の女の子と男の子は、今は素敵なお嬢さんと青年になっていることでしょう。

社会人になってからの小屋の思い出も、やはり雪下ろしです。私が社会人になった頃（1999 年ごろ）から、OB・OG の雪下ろしが盛んになりました。毎晩の宴会で、酔っぱらっても、終電を気にしなくていいし、気がついたら、コタツに入ったまま寝ていたりして、本当にいい場所です。私は、海洋調査に関する仕事をしています。一度、乗船すると1ヶ月間は出張となり、なかなか陸を見ることができなくなります。冬場は、帰ってくると雪下ろし隊でした。軽自動車で、がんばって行きました。そういえば、長野オリンピックがあったころ（1998 年）に妙高高原まで高速道路が開通しました。一般道の約半分の時間で行けてしまうので、本当にアクセスしやすくなりました。

今では子供が生まれて家族が増えました。子供たちがまだ小さいので、最近小屋に行くことが少なくなりました。私たちは、小屋よりも短い時間の間が変わって行く。子供が大きくなって行く。山小屋は同じ場所にある。なんだかうれしい。いつか家族で山小屋へ行こう。

（□）メンツ＝面桶（1人前ずつ飯を盛って配る、鬻物で創られた食器を指す）

シニアOB月例山行雑感

腰塚 典明(3期)

シニアOBの月例山行は、1999年1月に第1回を開始して以来、2007年9月で第100回を迎える(内、7回は天候不良で中止)。最近では、各回平均30名前後の参加者があり、盛会である。

これは、シニアOBが時間的に余裕ができたことが大きな要因のひとつではあるが、集合場所に行けば、山歩きができ、お花を見たり、温泉にも入れ、さらに世代を超えて交流ができ、一日、健康的に過ごせるという便利さがその一因ではないかと考えている。まだ、一度も同じ行き先がない(中止となったものの再挑戦はあるが)というのも、この月例山行の自慢のひとつではないでしょうか。これも委員長以下、各山行幹事の努力の賜物であると言える。

私も、無理やり押し付けられて幹事とされた一人であるが、月例開始当初は、行き先の選択でかなり迷ったことが強く記憶に残っている。というのは、当初は、前月の月例が終了したのちに、企画を提出するという段取りで行っていたため、前月の行き先が気になったりして、なかなか決定できない場合があった。特に、夏の月例は暑さもあり、涼しい場所をと誰でも考える。しかし、アクセス等を考えると、遠くには行けず、結局安易に行き先を決定する場合は、私の場合結構あった。しかし、最近の月例では、参加人数も多くなり、貸切バス利用が可能となって、アクセスを気にせず結構遠いところまで日帰りで行けるようになってきている。また、2001年からは年間スケジュールとして行く先を決定しているため企画する方もまた参加する方もどちらも便利になっている。

その中で、夏の月例として、「酷暑の御前山」として評判(?)の月例がある。それは、3期(私)が幹事で企画した、2000年7月22日(第18回)の奥多摩・御前山である。「御前山」は、奥多摩の名山であり、登り甲斐のある山である。このときは、暑さを考慮して、境橋から栃寄沢を経て、御前山へ登り、大岳山の鋸尾根を下るコースを選定し、奥多摩駅近くのもえぎの湯に入浴する予定とした。

しかし、その日(7月22日(土))は、不運にも、その夏一番という暑さに遭遇した。前日は東京で31℃程度であったが、当日は最高気温が、東京で34.5℃、熊谷では36.9℃までに急上昇した。

後から、天気図を見ると太平洋高気圧が関東地方にその夏、初めて張り出してきた。そのため、その夏一番という暑さになったのである。

その上、その日は山中でも、風がほとんど吹かず、非常に蒸し暑く感じたのである。栃寄沢を登っている時は、暑さはそれほど感じなかったが、尾根道となってからは、とたんに暑さを感じ、水の消費量が増していった。御前山の直下の避難小屋に湧き水があり、多少の水分補給とはなったが、手持ちの飲料水が少なくなるという事態となった。そのためか、足に痙攣が生じた人も出て、一部の人は、途中から林道を下った。しかし、残りの人は、予定のコースを完走した。下山口に着いたのは、予定より1時間以上遅い、夕暮れも近い18時ごろであった。確かに、蒸し暑かったため、その後、「あの御前山は暑かった」ということが話題になる月例となったが、久しぶりに大量の汗をかき、「清々しい」気分が残った(自画自賛!)月例ではあった。

下山後、温泉に入り、冷たい一杯が最高に美味しかったことを記憶している。温泉を出たのは20時近かった。まだメンバーの年齢も若かった7年前のことであるが、従来から言われているとおりの、水の大切さを改めて思い知らされた月例であった。それ以後、夏の月例では、いつ



もより多めの飲料水を持参するようになった。

また、「二人だけの月例」として記憶されている「幻(?)の月例」がある。これは、8期が企画した2001年1月27日(土)の南房総・富山(第23回)である。この日の関東地方は、南岸を低気圧が通過し、雪でしかも大雪となった。そのため、交通機関、とくにフェリーが欠航となり、月例は中止となった。私のところにも、6時半すぎ幹事から中止の連絡が入った。しかし、すでに靴も履き、出かけるところであり、家にじっとしている気分でもなかったので、「岩井付近の水仙でも見物するか」という軽い気持ちと、「雪も南房総では雨となっているであろう」という勝手な推測で、家を予定通り出発した。内房線の列車にも予定通り乗車したが、木更津を過ぎても雪は止むどころではなく風も出て、むしろ強い降りとなり、列車も遅れ気味となった。雪が降る岩井駅に10時半すぎに着いた。駅に着いてびっくりしたのは、月例が中止となり誰もいないはずであるのに、シニアOBの一人(2期の宮崎さん)がすでに到着していた。聞けば中止の情報は届いていないということであった。すでに、積雪も10センチ近くあり、水仙見物でもなくなっていた。



せっかく来たので、南総里見八犬伝の「伏姫の籠窟」でも見物するかということで、岩井駅を二人で出発した。まだ雪は降っていた。二人以外誰もいない「伏姫の籠窟」で昼食をとり、さらに人の歩いた跡も無い林道に入ると、周りから「バサッ」、「バサッ」という音が随所からきこえてきた。こんな大雪が降ることなどめったにない南房総の樹々は弱く、雪の重みで枝が折れているのである。この雪の重みで倒れた樹で道が隠され、枯れ沢に迷い込んだこともあったが、無事に、白銀一色の富山北峰に13時頃着いた。記念にと一人ずつ写真を撮った。三脚もなく、また付近に人もいなかったため、一人ずつの写真となった。しかも、構図が全く違うことになっていた。

記念撮影後、南峰を経て尾根道を下り、福満寺を通り、15時頃岩井駅へ。結局、月例で予定したコースを逆に歩いたことになる。

雪はまだ降っていた。そのため、帰りの列車は途中で長時間の待ち合わせを繰り返したため、帰宅は深夜となった。帰ったら、2日前に職場(私の隣の席)でも膜下出血で倒れ、意識不明となっていた職場の後輩の訃報が届いていた。このこともあって、この日は忘れられない一日となっている。なお、後日談であるが、二人だけの「幻の月例」が皆の知るところとなり、頂上で撮影した写真がツ・ショットに「変身」して、翌年のシニアOB会特製マイカレンダー(2002年)に掲載されたのである。写真を良く見ると、足が全く同じで、編集者の努力による合成であることがわかる。

また、強い雨のため月例は中止という決定の中で、有志5名ほどで急登した浅草岳(1999年6月27日:4期企画)も忘れられない月例の一つである。景色は全く見えなかったが、雨の中で可憐に咲く姫小百合の花が忘れられない月例となった。

これ以外の月例では、天気も良い場合が多く、素晴らしい展望や、高山植物等の花々や、素晴らしい温泉、あるいはお土産など、多くの楽しみを提供してくれている。しかも、毎回継続して参加していると「体の動きが軽快になる。」等の感想もよく聞かれ、参加者各人の体力維持等に大きく貢献していると考えている。

正に、「継続は力なり」である。また、世代を超えた会話ができることも、現役時代には考えられなかったという意見もあり、シニアOB会月例の貢献は大であると考えている。今後、メンバーの高齢化が進み、どう月例を変身させて継続させていくかが問われることになる。



八間山のショウジョウバカマ

これからのワングエルを担って

YWV 主将 小林 貴志 (3年・49期)

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部が、創部 50 年を迎えたと聞き、ずいぶんと歴史と伝統のある部だということを初めて知りました。

現在ワングエルには、4 年生 3 人、3 年生 3 人、2 年生 4 人、1 年生 5 人の計 15 人の部員がいます。ワングエルに入ったきっかけは、高校で山岳部に入っていたからというのや、なんとなく楽しそうだからというのなど、いろいろですが、15 人はみんなけっこう仲良くやっています。

今年も夏合宿の季節がやってきました。行き先は北アルプス(立山、薬師、雲ノ平、水晶、鷲羽、黒部五郎)です。私が入ってから毎年、夏合宿は波乱続きで、今年こそは何事もなく行われることを願っています。

私が遭遇した波乱の事件一つは、6 月の尾瀬でのことです。

残雪を踏み越えて登ったら下山路が雪渓で、パーティーの誰一人としてアイゼンを持っていない中、必死に前進し、時間はかかりましたが、誰一人としてケガもなく無事に下りてこられたということです。当時 1 年だった私は、本当に死ぬ思いをし、大変なところに来てしまったと思いました。

その後、当時のリーダーだった先輩に、「あのときは大変でした。……」という、「小林君はけっこう大丈夫そうだったよ」と言われ答えに困りました。

確かにケガらしいケガもなく、被害といえばはいていたズボンが泥だらけになり捨てたことぐらいでしたが。

先輩の話では、この 50 年の間にはいろいろな出来事があったようです。

良いことばかりではなく、遭難事故などもあり、途中では存亡の危機もあったようですが、それらを乗り越えて来られたから今の部が存在するのだと思います。

私たちは、このような歴史と伝統のある部に入ったことを誇りに思い、ワングエル活動を楽しみながら、よりよい方向に発展させていきたいです。

自分たちが生まれるはるか以前より引き継がれてきた伝統の灯を、これからも絶やさないように頑張ります。



【 編集後記 】

ついに「50周年記念誌」が完成の運びとなりました。思えば編集委員が初めて顔を合わせたのが今年の1月27日。当日、弘明寺の横国大付属中学校で急に編成された、にわか編集委員会と素人編集長で、一体どんなものが出来るのかと何とも心細いスタートでした。

ところが、まずOBの方々が昔の資料をひもとき、創部間もない頃の貴重な活動を記事にして下さり、一気に勢いが出ました。また各期の活動のページ作成では、編集委員や各期の代表の方々を中心に、次から次へとネットワークが広がって行き、驚くほど多くの方々の力が合わさり、51期全ての期から原稿が寄せられました。

これも学生時代に、同じテントに寝泊まりし、同じ飯盒の飯を食べ、同じ汗を流しながら育まれた強い絆の賜だと、改めてワングルのすばらしさとパワーを感じました。

この記念誌のコンセプトは「道」です。

部長先生方からお寄せ頂いたメッセージに、また部創設のいきさつに、はたまた50年の歩みに、また各期のページから、山小屋日誌から、悲しい出来事から、部員の投稿から・・・・・・・・

全てのページに、50年の道のりの重みを感じられます。

ワングルの50年の道のりは晴れの日もあれば存亡の危機に見舞われた嵐の日々もありました。何とも波乱に富んだ50年です。それは一人一人の人生の道にも重なる部分があるのではないのでしょうか。どうか皆様の人生と重ね合わせてこの記念誌をお読み頂けましたら幸いです。現役部員の皆様には、ワングルの歴史を知り、これから皆さんが辿るであろう輝かしい未来の道を創るヒントとして頂けたら幸いです。また、残念ながらこの50周年と一緒に祝えない仲間も居られます。YVVの歴史を辿りながら故人を偲び、ご冥福をお祈りします。

今回の記念誌には、記事作成のみならず、写真や挿絵などにも世代を超えた多くのワングルOBや部員の方々のご協力と熱い思いが込められています。

編集委員一同、心より感謝申し上げますと共に、ワングル部員およびOBの皆様のこれからの道と、ワンダーフォーゲル部の進む道が素晴らしい未来へと続きますことを願ってやみません。

(下村・大黒)

〔編集委員〕

委員長	下村 蓉子(10)	副委員長	大黒美代子(4)		
編集委員	嘉納 秀明(1)	吉野大次郎(2)	井上 肇(3)	渡辺 享英(3)	
	郡司 直樹(4)	永田多恵子(4)	菅谷 光雄(6)	日渡 松男(9)	
	丹羽 守裕(11)	上野 節子(14)	西浦 章予(15)	向井 良作(18)	
	丸茂 俊二(23)	早川 恭二(24)	楠本なぎさ(28)	伊藤 明広(31)	
	渡邊 隆史(36)	細谷 慎一(38)	塩野 貴之(46)		
写真協力	谷上 俊三(4)	林 誠一(7)	YVV ホームページ		
カット協力	宮本 高子(2)	細田 隆(7)			

YVV50年の歩み

(横浜国立大学ワンダーフォーゲル部創部50周年記念誌)

発行日：2007年11月10日

発行：横浜国立大学ワンダーフォーゲル部・同OB会

発行責任者：嘉納 秀明

編集責任者：下村 蓉子

印刷所：株式会社 カワチャ・プリント(東京都港区新橋5-31-7)

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部・同 OB 会